
A revenge tragedy ~ 偽顔の鬼童子 ~

悪HUZAKE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A r e v e n g e t r a g e d y 偽顔の鬼童子

【Nコード】

N 5 2 2 4 X

【作者名】

悪H U Z A K E

【あらすじ】

彼は自分の妻と出来た娘をとて愛していた。彼は妻の約束した娘を守ってみせると、だが彼が目覚めみるとそこはN A R U T Oの世界だった。「世界は俺からすべてを奪った！！」今、

世界を憎んだ男がN A R U T Oの世界を滅ぼす戦いが始まる

元、『仮面は今日も裏側で微笑む』からタイトルを改名しました。

何度も何度もすみません！感想や質問などお気軽にどうぞ。

第一話 序章（前書き）

駄文ですが、あまり文句を言わないで見ていただけると幸いです。

第一話 序章

「お願い、私のお願いを聞いて……………」

…そんなことを言うな……………！まだ生きる道はある……………！

「あなたには悪いけど……………、もう……………、ダメみたい……………」

諦めるな……………！！お前の子はどうするつもりだ……………！！

「あの子……………、私とあなたの娘を……………いつまでも見守っていて
……………ください……………」

…ああ！あの子は絶対に哀しい思いはさせない……………。だから、
お前も生きる……………！！

「本当に……………、最後の最後まで迷惑をかけてしまって……………、本当に
ごメンナサイ……………」

謝らなくていい……………！！だから、頼む……………生きて
いてくれ……………！！！！

「本当に……、ゴメンナサイ……………！」……………愛しています……
○○○……………」

ッピ

「*****

……………!!!!!!……………」

深夜の病室の一室で、父と先ほど生まれた自分の娘を置いて、一つの命が今あの世に旅立った。

その亡骸のそばに縋り付いていた父親は、一晩中、亡骸に縋り付いて泣いていた……………。

あの日から約1年ほどたった。

彼はあの後、自分の愛すべきものを失い、とても深く悲しみ、この先の人生の絶望を感じた。

人が傍で見張っていないければ、それこそ今すぐ己の命を断つほどの危うい状態だった。

他人から見ても、彼の深い悲しみは痛いほど感じられ、いつそのままだま死なせてあげたら

彼は楽になれるのではないかと思われるほどだった。

しかし、しばらくして彼はあの深い悲しみがウソだったかのように立ち直ったのだ。

自分と彼女の間に生まれ、妻の命をかけて生んだ、愛しい『娘』の存在のためである。

彼は妻の死に際の言葉を思い出したのだ。

「あの子、私とあなたの娘をいつまでも見守っていてください」と。

そうだ、彼女と約束したんだ。彼女が自分の娘を自分に託してくれただ。

今、自分が彼女のために何ができる、

彼女はどうすれば安心してくれる、自分の娘を守ることだろうか！
！！

今のままの自分では彼女は安心してくれない、何より、今自分がダメになったら娘に悲しい思いをさせてしまう！！！！

彼は妻の約束を果たすため、そして、娘に辛い思いをさせないのために悲しみを乗り越えることを決意したのだ。

立ち直った彼はまた元気な姿に戻った。

彼は娘に対して、とても深い愛情を注いだ。それは今は亡き娘の母親の分まで深く娘を愛した。周りはそんな彼の姿を見て、彼はもう失った悲しみを乗り越えられたのだ、これから先は親子共に幸せになっってほしいと願い、幸せそうな親子を見ると自然に笑みを浮かべ

得るほどだった。

……だからこのとき、誰もがこの予測できない事件に驚きを隠せなかった。

……娘の父親が行方不明になったことに。

第一話 序章（後書き）

投稿するのは気まぐれなため、あまり続きを期待しないでください。

第二話 誕生（前書き）

駄文ですがよろしく願います。

第二話 誕生

目が覚めると知らない天井が見えた…。

何処だ此処は……………？

自分に全く覚えのない部屋に彼はすぐ混乱する。

部屋の中は全体的に白っぽく、自分の周りにはいくつかベットが置いてあり、自分もベットの上にいるようだ。窓から見える景色は夕方らしいのかオレンジ色に建物が輝いている。どうやらここは病院であり、自分はベットの上で寝ているようだ。

どうゆうことだ？何故自分は病院なんかにいる？

私は昨日、仕事が休みだったので娘と一緒にいたはずだ。そのあと娘のオムツがなくなったので、実家の父と母に預けて買いに行ったのだ。

そのあとは確か……………、

そう、確かあの時、私はいつも通る道を使い買い物に行ったんだ。

そのとき、いつもと違う現象が起こったのだ……………。

……………。

あの時、いつもと違い道の向こうが光っていたのだ。最初、私は車が来たのだと思ったのだ……………。

だから私は道の端により車が通り過ぎるのを待っていたのだ。しかし、光は近づくにつれ輝きを増し、それからついには自分まで呑み込んでいき、それから……………

そこからの記憶がまったく思い出せない。しかし、自分の今の状態を考えてみる。今の自分の身体は別段痛みを感じない。が、身体を動かそうとしても思うように全く動ける気配がない。それこそ腕も上がらないほどだ。そして、此処が病院だとするとあの後何が起こったのか見当がつく。

どうやら私はあの後、車に跳ねられてしまい、結構な重傷を受けてしまったのだろう。今は痛みがないが多分、麻酔で痛みを和らげているからであろう。

ああ、とんでもないことになってしまった……………。

彼は今の自分の状態を確認するとこの後のことに深くため息をついた。

彼が今住んでいる所は自分の実家であり、父と母と娘、そして自分を入れて四人で暮らしている。彼が仕事に行っている間、自分の娘は彼の母が代りに見ていてくれるのだ。父親もまだ仕事を続けており、男集が家を支えているのだ。しかし、自分は怪我を負ってしまったため、数ヶ月は会社を休まなくてはならないだろう。家は裕福でも貧しいわけでもないが、稼ぎ頭が一人減ってしまったため、生活も少しくなってしまうだろう。そのことで両親にとっても申し訳ないと思っているのだ。

ちなみに、今は亡き妻はもともと孤児であり、両親は幼少のころ事故で亡くなっている。

それでも自分の両親は妻を我が娘のように大切に受け止めてくれた。

自分の今後のことを考えていると部屋のドアが開き、数人の人たちが入ってきた。

入ってきたのは三人の人間であり、自分が寝ているベットを取り囲むように立った。

まず、最初に入ってきた一人目はベットの右側にいる人物、髪は背中まで伸ばしており、眼がクリツとしている黒目黒髪の愛嬌のある顔立ちの女性だ。服装は桃色の着物に黒の帯で締めており、雰囲気からしてゆつたりとしか雰囲気がある人物である。だが、目は周りをきよるきよる落ち着きなく見ているところから何故かドジっ子のかんじがする。

次に入ってきた二人目の足の下的人物は壮年の男である。髪は短髪で目は垂れ目で無精ひげを生やした黒目黒髪の少しくたびれた印象のある男性だ。服装は白衣を着ている所からたぶん自分の治療をしてくれた人物なのであろう。自分を治療してくれたことに感謝の言葉を伝えておこう。

そして最後に入ってきた左側にいる三人目の人物、髪の長さは首筋が隠れるほどの長さ、前髪は逆立っており少しだけとげとげた雰囲気。目は少しキリツとしており、優しくはあるが教育などは少し厳しくなる印象の青髪茶色目の二枚目な男性であり、どう見

ても外人である。髪は染めているのかどうか知らないが目立ちまくりで少し理解できない色合いである。服装は浅葱色の半袖ジャケツトを着込み、下は黒のサバイバルパンツ、男性の右腕には変な模様の書いてあるバンダナをつけており、どこかコスプレ臭のする恰好をしていた。

彼らを見て最初に思ったこと、それは自分と彼等の関係である。

二人目に入ってきた白衣を着た人物ならまだ分かる。お恐らく自分を担当した先生なのだろう。だが、残りの二人、女性と外人のことは全く知らない人だ。断言できるがあつた事さえないだろう。なればなぜ知らない人がいるのか。少し考えたが一つだけ思い出した事があつた。多分、彼らが自分を車で引いた加害者なのだろう。そう思えば辻妻も合うし、と言うよりもそれ以外思いつかない。

もう一度三人の顔を見てみると、何故か俺の顔を覗き込まれ、何故かとてもいい笑顔でわらっていた。

何故俺の顔を覗き込む…、何故そんなに笑っているんだ？

こっちは車に撥ねられ、危うく命も落とすところだったのかむしれないのだぞ……！！

怒って問い掛けようとするが何故か言葉が出てこない。何故だ？今一度腹に力を込め、絞り出すように喉から声を出してみる。

「あうああー？」

漸く絞り出した声は、喘ぎにも似た言葉とは言えない音の羅列だった。そしてそんな俺の声に嬉々として反応し、はしゃぎ出す目の前の男女。

舐めているのか貴様ら！！！そう怒鳴ろうとしてもうまく言葉にできず、横にいた女性が言葉を発した。

「やっと生まれてきてくれた……。私たちの愛しの赤ちゃん」

……………何を言っているんだこの女、それと今の状況と何の関係がある！代替、赤ん坊などどこににいるというのだ！

そんな自分の考えなど無視し、反対側の男性も言葉を発する。

「よく頑張ったね、美鈴^{みすず}…。念願の『僕達の子』だ」

「ふふっ、私達もやっと子宝に恵まれたのね…。それも男の子…。私達の願いが神様に通じたのかしらね…」

「これで僕の代で『水鏡^{みずかがみ}一族』の血筋を絶やす事にならずにすんだ

…、本当によくやったよ」

何なんだこいつら……、さっきから何を言っているんだ？なんで自分たちが怪我させた相手の前でこつも平然と関係ない話をしてられる……？頭がいかれているのかこいつ等！？

自分がこの二人の様子に混乱していると、今まで黙っていた医者らしき人物がしゃべりだした。

「それでは今の所異常なども見られないため、明日赤ん坊は退院します。何か不都合なことはございませんか？」

「いえ、不都合など全くございません。先生のおかげでやっと妻と子供が退院できます……。今までありがとうございました」

「私も先生のおかげで無事出産できました！……本当に、ありがとうございます！」

二人の男女は医者に向かって深いお辞儀と感謝の言葉を述べている。

……はつきり言って話題についていけない。俺は結局どうすればいいんだ。

「いえいえ、こちらも仕事ですから。それより、赤ん坊でも抱いてあげたらどうですか？なんだか寂しそうにしていますよ。」

「え？まあ、ボクちゃんはさびしがりやなんでちゅね。ごめんね

「気づいてあげられなくて」

はつきり言って心底ムカつく言葉を言いながら、手を広げて自分の方に抱き寄せようとする。

こっち来るんじゃないや糞女！！ぶっ殺すゾ！！！！！！

しかし、此処で信じられない事が起こった。

抵抗しようとするが身体が重い道理に動かず女に持ち上げられ、文字通り抱き寄せられてしまったのだ。

！！！！！！？？

此処で自分はかなり動揺した。バカな！！？いくら動けないからと言って大の大人だぞ！？確か自分の体重は七十キロはあったはず、とても女性一人で上げられる重さではない！

何故こんなにも簡単に持ち上げることが出来る！？

「きゃー！やっぱりー！りゅーちゃんはあるたかくてかわいーな
ー！」

この糞テンションの高いバカ女はそう言いながら等身大の映る鏡の前まで来た。

そして、その鏡に映る自分の姿を見て……………
……………絶句した

黒髪の女が抱いている人間、その髪はまだ少ししか生えてはいないが、明らかに人類が絶対生み出すことはないと言えるだろう鮮やかな深い青色の髪。丸くてクリっとはしているが少し鋭さが入っている黒い瞳。

そして、体つきからして柔らかく、触るだけで壊れてしまいそうな精細な体つき。

その姿はどう見ても赤ん坊であり、今、鏡の前に立っているのは自分とこの女の二人だけ……………。

……………つまり、今映っているこの赤ん坊は……………

「りゅうき流稀くん。ようこそ木の葉の里へ！」

第二話 誕生（後書き）

評価とか暇なときお願いします。

第三話 復讐者の誕生（前書き）

結構生き良いで描いたので、かなり凄いことになってます。
内容もとても薄いのですが、あきれないで読んでもらえると助かります。

第三話 復讐者の誕生

時刻は深夜

あの後、三人の大人たちは部屋から出ていき、また静かな室内へと変わっていた。

部屋の中は明かりはなく、窓の外から入ってくる月明かりがこの病室を照らしていた。

その病室のベットの upper は一人の人間…、いや、一人の赤ん坊が横になっていた。

この赤ん坊、見た目こそ言葉どりの風貌だが、中身はすでに自我をもった、いや、

ある一人の男の記憶を持った、異形の存在だった。

そして、この赤ん坊は、今いる世界が自分の知っている世界でない
ことを感じ取った

その事実を知った赤ん坊が始めに抱いた感情とは何なのだろうか？

それは何故、自分がこんな姿になっているのかという疑念ではなかった

それは何故、こんなわけのわからない異世界に飛ばされたのかという憤怒でもなかった

それは何故、自分がこんな辛い目に逢わなければいけないのかという悲壮どもなかった

そう、この赤ん坊が抱いた感情、それは……………

今は亡き妻と、自分が愛してやまない愛しい娘に対する……………

深い深い謝罪だった。

元の世界の彼の人生はとても平和だった。

彼がまだ幼いころ、友達と喧嘩しそうになっても、彼は自分からすぐに謝り、喧嘩自体起こさなかった。

彼が思春期に入っても、親や学校などでも特に事件など起こさず卒業してしまった。

彼が社会人になっても、まあまあ業務成績を取り、会社でも話題すら取られないほど地味に生きている。

彼の生き方は平和と言えるものだが、逆にいえば平凡、全くもって面白みのないものだ。

しかし、彼はその面白みのない人生に満足していたのだ。

…彼は天才だった。

彼は一のことを知れば百の事知ることが出来、さらにそれを応用し、全く別の新しい物も作れるほどの天才だった。彼が本気を出せば、元の世界では世界の征服すら夢物語でなく、現実にできるほどの天才あり鬼才だった。

しかし、なぜ彼はそんな才能を持ちながら地味に人生を送っているのか？

それは今は亡き妻の存在があつたからである。

彼がまだ少年だった時、彼の才能はすでに開花しており、ある程度の事もすぐに理解できた。

そのせいなのか、彼は他人の裏の感情も分かってしまうのである。嫉妬、憤怒、妬み、恨み、ありとあらゆる色々な黒い感情が彼にはわかってしまうのだ。

当然、彼は人とはあまり関りたくないと考え、必要最低限しか付き合うことはしないようにした。

彼はその日、当てもなくただ近所を散歩していた。そこで見つけた児童施設。

彼が興味なくその施設の庭を見ていた。庭には子供たちが元気いっぱいに遊んでいた。（今思い出してみるとかなりウザかった）そして何気なしに縁側の方を見てみた、そこには自分と同一年くらいの

少女を見つけた。彼女もこちらの存在に気付いたのか自分に顔を向けてきた。

はつきり言って、ありきたりにも程があるが、彼はこの時彼女に本気で恋をした。

それから彼は自分の頭脳とかフルに使って、彼女を自分に興味を向かせようとした。

しかし、彼の神がかった才能でも、彼女の前では空振りに終わり、それどころか彼女に考えがわかってしまっていたようで、それでも彼女にアプローチを続けた。

そして彼と彼女の娘が生まれる三年前、ついに彼の努力が実を結び、彼女と結婚することが出来たのだ。

そこから彼が平凡を求めた理由、それは少しでも長く、彼女と一緒にいる時間を多くしたいがための物だったのだ。

彼は才能があった。しかし、その才能使えば使うほど自分を利用するものが必ず出てくることも分かっていた。そうすると必然的にメンドウ事の量が多くなり、妻と会える時間が減ると考えたのだ。

そして、彼はわざと自分の能力を落とし、平凡の自分を演技していたのだ。

普通で面白みがないかもしれないが、彼と妻にとってはこの生活が一番幸福だったのだ。

彼にとって妻の存在は幸福そのものだった

その愛しの妻の約束を守れなくなった彼は彼女に対して謝罪した

彼は何度も何度も心の中で謝罪をした。彼は元の世界に置いてきた自分の娘に深く深く懺悔した。

何度も何度も謝った。何度も何度も心の中で土下座した。何度も何度も約束を守れぬ自分に罵声を上げた。

赤ん坊の外見からは想像のつかないほどの負の感情がこの病室を支配していた。

そのおぞましい気配を感じ取り、外にあるの木に止まっていた鳥たちも一斉に離れていった。

もし仮に、この部屋に他人がいたら、今すぐにも部屋から飛び出して逃げたか、気が狂って精神を病んでしまいかもわからない。

…しかし、今この場所にはそんな雰囲気があった。

…どのくらい謝罪の言葉を思ったのだろうか？外を見てみるともう明るくなっており、朝日も顔を出していた。

…彼の心はすでに荒んで、壊れかけていた。

感情の出し方すら分からなくなったかのように顔は無表情になっていた。

そして彼はフツとあることを考えた。「何故、自分はこんなにも謝っているのだろうか？」。

何故、こんなにも謝っているのだろうか？

自分が妻の約束を守れなかったから

何故、約束を守れなかったのだろうか？

- 私の愛する娘を見守ることが出来なくなったから -

何故、娘を見守ることが出来ないのだろうか？

……この世界が……、この、理不尽な世界が娘との絆を
引き裂いたから

何故、自分から娘を引き裂いた？

何故、自分から娘を奪い去った？

何故、この世界は自分から大事なものを奪った？

何故、この世界は自分から幸福を取り上げた？

何故？

何故？

何故？

⋮ ⋮

何故？

.....

.....

憎い、.....

憎い、憎い憎い、

[illegible]

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い

憎い憎い憎い憎い
憎い憎い憎い憎い

憎い憎い憎い憎い
憎い憎い憎い憎い

憎い憎い憎い憎い
憎い憎い憎い憎い

憎い憎い

憎い

憎い！！！！！！！！！！！！

俺からから家族を引きががしたこの世界が憎い！！

俺から人生を踏みにじったこの世界が憎い！！！！

俺から幸福を粉々に砕いたこの世界が憎い！！！！

俺から！！！！！！ 俺から妻との約束を、娘を奪ったこの世界が

憎くて、憎くてたまらない！！！！！！

.....世界よ、お前は俺から大事なものを奪った

.....お前は、俺の命よりも大切なものを奪い取った

.....お前がその気なら、俺にも考えがあるのだぞ

.....お前が一体何を敵に回したのか後悔させてやる

.....俺はこの世界に対し復讐してやる!!

この世界を……、俺の手で……、

必ず滅ぼしてやる!!!!!!!!!!!!!!

そこにはもう、自分の妻の約束を守る、健気な男の姿はなかつた……

そこにはもう、自分の娘を見守り愛する、優しい男の姿はなかった……

そこにはもう、自分の大切なものをなくしても、前を向いて進

む強い男の姿はなかった…

そこにはもう、自分の愛する者を奪われ、悲しみのあまり心が壊れ、

八つ当たりぎみにこの世界を嫌悪し、憤怒し、憎悪し、妬み、

そして、世界を破滅することで己の心を保ってられない、

邪悪で、憎しみに染まった恐ろしい存在しかいなかった。

この日、木の葉の里は世界を憎む『復讐者』を、この世界にとっての『敵』生んだ。

それが、この世界のすべてを巻き込む壮絶な戦いの始まりだった。

第三話 復讐者の誕生（後書き）

いかがですか？

感想や意見とかも描いてもらえると助かります

第一話 12年後（前書き）

ハイテンションで描いたため、かなりぼろぼろかもしれませんが

第一話 12年後

イルカサイド

「卒業試験は分身の術にする。呼ばれた者は一人ずつ隣の教室に行くように。」

教室の中にいる生徒たちに試験科目を伝え、俺は隣の部屋の試験部屋に入って準備をする。

今回の試験は自分以外にもミズキ先生と一緒に試験管をすることになっている。

この試験内容の『分身の術』は、今までアカデミーの授業をちゃんとやっていたら合格する試験だ。

この『分身の術』は難易度は低いため、生徒達はみんな出来る筈なんだが…

…皆アカデミーで六年間頑張ってきたんだ…全員合格してほしいと思うのは教師としての気持ちである。

…昨日、火影岩のラクガキの罰の後、ナルトと一緒にラーメンを食べに行った時、ナルトは今回の試験に全てを賭けているようだった…。教師が一人の生徒だけに注目するのはあまり良くない事だとかっている……。

里の人達もナルトの合格を望んではいない事も事実だが……しかし、それでもナルトには一人の俺の生徒として、今回合格してほしいと願っている。

「次！水鏡流稀。」

ガラッ！

「ハッああゝゝいい（笑）！！」

そんな変な掛け声をあげながらドアをあけた生徒は、とても奇妙なポーシングをしていた。

…具体的にいえば、左右の腕を上にあげ、手は手刀の形で地面に向くよう手首を九十度の形で固まっております、足は何故か内股であり、教室に入ってくるときは何故か身体を大きく左右に動かし進み、なぜかこの光景を見て（シャナリ、シャナリ）という良く分からない効果音が付きそうな光景あった。

……うん、本当に何だ！？

今までの気持ちも一瞬で萎み、なんだか、色々どうしても良くなった気分になってしまった。

そんなどうでも良い空気にさせた張本人、そんな生徒の名は水鏡流稀と呼ぶ。

イルカは数年このアカデミーで教師をやっているが、これほど特徴の《わかりやすい》生徒もそうそういないだろう。たぶん、街中ですれ違っても十人中九人は彼に振り向く自信がある。では、そんな彼の全体を見てみよう。

服装は、上は黒いハイネックに白いジャケットを羽織っている。

下はこれまた黒いカーゴパンツを履いている（ポケットは左右で合計六つついている、ベルト付き）。

靴は忍びが愛用しているぞうり（？）黒バージョンである。

髪は前髪が逆立っており、長さは首の後ろがギリギリ隠れない位の長さで、全体的にトゲトゲしい感じの深い青色の髪をしている。

眼は鋭い、というより、若干睨んでいるような印象を受ける真つ黒な目だ。

（もつとも、いまは死んだ魚の目をしている）

まあ、此処までならそこまで注目するものはあまりない。確かにあの青い色の髪は珍しい部類に入と思う。しかし、この里にはいろいろな色の人たちが暮らしているため、そこまで注目されないのだ。

ではどこに特徴があるのか？その答えは『顔』である。

…いや、正確に言えば『顔』についているもの』である。

そう、この生徒の顔には顔全体を覆うほどの『仮面』をつけているのだ！

この仮面のせいでこいつの顔が見える所は『目』の所にか開いていないわずかな所しかなく、仮面は両端に二本ずつ付いている細い縄（黄色）を後頭部の後ろで縛っており、運動でも取れないようになっている。

…そして仮面のデザインがまた凄い。

木の葉の暗部では、相手に顔を見られないようにするためお面をかぶって任務に就いている。そのデザインは十二支の干支になぞられており、主に、『猿』や『犬』などの動物がモチーフになりデザインされているものが多いのだ。

…しかし、この生徒のデザインはその十二支の干支など全く関係ないモノ、

仮面には凸凹があり、何故か無駄にリアリティが凝っている。

仮面の口の部分にあたる場所には、歯がびっしり付いており、歯茎がむき出しになっている。

目の部分に当たる場所には、横にした長方形のようにぽっかり二つ開いている。

そして、米神の部分には、直径六センチ程の立派に丸く上がった角が二ヨキツと二本生えているのだ。

ちなみに仮面の色は白色。

…ハッキリして答えると、このデザイン、『鬼の頭蓋骨』をモチーフにした仮面である。

こんな機会はまだ二度とないだろうからこの際、本当の気持ちを言っておこう…

…ハッキリ言っただけに怖い！！

いや！だって、なんだあれ？なんであんな怖い仮面しているんだ！？何故あんな怖い仮面をしているのか、全然意味が分からない！いや、自分の教え子に対しこんな言いかたしたくはない！…したくはないが、ホントに怖いのだ！！

…あれは俺がまだ新米教師の初日の時、自分の生徒たちの顔を一日でも早く覚えるため、出欠確認をするともに、皆の顔を覚えていこうとしていたんだ。

最初は緊張気味に進み、自分のが生徒の名前を呼んでいくと生徒達も元気に返事を介してきた。そして徐々にだけれど、自分の緊張感

も和らいでいき、自分が教師として生徒達と仲良くやっていけると思っていたんだ。

次にこの生徒の名前呼んで顔向けた時、自分はそのまま泡を吹いて気絶してしまった。

あの時は、本当に心臓止まるかと思った！

今日が自分の命日だと、自分にお迎えが来たかと本気で思ってしまったからなっ！？

ああ…、あの時は大変だったよ……………。

初日から倒れて生徒たちに騒がれるは、騒ぎを聞きつけ先輩教師が来て大騒ぎになるやら……………

…うん。 今となったらいい思い出だ（泣）！

ちなみにあの後、なんとか立ち直ってその仮面脱げっていったけど

「もし仮面脱がしたら、アカデミー起爆札使って木端微塵にしますっ（ニコッ）。」

で、笑って言うてくるから最終的にうやむやになっちゃたが、結局こいつの受け持ちになって数年経ったけど一度も素顔見たことないんだよなあ。…………… なんだかこうやって思い返してみると、自分のこと信用されていない様な気がして、色々寂しいものがあるんだよな。

…まあ！人にはどうしても譲れない事が一つや二つあるんだし、この子に至っても何か大事な理由があるんだと考えるしかないか。

そんなことよりも今は、今日この生徒が試験に合格することを教師として見守るしかないか。

「ちなみに、あの掛け声と変なポーズの意味は？」

「特にないツス。なんか気分的にやりたかったからツス（笑）！」
…うん、この子はこんな生徒だったな。

この子は仮面で見た目は怖いが、性格は自分から見ても他人に対し
思いやりのある、心の優しい生徒であると俺は見ている（少し思考
は読めないが）。この子はいつも生徒同士でケンカやイザコザなど
があつた場合、相手の間に入り仲裁や意見などまとめてくれたりし
てくれる。彼と同年の学友の中でも、心優しいと印象として残る。
何より、里の人達に忌み嫌われているナルトに対し、普通に里の仲
間として接してくれているのだ。

…九尾の事件により彼の親戚達も殺され、血のつながりは彼の家族
しかないのと彼の資料に書いてあつたが…それでも、彼は普通にお
喋りをし、笑っている姿も見ることがある。…流稀のような子が里
に少しでも多くなれば、ナルトが木の葉の仲間として接してくれる
日も近くなるかもしれないのだが……………

「それで、試験はもう始めていいんですか（悩）？」
「ん？…ああ！悪い！よし、じゃあ分身の術をやれ」
「よし、いくぞ〜（ドキドキ）！」
と言いながら分身の術の印を刻んだ。

「分身の〜術（ウヴオウリヤ）！！」
ポポンツという音が鳴り、左右を見るとちゃんと三人になつていっ
た。

…うん！チャクラの配分も量もちゃんと教えた通りに出来ているな
！これは文句なしの、

みずかがみゆつき
「水鏡流稀。合格だ！おめでと〜。」
そう言いながら俺は流稀に額当てを渡した。

[illegible]

「ちよつと待て流稀！」

「なんですかあゝゝゝゝ（疑）？」

「あゝ、ほら！お前ももうアカデミーから卒業だろ。…だから頼む！その仮面とって素顔見せてくれないか？」

流稀は変な踊りをしながらイルカ先生の方を向いた。そして先生に笑みを向けた。そして突然動きを止め

「調子に乗るな」

突然、真顔で冷たい一言を言い放ち、そのまま普通に教室を出ていった。

……そのまま教室に残された、少しだけ涙目になっているイルカと今の光景を見てビクリして、啞然としているイズミは後にこういつた……

あの生徒は、最後の最後までわからなかったと……

第一話 12年後（後書き）

イルカ崩壊してます。

イルカファンのみなさん、本当に申し訳ない！！

第二話 班決め（前書き）

この物語は主人公の視点はあまり出さず、周りにいるレギュラーの視点から主人公の行動を出していきます。
分かりにくいかもしれませんが、よろしくお願いします。

第二話 班決め

ナルトサイド

忍アカデミーの教室の中

うずまきナルトはイルカ先生からもらった木の葉の額当てをして席に座っていた。

この前の試験に落ちた夜、ミズキに騙されて火影の部屋から禁忌とされる封印の巻物を持ち出してしまった。あのときは卒業試験の事で頭がいっぱいで、ミズキの言葉に対し疑うことなく従ってしまった、そのあとミズキに殺されかけられ、危うく命を失う羽目になる所だったのだ。

しかし、ナルトを探していたイルカ先生に見つかり、今回の首謀者がミズキだとわかる。そのあと、イルカ先生とミズキは戦闘に入り、此処でナルト十二年前に里を襲った九尾の妖子だとミズキに聞かされる。真実を知ったなるとは耐えられなくなり、その場から巻物を持って逃走した。そしてその後、イルカとミズキはナルトに追い付き、ナルトはイルカが生徒として、この里の一人としてにいてくれたことを知る。

そしてナルトはミズキにやられそうなるイルカの前に立ち、禁書に書いてあった忍術『影分身の術』を使い、ミズキをボコボコにした。

戦いが終わった後、ニッコリほほ笑んだイルカに
「ナルト。ちょっと来い。お前に渡したいものがある！」

と言われ不思議そうにイルカのことを見上げながら、とてとてとナルトは近づいた。

「目、閉じてろ」と言うと、素直にナルトは眼を閉じた。イルカは苦笑しながら、自分の額に手をかけ、そして、額につけていたものをナルトの額につけた。

目を開けたナルトにイルカは「卒業……おめでとう」といい、目を潤ませ喜び、泣きながらナルトはイルカに飛びついた。

この日、ナルトは忍アカデミーを卒業した。

そして、現在の冒頭に戻る。

そんな事があつたなど露知らず、学友たちはナルトを茶化したてる。そんな彼らにナルトは、自慢げに自分の木の葉のマークのついた額当てを見せびらかし席に着いた。

ちなみに、この時ナルトはサスケが座っている机の同じ列に座った。隣を見るとサスケは静かに腕を組んで前を見ていた。：ナルトはこの時やはりと言うべきか、サスケの事が気に入らなかった。

そんな事を思つてると、後ろから自分に対し声をかける生徒がいた。

「あつれ〜？ ナルト君じゃないですか〜！！何故に君がここに
いるんですか〜（疑）！??」

：こんな独特なしゃべり方をする生徒、いや、この木の葉の里にはナルトは一人しか知らない。

ナルトは声のした方に顔を向け、自分の知っている学友の姿を思い浮かべる。

彼は黒いハイネックに白いジャケットを羽織っており、下も黒いカーゴパンツを履いている。

靴は自分と同じ忍びぞうり（？）で、色は黒である。

髪は前髪を逆立て、全体的にトゲトゲしい感じの深い青色の髪。眼は隣にいるサスケよりは少し柔らかいが、若干睨んでいるような印象を受ける黒目をしている。

そして、彼独特の特徴と言っているほどの分かりやすい目印、『鬼の頭蓋骨』の仮面をつけ、眼が少し見開き、両手を上にあげながらビックリしたポーズをして自分の後ろに立っている「水鏡流稀^{みずかがめゆき}」をナルトは見つめて笑う。

「よお！流稀^{りゅうき}。…ヘッヘエーン！実はイルカ先生の追試に受かった俺も合格できたんだ！」

実はこの二人、いつもは別につるんでいる訳ではないが、実は結構仲が良かったりする。

彼らが初めて会話した時、それは二人ペアを作り、片方が片方に幻術をかける授業のときであった。

その日、ナルトはいつものように学友にハブられ、ペアが出来なかったとき、流稀がナルトに接近し声をかけたのだ。

「君もひとり？だったらボクとペア組まない（疑）！？」

この時、ナルトは自分に声をかけられビックリした。だからつい、「本当にオレでいいの？」とナルトは聞いた。そこで帰ってきた答えは

「別にいいよ！組んで困ったことなんてないし」（笑）！」
と、なんだか気の抜ける返事をしてきた。

ちなみに、このあと二人はペアを組み、両方とも幻術を相手に欠ける事は出来なかった。

それから彼らは何だかんだでしゃべるようになり、親友とはいかなくとも、気の合うおしゃべりの友達としての認識になっていった。

「オ〜〜ウ！そいつは良かったじゃないですか〜〜！！これでボクたち同じ忍びじゃな〜い（嬉）！！！」

そんな事を言って、流稀は手を上げながらその場でクルクル回り始めた。顔はほとんど見えないが、眼の部分からわずかに見える穴からは、眼の周りにしわを寄せている所が見え、本当によるこんで笑っているところが見て取れた。

流稀は、確かに人とは違い、しゃべり方や仮面をつけるなど少し（？）変わってはいるが、

相手が喜んでいるときは身体も使って自分も喜び、相手が傷ついているときは一生懸命慰めてあげるなど、相手対して本気で接する姿から彼はこの木の葉の里でもちよつとした人気者になっているのだ。そんな彼にナルトも仲良くなれて良かったと本気で思っていた。そんな事を思っていると後ろから、

「アレ？ナルトオ！なんでお前がここにいんだよ！今日は合格者だけの説明会だぜ」

と声がして振り向くと奈良シカマルが立っていた。

「オウ！シカマル。実はイルカ先生の追試に受かってな俺も合格できたんだ。」

「良かったですね。これで見んな木の葉の忍でつすよ」(笑)――」

ナルトはさっきと同じ答えを言い、流稀は元気にナルトのことで喜び、

シカマルは「あいかわらずおめーは元気だな」とため息をついた。

…ちなみにこの後、春野サクラがナルトを退かし、ナルトはうちはサスケの目の前に座り込み、原作道理、ガンつけあっていた。そして更に前の席の奴に押されてサスケとキスをするというトラウマも受け、

更にそのあと春野サクラにボコられるという不幸になったが、此処までは同じなどで割愛する…

「今日から君達はめでたく一人前の忍者になったわけだが…。しかしまだまだ新米の下忍。本当に大変なのはこれからだ。」

イルカ先生による最後の講義が始まった。ナルトはさっきの騒動でまだダウンしている。

ちなみに流稀は席に座ってなんだか落ちゆきなく腕をグネグネ動かし、一応、教師の話を聞いていた。

「えー…。これからの君達には里から任務が与えられるわけだが、今後は三人一組のスリーマンセルを作り…。各班ごとに一人ずつ上忍の先生が付き、その先生の指導のもと任務をこなしていくことになる。」

ちなみに、他の里では四組のフォーマンセルが基本な所もあるが、そこは里によっていろいろあり、

基本、木の葉は三人一組のスリーマンセルが基本である。

「それじゃあこれから班の発表をする。班は力のバランスが均等になるようこつちで決めた」

そうイル力が言うと

「「えー!!」と不満の声が教室の中に響いた。

この時流稀は手を額に当て「OHU~U!!」と言い、なんかアメリカンなりアクションを取っていた。

「うるさあああいつ！文句は受け付けん！それじゃあ、今から班を言っていくからちゃんと聞くように。ああ、それから出来た班には上忍が一人担当として付くからそのつもりで。」
この後、一班〜六班まで順調に進み、次はいよいよ七班の発表である。

「じゃ、次7班。春野サクラ…うずまきナルト！」

その言葉にナルトは歓喜の声を上げている。

サクラは逆に凄く落ち込んでいるが…。

「それと…うちはサスケ。」

そしてその言葉に今度はサクラの歓喜の声上がる。

それに立ち替わり、今度はナルトが落ち込む。

…… 此处で原作とは違い、あるイレギュラーが乱入してくる。

「そして、みずかがめゆっき水鏡流稀。」

この言葉で教室が少しざわついた。

当然、基本、スリーマンセルのはずなのに、第七班だけ四人一組のフォーマンセルだからだ。

これを聞いていた流稀も首をかしげ「おんやあゝ（謎）？」と不思議そうにしている。

「担当上忍は「先生！質問です！なんでこの班だけ四人一組なんで

すか？」

担当上忍を発表される前にサクラが手を挙げて遮った。

「そうだってばよ！なんでオレがサスケといっしょなんだってばよ！！」

此処でナルトがサスケに指を指しながら質問に便乗する。

イルカはナルトとサクラを見ると、少しだけ息をはく。…そしてナルトに向かっていった。

「卒業生を数えてみると一人余ったからどうしようかと悩んでいてな、常に一番の成績であるサスケと座学ではサスケと同率1位のサクラ、そして成績が一番ドベのおまえ！、そこに座学や体術で常に平行線を保っていた流稀を入れれば丁度良いかな？とこちらで判断したからだ。」

理由を聞いたサクラはこれ以上何も言わず、ナルトは少し落ち込みサスケは普通に口を閉じて黙っている。…稀流はなんか納得したのか身体を動かしイソギンチャクのように身体を震わしていた。

それぞれ思いにふけていると班の発表を終わり、

「じゃ、みんな午後から上忍の先生達を紹介するから。それまで解散！」

イルカの解散宣言が聞こえた。

第三話 第七班

各自飯を食べ終え、流稀以外の七班はそれぞれ一悶着あったものの、時間通り教室に戻った。

…その後、次々と他の班の担当上忍達が来るのに7班の担当上忍だけはいつこうに来る気配が無い。

そして教室に最後まで残っているのは、第七班の四人だけとなっていた。

あまりにも遅いので、流稀は机に伏せ、いびきをかき眠っていた。他の三人は当然、イライラしながら待っている。

「ナルト！じつとしときなさいよ！！」

扉を開けて廊下を見ているナルトをサクラが注意する。

「何でオレ達7班の先生だけこんなに来んのが遅せーんだってばよオ！！」

ナルトはイライラが限界に達したのか大声を上げる。

指定時間に数時間も過ぎてしまえばストレスも溜まってしまっただろう。…そもそも人との約束の時間に遅れるってあり得ないと思われる。此処まで時間に遅れて連絡もなしとは……、忍としてというより人としてダメダメである。

「ほかの班はみんな新しい先生とどっか行っちゃったし、イルカ先生は帰っちゃうし！」

イライラしながら教室の中を見ていたナルト…黒板消しを見て名案を閃いたみたいに笑う。

「ちょっと！！何やってんのナルト！！」

扉に古典的な黒板消しトラップを仕掛けているナルトをサクラが注意する。

「ニシシシ。遅刻して来る奴がわりーんだってばよ!!」
仕掛けが完了してナルトはやや満足気。

「私！知らないからね!!」
サクラは優等生的な発言をしているが止めない事から楽しんでいる事がわかる。

「フン。上忍がそんなベタなブービートラップに引っかかるかよ。」
サスケはくだらなそうに見ているだけ。

「おやおや！ずいぶんと楽しそうな事してますね（ワクワク）!？」
隆稀^{りゅうき}は二人の会話で起きたのか、ナルトの仕掛けに対してはしゃいでいる。

少し経ち、カカシが扉に手をかけ、扉を開いたら黒板消しが見事頭に命中した。…あんまりにも出来すぎてワザとらし過ぎる。

「ぎやははは!!引っかかった!!引っかかった!!」
それが分かってないナルトは指を指しながら爆笑している。

「先生、ごめんなさい。私は止めたんですがナルト君が…。」
サクラはしおらしい演技をしてナルトに全責任を押しつける…ヒドイ女だ。

サスケはカカシがあんまりにも簡単に引っかかったから疑わし気にカカシを見る。

「プププププ！こんな仕掛けに引っかけたってやゝゝんの（爆）！！」

…バカだよな！あほだよな！トンマだね！間抜けだね！オタンコナスだね！滑稽だね（超爆）！！」

流稀はあらん限りの罵倒で爆笑しながら貶している。ハッキリ言っ
て一番ヒドイ。

「んー…なんて言うのかな、お前らの第一印象はあ…：嫌いだ
！！」

嫌い宣言をする力カシ…確かに仕掛けたこちらが悪いが、そもそも
大幅に遅刻してきたそちらも悪いような気がする。…そのせいか、
周りの雰囲気陰鬱なものになる。

…まあそれでも、周りの雰囲気などお構いなしに爆笑っている奴も
いるが。

「特に、そこで笑っているお前！…：大ッ嫌いだ！！！」

力カシは笑っている流稀に指をさし、さっきよりも強く宣言した。

力カシに連れられ第七班は外に行った。

「そうだな…まずは自己紹介してもらおう。」

「…どんなことを言えばいいの？」

サクラがオズオズと少し手を挙げ質問する。…さっきの空気はまだ
引きずっているようだ。

「そりゃあ好きなもの嫌いなもの…将来の夢とか趣味とか…ま！そ
んなのだ。」

「あのさ！あのさ！それより先に先生、自分のこと紹介してくれよ

！

今度はナルトが空気を壊した声で質問する。

「そうね…見た目、ちょっと怪しいし。」

カカシはサクラから悲惨な評価を受ける。確かに片目と口元を隠し、不審者よろしく。かなり怪しい恰好をし、変態に見える。……そこで仮面を被ってボー…ッとしている奴も例外なく怪しいが。

「あ……オレか？オレは『はたけ・カカシ』って名前だ。好き嫌いをお前らに教える気はない！将来の夢……って言われてもなあ……ま！趣味は色々だ……。」

自己紹介と言えるか疑問な紹介をカカシは言う。

「ねエ……結局分かったの……名前だけじゃない？……」

サクラが言う。忍に詳しく自己紹介をされても困る思うが。

「じゃ、次はお前らだ。右から順に。」

ちなみカカシから見ての順番は、ナルト、サスケ、サクラ、流稀となっている。

「オレさ！オレさ！名前はうずまきナルト！

好きなものはカップラーメン。もつと好きなものはイルカ先生におごってもらった一楽のラーメン！！嫌いなものはお湯を入れてからの3分間。将来の夢はア、火影を超す！！ンでもって里の奴ら全員にオレの存在を認めさせてやるんだ！！趣味……はイタズラかな」

その言葉にカカシは「こいつ……面白い成長したな」と、興味深くナルトを見ていた。

隆起もそんなナルトを横眼で見ており、その眼は少し歪んでいて笑っている所がわかった。

「次！」

「名はうちはサスケ。嫌いなものならたくさんあるが好きなものは別ない。」

それから…夢なんて言葉で終わらず気はないが野望ならある！一族の復興とある男を必ず…殺すことだ。」

サスケの言葉に場の空気が少し変わる。

ナルト冷や汗を出しサスケに目を向け喉を鳴らし、サクラは眼をハートにしてサスケを見つめ、

カカシはサスケに少しきつめな視線で過去を思い出し、…流稀はそんなサスケに対し、珍しく静かに聞いていた。

…その眼の奥にある光が失ったことに誰も気付かずに…。

「よし、次。」

「私は春野サクラ。好きなものはあ……ってゆーかあ、好きな人は…えーとお……将来の夢も言っちゃおうかなあ…。キャー…！」

さつきのシリ阿斯な雰囲気も完全に壊れ、サクラの桃色ピンクな雰囲気がこの場に充満していた。…ハッキリ言って非常にウザい。

そんなサクラに流稀も影響されたか、「ナニナニ!? アンタの好きな子って誰なのよ（笑）！！この場でハッキリ言っちゃいなよ（ウツキウツキ）！！」と、女声ではやし立てている。…サクラ

よりこいつの方が数倍ウザい。

「嫌いなものはナルトです！」

それを聞いてナルトはガックシする。それを無視してサクラはサスケを見ている。

カカシは疲れたのか次に移ろうとしている。

「よし…じゃ最後。」

「はいはいはい！私の名前は水鏡流稀みずかがゆづきいます（笑）。

好き嫌いは色々！将来の夢は…じゃあ上忍になるってことで！趣味は…人間観察で…す（エッヘン）！」

…なんだかカカシ張りに恐ろしく適当な自己紹介をする。カカシと違う所は将来に夢と趣味を言っている所位で、将来の夢はなんか今考えてしゃべったような感じがする。嘘は言っていないようだが…、意外だったのか周りもビックリした目で流稀を見ている。

「何か…えらく適当だな。」

カカシも少し驚いている。

「貴方に言われたくはありません（ニコッ）」

「よし！自己紹介はそこまでだ。明日から任務やるぞ。」

カカシが話を打ち切り、別な話題に転換させた。

「はっ、どんな任務でありますか！？」

ナルトがわざわざ敬礼して聞いてくる。

「まずはこの五人だけであることをやる。」

「なに？なに？」

「サバイバル演習だ。」

カカシの言葉にナルトとサクラら不満気な顔をする。

「サバイバル演習？」

「ほ…う（興）」

「なんで任務で演習やんのよ？演習なら忍者学校でさんざんやったわよ！」

「……。」
サスケはただ黙ってる。

「相手はオレだが、ただの演習じゃない。」
カカシの言葉に三人は「？」となるだけ。稀流は黙って言葉の先を聞こうとしている。

「じゃあさ！じゃあさ！どんな演習なの？」
「……クククッ！」

ナルトの言葉にカカシは笑って答えを返す。

「ちょっと！何がおかしいのよ先生！？」
「いや……ま！ただな……オレがこれ言ったらお前ら絶対引くから。」

「引くウ……？は？」
カカシの言葉にナルトは疑問を露にする。

「卒業生二十八人中下忍と認められる者はわずか十名。残り十八名は再びアカデミーへ戻される。」

この演習は脱落率六十六%以上の超難関試験だ！
カカシの言葉に三人は咂然としている。流稀はただ無言なだけ。

「ハハハ、ホラ引いた。……おまえはあまり引いてないね。」
カカシはなにも反応しない流稀に注目した。それでも彼は言葉を発さない。

「とにかく、明日は演習場でお前らの合否を判断する。忍び道具一式持って来い。」
それと朝めしはぬいて来い……吐くぞ！くわしいことはプリントに書いていたから明日遅れて来ないよーに！」

カカシがプリントを渡して来たので全員受け取る。三人の方から変なオーラが出てる気がする。

時刻は夕方

太陽はもう沈み、空はまるで、光が消え闇が支配しようとしている光景になっていた。

…カカシやナルト達が明日の準備ために自分の家に帰っていく中、水鏡流稀は、さっきとおなじ場所に座っていたままだった。流稀は手に持っているプリントを眺めながら、自分だけに聞こえるように言葉をつぶやいた。

「……さて、そろそろ望んできた時がついにやってきた。

…俺の計画に少し誤差が発生したが……、まあ、それもまだ予想の範囲内。だが、油断はするな……計画に邪魔になるものには早々に消して置かなければ、

……たとえ、それがどんなに小さい綻びであつたとしても」

そう呟くと、流稀の持っていたプリントが燃え上がる。

一瞬で燃え広がると、そのままかけらすら残さず消え失せた。

…その後、流稀もその場から静かに消え失せ、座っていたこの場には静寂しか残されなかった……。

第四話 サバイバル演習

翌日、プリントに書かれた通りの時間に第七班は集合した。

サバイバル演習場、三本の丸太が地面に刺さっている場所。そこにナルト、サスケ、サクラの三人がいるが、カカシの姿は当然ないが、今日は流稀の姿も見当たらない。

三人共張り切っていたのかカカシと流稀の遅刻にイライラしている。

…しばらくして、

「やー諸君、おはよう！」

ダルそうに歩きながらカカシがやって来た。

「おつそーい！！！」

ナルトとサクラは怒鳴る。あれだけ時間に遅れるなといってこの大遅刻。腹も減ってるだろうから相乗効果で倍ム力つくだろう。

だが、此処で誰か一人足りない事にカカシは気付く。

「あれ？そう言えば流稀の姿が見当たらないんだけど？」

「流稀のやつ、まだきてないんですよー！！！」

サクラはヒステリ 気味にまだ彼が集合していない事を伝えた。
とそこへ、

「うついゝッシュ！おはよーみなさん！！今日もさすがしい朝だねゝゝ（元気はつらつ）！！！」

右手を上げながら余裕綽々でこちらに近づいてくる同僚がやってきた。

「ちょっと！あんなに遅刻してきてんのよ！！今まで何やってた

の!？」

サクラが大幅に遅れてきた流稀に怒鳴り散らす。

「いや、この先生ならすくすくし位遅刻したってどくせきてないとおもってね」(笑)。

家で二度寝してたらこんな時間になってたんだよ」(苦)。

カカシは流稀の行動に注意しようとしたが、実際自分も遅刻してきたので、ただ苦笑するしかなかった。

「まあ、カカシの代わりに同僚三人に怒られていたから良しとすることにした。

少し移動した後、

「よし!十二時セットOK!」

カカシが目覚ましをセットしていた。三人は何がしたいのか分らないから「？」を浮かべる。

「ここにスズが三つある…。これをオレから昼までに奪い取ることが課題だ。

もし昼までにオレからスズを奪えなかった奴は昼メシぬき!あの丸太に縛りつけた上に目の前でオレが弁当を食うから。」

四つの丸太を指差しながらカカシは言う。

三人の腹が「ぎゅるるる」と鳴る。ちなみに、稀流はちゃんと朝食を食べてきている。

「……と言うより、そんな過酷なことを要求するカカシが三人にはかなりムカついて見えているだろう。

「スズは一人一つでいい。三つしかないから…必然的に一人丸太行きになる。…で!スズを取れない奴は任務失敗ってことで失格だ!つまりこの中で最低一人は学校へ戻ってもらうことになるわけだ!」。

「
三人の顔に真剣な色が浮かぶ。…稀流の顔は相変わらず死んだ魚の目をしてたらずんでいる。」

「手裏剣も使っていていいぞ。オレを殺すつもりで来ないと取れないからな。」

カカシの言葉にサクラは、

「でも！！危ないわよ先生！！」

とかなりビビりながら言う。

「そう、そう！黒板消しもよけられねーほどドンくせーのにイ！！
！本当に殺しちまうってばよ！！」

ナルトも昨日の教室での出来事を言い追従する。

「世間じゃさあ…実力のない奴にかぎってホエタがる。ま…ドベは
ほつといてよいスタートの合図で…」

ドベと言われた事が余程腹が立ったのかナルトはクナイを取り出し、
カカシの方に投げようとしたが、その前にカカシに後ろを取られ、
手と頭を拘束されて逆に自分の頭の後ろにクナイを向けられた。

「そうあわてんなよ。まだスタートは言っていないだろ。」

あまりの早さにサクラとサスケは驚く。流稀のめにも少し光が灯る。
カカシも全員本気になったことで満足げに微笑む。

「でも、ま、オレを殺るつもりで来る気になったようだな…。やつ
とオレを認めてくれたかな？

ククク…なんだかな。やつとお前らを好きになれそうだ。…じゃ始
めるぞ！！…よいい

…スタート！！！！」

カカシの合図に一斉に散る。

完全に隠れると不自然だから調整して下忍に出来る範囲で気配を消す。

「いざ、尋常に勝~~~~負!!」

何故かナルトはわざわざ出てきた。

「しょーぶつたらしょーぶ!!」

ナルトはまだ言う。

「……………あのさア…お前ちつとズレとるのオ…………。」
カカシが呆れている。忍びが正々堂々と勝負なんてあり得ないからな。周りに隠れていたサスケとサクラも呆れていた。

「ズレてんのはその髪型のセンスだろー!!」

ナルトがカカシに突っ込んで行くとカカシはポーチに手を入れた。

「うつ…」

それを見てナルトは止まる。

「忍戦術の心得その一、体術!!…を教えてやる。」

そう言いながらカカシはポーチから何かを取り出し…『イチヤイチヤパラダイス中巻』と書かれた本を読み出した。

「!?!」

ナルトはまさか本だとは思わなかったのか啞然としてカカシを見る。

「……………?どうした早くかかって来いつて。」

「……………でも…あのさ?あのさ?なんで本なんか……………?」
カカシの行動にナルトが聞くと、

「なんでって…本の続きが気になったからだよ。あゝ別に気にすんな。…お前らとじゃ本読んでも関係ないから。」

その言葉に再びぶちギれるナルト。額に血管を浮かべて突進する。

「ボッコボコにしてやる!!」

思いつき振りかぶって殴りにかかるが軽く防がれる。

「くっ…!!」

今度は蹴りを放つがしゃがんで避けられる。

「だあーっもうっ!!」

当たらない事がムカつくのか再び殴りにかかるが外れ、いつの間にか後ろを取られる。

「あれ?」「忍者が何度も後ろ取られんなバカ」

カカシは指を組んで構える。一見すると火遁系の構えに見える。

「!!ナルトー!!早く逃げなさいって!!!!アンタ死ぬわよオ!!!!」

サクラはわざわざ姿を表してナルトに警告する。

「え?」「遅い」

ナルトは後ろを振り返ろうとするが、カカシが指を組んだまま突き出し

「木の葉隠れ秘伝体術奥義!!!『千年殺し』!!」

ナルトのケツの穴を四本の指で突き刺し、ナルトをぶっ飛ばす。ナルトは「ぎいやあああ!!」と断末魔を上げた。……相当痛いだろう。

ナルトは川に落ちた。あの状態じゃあ再起するのに時間がかかるかもしれない。

しかし水中から手裏剣が二枚出てきてカカシを狙う。どうやら無事らしい。

その手裏剣は本をみて笑ってるカカシに軽く取られた。…少しした後、ナルトが川から上がってきた。

「ゲホ！ゲホ！」

「ホラどうした。昼までにスズを取らないと一人だけ昼めし抜きだぞ。」

カカシがナルトに近付く。

「んなの分かってるってばよー！」

「火影を超すって言ってたわりに元氣ないねお前…。」

「くっそ！くっそ！腹がへつても戦はできるぞー！」

カカシの挑発にナルトがはき捨てるように怒鳴る。

「さつきはチット油断したただけだってばよー！」

「世間じゃ油断大敵って言うんだよね。」

カカシがナルトに背を向けて歩く。

その瞬間、川から七人のナルトが出てきた。

「ん？」

カカシが軽く反応する。

「へへー…ん！お得意の多重影分身の術だ！油断大敵！今度は一人じゃないってばよー！」

ナルトが自信満々に言い放つ。

「ん！分身じゃなくて影分身か…。残像ではなく実体を複数作り出す術…。お前の実力からしてその術、一分が限界ってところだろ…。御託ならべて大見得切ったってしよせんナルト…。まだその術じゃオレはやれないね。」

カカシが冷静に分析している途中にカカシは後ろから衝撃を受けた。

後ろを見るとナルトの影分身がカカシを押さえつけていた。

「な…なにイ!!!後ろ!!!?」

「へへ…忍者つてのは後ろ取られちゃダメなんだろ…カカシ先生つてだよ!!!」

ナルトが勝ち誇った顔で言う。

「影分身の術で一人だけ川下からこっそり上がって裏手に回り込んでいたんだつてだよ!…さっきケツやられたぶん!せっかくだからここで一発!なぐらせてもらうつてだよ!!!」

ナルトが思いっきり振りかぶってカカシを殴った。

……が、殴られたのは同じナルトだった。

「いつてエー!!!」

殴られたナルトは倒れこむ。

「お前つてばカカシ先生だな!変化の術で化けてんだろ!!!」
主人公?のナルトが言う。

「お前こそ!」「イヤ!お前だ!」「オレじゃないつてばよ!」「お前、先生と同じオヤジの臭いすつぞ!」「するかあ!!!」
などなど言い合い、互いに互いを殴り合う。

少し経った後に、

「あのさ!あのさ!とりあえず術といてみろつてば。そしたら二人になる…。それで分かる。」

ナルトの一人が提案する。

「あ!もつと早く気づけバカ!」「お前はオレだバカ!」

ボンツ！術を解いたらナルト1人だけだった。

……ちょっと、ナルトの背中に哀愁が感じられた。

サスケサイド

オレは森の中、特に葉の多い木の枝の上でカカシの様子を見ていた。ナルトのバカがカカシの罠にかかりチャンスだとおもった。一度深呼吸し、自分に冷静になれと言い、手裏剣をナルトと喋っているカカシに向かって放った。

俺の手裏剣はすべてあたり、良し！と思った瞬間、丸太に変化した。

クソッ！変わり身の術で場所がばれたな……。早くここから離れな
いと……そう思ってた木から飛び移りながら考えていると、自分の近
くの茂みから声がかかった。

「ヨッ！サスケくん。無事だったんだ（笑）。」

俺はカカシだと思い手裏剣を投げかけたが、そいつが同じ班の人間
だと分かると止めた。

「お前か……」

警戒したほうがいいだろう……。もしかしてカカシがコイツに化けて
る可能性があるからな……。

「安心なさい、私はカカシじゃありませんよ」（笑）。」「腕の前に突き出し、自分がカカシであることを否定してくる。…全然信用出来ないが。」

「何の用だ？」

「うん、実はさ、私と協力しませんか（疑）？」

こいつは俺に協力要請してきた。俺もつい「協力？」と言ってしまった。

「うん！…さつき見た限りカカシはかなり強いよ。一人だと難しいだろうから協力してスズを取らな〜い（期待）！？」

…このいちいちメンドクサイしゃべり方といい、身体を動かし意思表示をする所と言い、どうやら本物ようだ。カカシでもそこまで真似出来ないだろう。

流稀はウザったらしい笑いで勧誘してきやがる。

…こんな奴と組んだ所で目に見えている。…当然、返事は「断る」

…流稀の勧誘に即答で断るサスケ。

「何故（疑）？」

「オレは1人でも問題無い。それにお前と組んだところで足手まといになる可能性がある。」

サスケは憚然とした態度で言葉を放つが、何をどう見て判断したのかキツパリと断言する。

「いやあゝ、でも1人より2人の方が戦術の幅は広がるとおもっただけだな（願）？」

「くどい。俺は1人で合格する。」

流稀は再度頼んでみたが、聞く耳持たずにサスケは行ってしまった。

……そこで眼を細めて笑っている流稀を残して。

「あぎやあああああああ！！！」

しばらくするとデカイ悲鳴が聞こえた。サクラが幻術をかけられたのだらう。…サクラは脱落だな。

『ボゴウ！！！！』

というデカイ音と光が見えた。サスケが『豪火球の術』をやったのだ。…その後はサスケも地面に埋まり

終わった。

…残りは『水鏡流稀』
みずかがめゆづき

カカシサイド

…カカシは今、弁当を盗み食いしようとしていたナルトを丸太に縛り上げた後、最後まで姿を見せていない流稀を探している。

場所は気配で分かる、そろそろ時間も押してきているので自分から行くことにした。

気配を消して隠れているがこの程度の隠蔽ではカカシからは逃れら

れず、真っ直ぐ流稀のいる方角に来る。

（さて、…もうそろそろ時計が鳴るころだし、こっちから行って終わらせるか）

そう思いながらカカシは流稀のいる方向に足を進める。

カカシはやはり流稀の居場所がすでに分かっていたのだ。たしかに、アカデミーから卒業したばかりにもかかわらず、気配の消し方は合格点が付くほどであるが、しかしそれは所詮、下忍にも慣れていない忍者での話。上忍のからすれば天と地ほどもある力の差があるのだ。

そんなカカシには流稀の場所など眼をつぶっていても分かっている。う。

さつさと実力をみて終わらせようとカカシは思いながら進んでいく。

……ちなみに、このときカカシは油断していた。

相手は下忍、万が一にでも自分は怪我はしないと、カカシの相手となる流稀を侮ってしまったのだ。

だからカカシは分からなかったのだ。…自分が流稀のテリトリーの中に入ったことに……

カカシは林の中を進んでいき、そこに立っている流稀を見つけた。彼のいた場所、そこは広場のようになっており、周りは木に囲まれている場所だった。

彼はその中心に立っている。

カカシは隠れようとしたが、流稀の前に出てきてしまったため、そのまま出ていくことにした。

「よう流稀。おまえ、かくれないでいいの？」

カカシの質問に彼は答える。

「やあ先生！実はボクもそ〜思っちゃったんだけどさあ〜。よくよく考えてみたらさ〜（想）、
下忍にもなつてな僕たちが上忍に見つからないわけないじゃ〜んておもったんだよね〜（想）！！

…だったら自分の得意なやり方で挑戦したほうがいいかな〜て（閃）。

それで評価してもらおうと思つてず〜と先生待つてたんだ（笑）！
流稀はいつものように仮面の下で笑いながら答えた。

カカシはこの時、少し彼の評価を上げた。

…隠れていても無駄だと的確に情報分析をし、『自分の得意な部分で攻めるという姿勢に』、だ。

そう、感心しながら言葉を紡ぐ。

「ほおー。で、お前は何を得意としているんだ？」

「体術ツス（自慢）！」

そう言いながらカカシに拳を構え、臨戦態勢をとった。

「そうか。じゃ、おまえにも忍戦術の心得その一、体術を教えてやる。」

そう言いながらイチヤパラを出し相手を迎え撃つカカシ。その態度にも流稀は別段気にせず構えている。

「…じゅー！いきますよ（緊張）！！」

「どうでもいいから、さつさときなさい。」

カカシがしゃべった瞬間、流稀はカカシに突進した。

カカシはそれに対し（ナルトみたいな戦い方のやつだなあ、）と半分呆れていた。流稀はどんどんカカシに近づいていき、ついにカカ

シに拳を入れられる距離まで入った。

カカシはイチャパラを見ながら流稀の攻撃をかわそうとしていた。そして流稀がカカシに拳を入れようとした瞬間、

ボンッ！と流稀の身体は煙になり、その場で消えたのだ。

「！なんだとッ！！！（これは……『影分身の術』！！？）」

…カカシは突然の出来ごとにその場で致命的と言えるほど、体が硬直して止まってしまった。

そして、影分身が消えた瞬間、林の中から何かが飛び出しカカシを狙った。

…それは黒い光沢を放ったクナイ…そのクナイは四方八方から大量に飛び出し、広場の中心にいるカカシに殺到して来たのだ。

「やばっ……………！！！」

カカシは「やばい」と言い切る前に、無数のクナイの群れに仕留められた。

…そして演習場に存在したものは、クナイによる鉄の衝突音の響きを聞いた…。

第四話 サバイバル演習（後書き）

感想や意見などありましたら気軽にどうぞ。

第五話 結果発表（前書き）

文章の段落がごちゃごちゃで読みにくい場合があります。
申し訳ございません。

第五話 結果発表

先ほどまで流稀とカカシがいた森に囲まれた広場……。

そこは先ほどのクナイの嵐の攻撃のせいで、砂煙が舞い、中央部分は見えなくなっていた。

「やつぱ……マジで死んじゃったかしね……ッすね（焦）」
そう言いながら森の中から、右手にクナイを持ち警戒している
みずかがみゆうき
水鏡流稀が出てきた。

彼はやや心配気味に気味に言っではいるが、
もちろんカカシが死んだなんてこれっぽっちも考えてはいない。

…あの時、大量のクナイを食らう瞬間、かろうじて手を動かし印を結んでいた。

その印は先ほどナルトの時に使用した『変わり身の術』、間違いなくそれだった。

その証拠に、カカシがいたと思われた場所には大量のクナイが突き刺さった丸太が転がっている。

カカシが死んだように見えているが、流稀クナイを構えたまま警戒を解かない。

「いやあ……やってくれるね。」

すると、後ろの茂みから無傷のカカシが出てきた。

「は……ッ良かった!!、先生、生きててホントよかったですよ（嬉）!!!」

…でも、無傷とは傷つきますね（悔）！怪我の一つは期待してたんですが…（期待）」

ホントに残念そうに答える。

「それは勘弁して欲しいな。…にしてもこのやり方といい下忍とは思えないな。…もしかしてお前、実力を隠していた？」

少し疑い気味にカカシは喋りかける。

「はっはゝ！！先生忘れてません？私の一族、『水鏡一族』は、忍びの家系だつてことを（自慢）！？」

「……ああ！そういえばお前『水鏡一族』の人間だったね。すっかり忘れてたよ。」

流稀の説明でカカシは何かわかったのか、妙に素直に納得する。

「…しかし、避けなきゃお前完全に殺す気だったでしょ？ていうか目的忘れて無い？」

「先生が怪我して動けなくなってる所を確認した後、スズを貰おうとおもったんすよ（策）。」

手に持ったクナイで、カカシを狙い攻撃する。

「そついう訳にはいかないのよね。」

カカシは下忍では見切れないような速さで避けて流稀の背後にまわる。

そしてカカシは俺を昏倒させるために首に手刀を叩き込む。

しかしまたしても、攻撃した瞬間ボンツという煙りを出しながら流稀が消えた。

「な、これも影分身！」

カカシは流稀がまたしても影分身だったことにほんの一瞬だけ驚いた。

そこを見計らって後ろで最大限気配を消して待機していた本体の隆稀がスズを取った。

「よっしゃー！！スズゲーーーーーーーーーーーーーーーーツチュ（超喜）！！！！」

スズを揺らして鳴らし、何故かフラダンスを踊りながらカカシを見る。

「はあゝゝスズ…盗られるなんてね。」
カカシが呆れたような目を向けていた。

ジリリリリリッ！！

目覚まし時計が鳴った。その後、流稀とカカシは共に丸太の前に戻った。

そこには丸太に縛られてるナルトと座り込んでいるサスケとサクラがいた。

「おーおー、腹の虫が鳴つとるね…君達。…ところで、この演習についてだが、ま！お前らは忍者アカデミーに戻る必要も無いな。」
カカシの言葉に合格したと思ったのか四人とも喜色の色が浮かぶ。

「じゃあさ！じゃあさ！ってことは四人とも…」
ナルトが確認のために聞こうとしたら

「……そう流稀以外の三人とも…忍者をやめる！」
「！！！！？」

いきなりの勧告に三人とも絶句する。流稀も三人の空気に合わせて絶句してみる。

「忍者やめろってどーゆーことだよオ！そりやさ！そりやさ！確かにスズは取れなかったけど！…ていうか何で流稀だけ合格なんだよ！！」

怒りのためか普段の口調を忘れるナルト。

「だってボクちゃん、スズ取ったんだもん（ニヤリッ）！」
ほ〜れっほ〜れと言いながら三人にスズを見せつける。
それを見て三人は驚愕する。

「流稀、あんたスズ取れたの！？」
サクラが信じられないようなものを見るように聞いてくる。

「ま〜ね〜。…まっ！結構、運任せだったんだけどね（暴露）」
…まあ、あれはカカシが驚かなければまず不可能だったからである。
もちろん流稀は別のやり方も考えていたが。

「〜っ確かに流稀はスズを取ったみたいだから合格で良いとして、
なんでやめるまで言われなくちゃなんねェんだよ！！」
縛られながらナルトが暴れる。

「どいつもこいつも忍者になる資格もねエガキだってことだよ。」
カカシが言い切るとサスケがキレたのかカカシに突っ込んで行った。
しかし逆に上に乗られて頭を踏まれている。

「！！サスケ君を踏むなんてダメー！！！！」
泣いてんのか怒ってんのか分からない顔をしてサクラが抗議する。

「耐えろ！耐えるんだ！！サクラー（熱）！！！！」
何故かこのタイミングで流稀も入ってきて、熱い言葉を何故かサク

ラに投げかけている。

「お前ら忍者なめてんのか？あ！？何の為に班ごとのチームに分けて演習やってると思ってる。」

「え！？……どーゆーこと？」

それをカカシが睨み付けて言うが、サクラは未だ分からない様子だ。

「……チョ シに乗ってすいません（哀）」

流稀も何故か勢いをなくし大人しくなった。

「つまり……。お前らはこの試験の答えをまるで理解してない……。」

「答え……！？」

ナルトはまだ分かってないのか首をかしげる。

「そうだ、この試験の合否を判断する答えだ。」

「だから……。さつきからそれが聞きたいんです！！」

サクラは何故か開き直る。

「………つたく。」

カカシが再度呆れる。

「あ………も………！だから、答えって何なんだってばよオ！？」

「チームワークなんじゃないかな（疑）？」

……以外にも流稀が答えた。

「………！！………」

三人ともその単語に反応する。

「一人では無理だが、四人全員ならスズを取れただろう…。」

「なんでスズ三つしかないのにチームワークなわけエ!? 四人で必死にスズ取ったとして一人我慢しなきゃならないなんてチームワークどころか仲間割れよ!」

サクラが反論する。

「当たり前だ! これはわざと仲間割れするよう仕組んだ試験だ。」
カカシの言葉にサクラとナルトは「え!?!」と反応する。

「この仕組まれた試験内容の状況下でも、なお自分の利害に関係なくチームワークを優先できる者を選抜するのが目的だった。だから流稀は合格したんだ。」

その言葉にサクラとサスケは思い出す。

実は流稀は試験の時、サスケだけではなく、サクラにも協力関係を結ぼうと持ちかけていた事を……

(ちなみに、ナルトは勝手に独走していたので持ちかけることが出来なかった)

「それなのにお前らときたら……。」

…サクラ…お前は目の前のナルトや流稀じゃなくて、どこに居るのか分からないサスケのことばかり。

ナルト! お前は一人で独走するだけ。サスケ! お前は3人を足手まといだと決めつけ個人プレイ。」

各々思い当たる節があるので何も言えない。

「任務は班で行う! たしかに忍者にとって卓越した個人技能は必要だ。が、それ以上に重要視されるのは『チームワーク』…コレを乱す個人プレイは仲間を危機に落とし入れ、「殺す」ことになる。…

…例えばだ…」

カカシがポーチへと手を伸ばし、クナイを掴みサスケの首に添える。

「サクラ！ナルトを殺せ、さもないとサスケが死ぬぞ。」

カカシの行動にサクラは動揺し、ナルトは「え！？」とビビっている。流稀も「マジでッ！！？」とサクラほうに向き行動を見つめる。

「と…こうなる。人質を取られた挙げ句、無理な二択を迫られ殺される。任務は命がけの仕事ばかりだ！」

カカシはクナイをサスケの首から外し、サスケを解放して立ち上がる。

サクラは嘘だと分かりホッとして、ナルトはもしかして殺されるんじゃない？と思っていたのかかなりホッとしていた。流稀は「マジでやる気だったのでは…！？」とサクラを見ながらまだドキドキしていた。

カカシは丸太の後ろにあった石碑に近づく。

「これを見る、この石に刻んである無数の名前。これは全て里で英雄と呼ばれている忍者達だ。」

それを聞いてナルトが反応する。

「それぞれそれーっ！！それーっ！！オレもそこに名を刻むってことを今決めたーっ！！英雄！英雄！犬死になんてするかっばよ！！！」

ナルトが高らかに英雄宣言をする。

「…が、ただの英雄じゃない……。」

「へー！えー！。じゃあどんな英雄達なんだってばよオ！」

「……。」

「ねえ！ねえ！」

ナルトが笑顔で聞く。

「任務中、殉職した英雄達だ。」

カカシの言葉を聞くと流石のナルトも黙る。サクラやサスケも同様だ。流稀も表面上は哀しそうにしているが、眼だけは何の感情も見せていない。

「これは慰霊碑。この中にはオレの親友の名も刻まれている……。」「カカシが沈鬱な感じで言う。

「…お前ら…！最後にもう一度だけチャンスをやろ。ただし昼からはもっと過酷なスズ取り合戦だ！

挑戦したい奴だけ弁当を食べ、ただしナルトには食わせるな。」

「え？」

ナルトが言う。朝昼飯抜きはキツイからな。

「ルール破って一人昼めし食おうとしたバツだ。もし食わせたりしたらそいつをその時点で試験失格にする。ここではオレがルールだ。分かったな？…それと流稀、お前はめしを食ったら帰って良い。明日から任務だ。」

そう言い、カカシは瞬身でどっか行つた。

「へっ！オレつてば別にめしなんか食わなくつたつてへーきだつ…」強がりを言ってる途中でぎゅるるると腹の虫が鳴く。

サクラやサスケが飯を食ってる。そんな最中に流稀は包みを開け、

「はい！」

ナルトに弁当を差し出す。

「…！！」

ナルトとサクラが反応する。サスケはどうしようか迷っていたようだから別に驚いていない。

「ちょ…ちょっと流稀！さっきカカシ先生が！！」

「うん…でも、さ！…私はダメなんて言われて無いしね」（笑）。それにこれで失格になったら、

今度はみんなでスズを取りゃいいさ（笑）！…それに、これもチームワークってやつでしょ？」

そう言っただけはいつもと違う優しい笑顔で笑い、ナルトに自分の弁当を差し出す。

「…そうだな。今はアイツの気配はない。昼からは全員でスズを取りに行く。」

サスケも弁当をナルトに差し出す。それを見てサクラは弁当を名残惜しそうに一瞥し、ナルトに差し出す。

「へへへ、ありがと…。」

…それを見たナルトは笑顔で礼を言う。

縄を切ろうと流稀が動こうとしたらボン！！と目の前にデカイ煙りが上がり

「お前らああああ！！」

カカシが大声上げながら出てきた。

「！」「うわあああ！！」「きゃあああ！！」「ふおおおおお

おお（驚）！！！！」

各々声を上げる。

…そしてカカシが近付き、

「ぐーかつく！」

…笑顔でナルト達に合格を宣言した。

「え！？」「は？」「……。」「ふお！？」

当然、全員固まる。

「合格！？なんで!？」

サクラが聞くと

「お前らが始めてだ。今までの奴らは素直にオレの言うことをきくだけのボンクラどもばかりだったからな。……忍者は裏の裏を読むべし。忍者の世界でルールや掟を破る奴らはクズ呼ばわりされる。

……けどな！仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだ。」

「アハ……」「……。」「フン……。」「……ムッフー……ン（喜）……」

自分たちが合格だとわかったと、サクラは喜び、ナルトは呆然、サスケは知ってたかのような態度を取り、流稀は腕を組んで鼻で息を吐いた。

「これにて演習終わり、全員合格！……よーしい！第七班は明日より任務開始だア……」

カカシがサムズアップしながら決め台詞を言った。

「やったああってばよオ……！オレ、忍者！忍者……！忍者……！」ナルトが歓喜に震えていると

「帰るぞ。」

とカカシやサスケ、サクラは帰る……縛られてるナルトを放置して。

「って！どーせこんなオチだと思ったってばよオ！縄ほどけエー……」

「よいしょ！」

そこにクナイをもった流稀がナルトの縄を切ってやった。

「！！おオ！サンキュー流稀！やっぱお前だけが良い奴だってばよ！！」

ナルトは喜びながら三人の下に向かう。

…最後にこの場に残った流稀は、丸太の後ろにある石碑に近づいていく。

石碑の傍まで来た流稀は、石碑に手を触れ、少しだけ撫でた後：

石碑に唾を吐き付け、侮蔑の視線で石碑を見下していた。

……石碑を睨みつける目は深い憎しみと恨みが垣間見えており、視線のみで相手を殺すことも十分と思わせるほどだ。そして石碑に向かい吐き付けるように呟く。

「醜悪なゴミ共が………あの世でも苦しみ続ける」

……最後に石碑に蹴りを入れ、流稀はこの場を立ち去っていった。

第五話 結果発表（後書き）

次回も楽しみにしているとうれしいです。

第六話 不自然な任務（前書き）

うわあああああああああ（泣）！！

何か今日発売のジャンプでNARUTOみたら自分が考えている展開と、

被ってしまったあああああああああ（驚）！！！！

喜ばいいのか悲しめいいのかあああああああ（迷）！！

・・・・・・それでも書いてくんでみてってね！

第六話 不自然な任務

『目標との距離は？』

無線機からカカシの声が聞こえる。流稀たち七班は今現在、以来のターゲットの周りを囲んでいる

『5m！いつでもいけるってばよ！』 『オレもいいぜ』 『私も』

………』

ナルト、サスケ、サクラはカカシの言葉に応答したが、…何故か流稀は返事を返さない。

…不審に思ったカカシはもう一度無線をかける。

『流稀？どうした、返事をしろ？』

『………ZZZZ（眠）。』

…カカシの返事の代わりに、稀流のいびきが無線から流れる。

『『『『はあ……。』』』』

流稀以外の七班全員が疲れたように溜息を吐いた。

『もういい…流稀以外の三人！やれ』

カカシからの捕獲命令が出たので全員で一斉に猫に襲いかかる。

「うりゃああ！！…つかまえたあーっ！！！」

その後すぐに、ナルトが右耳に不自然にリボンがついているネコを捕獲した。

「ニャー！！！」

ネコは必死に逃げようとする。……心なしか命がけで必死に逃れようと見て取れる。帰りたくないのだろうか…。

『右耳にリボン…。目標のトラに間違いないか？』
カカシが念のため聞いてくる。

「ターゲットに間違いない。」
それにサスケが答えた。

『よし、迷子ペット「トラ」捕獲任務終了！』
カカシが疲れたような声で告げる。

『……………ZZZZ（睡眠中）』。
…流稀はまだ眠っている。

『『『『いい加減に起きろ！！！』』』』
『ウツップス（驚）！！？』

暴れるトラを連れて任務終了を報告するため里に戻った七班。…そこには世にも恐ろしい光景があった。

「ああ！私のかわいいトラちゃん。死ぬほど心配したのよ……。」「
焼く前のハンバーグのように肥えたシジミ婦人と、…まるで地獄を
見たようなネコは意思疎通がうまく出来ていないようだった。トラ
は「ニャー……！」と泣いてる…。」

（（（かわいそうに……）））
それが例外の一人を除き、この部屋にいる者全ての想いであつた。
例外の一人、眠っていて事情の知らない水鏡流稀は、この光景を目
にしながら「ええ話や…」と眼にたまった涙を手で拭いながらほ
えましく眺めていた。

隣にいるサクラに「病院行った方がいいわよ……」と彼の頭を本気で心配していた。

第七班は寝ていたがカカシを含め三人は朝っぱらからこのネコを確保する為に森の中を走り続けてきたのだ。相当嫌そうな顔をしている。

「帰って寝たいな」

カカシは本当に疲れた顔で呟く。その顔からして本心なのだろう。

「まったくだつてばよ」「そうですね」「ああ……」

「ボクは別にだいじょうぶだけどな」（不思議）？」

……流稀は任務中、気持ちよくいびきをかきながら眠っていたので当然である。

そんな稀流にナルトと春野、サスケやカカシまでもが稀流の頭を強くはたいた。

「気持ち分かるが……まあ、とりあえず任務ご苦労じゃった」

大名の夫人の前であるから忍びにしか聞こえない程度で火影も七班の気持ちを共感し呟く。

「……さて！カカシ隊、第七班の次の任務はと……」

んー……老中様のぼつちゃんの子守りに隣町までのおつかい、イモほりの手伝いか……。――

火影がスケジュールを見ながら言う。……これ本当に忍びの仕事なのだろうか？

今さらだがこの世界の忍びはすでに忍んですらいらない気がする……。

「ダメー……ッ……！そんなのノーサンキュー……！」

オレってばもつと、こうスゲーー任務がやりてーの！他のにしてエ

「！！！」

火影の言葉に対し、ナルトがケチつける。

「バカヤローー！！お前はまだペーペーの新米だろーが！誰でも初めは簡単な任務から場数を踏んでくり上がってくんだ！」

そんなナルトはイルカに怒鳴られる。ところでイルカはアカデミーの教師のはず……？副業だろうか？

「だってだって！この前からずっとシヨボイ任務ばっかじゃん！！」
それでもまだナルトは喰ってかかる。

「いいかげんにしとけ、こら！」

流石に力カシが止める。殴ってだが。…その後は火影が任務の大切さやランクについて教える。

「分かった。お前がそこまで言うならCランクの任務をやってもらう。……ある人物の護衛任務だ。」

ナルトの気持ちを組んで、自分たちの実力よりワンランク上の任務を火影は用意した。

「だれ？だれ？大名様！？それともお姫様！？」

ナルトはワクワクしながら聞く。…そんなにやりたい？

「そう慌てるな、今から紹介する！入ってきてもらえますかな……。」

「
火影が声をかけると扉を開け、酒瓶片手の両腕が傷だらけの老人が現れた。しかし足腰はしっかりし、肌も若々しく筋肉もそこそこある。」

「なんだア？超ガキばっかじゃねーかよ！」

メンバーが不満なのか酒を飲みながら俺等を見る。

「…その床にうつ伏せに倒れてるガキに、

…とくにその一番ちっこい超アホ面、お前、それ本当に忍者かあ！？お前エ！」

…ちなみに、うつ伏せになっているのは勿論、流稀の事である。少し前第七班全員に頭をはたかれた後、床に倒れ、そのまま情眠を貪っていた。

「アハハ、誰だ？一番ちっこいアホ面って……。」「ナルトが同僚達を見る。ちなみの中で流稀が一番背が高い。

「ぶっ殺す！！！」
そして自分が一番低いと分かったナルトは依頼人に突進しようとした。

「これから護衛するじいさん殺してどーするアホ。」
…が、カカシが襟を掴んで止める。

「わしは橋作りの超名人、タズナというもんじゃわい。わしが国に帰って橋を完成させるまでの間、命をかけて超護衛してもらう！」
タズナはすいぶん偉そうに依頼を宣言していた。

…その後、床に突っ伏していた流稀をカカシが起こし、顔を上げた流稀の目の前にいたタズナは驚き
悲鳴を上げながら腰を抜かした。その時にナルトは大爆笑していたがそれはまた別の話。

「出発ーっ!!」

「ヤッフウ~~~~ツイ（ナチュラルハイ）!!」
ナルトと流稀がハイテンションで叫ぶ。

「何をはいじやってんのアンタら……」
サクラが白けた目を向ける。

「だってオレってば一度も里の外にでたことねえからよ。」

「いや〜！初の里外任務だし、やっぱり最初が肝心かと思って（キリッ）！」

ナルトは辺りをキョロキョロして、まるでお上りさんである。流稀はまるで酒の入った酔っ払いのようにゆらゆらし踊っている。

「おい!……本当にこんなガキ共で大丈夫なのかよオ!!」

タズナがナルトと流稀の二人を見て不安がる。……まあ護衛の内ひとりとはガキ丸出し、もうひとりとは仮面を被り良く分からない踊りをした奴であるから仕方もないが。

ちなみに、タズナは昨日の一件で免疫が付いたのか、流稀を見ても普通に会話している。

初見の人は大抵、仮面を見ると恐怖し怯えるか、警戒するかのも二択になるのだが、大体二度目になると、皆普通に会話している。……最初の方でこいつの性格を知るために、怖がるのも馬鹿らしくなるのだ。

「ハハ！上忍の私がついてます。そう心配いりませんよ。」
カカシは責任者として依頼人を安心させる。……大変だね大人っ。しかしそんなカカシの苦勞が分からないナルトは

「コラ、じじい！あんまり忍者をなめんじゃねえぜ！オレってば

スゲーんだからなあ！」

根拠の無い自信を見せるナルト。

「いずれ火影の名を語る超エリート忍者！…名をうずまきナルトという！！覚えとけ！！！」

「ちなみに、わたしは木の葉一の付け物職人になる男！…名を水鏡流稀という！！それなりに覚えとけ（ドーン）！！！」

…ナルトに便乗した流稀は何故か微妙な宣言をした…てかこいつ、たしか夢は上忍になる事だったはず…

「…火影つていやー里一番の超忍者だろ？お前みたいのがなれるとは思えんが？」

…そんな流稀の宣言をスルし、タズナは酒を飲みながら軽く笑う。

「だーうつさい！！火影になるためにオレってどんな努力もする覚悟だつてーの！！オレが火影になったらオッサンだつてオレのこゝと認めざるをえねエーんだぞ！！！」

「認めやしねーよガキ…。火影になれたとしてもな。」

それを聞いて再びナルトはぶちギレル。

「ぶつ殺ーーす！！！」

「だからやめるバカ、コイツ。」

そして再びカカシに止められる

「……ちなみに、わたしは木の葉一の付け物職人になる男！…名を水鏡流稀という！！それなりに覚えとけ（ドーン）！！！」

…無視されたのに気付かなかったのか、流稀はもう一度高らかに宣言した。

しばらく歩き、不意にサクラが、

「ねえ…タズナさん。」

「何だ？」

「タズナさんの国って『波の国』でしょ？」

「それがどうした？」

「ねえ……カカシ先生……。その国にも忍者っているの？」

これから行く所についてサクラはカカシに質問した。

「いや、波の国に忍者はいない……が、たいていの他の国には文化や風習こそ違うが隠れ里が存在し、忍者がいる。」

カカシによる忍び五大陸や火影についての説明が始まった。…そもそも学校で習いそうなものだが？

「へー、火影様ってすごいんだあ！」

サクラがワザとらしく言う。心の中で絶対バカにしてる。

「……お前ら、今火影様疑っただろ。」

カカシが見事見抜く。三人ともギクツと反応する。

「ま…安心しろ、Cランクの任務で忍者対決なんてしやしないよ。」
カカシがサクラの頭に手を置いて安心させる。

「じゃあ外国の忍者と接触する心配はないんだア……。」
サクラは安心する。

「もちろんだよアハハハ！」
カカシが笑うがタズナは微かに反応した。それをサスケが見つけたが確信が無いのか黙ってる。
流稀はただ眼を細めただけだった。

…またしばらく歩いていると、目の前に水溜まりを見つけた。

カカシは水溜まりを一瞥し、そしてそのまま通り過ぎていく。

そして水溜まりを通り過ぎたら徐々に二つの気配が生まれてきた。
そして後ろから一人が飛んで来た。

そいつは鎖の部分が刃物になっている鎖を持ち、カカシに巻き付ける。

もう一人も鎖を持ち「一匹目。」という片方の声と同時に鎖を引く。
鎖に巻き付けられていたカカシはバラバラになる。

「キヤーー！！」、「カ…カカシ先生エー！！」、「うつそーー（驚）！！」

サクラとナルト、流稀は突然の事に混乱して止まっている。

そして敵は瞬時にナルトに近付き「二匹目。」とカカシ同様、鎖で巻こうとしたがその前にサスケが反応してジャンプして手裏剣を飛ばす。

その手裏剣はナルトを縛ろうと円状に飛んでいる鎖を木に縫い付け、更にクナイを投げて手裏剣の穴に通して木に刺して固定する。

敵は鎖を引っ張るが動かない。

サスケはその隙に敵二人の爪がついた籠手のような装備に飛び乗り、引っ張ろうとする動きを止め、敵の腕を掴みながら両足で二人の顔を蹴る。

蹴られた二人は「グッ！」とうめき声を上げた後に邪魔になっていた鎖を籠手部分を回転させてネジ切り、自由になる。
そして別々に狙いを変えた。

背の高い方はタズナの方に、背の小さい方はナルトの方に来た。

サスケがサクラとタズナそして流稀を守ろうと盾になろうとしていたが、その前にカカシがラリアットかまして敵を昏倒させた。

「ナルト…すぐに助けてやらなくて悪かったな。ケガさしちまったな。……お前がここまで動けないとは思ってなかったからな。とりあえずサスケ、よくやった。」

サスケに対しねぎらいの言葉をかける。

「よオ…ケガはねーかよビビリ君。」

わざわざサスケがナルトを挑発する。

「……！」

ナルトがまたぶちギレそうになったが…

「ナルト！ケンカはあとだ。こいつらの爪には毒が塗ってある。お前は早く毒ぬきする必要がある。傷口を開いて毒血をぬかなくちゃならない。あまり動くな、毒がまわる。」

ナルトに注意した後、タズナを睨み付ける力カシ。

「タズナさん。」

「な…何じゃ…！」

力カシが話しかけるとタズナは明らかに動揺しているような口調になる。

「ちょっとお話があります。」

そう言った後、とりあえずまだ生きてる敵を木に縛りつけた。

「こいつら霧隠れの中忍ってところ……。こいつらはいかなる犠牲を払っても戦い続けることで知られる忍だ。」

力カシが全員に説明する。

「…なぜ我々の動きを見られた。」

起きた敵が聞いてくる。

「数日雨も降ってない今日みたいな晴れの日に水たまりなんてないでしょ。」

カカシの全て分かっていたという説明にタズナが噛みついた。

「あんた、それ知ってて何でガキにやらせた？」

「私はその気になればこいつぐらい瞬殺できます。…が…私には知る必要があったのですよ…。この敵のターゲットが誰であるのかを…。」

改めてタズナを見る。

「？どういうことだ？」

「つまり、狙われてるのはあなたなのか、それとも我々忍のうちの誰なのか…ということですよ。」

我々はアナタが忍に狙われてるなんて話は聞いてない。依頼内容はギャングや盗賊など、ただの武装集団からの護衛だったはず…。これだとBランク以上の任務だ…。依頼は橋を作るまでの支援護衛という名目だったはずですよ。」

「……。」

「敵が忍者であるならば…迷わず高額な「Bランク」任務に設定されていたはず…。」

なにか訳ありみたいですが依頼でウソをつかれると困ります。これだと我々の任務以外ってことになりますね。」

カカシの説明を聞き、さっきみたいな事がまた起きるかも知れないのでサクラは怖くなり

「この任務、まだ私達には早いわ…。やめましょ！ナルトの傷口を開いて毒血を抜くにも麻酔が要るし…里に帰って医者に見せないと…。」

ナルトを口実にして里に帰ろうと促す。…ちなみに、流稀はこの時、捕えられた霧隠れの二人を見て、

…何かを思い出そうと黙ったまま考えていた。

「んー」。」

カカシはナルトを見ながら考える。

「……こりゃ荷が重いな！ナルトの治療ついでに里へ戻るか。」

カカシはそう決断した。担当上忍として正しい選択だ。さっきより強い敵が現れたら誰か死んでもおかしく無い。そもそもランクが違いすぎるのだ。…下忍がやっていいランクでは無い。

そう思っていると、ザクツ！といきなりナルトが傷にクナイを刺した。

「！」「。」「」

全員が驚愕する。唯一、流稀は冷やかな眼で見ていたが…

「ナルト、何やってんのよ！アンタ！！」

サクラがナルトの奇行を咎めるがナルトは何故か笑顔を浮かべて宣言する。

「オレが、このクナイで……。オッサンは守る。任務続行だ！！！」
…任務はまだ続きそうだ。

第七話 本当の任務、そして対決（前書き）

先に通達しておきます。

並みの国編では…流稀は戦闘はしません（キリッ）

ただ、オリジナルの術は出てきますので、
期待して呼んでくれますと幸いです。

第七話 本当の任務、そして対決

あの後、タズナから依頼の真相を聞かされた七班一行、下手な泣き落としみたいなのを聞かされ、お人好しの力カシは依頼を受託。

Cランクから一気にAランク任務に上がった…。

ハッキリ言って冗談ではすまされない位危険だが、ナルトやサスケなどはヤル気になっていた。

陸を歩き、波の国への国境に近付いたら今度はバレないようにエンジンを切った手漕ぎ船で入国する。

自分の国に帰るだけなのにまるで不法入国者みたいに入国する。

「うひょう！でけエー！ー！！」

「霧の海フｗｗｗｗ（興奮）！！ヤッベ！本気^{マジ}テンション上がるんですけど（嬉）！！」

見えてきた建設中の橋を見てナルトが叫び、あまりに霧の海が濃い
ため、興奮し身体を震わせた流稀が雄叫びを上げる。

「こ…こら！静かにしてくれ！この霧に隠れて船出してんだ。エンジン切って手漕ぎでな。ガトーに見つかったら大変なことになる。」
船主がナルトと流稀を注意する。……たしかにこんな間抜けなミスでガトーの手下に見つかり、命をさらすことになったらたまったものではない。

しばらく橋沿いに進んでいたら波の国が見えてきた。

見つかる事を避けて上陸するのはマングローブのある街水道を通る事にしたようだ。

マングローブ地帯を抜けて古い木の栈橋に到着した。

「オレはここまでだ。それじゃあな、氣をつける。」

「ああ、超悪かったな。」

船主はオールを外してエンジンをかけて、一目散に逃げていった。

……いや、ちよつと待て。何で逃げる時はエンジン使うの？

「よーし！ ワシを家まで無事、送り届けてくれよ。」

偉そうにタズナは言う。…依頼を偽ったためにこつちが大変な事に巻き込まれたというのに。

「はいはい。」

カカシは面倒くさそうに返事する。何せ次はさつきみたいな雑魚とは違い、もっとレベルの上がった上忍が来るかもしれないのだから……。

そんなカカシの感情も余所に、流稀はさつき襲ってきた敵の事を考えていた。

（……あの霧隠れの忍び、昔、直接どこかで見かけたことがある……。

それも、最近ではなく今からおよそ十年前に見た記憶がある……。）
しかし、あと少しで思い出せそうな時、ナルトが大声を出す。

「そこかぁー！ っ！ っ！」

キョロキョロしてたナルトが突然大声を叫びながら手裏剣を草むらに投げる。

せめて投げるなら無言で投げてほしい。

……しーーーーんつと何も起きない。

「フ……なんだネズミか。」

ナルシストみたいに格好つけるナルト。

「って、何かっこつけてんの！！そんなとこ初めから何もしやしないわよ！」

大声で注意するサクラ。しかし、サクラが一番うるさい。

「コ……コラ！お前がやたらめったら手裏剣使うな……。マジでアブナイー！」

カカシが注意するがナルトは聞いてない。また何かを探しはじめていた。

……その時、流稀は何か視線を感じた。カカシも反応したがその直後にはまたナルトが

「そこかアーーーーー！！！」

また手裏剣を草むらに投げた。だが、確かにその方向から視線を感じたから間違っただけ。

……何気にナルトは勘が鋭いな。

「だからやめろーーーーー！！！」

「ぐがアーーーー！」

二度目にぶちギレたのかサクラがナルトを殴る。

「ホ……ホントに誰かがこっちをずっと狙ってたんだってばよ！」

「はい、ウソ！」

ナルトが真実を言うがサクラは信じない。

カカシは視線が気になったのでナルトが手裏剣を投げた辺りを探すと、そこには手裏剣にビビっていた白い毛並みのウサギがいた。

「ナルト！なんてことすんのよオ！」

サクラはウサギにした事を怒る。そんなの気にすんなよ。しかし力カシは警戒を更に強めた。

あれは温室で育てられただろう、変わり身用のユキウサギだ。敵がすぐ傍にいるかもしれない……。

だが、ここで流稀はさっきの忍びの事を思い出した。

（そうだ……。あいつら霧隠れの『忍び刀七人衆』一人の部下だった鬼兄弟！……確かその七人衆の名前は……！）

稀流が名前を思い出そうとしたその瞬間、

後方からブン！ブン！と何かが飛んで来る音が聞こえたので直ぐ様伏せる。

「全員ふせろ！！」

力カシが命令すると、数瞬後にはデカイ何かが飛んで来た。

全員、間一髪のを避け、その飛んできた物は木に刺さり、デカイ包丁みたいな刃物と分かった。

…そしてその刃物の柄に上半身裸で口元に包帯を巻いた男が現れた。

一目でヤバい事が分かる忍者。そして流稀が今、思い出そうとしていた人物………桃地再不斬！

「ヘー、こりゃこりゃ、霧隠れの抜け忍、桃地再不斬君じゃないですか。」

力カシは自分と同等と思われる相手に対し、隙を見つけようと技とおどけた喋りをしている。

空気の読めないナルトは無謀にも再不斬に挑もうとするが直ぐに力カシが止める。

「邪魔だ、下がってろお前ら。こいつはさっきの奴らとはケタが違う。」

「このままじゃあ…ちとキツイか…。」
そしてカカシは額当てを触りと自分の額当てに手をかける。

「写輪眼のカカシと見受ける…。…悪いが、じじいを渡してもらおうか。」

写輪眼と言う言葉に反応しながら、サスケは驚きながらカカシを見た。

再不斬とカカシがにらみ合う。

「卍の陣だ。タズナさんを守れ…お前達は戦いに加わるな。それがここでのチームワークだ。」

カカシが命令する。

ナルト達は急に表れた敵に対しまだ思考が追い付いていない。

「……再不斬、まずは…オレと戦え。」

カカシが額当てを上げて左目を出す。そこには3つの勾玉みたいな紋様が浮かんでる目が現れた。

それを見ていた流稀は注意深く、そして少し目を細め、カカシの左目を観察した…

「ほー！ー！、噂に聞く写輪眼を早速見れるとは…光栄だね。」

再不斬がそんなのこれっぽっちも思っていない癖に言う。

「さっきからシャリリングン、シャリリングンって…何だそれ？」

ナルトがわざわざ聞く。今この状況で聞くことなのか？

あまりにウザかったのかサスケが説明した。

「写輪眼…。いわゆる瞳術の使い手は、全ての幻・体・忍術を瞬時に見通し、跳ね返してしまう眼力を持つと言う…。写輪眼とは、

その瞳術使いが特有に備え持つ瞳の種類の一つ……」

睨みを利かせている力カシの隣で、サスケがナルトの問いに答える。

「……しかし、写輪眼の持つ能力はそれだけじゃない」

「え？」

ていうか、のんきに写輪眼の説明をしているがもし、再不斬以外の忍びがこの場にいたら確実に

殺されているよ君たち……。

「クク……御名答。ただそれだけじゃない。それ以上に怖いのはその目で相手を見極めコピーしてしまうことだ。

オレ様が霧隠れの暗殺部隊にいた頃携帯していた手配帳にお前の情報載ってたぜ。それにはこうも記されていた。千以上の術をコピーした男……コピー忍者の力カシ。」

わざわざ説明するなんて意外とおしゃべり好きなのだろうか？

……何でこの世界の忍者は微妙に正々堂々に拘るのか不思議の一つである。

「さてと……お話はこれぐらいにしとこーぜ。オレはそのじじいを殺さなくちゃならねえ」

その言葉にナルト達4人はタズナを取り囲み、守る体制を取る。

「つつても力カシ！お前を倒さなきゃならねーようだな。」

そう言った直後に包丁を引き抜き、水の上に移動して印を結んでる。

「あそこだ！！」「しかも水の上！？」「マジで（驚）！？」

ナルト、サクラ、流稀は驚く。人が水の上に立ってるんだからな。

「忍法……霧隠れの術。」

その言葉の直後に再不斬の周りの霧が急に濃くなり、消えた。

「消えた!？」「うそ〜ん(ビックリ)!？」

「まずはオレを消しに来るだろうが…。……桃地再不斬、こいつは霧隠れの暗部で無音殺人術として知られた男だ。気がついたらあの世だったなんてことになりかねない。オレも写輪眼を全てうまく使いこなせるわけじゃない…。お前達も気を抜くな!」

カカシがわざわざ説明する。確かに、この深い霧の中で音を立てるのは自殺行為だ。

「どんどん霧が濃くなっていくつてばよ!」

「落ち着け…落ち着くんた…!、そう!心の目で周りを見るんだ(熱)!!」

……ナルトと流稀はお構いなしに騒いでいるが。

「8ヶ所。」

「!?!え?な?…何なの!？」

「咽頭、脊柱、肺、肝臓、頸静脈に鎖骨下動脈、腎臓、心臓…。…さて…どの急所がいい?クク…。」

その言葉が終わった瞬間、猛烈な殺気が襲ってきた。

三人はあまりの事に震えている。サスケなんてあまりの殺気に自分から自殺しようと考えていた。

そこに

「サスケ…安心しろ。お前達はオレが死んでも守ってやる。オレの仲間は絶対殺させやしないよ!」

カカシが軽く言っただけでサスケを安心させる。

「それはどうかな…。?」

いつの間にか再不斬が俺達とタズナの間にいた。

「終わりだ。」

再不斬がタズナを殺そうと包丁を振ろうとしたがその前にカカシが再不斬の腹にクナイを刺す。

しかしその腹から流れるのは血では無く水。そしてまたいつの間にか再不斬がカカシの後ろにいた。

「先生！！後ろ！！」

腹を刺された再不斬が水になり、ナルトの言葉にカカシは反応しようにとするがカカシは胴体を真つ二つにされる。

「ギャー！！！！」

それを見てサクラは叫ぶ。

しかしそのカカシも水に変わり、再不斬の背後を取り、クナイを首筋に当てる。

「動くな……」

此処で何故か声をかける。やるべき所で情けをかけると足元すくわれるぞ？

「終わりだ。」

「ス……スッゲー！！！！」 「ハハ……」

ナルトやサクラも安心する。しかし、

「クク……」

再不斬は笑う。自分が圧倒的有利なままのように。

「ククク……。終わりだと……。分かってねエーな。……サルマネごときじゃあ……このオレ様は倒せない。絶対にな。……クク……しかし

やるじゃねエーか！あの時すでに……オレの水分身の術はコピーされてたって訳か……。分身の方にいかにもらしいセリフをしゃべらせることで……オレの注意を完全にそっちに引きつけ、本体は霧隠れで隠れてオレの動きをうかがってたって寸法か。」

「……。」

「けどな……。オレもそう甘かぁねーんだよ。」

また再不斬が後ろにいて前にいた再不斬は水に変わった。

「そいつも水分身ー！！？」

ナルトが再び叫ぶ。

再不斬が包丁を振り回し、カカシを切断しようとするがカカシはそれを避ける。

再不斬は包丁の回転を利用してカカシに蹴りを入れる。カカシもそれは避けられなかったのか食らい、海にぶっ飛んだ。

再不斬は追撃しようとするが足に痛みを感じ、見てみるとまきびしがバラまかれていた。

「……くだらねエ。」

再不斬は瞬身を使いカカシの元に移動する。

「！せんせー！！！」

ナルトが叫ぶ。

カカシは水から上がろうとしてるが何故か水がまとわりつく。

「フン……バカが。」

再不斬は印を結び、水牢を作り、カカシを閉じ込めた。

「……！！なに！？」

カカシが驚愕する。…これでカカシは何もできなくなった。

「ククク…。脱出不可能の特別牢獄だ！！お前に動かれるとやりにくいんでな。」

…さてと…カカシ、お前との決着は後回しだ。…まずはアイツらを片付けさせてもらうぜ。」

再不斬は印を結び水分身を作る。

ズズズ…。と水際から再不斬の分身が出てきた。

「…！」「」

三人とも恐怖の顔色を浮かべる。全員一歩後ろに下がり構える。

「ククツ…。偉そーに額あてまでして忍者気どりか…。だがな、本当の忍者つてのはいくつもの死線を越えた者のことを言うんだよ。つまり…オレ様の手配書にのる程度になって初めて忍者と呼べる…」

…お前らみたいのは忍者とは呼ばねエ…。」
そう言つて水分身は消える。そしていつの間にかナルトの前にいてナルトを蹴り飛ばす。

「ナルトオ！！」

サクラが叫ぶ。

「だだのガキだ。」

本体が言う。どうやらまだ殺さずに遊んでいるようだ。

「ぐっ！お前らア！！タズナさんを連れて早く逃げるんだ！！コイツとやりあつても勝ち目はない！！」

オレをこの水牢に閉じ込めている限りコイツはここから動けない！水分身も本体からある程度離れば使えないハズだ！！とにかく今は逃げる！」

カカシのその言葉に全員が焦る。特にナルトは恐怖から逃げようと

したが転けた。

そして自分で抉った傷跡を見た後、再不斬に踏まれてる自分の額当てを見る。

ナルトは立ち上がり

「うおおおおー!!」

叫び、再不斬に突進する。

そして再びドカ!!と蹴り飛ばされる。

「1人で突っ込んで何考えてんのよ!いくらいきがたつて下忍の私達に勝ち目なんてあるわけ…」

サクラが正論を言っているとナルトは立ち上がり、その手には額当てを持っていた。

「おい…そのマユ無し。」

ナルトの言葉に再不斬が僅かに反応する。

「…お前の手配書に新しくのせとけ!いずれ木の葉隠れの火影になる男

木の葉流忍者!『うずまきナルト』ってな!!」

薄笑いを浮かべながら額当てを結ぶナルト。そして何かを考えついたのか、サスケと流稀を呼びつける。

「サスケ、流稀!ちょっと耳貸せ……………」

ナルトはそういうと……………なにかに気付いたのか周りをキョロキョロ見渡し、

「…………あれ？流稀どこ行った…………？」

自分たちの周りにいない仲間に対し、ナルトの疑問がその場所でハッキリ聞こえた…………

再不斬サイド

「…………あれ？流稀どこ行った…………？」

当然、そのナルトの疑問はカカシと再不斬の方にも聞こえてきた。それを聞いた再不斬は、あわてて自分の周囲を確認する。

（…ばかな！いったい、何時からいなくなっていた？

…いや！そもそも何故いなくなっていた事に俺が気付かなかった！？）

再不斬は向こうで消えてしまいあわてている下忍たちと同様、いなくなつた流稀に対し動揺した。

……再不斬は霧の里からの抜け忍とはいえ、カカシを互角かそれ以上の強さを持った上忍だ。

そんな再不斬から目を盗んで消えるなど、たかが下忍に出来るわけがない！

…そもそも、先ほどまであの金髪と一緒に騒いでいたはずだ。…なのに突然いなくなっただけにもかかわらず、再不斬…ましてや仲間ですら何時消えたのかわからないでいるのだ。

それどころか、今ナルトが流稀の名前を呼び探さなければ、そのまま存在すら忘れていただろう…。

あまりに自然…しかし、それ以上に不自然な消え方に再不斬は緊張する。

少なくとも、相手は下忍以上の実力とみていいだろう…。

再不斬は臨戦態勢を取り、さっきよりも警戒レベルを上げ周囲をくまなく搜索する。

……しかし、もうすでに警戒しても遅かった。

バシャン！！

「呼ばれてとつび出てジャッジャジャ~~~~~ン（テンション高め）！！！」

水牢を維持していた再不斬の近くで流稀が水中から、何やら無駄にアクロバティックな飛び方をし、

これまたこの場の空気を粉々にぶっ壊すような素っ頓狂な事を言い

ながら流稀は再不斬に向かってクナイを投げる。

「!!!」

急な攻撃に再不斬は避けるために水牢から手を離す。

そして流稀が投げたクナイは再不斬の頬を僅かに擦り、小さいが再不斬に傷を与えた。

「!」、「!」、「!」

三人は突然現れ、自分たちが手も足も出なかった再不斬に、僅かにだが傷をつけた流稀に対し驚愕する。

ほんの少しだけの傷とは言え、傷つけられたのがム力ついたのか再不斬は影分身に向かって包丁を振りかぶるがその前に水牢から脱出したカカシが手で止めた。

そしてそのまま流稀は水の上に着水する。

「カ…カカシ先生!!!」

サクラは純粹に喜ぶ。ナルトは稀流に啞然とし…サスケは微妙に流稀を睨んでいる。

「……流稀…作戦見事だったぞ……。」

水の中から流稀が顔を出し返事をする。

「プハア!!!」

…いんやあゝ!ナルトくんが上手く全員の注意を引き付けてくれたおかげですよ(笑)!!!

おかげで私は簡単にあの場から抜け出すことが出来ましたから(笑)。

…後は、ナルトくん達に私がない事に気付かせ、相手動揺している隙に奇襲をした(策)。

ナルトくん達のおかげですよ(笑)!!!」

ナルト達に感謝の言葉を述べる。

…しかし本当はタズナを再不斬が切りつようとした時に抜けており、後は回り込んでカカシの所まで泳いでいき、チャンスが来るまで気配を消していたのだ。

今回、別にナルト達はいなくても良かった。

しかしそんなことは知らない七班は自分たちのおかげだと思いナルトは「へへ…それほどでも。」と照れて、

サクラも心の中で「しゃーんなるー」と喜びの雄叫びをあげ、サスケは何やら微妙に納得してはいない様子だった。

「へっ…カツとして水牢の術をといちまうとはな…。」

「違うな！術はといたんじやなくてとかされたんだろ。」

カカシの言葉に再不斬はピクつく。

「うわぁ、いい大人がいい訳してるよ……………つぶ（微笑）

！」

そして流稀は今日も相手に対し、神経を極限まで逆なでるウザい行動をとる。

そんな流稀にブチ切れたのか、再不斬は流稀に刀で攻撃を仕掛けようとする。…まあ、例によりカカシに喰いとめられたが、

「流稀！お前はもういいから！皆の所に戻っている！」

流稀に心を抉られる言葉を入られた事があるカカシは、流稀に馬鹿にされた再不斬に少し同情しつつ、流稀をさっさとみんなの所に戻させた。

「ほいほ〜い（ニヨホ）！」

気の抜けるような返事をし、平泳ぎをしながら帰っていく部下を見

送りながら、やっと目の前の再不斬に集中する。

「……言っておくが、オレに二度同じ術は通用しない。さて、どうする？」

「フン！てめーを殺してさっきのガキをぶっ殺してやる！！」
お互いに一斉に離れた。

そして再不斬が印を組み始めたらカカシは写輪眼で見ながら少し遅れたが、段々追いつき、同時に印を組み終わる。

『水遁、水龍弾の術！！』

同時に術を発動した。そして互いに周りの水が龍のようになりお互い相殺し合う。

その余波がナルト達の方にも来た。

「うおお！！」、「キヤー！！！！」、「ぐっ！！」、「ただいま」（帰）！！」

ザブオ！！と龍の接触地点にデカイ水柱が出来、その余波で出来た波に流稀は乗り、そのまま流されて帰ってきた。

カカシ達の方を見るとカカシと再不斬が全く同じ動きを取っていた。流稀によってイラつかされた再不斬にとって、物凄い不快だろう。

そして互いに印を結んでいたが、突然再不斬の動きが鈍り、術の発動が遅れた。

その隙にカカシが水遁、大瀑布の術を発動させて再不斬を吹っ飛ばす。

……その光景はものすごく、一種の天災に感じられた。

流された再不斬は木に叩きつけられ、更に両手足をクナイで刺されて身動き取れない状態にされた。

「ぐっ……」

「終わりだ……」

もうすぐ決着がつく再不斬に背を向けて枝の上にいるカカシが語りかける。

「……なぜだ……お前には未来が見えるのか……!？」

再不斬は恐怖が入り交じった目でカカシを見る。

「ああ……お前は死ぬ。」

カカシがクナイを構え、決めようとした。

その瞬間、いきなり細長い針である千本が飛んで来て再不斬の首をザクツザクツつと刺す。

再不斬は倒れ込み、動かなくなった。

「フフ……本当だ。死んじやった。」

いつの間にかカカシの反対側の木の枝には仮面をつけた俺達と変わらない年であろう人間がいた。

カカシは瞬身で再不斬の下に移動して首筋に手を当て脈を確認する。
……どうやら本当に死んでいるようだ。

「ありがとうございます。ボクはずっと……確実にザブザを殺す機会をうかかっていた者です。」

霧の追い忍は頭を下げて言う。

「確か、その面……お前は霧隠れの追い忍だな……。」

「……さすが……よく知っていらっしやる。」

「追い忍？」

ナルトが悔しそうな顔で聞く。

「そう、ボクは抜け忍狩りを任務とする霧隠れの追忍部隊の者です。」

そんなナルトに対し、落ち着いて答える。

そこでナルトが仮死の再不斬と白を何度も見返す。

追忍も「？」となる。

「なんなんだってばよ！！お前は！！？」

追忍を指差してナルトは叫ぶ。

「安心しろナルト、敵じゃないよ。」

カカシが安心させるために言うがナルトは止まらない。

「ンなこと聞いてんじゃねーの！オレってば！！あのザブザが…あのザブザが殺されたんだぞ！！」

あんなに強えー奴が！オレと変わんねエガキに簡単に殺されちまつたんだぞ！オレ達バカみてーじゃん！納得できるかア！！」

ナルトの言葉にサスケとサクラも俯いている。流稀は疲れたのか眠そうな目をしていた。

「ま！信じられない気持ちも分かるが…が、これも事実だ。」

カカシはナルトの頭に手を乗せて諭す。

「この世界にやお前より年下でオレより強いガキもいる。」

…そう言う、カカシは何故か後ろにいた流稀に眼を向けた。

流稀は眼をつむっており、カカシの視線に気付かない。

ナルトはとりあえず黙った。納得はしてないようだが。追忍人は瞬身で再不斬に近付き、手を肩に回して担ぐ。

「…あなた方の闘いもひとまずここで終わりでしょう。ボクはこの

死体进行处理しなければなりません。
なにかと秘密の多い死体なもので……。…それじゃ失礼します。」
また瞬身を使い消えた。

「フーー。」

カカシはため息をつき、額当てを戻し写輪眼を解除する。

「さ！オレ達もタズナさんを家まで連れていかなきゃならない。元
氣よく行くぞ！」

カカシの号令にようやく雰囲気に戻る。

「ハハハッ！！皆、超すまんかったのオ！ま！ワシの家でゆっくり
していけ！」

タズナが笑いながら言った後にカカシが倒れた。

「なに！？え……。！？どうしたの！！？」

「カカシ先生……。！！」

「えっ！？何っ？何！？何が起こったのん！？誰か状況を説明汁（
慌）……。！！」

全員が慌て出す。もしかして何か大怪我したのか？と心配するが。

「……。スマン、写輪眼の使いすぎで体が動かない……。誰かおぶって
くれ……。」

その情けない言葉に誰がカカシをおぶるかで一行は揉め始めたのだ
った。

まあ、今は結局身長からタズナがカカシを担ぐ事になり、タズナが
愚痴りながら歩く。

……。しかし、カカシも含む五人は知らなかった。

傍にいる流稀が、影分身の偽物だということに………

第八話 仮面の下の素顔、そして修行（前書き）

総合評価 100pt 突破!!

ありがとうございます。

第八話 仮面の下の素顔、そして修行

その後、無事タズナの家に着したカカシ班一行。
現在カカシを布団に寝かせた状態だ。

「大丈夫かい？先生！」

タズナの娘のツナミが言う。

「いや……！一週間ほど動けないんです…。」

弱々しく言うカカシ。ピクリとも動かないからしかたがない。

「なあーによ！写輪眼つてスゴイけど体にそんなに負担がかかるんじゃないや考えものよね！！」

「そーよねー！カカシ先生、遅刻したり人前でエロ本だり生活態度はもう世捨て人なんだから戦闘の時位はちゃんとしてほしいわよね（ツプ）！！」

サクラと流稀が呆れたように言う。というか最近、流稀の言葉がひどすぎる。

最初の時はまだ丸い言い方をしていたが、今は剣山並みにトゲトゲしていた。そんな言葉に対し寝ているカカシは反論したいが事実なため何も言えず少し涙目になり、傍にいたツナミさんはその光景を見て少し引いている。

「でも、ま！今回、あんな強い忍者を倒したんじゃ。おかげでもうしばらくは安心じゃろう！」

この空気を変えるため汗を拭きながら言うタズナ。

「それにしてもさっきのお面の子って何者なのかな？」

その後はカカシが追い忍についてと忍者の始末法について説明する。

説明を聞くにカカシやサスケは死後、解体されるか完全に燃やされるんだろうな。

血継限界の悲しい末路だ。

ちなみに、流稀の家、『みずかがみ水鏡一族』も血継限界の一つであり、流稀もその秘術を使える一人である。だが、それは後のお話……

その後、カカシは疲れたのか眠ったので全員も休息を取る。

各々座ったり、携帯食料を食べたり、装備の確認、無意味に身体を震わせ踊りをするなど暇つぶしをしている。……てかなんだ、そのグネグネした気持ち悪い踊り？

しばらくダラケてたらナルトが

「……なあ、流稀ってなんでいつもその仮面かぶってるんだってばよ？」

とその場で踊っている流稀に質問した。

「そつえばそうね……。ねえ！その仮面のしたってどうなってんの？」

ナルトの質問にサクラが便乗してきた。

…実は流稀の仮面の下、アカデミーに六年間通っていたにもかかわらず、アカデミー生はおろか教師も含め誰一人として流稀の素顔を見た人はいない。…それどころか流稀の素顔は木の葉の里でも流稀の父と母、そして木の葉の里長三代目火影の三人しか知られていないのだ。…それも、流稀が六歳までの時までであり、その後の六年は誰も彼の素顔を見たものはいなかったりするのだった…。

何故、仮面をかぶるのか？何故、仮面を脱がないのか？理由を聞

いても当人は答えてはくれず、真相は流稀本人しか知らない（忍者登録証の写真ですら、素顔を見せず仮面を提出したほど）。

ちなみに、流稀の仮面の下、素顔は木の葉の里の七不思議にも公認とされている（木の葉の里発行「木の葉新聞」から参照）。

…そんな稀流の素顔の真相は、此処にいる力カシ以外の全員が気になっっている。

サスケですら気になって武器を磨きながら聞き耳を立てている。

……そんな二人の質問に対し稀流は踊っている身体を止め、

「…ん？見たいの（疑）？いいよ、別に（了承）。」

あっさりと許可した。

「え！？マジでー！？？」

「うそ！？いいの！！？？？」

あまりの拍子抜けっぷりにナルトとサクラが素っ頓狂な声を上げる。周りにいたサスケ達も以外すぎたのかめちゃくちゃ驚いている。

「じゃあとるよ〜」

そういうと流稀は頭の後ろの紐に手をかける。

…ドックン！ …ドックン！

…この場にいるカカシ以外の全員が緊張した様子で流稀の顔を凝視する。

事情を知らないタズナやツナミまでもが真剣になって顔を見る。

…ドックン！ …ドックン！

…竜輝の後ろの紐が解けた

その様子にサクラは手の隙間から覗き見、ナルトは唾を飲み喉を鳴らし、サスケは額から汗を流す。

…ドックン！！ …ドックン！！

…竜輝は両手を仮面に添え、仮面を持ちあげる。
その場にいる全員の息が荒くなり目も血走る。

…ドックン！！！！ …ドックン！！！！

…そして今、その素顔がさらされようとする瞬間……………。

ガバツ！

「…あの追い忍。まさか！」

「ん、なんかあったの先生（疑）？」

カカシが布団から起き上がり、流稀は仮面をとることを中断し、また紐を結んでつけなおした。

「……おい——————！！！！……？？」

「……？」

……この時、ナルト達五人は、確かに皆の心が一つになったのを感じた。

……カカシが何かに気づいて起きたために中断されたため、部屋の

空気が険悪なものになる。

「……で、どうしたんだってばよ！先生！！？」

「……いや、なにそんな怒ったように聞くの？……まあ、いい。…死体処理班つてのは殺した者の死体はすぐその場で処理するものなんだ……。」

「それが何なの？」

「分からないか？あの仮面の少年は再不斬の死体をどう処理した？」

「は？知るわけないじゃない！だってあのお面が持って帰ったのよ。」

「

「そうだ…殺した証拠なら首だけ持ち帰れば事足りるのに…だ。

それと問題は追い忍の少年が再不斬を殺したあの武器だ…。」

確かに千本じゃ難しい。毒でも塗ってあるなら別だ。

「！！……まさか……。」

サスケがようやく気付いた。

「あー…あ…。そのまさかだな。」

カカシが頭を抱える。何せ厄介な敵が生きてる事がほぼ確定したんだからな。

「？」

ナルトとサクラと流稀はまだ分からないのかサスケとカカシを見ている。

「さっきからグチグチ何を言っとるんじゃ、お前たち……！？」
タズナも分からないようだ。

「おそらく、再不斬は生きてる！」

カカシの言葉にナルト、サクラ、流稀、タズナは驚愕する。ツナミは再不斬を知らないので分からない顔をする。

「どーゆーことだつてばよ!？」

「カカシ先生、再不斬が死んだのちゃんと確認したじゃない!」

「そーだそーだ!そんな考え全力で拒否させてもらう(ドドーン)!!」

ナルトとサクラはカカシを問い詰める。…流稀は信じたくないが分かったようだ。

「確かに確認はした…が、あれはおそらく…仮死状態にただけだろ…。」

カカシは追い忍の持っていた千本と不自然さをからお面の少年は再不斬の味方だと説明した。

「……超考えすぎじゃないのか? 追い忍は抜け忍を狩るもんじゃろ!」

タズナはまだ否定する。そう信じたいんだろう。何せターゲットは自分だ。

「いや…クサイとあたりをつけたなら出遅れる前に準備しておく…それも忍の鉄則!」

ま!再不斬が生きてるにせよ死んでるにせよ。ガトーの手下にさらに強力な忍がいなくても限らん……。」

カカシの説明にナルトは何故か少し笑顔でフルフル震えている。その様子はワクワクしているにしか見えない。

「先生! 出遅れる前の準備って何しておくの? 先生とーぶん動けないのに…。」

サクラが聞くとカカシは突然含み笑いをし

「お前達に修行を課す!!」
と言った。

「えっ!……修行って……!!先生!!私達が今ちよつと修行したところでたかが知れてるわよ!!相手は写輪眼のカカシ先生が苦戦するほどの忍者よ!!」

「てか、再不斬より強いやつがいるかもしれないって自分で言ってたくせに呑気に修行なんてしてる場合じゃねーだろ(疑)?」
サクラが正論を言う(ついでに流稀も)。

確かに普通ならたかが一週間程度の修行ではほとんど変わらないと思う。

……しかし、彼らはこの世界の主人公なのだ。
メインキャスト

一週間どころか一日で劇的に強くなれる可能性すら秘めている。

「サクラ……その苦戦しているオレを救ったのは誰だった……。お前等は急激に成長している。」

とくにナルト!!お前が一番伸びてるよ!!」
カカシがナルトに指差し宣言した。

カカシの言葉でナルトは嬉しそうな顔をしている。

……なんか上手く乗せた気配がある。

「とは言ってもだ。おれが回復するまでの間の修行だ……。まあ、お前らだけじゃ勝てない相手に違いはないからな……。」

「でも先生!!再不斬が生きてるとして、いつまた襲ってくるかも分からないのに修行なんて……。」

「その点についてだが……いったん仮死状態になった人間が元通りの体になるまでかなりの時間がかかることは間違いない。」

ようするにカカシと同じころに回復するはずだから少しでも強くなるうということか……。

下手な付け焼刃は怪我の元ともいうが…。

「その間に修行つてわけだな！面白くなって来たつてばよ！」

「面白くはないよ…」

だが、冷やかな声突き刺さった。

「！！！」

「！？」

声の方向を見やると、帽子を目深に被った小さな子供が土間に立っていた。

ちなみに流稀はその子の存在に既に気付いていた

子供は靴を脱いで家に上がると、真つ直ぐにタズナの元へ近付く。

「おおイナリ！！ 何処へ行つてたんじゃ！！！」

子供の名はイナリ。 正真正銘、タズナの孫である。

「お帰り…じいちゃん…」

「イナリ…ちゃんと挨拶しなさい！ おじいちゃんを護衛してくれた忍者さん達だよ！」

「いいんじゃないいんじゃない。 なぁイナリ」

躰に厳しいツナミと、孫を甘やかすタズナ。

頭を撫でられていたイナリは、ナルト達を白い目で見渡し、指を指してポツリと言った。

「母ちゃん…こいつら死ぬよ…」

その言葉にナルトがかみつくがイナリは動じない。

「ガトー達に刃向かって勝てる理由ないんだよ」

「……………」

カカシとタズナが驚いた顔でイナリを見詰める。

「フン、バツカみたい！…………死にたくないなら早く帰った方が良
いよ……………」

「何処へ行くんじゃイナリ？」

部屋を出て行こうとしたイナリは、タズナの声に振り返った。

「部屋で海を眺めるよ……………」

そしてその一言を最後に襖は閉ざされた。

その後ナルトは文句を言い、イナリの所に行ったが、
部屋の外で自分の父親及び泣いていた声を聞くと、そのまま下に戻
っていった。

ナルトが戻ってきてまわりを見ると、

…………流稀が何やらいつもと違う震え方をしているのに気がついた。

「ど、どうしたんだってばよ流稀？」

ナルトが恐る恐るといった感じで質問する。

「……………今の子、……………今の子は、……………俺の、」

何故か流稀は震えながら言葉を発している。

「…………俺の顔を見たのに、怖がる素振りをしてなかった（嬉）！
……………」

…そういえばさつき、イナリは全員の顔を見渡しており、流稀の顔
を見ても怖がった素振りを見せていなかったのだ。…自分の祖父も
最初は腰が抜け怖がったにも関わらず。
…もしかしたら将来、大物になるかもしれない。

そもそも、自分の仮面が怖がられることに対し気にしているなら脱
げという話である。

……そんな果てしなくどうでもいいことで流稀は喜び、さつきより
部屋は白けていった。

そんな空気になった家から所代わり、
今は松葉杖を突いているカカシに森まで連れて来られてチャクラに
ついての説明をしている。

「木登りー！！？」

カカシから告げられた修行内容が木登りだったため、三人は疑わし

気な目でカカシを見る。

「そんなことやって修行になんの？」

サクラは木登りの意味を聞く。

「まあ、話は最後まで聞け。ただの木登りじゃない！手を使わないで登る。」

カカシの言葉にナルトは面白そうとも思ってるのだろう。笑顔だ。

「？どうやって……？」

サクラはまだ疑わしげ。

「ま……見てろ。」

カカシがわざわざ印を結んでチャクラを足に移動させる。

そしてスタ、スタと歩き、そのまま木の表面も歩く。まるで重力を感じてないかのように。

でも実際はかなりの重力を感じる筈なのでかなりきついはずだ……あの状態であそこまで楽々登るのは……。やはり上忍はだてではない。

「登ってる……。」「足だけで垂直に……。」

三人は呆然。

というか、これは忍びになるための基礎なのだからもっと早く教えてくれてもいいくらいだ。

「……と、まあこんな感じだ。チャクラを足の裏に集めて木の幹に吸着させる。チャクラは上手く使えばこんなことも出来る。」

笑顔で逆さになりながら話すカカシ。あの体制は頭に血は昇らないのか？

「ちょっと待って！木登りを覚えて何で強くなれるのよ！」

サクラが抗議する。

…しばらくカカシがこの修行の有効性を説明した後に

「…と、まあオレがごちゃごちゃ言ったところでどーこーなる訳でもないし…。体で直接覚えてもらうしかないんだね。」

カカシは俺達4人の前にクナイを投げる。

「今、自分の力で登りきれる高さの所に目印としてそのクナイでキズを打て。そしてその次はその印よりさらに上に印を刻むよう心がける。お前らは初めから歩いて登るほどうまくはいかないから走って勢いにのりだんだんとならしていく……いいな!」

「んな修行、オレにとっちゃ朝めし前だつてばよ！なんせオレってば今一番伸びてる男！」

ナルトが自信満々に言う。

： 何の根拠も無い癖によくそこまで自分を信じれるとは、ある意味
尊敬に値するほどである。

「ごたくはいいいから。お前ら、早くどの木でもいいから登ってみろ。」

カカシの言葉に三人は印を結び、チャクラを足に集中させる。

「よっしゃー！！！！いつぞオー！！！！」

ナルトが勢いよく行くのと同時にサスケとサクラも木に向かう。

そしてナルトは一步目から滑り、転けた。

サスケは木の表面を破壊しながら進むが、中腹で限界が来て木に傷を打ち、着地した。

ナルトはチャクラが少なすぎて吸着出来ず、サスケは逆に多すぎて弾かれて木を破壊しながら進むだけ。

しかしそこ以外にも「案外カンタンね!」という声が入り込んでくる。

こえて来た。

そこにはも一番高いであろう枝に腰掛けたサクラがいた。

「サクラちゃん!!」

「今一番チャクラのコントロールがうまいのはどうやら女のコのサクラみたいだな…。」

これにはサスケは「チツ。」と舌打ち、

ナルトは「スツゲーー!! サクラちゃんってば! さすがはオレが見込んだ女!」とサクラを賛美する。

しかしサクラはサスケに誉めて欲しかったのかガツクリとする。

「いやー! チャクラの知識もさることながらコントロール、スタミナともになかなかのもんだ。

この分だと火影に一番近いのはサクラかなア…。誰かさんとは違ってね。それにうちは一族つても案外大したことないのね。」

カカシが見えすいた挑発をする。

二人はその挑発にまんまとかかったようだ。……しかしここで例によりまだ登っていない人物がいた。

「…そう言えば流稀はどうしたんだ? 早く登れよ?」

カカシが流稀がいない事に気付き、木の下にいた流稀に声をかける。

そしてその木の下にいた流稀はと言うと

「ZZZZ〜(爆睡)。」

さっきのチャクラ説明が退屈だったのか、立ったまま惰眠を貪っていた…。

「起きろー!!」

「ヒヤウ（驚）!!」

カカシの怒鳴りに変な返事で起きた流稀。そんな自分の部下にカカシは大きいため息を吐く。

「はー。もういいから、さっさと木に登ってみろ」

…カカシはなにか諦めたかのように流稀に木登りを命じる。

「ん~~~~~（眠い）？」

カカシの言葉に寝ぼけながら返事をし、そしてクナイを拾い木の前まで行く。

ゴシゴシと眼をこすり、何とか木の前までやってくると

カカシのようにスタスタ歩き、そのまま普通に木の表面を歩いていく。

「…ほ。」「な!!?」「ウソ!!」「!!」

カカシは見当はついてたのかそんなに驚かず、逆にナルト、サクラ、サスケは驚いていた。

そして俺は一番高い枝に腰かける。

「…木登り、出来たのか？流稀。」

「ん？…まあチャクラコントロールは基本中の基本ですしね。父さんにも教えて貰っていたし（眠）。」

流稀はまた眠りそうな所を我慢して言葉を紡いだ。

「まあ！確か流稀の父親は上忍で母親は中忍だったな。」

だったらこの程度なら知ってても不思議は無いか。」
カカシも当然なのだと納得してくれる。

「え、マジ！？流稀の両親って忍者なのか！？」
何故だかナルトが驚いている。

「ああ、そう言えば流稀の家である『水鏡家』は日向やうちはと同じような旧家でな、

…あまり木の葉でも知られてないが血断限界の持ち主でそれなりの家系だしな。」

カカシがそれに補足してくれる。

水鏡家は温厚な一族であり、あまり目立つのを嫌がるから当然と言えは当然である。

「へーなんだか以外ね。でも、だから流稀って結構強いんだ。」
なんかサクラは失礼な事を言っているようだが納得する。…まあ、日ごろの行いが行いだからね。

ナルトとサスケは微妙な表情をする。

両方忍者なんて羨ましいんだろう。

たしか、サスケもナルトも確か両親は忍者だったから。

…そんな七班のそれぞれの思いをよそに、流稀は枝に腰掛けながらまた寝むっていた。

第八話 仮面の下の素顔、そして修行（後書き）

。

第九話 会話盗聴中（前書き）

お気に入りが入りが50件突破！皆様ありがとうございます

このお話でついに『オリジナル忍術が出ます』！！

中二病乙とかいわないで〜

第九話 会話盗聴中

白サイド

森の奥深くにあるボク達の隠れ家、
そこに不快な声が響いていた。

「あんたまでやられて帰って来るとは…霧の国の忍者は余程のヘボ
と見える……だろお？」

そういつて嘲笑する醜い奴等が三人、サングラスをかけた背の低い
男と両脇にいるサムライの二人組だ。

…空気が汚れるから早く出て行つて欲しい。

再不斬さんは仮死状態から復活してそんな時間が経っていないんだ。
既に何度か殺そうかと悩んだ。

「部下の尻拭いも出来んで何が鬼人だ……笑わせるな！」

何が海運王ガトーだ。ただの脂ぎった肉団子じゃないか。傍らにい
る用心棒のような二人も大したことはない。

三人合わせて二秒で殺せる。

再不斬さんは無言であいつ等の戯言を聞き流す。事前に頼んでおい
て良かった。騒がれると身体に障って治療が遅れるかもしれない。

ただ、再不斬さんの無視が気に食わなかったようだ。殺気が溢れた。

「（居合いか？）」

大した訓練も受けていない者の居合いなんてモノに恐怖はない。

落ち着いて切先を止めればいい。再不斬さんの虐待染みた訓練に比べればそよ風のように心地よい。

「まあ待て……なあ……」

ガトーは左右の侍を手で制しベッドで横になっている再不斬の口元へ手を伸ばそうとする。

「黙っている事はないだろ…何とか…!!」

「汚い手で再不斬さんに触るな……ッ！」

この場で握り潰してやる。醜いウシガエル。

「ヒイイ!!」

ボクの容姿からは想像できないだろう握力と低い声に腕から伝わってくる

激痛に悲鳴を上げる肉団子。

肉団子の悲鳴を合図に2人の用心棒は刀に手を掛け、居合いを放つ。

だが、瞬身の術で一瞬で二人の白木造りの刀の柄を握り、奪い取り背後を取る。

（バ…バカな…）

（一瞬で……）

肉団子を含めて三人が化け物を見るような眼で見る。

それが更に一層、心を燃やした。

「やめた方がいいよ……僕は怒っているんだ」

更に声を低くする。早く居なくなれ、ボク達の目の前から。

（化け物かよ……）

また、またボクを化け物と見る。空気が凍っていく感じがする。

「次だっ……次……失敗を繰り返せば……此処にお前らの居場所は無い
と思え！！」

「次、この隠れ家に一步でも踏み入れたら、貴方達の命は無いと思
ってください……」

最後のが聞こえたのか分からない、居なくなったからそれで十分だ
った。

「白……余計な事を……」

初めて口を開いた再不斬はシーツの下にはクナイが握っていた。

「分かっています……ただ、今ガトーを殺すのは尚早です。此処で
騒ぎを起こせば又奴らに追われる事になります」

ボクだつて何度か殺そうかと悩みましたが、我慢しましたよ。

「……………」

「今は我慢です」

納得してくれるかなあ。頑固だからな。嫌じゃないけど。

「……………ああ……そうだな」

そう言つて再不斬は再び眠りに付いた。

「おやすみなさい、再不斬さん」
さてと、薬草でも取りに行こう。火傷に効く薬草が切れかけてるんだ。

…その後、白は再不斬の部屋から出ていき、そのまま静寂に包まれてた。

…だが、かれらは誰一人知らなかった……今の会話を自分たちの敵に聞かれていたことを…

流稀サイド

…深い夜の森の奥にある隠れ家。…その場所の会話を聞いているものがいた。

…その男は片膝の上に自分の片腕を乗せ、直接地に腰を下ろし座っていた。

…そしてその男の顔には

ある者は見ただけで身体が凍りつき恐怖し、
またある者は震える手を合わせ、必死に自分の許しを乞う、
またある者は精神に畏怖を強制に植えつけられ失神する、

…そんな畏怖の念が込められたような面、『鬼の髑髏の仮面』が男に張り付いていた。

「……へえ。やはり、あのお面のガキは再不斬の子飼だったか……」

…。
…そんな再不斬達の会話を低い声で、さも興味なさそうに髑髏の男は呟いた。

……呟いた男の名は水鏡流稀^{みずかがめうき}、彼は今、表の道化な偽りの仮面を外し、

本性である禍々しい顔、…この世界の全てを嫌い、妬み、恨み、
…他にもありとあらゆる感情が混ぜ合い、溶け合い、結晶となりまた混ぜ合い、…なんともなんとも、溶けたら固まりを繰り返し、

そんな事が内側で今だ続いている憎悪の復讐者が、素顔を露わにしてその場所で座っている。

今、この場にいる人物は、木の葉の忍びにいる影分身の主人格である。

…彼は再不斬が『霧隠れの術』を使い、タズナに攻撃を加えようとした瞬間、彼はナルト達と再不斬（勿論、離れて見ていた白から）の死角に隠れ、恰もその場所から突然音もなく、煙のごとく消えたかのようにその場所から離れることに成功した。

離れた後、流稀は『影分身の術』で分身作り、捕まったカカシの方まで行かせ、水の中で待機し攻撃させることを指示する。そして本体は林の中に身を隠し、自分の持つ血断限界を使った秘術を使い、自分の気配を最大限まで消し去ると、残されたナルト達の様子を見て待機をした。

しばらくはカカシと再不斬の戦闘が続き、カカシの勝利で決着がつくと思われた瞬間、遠くで見ていた仮面の少年、つまり流稀の予想道理に敵がカカシの方に接近し、武器である千本で再不斬を攻撃したのだ。

…再不斬を攻撃し、カカシやナルトと会話を交わした後、彼は首を落とさず再不斬と落ちていた『首切り包丁』を持ちその場を離れていった。

ここで『影分身の術』で入れ替わった理由、それは再不斬との関係を知るためである。もし、仮に本当にただの抜け忍狩りなら流稀はそのまま頼って置くつもりでいた。

しかし、仮に相手が再不斬の仲間であつた場合は、また少し厄介なことになる。…もし仲間なら再不斬に攻撃した際、千本で仮死状

態のツボを突いたはずだ。それだとかかなり回復には時間がかかるが、復活した際はお面と一緒に二人がかりでカカシ達とタズナを殺しに来るだろう。そうなるのかなり面倒なことになる。

だから流稀は復活する前に両方始末しようと考えた。

そう思い、流稀は自分の分身にそのまま本人のフリをするよう指示をした。そして本体である流稀はそのまま秘術をかけながら移動し、追い忍と再不斬の後を追い懸けていった。

そして、案の重二人はグルであり、今現在まで至る

今、流稀が再不斬の話を聞いていた場所、

その場所は再不斬の居るアジトから約三？離れた地点の森の中だ。

…ハッキリ言ってどんなに耳の良い忍びでも聞くことは不可能に近い、バカげた距離である。

勿論、流稀はそんなに離れては聞こえないし、耳をチャクラで強化した所で全くもって聞こえる訳がない。

…だが、流稀はそんな遠くの場所からでも、再不斬達の会話を一言一句、聞き逃さず聞いていたのだ。流稀が作ったある『術』を使つて……

…それはまだ流稀が五歳のころのことだ。

彼はもうすでに赤ん坊の頃からちゃんとした意識を持っていた。…彼はこの時からすでに世界を復讐するための計画を練っており、そのためにこの世界の知識を蓄える動きをしていた。知識を蓄えるため、自分で歩きだせるようになってからは、家の中で学べるものがないか家探したり、外に出て知識を吸収するために探索したいなど色々な事をした。（ちなみに自分が何か行動するたびに親はべつたり付いてきてかなりウザかった。）

…そしてある日、自分の家の中で日課になった家探しをしていると、ある部屋の前に辿り着いた。その部屋は流稀の父親の書斎部屋だ。いつもは父がいて手を着けられなかったが、今は里外で任務中

だ。手をつけるのなら今だろうと考え、書斎に入り探索をした。

そして、探索し押し入れの中を物色していると、何かが入っている段ボール箱を見つけた。流稀はその段ボールを押し入れから引き出し、段ボールをあけてみた。

そこには、自分にとって最も欲っていた『知識』と『力』があった……。

…そこに入っていたのは、父親のアカデミー時代の『忍びの教材の本』だった。

流稀はこのアカデミーの本を貪るように教材の本を読んだ。…そして膨大な量の知識をたたきこむと、たった二時間ほどで読み終わり、そのまま頭の中で得た知識を何度も思い出し、復唱した。

…曰く、この世界の人間にはチャクラというものがあり、それを駆使して生きているという。

…曰く、このチャクラというものは、身体や武器に多くまとわせ強化したり、印というものを結ぶと

それに応じた忍術などを発動できる。

…曰く、術にもいろいろあり、火を出す者を『火遁』、水を出すのを『水遁』と、大抵色々なものがあつた　　り、封印術や時空間忍術などというものが存在していること。

…曰く、チャクラとは、生命の源でもあり、チャクラがなくなった場合はしをいみするなど。

他にもいろいろあるが、詰め込んだ知識を頭の中で復唱し、それを整理するだけで一時間はかかった…。

… 整理を終え、自分の中で結論を着けた時はもう日は沈みかけて闇が支配しようとしていた。

… 彼は今得た知識を得て理解した。… いや、理解してしまった。

… そして理解したうえで、彼はこの世界の忍術についてこう思った
……。

……この世界の忍術は、ハッキリ言って時代遅れのちよろ
い世界だと……

……彼は元の世界では『鬼才』と言われるほどの天才だった。それこそ、「一を知って百を知る」どころか新しい別の存在まで見つけてしまうほどに……。

彼はチャクラの基本を知り、そこから導き出される運用方法、利用法、応用法などありとあらゆる可能性を見つけ出し、ついにそれを総合し、全く新しい考えまで思いついたのだ。

……そしてこの瞬間、この世界を殲滅する方法を、その恐ろしい頭脳の中に浮かび挙げたのだ。

……この瞬間から約七年間、その計画の準備をするため、一人の『復讐者』が動きはじめた……

『忍法・幽鈴晃河の術：天柳』
ゆうれんこうが てんゆう

この忍術は自分の身体の至る所からチャクラの系『触爬系』と呼ばれるモノを放出する忍術。

系一本の太さはおよそ『零点零五mm』とかなり極小サイズとなっており、チャクラの系で出来ているため、『白眼』や『写輪眼』などチャクラを見る術を用いなければ、見るどころか感知する事さえできない。長さは最大約二十？とかなり超長距離に飛ばすことが出来る。（ちなみに、飛ばしたい方向に収縮し、飛ばせば長さは最長三十二？まで飛ばせる）

『触爬系』
しょくぱくし

このチャクラ系は攻撃などの用途としては使えない。このチャクラ系は普通のチャクラ系ではなく人間の五感の一つ『聴覚』と『視覚』、『触覚』の役割を果たしてくれる。このチャクラ系の先に他人が触れると、相手の声が糸を伝わり自分の物に入ってくる。子供の遊んでいる『糸電話』の様なもの。普通相手には、このチャクラは全く見ることが出来ず、相手に触れても質量は糸と同じ位の重さなので気付く事さえできない。

…ただし、質量は糸と同じなために、風が吹くと飛ばされて使えなくなる。

…これが先ほど流稀が再不斬達の会話を使うために使った『忍法・幽鈴晃河の術：天柳』だ。

どう使ったのかと説明すると、

まず、再不斬達の逃げていった方向に術を使い『触爬糸』を使い広範囲に探索、

なんか、それらしい建物発見。集中的にその建物を探索、建物の中に入ると再不斬とガキ、それと雇い主のガトー的な奴等発見。

そいつら全員に『触爬糸』を付け盗聴完了。

…とまあ、ハッキリ言っただけの世界で言うチートみたいな忍術である。この術は流稀が一番初めに創った忍術であり、これにより外に出ずも情報が集まるというステキ使用な術だ。っていうか、こいつのいる場所じゃあ悪口一つ出来ないぞ…ちなみに、今現在タズナの家まで伸ばされており、今現在何をやっているのかさえハイビジョンで判る…ちなみに今はタズナが泣きながらナルト達に語っている……

まあ、それはさておき、再不斬達の会話から聞くに、回復したらやっぱり攻撃してくる事がわかった。しかも、彼らは好きでガトに雇われているわけではなく、しかたなくやっている部分があった。まあ、そんなことは全くもってどうでもいいと思う流稀は、今すぐにもあの二人には殺す理由はあるが、生かす理由は全くもってない。……このまま頼って置いても計画の支障がないだろうが念には念を入れようと流稀が奴らのアジトに行こうとし、

……行こうとした足を止め、何やら考えている流稀。

(……こいつらは利用できるかもしれない……。ついでに奴を此処で殺してもらえば……)

そうしてある程度深く考えた後、流稀はアジトとは違う方向を向き、そのままタズナの家まで帰って行った。

（…あの二人は運がいい…… たった今殺されないで俺に利用されて死ねるんだから……。）

…なんとも自己中心的な考え方。

そんな事を考えてか、『髑髏の仮面』は怪しく微笑んでいる様に見える、

何とも楽しそうに、なんとも愉快そうに、木に飛び移りながらそれは、タズナの家に戻っていった……

第十話 見抜かれた偽顔（前書き）

誰か、感想を…

第十話 見抜かれた偽顔

カカシサイド

サクラはタズナさんの護衛に行き、ナルトとサスケは森の方で木登りをしている中、

俺の眼の前にはタズナさんの家族の護衛と自分の補佐（介護、まだ一人では動けない）をするため、今は流稀が家に残っている。その流稀は珍しく読書に集中して暇をつぶしている。

（ちなみに本の題名は『ヨガろうぜ！お茶の間ヒーロー、軟骨老子！』というマンガ本…）

…下忍チームの担当上忍の顔合わせの前、自分の隊の下忍の資料をもらう時、資料を渡してくれたイルカにこんな事を言われた。

…流稀の担任だったイルカによると、元々流稀は実力を持っているにも拘らず、どうやら意式的にそれを隠して生活をしていたらしい。

手元の資料を見てみた。すると成績を見る限り能力は平凡、悪くはないがしかし、それほど良くもないという特徴も見当たらないまさに平凡だった。

…しかし、ハッキリ言って安定しすぎる。よくみると、一定の法則により成績が上下しているから実力を隠しているのは納得出来る。

イルカもその事で流稀に問いただした事があつたそうだが、あの無駄に高いテンションと、あのフワフワと雲のようにつかめない性格でのりくらりとうまくかわされたのだそうだ……。まあ、偶然だったということもあり得るし、もし本当に隠していたとしても試験で分かる事だと思い、その時はそこまで深くは考えてはいなかった。

そしてそれが確信出来たのはあの演習の時だ。

あの演習で流稀は最後まで何ら行動を見せず、最後に残るは流稀だけになり、このままではラチがあかないと思い、わざわざ流稀が隠れている方向に向かったらトラップが仕掛けてあつた。

最初、流稀は周りにトラップでも仕掛けているかと思っていたが、周りにはそれらしき匂いもせず、流稀と対峙した時はナルトと同じ正々堂々の猪突猛進な奴だと思っていた。だが、こちらに来て攻撃してきた瞬間流稀は消え、また次の瞬間には周りの森の中からクナイが殺到してきた。

一瞬硬直してしまい、かろうじて避けられたものの、少し行動が遅れていたら大怪我を負っていただろう。それをかわし、次は直接戦闘になったが体術や忍具の使い方は下忍でも平凡であり、速さではサスケよりも少し遅い程度。

時間も無かつたし、さっさと決めるかと下忍では無理な速さで後ろに周り、手刀を入れ終わつたと思つたらそれも影分身で、いつの間にか背後にいた本体にスズを取られていた。

あの時の気配の消し方と言い、…速さでもあの時はサスケをものいでいた。

あの後、仕掛けていた罠を聞くと……なんとも驚くべき答えを言ってきた。

あの時、広場の真ん中を中心に、周りの森の中に『結界法陣』を仕掛けており、自分の影分身を広場に待機させ本体は結界の外で気配を消し待機していたという。…あの結界は敵が外から入ってきたら発動するものではなく、自分のチャクラがあの結界の中から消えた時に発動するものだったらしい…。

あとは影分身が広場の中央で俺が来るのを待ち、流稀に意識している所で術を解き、俺が動揺した瞬間にトラップが発動したという事だ（ちなみに、俺が罠を見つけられなかったのは、仕掛けていた札に消臭剤をかけ、その上から土や葉っぱなどで匂いを誤魔化したからだそうだ）。

…ハッキリいってそれだけで下忍とは思えない戦術だった。…実戦なら確実に敵を殺れるかも知れない。

最後に予想を上回ったのは再不斬の戦闘の時だ。

あの時は再不斬の術に捕まってしまい、外の声などはあまり聞こえなかった。

だが、外の様子から途中、ナルト達が何やら慌てており、よく見ると流稀一人があの場所からいなくなっていたのがわかった。再不斬の方も覗いてみると何やら動揺しており、流稀が消えたのに気付かなかったようだ。そう思っていると背後から自ら何か飛び出した気配がし、見ると変な掛け声をかけながらクナイを再不斬に投げている流稀がいた。そのおかげ俺は再不斬の術から脱出する事が出来た。

その後、流稀から霧に乗じて攻撃したと聞いたが、明らかに流稀の実力は下忍ではトップクラスだろうし、速さや決断力、実行力は既に中忍クラスだ。精神的問題はまだ何とも言えないが、あの実力ならアカデミーでもサスケを軽く抜いてトップになれるだろう。

……しかしここで疑問になるのが、何故実力を隠していたかだ。それに流稀は本当の自分を表に出していない気がする。それと、これも俺の勘ではあるが……流稀は何かとても重要な事を皆に隠しているような気がする……。

……少し探ってみるか……。

…ナルト達が外に行ってしまったため、流稀はタズナの家族の護衛とカカシの介護をするためにタズナの家で珍しく集中して読書していた（ちなみに今読んでいるのは三巻です）。

ベッドの上でイチヤイチャパラダイスというエロ本を読んでいたカカシに突然声を掛けられた。

「流稀、ちょっといいか？」

「……………（無視）。」

カカシの言葉に流稀は当然のように受け流す。

「……………あの、ちょっと、聞いてる？」

それでもカカシは負けじと言葉を言い放つ。

「……………（スッ）。」

そんなカカシに眼もくれず、流稀はどこから出したのか、カカシにあるものを手渡す。

…カカシはまだ全然回復してないからトイレに行くにも補助が必要。でもマンガを読むのを中断したくないので手っ取り早く尿瓶を渡した。

「……いや、違う。聞きたい事があるんだ。」

「………何？（イラッ）」

そんなに中断されなくなかったのだろうか、少し不機嫌気味に返事をする。

「……お前の實力についてだ。」

カカシは真剣な表情になり流稀に質問する。………なんだか面倒な質問である。

（さすがに再不斬の時の目立ち過ぎか……まあ、それでも予想内だから別にいいが……）

稀流は少し慎重に考え、表情には出さず自然に応えようとする。

「實力ですか（疑）？」

とりあえず惚けとく。

「ああ、アカデミーの成績表を見るとお前はどの教科も平行線で平凡だ……」

それでもおまえは安定した成績を取っているが、あまりに安定し過ぎていて作為的に感じたんだが………。」

（そこを突いて来るか……しかし、少しは得意、不得意を明確にしておくべきだったか……）

「……な～に言ってるんですか（笑）！作為的って先生……（ププッ！）。そんな事して何になるっていうんすか（笑）！（疑ッ門）？」

「それに現実にお前の實力を見た。……そしてどう考えても首席を取ったサスケよりも上回る。」

更にサバイバル訓練の時、アカデミー上がりには到底できない戦術

や考え方もお前は普通に実践し、
木登りで見たチャクラコントロールでも下忍とは思えない程安定していた。」

カカシは流稀の言葉になにも反応せず喋る。

（…やはり、カカシクラスだとそれぐらいは見破れるか……。）
「いや〜ん（嬉）！！そんなに褒めてもらっても何も出ませんよ〜」（笑顔）！」

「お前は低く例えても下忍のトップクラス。既に中忍の域にも達していると言っても良い。」

……そこで疑問だ。何故実力を隠していたんだ？

それでもカカシは流稀を無視し、目を見ながら聞く。

流稀はダメもとでもう少し粘ってみる。

「いやだな〜（困）！ボクチンは〜全身全霊で生きていますよつと（ドーン）！！」

「…その不自然なしゃべり方もそうだが…おまえ、自分に偽って生きているだろ。」

……そろそろ、本性を表に出したらどうだ……！！

カカシの目線が厳しくなり、どんなウソも見逃さないよう睨んでいる……。

「……………（……）。」

流稀は無言になり、笑みを浮かべながら止まってしまった。

……………さすがに上忍のカカシに対し、偽りの仮面を被っているわけ

にはいかなかった。

(……そろそろ、この辺で潮時か……。)

流稀は力カシに対し、遂に『道化師の仮面』を脱ぐことに決めた……。

しかし、此処までは流稀にとっては全くの想定内だった……。

むしろ、もっと早くカカシが気付くのを待っていたほどだ。

そうして流稀は偽物の仮面を取り外すと……………

前から用意していた『新しい仮面』を付け、カカシと対峙することにした……………。

「……………はー！ー！。…だつてよー、忍者の中で突出すると……………くそ面倒だろうが……………」

…流稀は姿勢を崩しながらため息をつき、眼は死んだ魚のように濁り、

まるで生きている事自体めんどくさいというような雰囲気を出しながら、

低く…そして、ゆっくり気だるけな雰囲気を感じる口調でカカシの問いに答えた。

「……………面倒っだど？」

突然流稀の雰囲気、態度、言葉使いなどいつもの流稀と百八十度違

う性格に、カカシはひどく動揺している。

「あーっ、先生が良い例だろーが。……カカシ先生はよーー、才能があつて、その才能を小さい頃から遺憾無く発揮した。……そのせいで直ぐに上忍とかになった筈、だろ？」

流稀は気だるけにカカシに言う。

「ああ、まあ、そうだ。」

…カカシは動揺しつつも、昔を思い出したように少し目を細め答えた。

「あんたの時代はよく、大全期だから更に顕著だったろっが……今の時代だって、優秀な奴は直ぐ！」

出世させて重要な任務につけさせるつつう体制は変わってねー筈だ、だろ？」

流稀はまるで忌々しく低い声で質問する。

……カカシに対してなどもうあんた呼ばわりである。

カカシは流稀に少し雰囲気を押されながらも頷く。

「だからっさ。……あんま突出すると、出世させらて危険な任務に就かされるじゃん？…だから、敢えてそこまで優秀じゃねえ忍を演じたんだよ」

「御分かり？」とダラダラしながらカカシに返事を促す。

「……つまり、危険な任務に就きたくないから実力を隠していたのか？」

カカシは少し怪訝な顔をしながら流稀の言葉に返事を返す。

「…まあ、それもあつたけどよ、

…そもそも俺忍びなんかこれっぽっちもやる気なかったし…」

「なっ!？」

カカシは流稀の衝撃的な言葉に眼を見開いて驚いている。

「俺の家はよー、木の葉の里でも知名度低いが、一応旧家で忍者の家系なわけよ……、しかも、大半の一族は九尾の事件で死んじまうはで、後残ってるの、内の家族だけなんだよ……、だから、なりたくねーつつても強制的に忍びやらなきゃならないし、親もなんか変に期待してるわで、……そんな状態で「ボク忍者やめまーす。」と言える奴なんて多くいると思うかぁ？」

いきなりの質問に少し驚いたようだが直ぐに冷静になり答えた。

「…いや、あまり無いな。」

「だろうなあ。忍びなんてただえさえ嫌だったのに能力認められて重要な任務で命を晒す?……何の冗談だったんだ…!」

そんな流稀の愚痴を聞かれカカシは黙ってみている

「俺の夢はよお…別に、今はそこまで真剣になりたいものは決めてないけど。…でも、俺ぐらいの年のガキってそんなもんじゃん?これから人生を進むことで将来を見つけていけると思っているのよ…。…少なくとも、自分の命を晒してやっていく仕事なんて俺は全然望んでなんかいない。…それでも、Dランクの仕事なら危険はないしやっていけるがなあ。」

…危険もなくダラダラ過ごして生きる…それが、俺の目指す人生…これだけは譲れねえなあ」

流稀は最後、真剣な顔で答えた。

「……………」

…しばらくカカシは黙っていたが

「……そうか、聞いて悪かったな。」
と言ってまた横になり寝出した。

……何だかんだで信用してくれたらしい。まあその辺は別に信じようがないはどうでもいい……。

……さて、これでこの『怠怒^{たいど}な仮面』は、偽^{いつはり}の俺の本性の顔として存在し、カカシはそれで認知していくだろう……。

これでしばらくは大丈夫だ……。
カカシと話を終えた後、流稀はわきに置いた漫画を手に取り、また集中し読み始めたのだった。

第十話 見抜かれた偽顔（後書き）

『結界法陣：黒鱗嵐磨こくりんらまの陣』

この忍術は術者のチャクラを感じ取り、

指定した区内から出ると発動するトラップ忍術。

術者が結界内から出ると、設置していた札からクナイが飛び出し、

この陣の中の者にクナイがまるで嵐のように相手に殺到する。

殺傷能力は高め。

オリジナル忍術です。

第十一話 本当の想い（前書き）

いつもよりちょっと短いかも、納得できない箇所もあり。

第十一話 本当の想い

タズナの家の中では、いつもの七班のメンバーと、タズナの家族が集まっていた。

ナルトとサスケは今日、木登りを完璧に上る事が出来るようになり、帰ってきたときナルトはサスケの肩を借りてドロドロになり帰ってきた。

ナルトは椅子に座り息を吐きながら机の上でダラダラしていた。そんな流稀はいつものハイテンションに戻り、ナルトとサスケにそれぞれお冷を渡していた。

そんなとき、椅子を乱暴に押しのけて叫んだ子供がいた。

「なんでそんなになるまで必死に頑張るんだよ！ 修行なんかしたってガトーの手下には勝てないってのに！いくら格好いいこと言って努力したって、本当に強い奴の前じゃ弱い奴はやられちゃうんだ！」

イナリである。

周りにいた力カシ達は大声でどなったイナリに驚き、泥まみれになった不潔な二人に対して感情をぶつかる（流稀は「ナヌ!?」と声をあげて驚いていた）。

「負け犬のくせによくわかってるじゃねえか」
ぽつりと呟いたのはナルトだ。皆がナルトを見るが、そんなものは無視している。

イナリは、怯む。

何を考えているのか、わからない。

だが、止まれないときもある。

ナルトたちの努力をする姿は、努力していない自分を無言で責め立ててくるようで、イナリは

「お前ら見てるとムカツクんだよ！ この国のこと何も知らないくせに出しゃばりやがって！

お前にボクの何がわかるんだ！ つらいことなんか何も知らないで、いつも楽しそうにヘラヘラやってるお前とは違うんだよお！」
イナリは泣きながら絶叫した。

……原作なら此处でナルトがイナリに対し何か言葉を言う筈だった。

…しかしこの時、聞こえてきたのは、

「何言ってるの（謎）？ キミのことなんかわからないし、わかったなんてみ〜んな一言も言っていないじゃん（きよとん）。それに、いつ私たちがキミを助けるなんて言った（疑）？ 勘違いも甚だしいな（呆れ）」

…このあまりにも酷い返答は、意外なことに流稀だった。

そのあまりの言葉にこの場にいたナルト達は驚愕している。

助けてくれない……？ 聞いていない。イナリはそんなもの、聞いていなかった。

「私以外の奴はどうだか知らないが、俺はお前を守る気なんかないよ（きつぱり）。」

流稀は呆然と立ち尽くすイナリのほうへと歩いていく。

「流稀！ テメエ……っ！」

「ナルト、少し黙ってろ」

止めようと立ち上がるナルトを止めたのはカカシだ。

ナルトは振り払おうとするが、強靱な力で抑え込まれて、動けない。

その間にも流稀はイナリの近くへ行き、腰を下ろして視線を合わせている。

じっと見つめる、その何も映さない真っ黒い眼は逃げようとするイナリの姿を捉えて離さない。

「……話は聞いた。目の前で、父親殺されたんだろ（疑）？ むかつかない？ やり返したいって思わないのか？……勝てない敵には挑まない、か……。そりや確かに利口な考えだけど、

……お前のやりたいことは何なんだ？」

涙が浮かび、震えだすイナリのことを、決して逃がしはしない。

心を引き裂く。

……その、今までの自分を全否定する言葉は、ことごとくイナリの精神に入り込んでいく。

「俺は、お前のことなんかわからないから、言葉の端々から感じるただけど……わかるよ」

…流稀の言葉はすでにいつもの御茶らかな気配はなく、反論すら許されないような冷たい言葉で言葉を紡ぐ。

「……何をだよ」
イナリは呟く。

目を逸らし、流稀の方を決して見ようとはしない。だが、顔を両手で挟まれて、無理やり流稀に目を合わせら

れた。……まるで、偽りは許さないと眼で言っているかのように。

「あのガトーって奴に勝ちたいんだろ？ …… 本当に強くなりたいんだろ？」

それなのに何故、行動しない？ …… 少しずつでも始めればいいじゃないか。

自分にできることから積み重ねていけばいい…。

こんな腐って生きていくより随分マシだし、運が良けりや…… 今すぐにも勝てるかもな」

… 頭が痛い、胸がばくばくと鼓動する。

「 …… お前の、やりたいことは…… 何だ？」

… 流稀はゆっくり、ハッキリと反芻する。

「ボク…… は…」

涙は頬を伝って、地面へと落ちる。

そう言い終わると流稀は立ちあがり、イナリを見下しながら言った。

「そのままじゃお前…… 一生後悔し苦しみながら死んで行くぞ… 泣いてる暇があるんなら、

…… 少しは根性出してみろや!!」

最後に少し強めに言い放った。

「……知らないよっ!!」

イナリは流稀の手を振り払うと、背を向けて走り出した。

その様子には流稀はただ静かに、ただ…静かに部屋の中で立ち尽くしていた。

轟々と風が吹き荒ぶ。

身体を打ち付ける暴風が今は心地よく、棧橋に座り込んでナルトは月を見上げていた。

「流稀の奴、一体どうしたんだってばよ……」

呟いた言葉が、足音と重なる。ぽきりと枯れ木を踏み折った音。

振り向くと、そこに曖昧な笑みを浮かべる力カシがいた。

「隣いいか」

「力カシ先生……」

許可を待たず、力カシは棧橋に座り込む。

カカシはナルトと同じように月を仰いで、ぼりぼりと髪を掻く。

…何かを、言い澀んでいた。

『沈黙』、居心地が悪くなり、肩にずっしりと圧し掛かるような静寂がこの場を支配していた。

……ナルトは息が詰まりそうになり、ナルトが言おうとしたときのことだ。

「流稀のこと……許してやれ。…お前だってさっきの話を聞いてわかってるだろ？ あいつの態度は一貫してる。……言葉が不器用なだけでな」

カカシはナルトに流稀のことを弁解する。

……いわれなくなつたってわかってるってばよ……！ナルトは声を出さずに俯いている。

「…正直、あいつが何を考えているのか俺にもわからない……。だが、あいつはとても大事な事を言っているのは分かる。…自分の仲間を信じてやれ。」

「カカシ先生は、稀流の方に味方するんだ…」

少しだけ不貞腐れて言うナルト

「……俺は七班全員の味方だよ」
そう微笑むカカシ。

…ナルトは嬉しそうに鼻息を鳴らすと、家へと戻っていき、カカシは一人、桟橋で佇み続けた。

…翌日、ナルトは前日の木登りで体力を限界近くまで使ったから未だに寝ていた。

「しょうがない。ナルトは置いてくか」

ナルトをタズナの家に置いてカカシは4人で行くことを決断した。

しかしそこに俺が意見した。

「じゃーボクも残りまーす（笑）！！」

いきなりの残る宣言にカカシは聞く。

「何でだ？ 流稀」

「いやーナルトくんは動けないからー、この家の護衛にならなとおもうんで、

俺が残ってこの家を守ろうと思ひまして（テヘッ）！それに、今までカカシ先生がこの家にいたから何も無かったけど、もしかしてガトーがツナミさんやイナリ君を人質に取りに来るかも知れませんかー（予）。

…まあ、杞憂だとは思いますが、忍びはクサイ！！、とあたりをつけたら出遅れる前に準備しておくのがいいですから（エッヘン）！」
…流稀の言葉は一理あるとカカシは考える。

確かに今までは自分と4人の内誰かはいたからタズナの家族に危害は及ばなかった。

…だが、今は自分が動けるようになったからこの家は完全無防備になる。

「それに、そつちには復活したカカシ先生がいるんっだし」（笑）。
……私が抜けても大した問題は無いでしょう（疑）？」
……その言葉にカカシもそれもそうか。と納得した。

「分かった。じゃあ流稀。ツナミさんとイナリ君、…それとナルトも頼んだぞ」

そう言つてカカシとサスケ、サクラはタズナの護衛について行つた。

「いつてらっしゅああーい（超大声）！！」

流稀はそんなカカシ達を大声で送ると、その場にはツナミさんの二人しかいなくなった。

「それじゃあ流稀君、護衛よろしくね」

「ほいほい（了解）！！」

笑顔で言つツナミに流稀はいつものごとくハイテンションで返していた。

しばらく時間が経つとナルトが起きた。

「あー！寝過ぎたアー！！」

ナルトが大声を上げながら飛び起きた。流稀並みの大声を出す。

「あ、ナルトクーン！？起きたみたいねいっくん（疑）！？」

御茶の間から流稀が来てナルトに声をかける。

「あれ、流稀！流稀がいるって事は、まだ皆いるのか！？」

希望を見つけたような目をしているが、流稀の言葉ですぐに打ち砕

けた。

「ん〜ん、もう皆行っちゃったよ（プルプル）。ぼくはツナミさんとイナリ君の護衛だからの残っただけよ」（応）！」

「何ー！ー！！やっぱな！やっぱな！オレ置いて行きやがった！！」
そいうとナルトは流稀の前で着替え始めた。

「えっ何！？ ナルトもカカシ先生の所に行くの！？」

「おう！あつたりまえだつてばよ！」

「そんなこと言わずに……今日は一緒に家にいんしゃい（誘）。先生、今日はゆっくり休めて言つてたよ、……様子見る限り大丈夫そうだけど（ポツリツ）。」

「見てのとおり！元気一杯だつてばよ！」

そんなナルトの様子に流稀は眼を瞑り考え、

「……ん〜ん（考）、……じゃあ、ナルトはカカシ先生と合流しにいきなよ（笑）！……ここの護衛は私だけで十分そうだしね（諦）！」

止めるのを諦め、ナルトに合流するよう言い進める。

「サンキュー流稀。よし、それじゃ行くつてばよ！流稀も護衛頼んだつてばよ！」

そう言つて元気良くナルトは出ていった。そんなナルトに流稀も外に出て見送る。

「いつてらつしゅあぁー！ーい（大声）！御土産よろしく（キリッ）！」

橋に行くのに御土産もくそもないが、ナルトがいなくなるまで手を

振っていた。

「……………ッ。」

……そして、ナルトもいなくなり、その場には稀流一人しかいなかった。

すると、流稀は周りに『幽鈴晃河の術』ゆうりんこうがを使用。周りに誰もいない事を確認し立っていると……

ポンッ！

っと、流稀の横にまったく同じ姿の『影分身』が出現した。

……流稀は代わりにタズナの家族を守るよう影分身に命令すると、
流稀はその場から姿を消した。

NARUTOの原作通りに進む中、流稀も自分の復讐のため、復活したであろう再不斬とカカシ達の戦いの場所、
工事している橋の上にとその足を向けて……

第十二話 感染爆発（前書き）

後半駄文です

第十二話 感染爆発

ゾウリサイド

俺たちは今、俺の雇い主のガト 社長の命により、タズナの家に行くために森に入って進んでいる。

ガト 社長からの命令で、タズナの家族を誘拐し、人質にするためだ。

海運会社としてガトカンパニーのを経営している自分の雇い主だが、それは所詮表向きの話、

裏では侍の俺たちや忍びたちを使い、麻薬や禁制品の密売、企業や国の乗っ取りなど、どんな犯罪でも行う闇の世界の帝王だ。

今回、社長の財力と暴力をタテに、島国国家であるこの『波の国』の海上交通運搬を牛耳るため、あらゆる手を使い狙っていた。

だが後もう少しと言う所で、あのタズナの爺が邪魔してきやがった。

タズナの爺は橋職人で、もうすぐ建設中の橋が完成する事を恐れた雇い主は、俺たちにタズナの家族を人時事に持って来いと頼んできた。おそらく、家族の命を交渉に使ったためだろう……まったく、馬鹿な爺だ。

ガト 社長に刀の腕を買われ、専属のボディガードとして雇われたワラジと俺。

金さえ積まれれば、たとえそれが子供であろうが老人だろうが容赦なく切る事が出来る…。

人はそんな俺の事を冷血で非情な男と言っただろう。

そう思っていると「プギーーーーー!!」という猪が、悲鳴を上げてぶっ倒れた。

その傍らには刀に手を添えてニヤけているワラジが立っていたいた。

こいつは俺と同じ社長に雇われた侍のワラジだ。

こいつは腕はともかく、とにかく好戦的で、暇つぶしに人を切るような奴だ。別にそんな奴がどうなるうが知ったこっちゃないが、今は急いでいる。

「おいワラジ！そんなもん切ってないでさっさと行くぞ！」

そう俺が言つとワラジは満足したのか、気分を良くしてワラジがやってきた。

「クク…あゝ動物もいいが、やっぱり人斬りでゝな」

そう言いながら手あたりある木など、居合で斬っていく。

…こいつ、人質も切っちゃうんじゃないか？

……そう、俺がワラジを目尻にさっさと行こうとすると

「おじさんたち、こんなところでなにやってんの？」

俺たちの後ろからまだ幼さが残る声で掛けられた。

声が背後から聞こえた瞬間、俺とワラジは声と逆方向に飛び、自分の刀に手を掛けながら、その声の主に顔を向けた……

が…俺がその主の顔を見た時、ハッキリ言ってひどく動揺した。

俺の目の前にいるのは、白いジャケットを着て椅子以外、服もズボンも靴すら黒く、傍から見ると黒づくめ一色だ。……そして何より一番目立つのが、その顔に着いた『髑髏の仮面』だ。しかも、その仮面には米神から二本の角が生えている。どうやら鬼を表しているのだろう……。

…そんな不気味な仮面をしたガキが俺たちに言葉をかけたのだろう。しかし、このガキは見た事がある。

たしか、タズナが木の葉の里に依頼した忍者の一人だった筈。どうやら、今から橋に行こうとした所に俺たちを見かけ声をかけたのだ

ろう。

「おい、確かこいつ、タズナの所のガキじゃねえか。」

そついうワラジは獲物を見つけた猛獣のように笑って刀に手を添えている。

きつとこのガキを切りたいのだろう。

どちらにしても、見られたからには生かしておくわけにはいかない……。

こう見えて、俺は幾多の修羅場をかいくぐってきたんだ、忍びを相手にした事も一度や二度でもない。剣筋にはハッキリ言って自信がある。

目の前にいる忍びになりたてのガキなどに負ける要素は全くない。

そう思つて俺は居合の構えをとる。すると目の前のがきが何かを呟く。

「なるほど、…どうやら読みは当たっていたようだ…。まあ、本当は最初っからわかつてたんだけどね。」

そんな事を言い、目の前のガキは俯き、ぶつぶつ言っている。

そんな様子にワラジが焦れたか、ガキに向かって突進していく。

「ククッ、ガキが。何ブツクサ呟いてやがる…。まあいい、とつとと死ネ!!」

ワラジは喋りながらガキに向かって自分の居合の範囲に入れ、斬り捨てようとする。

これでガキは死んだな。……俺はそう思いその光景を眺めた。

……そう思っているとガキは顔を上げ、突進してくるワラジに眼を向けると、

まるで興味なさそうにし、ワラジに向かって右手を向けた、

その途端

ぱあんっー!!

……そんな破裂音が聞こえたかと思うと、俺の顔に何かがかかった。

手で触れてみると、……………指にはまだ温かく、

赤くて少し粘つく液体が付いていた。

……そして、音の発信源であるワラジの方向を見てみると、

そこには頭部をなくし、今まさにバランスを崩し倒れようとしている……首から血を噴出しているワラジが眼に映った。

流稀の目の前にあるのは、元人間だったものだ。

…元人間だったというのは、目の前にあるのは死んでおり、
尚且つあるはずの人間の頭部が破裂し、頭だったものは周りにある
森に散らばってしまっているからだ。

…流稀もその血に当たってしまったのか、服に血痕が付着してしま
っていた。

流稀は今、タズナの家に自分の分身を残し、カカシ達が護衛に行
っているだろう橋の近くまで行き、隠れてその様子を覗いていこう
と思っていた。

今日カカシは復活し、それと同時に復活した再不斬が橋の上に行こ
うとしていた事を術を使い知っていた。そのため、今日橋の上で戦
闘が行われる事を判っていたのだ。

…そして流稀はそれを利用し、自分の計画に邪魔になるだろう相手

一人を殺すため、わざわざ森に入り橋の元まで走って行たのだ。

…だがその途中、自分の周りに常時垂れ流し状態にしている『触爬糸』に二人の男が引つかかった。

すぐにその男たちの会話を聞いていると、どうやらガトに雇われた侍だとわかった。さらに聞いていると、どうやらタズナの家族を人質にするらしい事がわかった。

…まあ、ガトにはすでに自分の糸を付けており、会話など流稀にとっては筒抜けだったのだが…。

別に今ここで見逃してもよかったが、あとから邪魔そうになるのも面倒だ。

そんな事を考え、流稀は今この場で二人を殺すことに決めたのだった。

言葉通り、まさに気まぐれに……。

倒れたワラジをつまらなそうに見つめていると、流稀はチラッとゾウリの方を見る。

「ヒッ！！」とゾウリは流稀の視線に怯え、相方の無残な最期に失禁していた。

そんなゾウリから嫌そうに見ていた眼をそらし、今度は自分の服を見る。

……服にはやはり、べっとり血が付いていた。

流稀はイラついたのか、その場で大きな舌打ちをする。

「た、頼む！！見逃してくれ！！もうこの家業からも足を洗う……だから！！」

涙と鼻水、冷や汗とシヨン便など体中から水分を垂れ流しながら必死に流稀に懇願する。

そんなゾウリに流稀はウザったそうに眼を向けた。

そして、ワラジと同じように右腕をゾウリに向け、

「うるさいんだよ、……………お前から洩れる雑音が」

冷たく、無慈悲な死の宣告をした。

ぱぁん！！

手を向けた瞬間、ゾウリと同じように、ワラジの頭が破裂した。

…そして、ワラジの身体も重力にしたがい、そのまま地面に倒れ伏せた。

…森にいるのは、一人の血を浴びた仮面の少年と、頭のない死体が

二体だけ。

唯一、この場にいる流稀は、血が付いた服を洗おうと水のある場所まで消えるように移動し、

残っているのは、奇妙な死体が二つだけだった。

『水遁 崇群？染の術』

この忍術は、相手の身体の血流を操り、任意の場所を爆散させ殺傷する事が出来る。自分の腕からチャクラを飛ばし、空気中に含まれる水分を馴染ませて通い、相手の口や眼、鼻から耳などから侵入する。

侵入したチャクラは相手の血管の血液に混じり、血液を操ることで指定した場所を爆発させる。なお、この技は血液だけではなく、体のあらゆる水分に干渉することも可能。

水遁に分類され、術者の半径約三？が攻撃範囲になる。

対処方法は存在するが、原理を知らなくては防御は不可能に近い。

近くに川を見つけ、簡単に服の洗濯をした流稀はそのままナルト達の方に移動している。

その間でも、ナルト達に付けてある『触爬糸』により、今の現状がどうなっているのかわかっている。

その時、流稀は見えていた映像で少し驚いた所があった。あの、白とかというガキの忍術である。

彼の技は風と水の性質変化を混ぜた『氷遁』であり、今はサスケを氷でできた鏡で囲んでおり、

結構優勢していたのだ。まあ、実力的にはサスケよりも上回っているので当然か。

……まさか、あんなガキとこんな所で共通点が存在していたとわな
……。

そんな事を考えていると、やっとナルトが橋に着き、無意味にド派手な登場シーンをやってる時だった。

「うずまきナルト！ただいま見参！！」

なんだか『道化師』な流稀張りのテンションで宣言している。
…感染でもされたか？

「オレが来たからにはもう大丈夫だってだよ！
物語の主人公つてのは大体こーゆーパターンで出て来て
あっちゅーまにイー敵をやつつけるのだァー！」
本当に感染されたか……いや、もともとそんな性格だったか。

大声で喋った宣言のせいで再不斬から手裏剣を投げられる……
が、白が千本で撃ち落とす。

……その光景に流稀は思った。……甘過ぎるな、コイツ。
そんな甘ったるい性格では俺の目的は実行できないかもしれない…。

そんな事を思っていると、

何故かナルトは白の術の中に入った。
……馬鹿すぎて言葉にも出来ない。

サスケに怒られ、言い争いが勃発。
いや、そんなことしてる場合じゃないだろ。周り見てみる。

もし相手がこんな甘チャンでなかったら確実に死んでるぞこいつら。

その後、サスケが豪火球の術をして氷の鏡を溶かそうと試みる

が無意味に終わり、ナルトと一緒になぶられる。

そして、見ているとわかる。…あいつら、相手を殺す気がないのだと…

そんなのでは相手に殺されるのも時間の問題だろう。

第十二話 感染爆発（後書き）

流稀の忍術は性格が影響されるため
広範囲大量殺害型の忍術が多めです。

第十三話 橋の上の戦い（前書き）

少し長いです。

第十三話 橋の上の戦い

カカシサイド

「何だこの術は！？」

俺が見たことが無い術なんて、一体あつちで何が起きてるんだ！？俺がサスケの元へ走りだそうとすると最初からいたかのように再不斬が目の前に立ってやがる。

「お前の相手は…オレだろ？ あの術が出た以上…アイツはもうダメだ」

再不斬の妙な自信、俺の知らない忍術、…そして、氷でできた鏡。

簡単で、気付きにくいパズルが一致した。

「まさか、あの少年もあの術を体得していようとはな……」

血継限界、まさか再不斬の部下にこれほどの者いたとは、完全にやられた。

「あの術…？」

サクラに一通り説明したが完全に理解できたとは考えにくい。

血継限界はそれほど複雑で、血の巡りが生んだ呪いのような力だ。

そしてあの少年の能力は氷、…こんな水だらけの場所でそれは最強ともなりえる能力だ。

…しかし、まさか氷遁とはな…。

五遁のどれにも属さない、まさに出会うにも運がいるような程の希少な存在…。

…だが、俺はそんな希少な存在の人物を一人だけ心当たりがある…。

…あまり知られてはいないが、木の葉の旧家『水鏡一族』^{みずかがみ}の末裔であり、今はいないが同じ第七班のメンバー、

『水鏡流稀』^{みずかがみゆづき}もこの『氷遁』を使える一人だ。

…代々、『水鏡一族』は空気中の水を使って『氷遁』を繰り出し攻撃をし、敵を氷の中に閉じ込めたり、氷そのものを使い相手を攻撃するなど、初代火影時代にはその名を他国まで知らしめたい…。

ではなぜ、その『水鏡一族』があまり知られていないか…単純な話、その『水鏡一族』は現在、その秘伝でもある『氷遁』をほとんど使う事が出来なくなっているためだ…。

血断限界…そもそもこれは同一の血を継ぐ系譜によってのみ子孫孫まで伝われる術、または特別な能力そのもの…それが血断限界だ。

だが近年、『水鏡一族』は、子孫を残し受け継ぐにつれ、段々とだが、どうやら受け継がれる術が弱くなっているらしい…。

初代、二代目の時代では、まだそれほど使えなかったわけでは無かったそうだが、三代目の時代に入ると、

自分たちの能力が眼に見えて弱体化し、四代目火影の時代では、一族の中でもほとんど使えるものはいなくなったそうだ。

さらに里を襲った九尾の事件…、あの時は一族も駆り出され、その時に一族はほぼ全滅…。

今、残っているのは流稀とその家族の三人だけ…、こうして『水鏡』の名は人知れず薄れって言った。

…流稀がその『氷遁』を使えるかはどうかはわからない。…が、もし使えたとしても、戦闘では大した力は発揮できないだろう…。

…そんな恐ろし術を使える奴とサスケが戦っているのか……。

…助けたいのは山々だが、…目の前の再不斬を何とかしなければ…
……………！

「悪いが…一瞬で終わらせてもらっぞ」
時間はあまり無い。

「クク…写輪眼…芸の無エ奴だ」
ナルトでも竜輝でもどちらでもいい…、頼む。早く来てサスケを助けてくれ…。

…カカシと再不斬の戦闘も始まった。

『触爬系』で戦況を覗いてみた。カカシが写輪眼を発動しようとしたらその前に再不斬がクナイで斬りかかり、それをカカシが手の平で止める。

何か再不斬が白の自慢話をしている……本当に上忍か？戦闘中はそんな事を言っている場合じゃないと思うが…、

（この世界の忍びは、本当に中途半端な奴らが多い…）そんな事を考えながら流稀は呆れながら見ている。

会話した後に結局はカカシが写輪眼を発動させるが再不斬が霧隠れの術を使い視界を遮る。

…まあ、流稀には『触爬系』を使い、相手の動くを感知しているため関係ないが…。

手裏剣の飛ぶ音や弾く音が聞こえる。

すると、また再不斬が写輪眼のメカニズムを説明している。…コイツ見た目と違ってお喋りか？まあ写輪眼は目を見なきゃそこまで脅威じゃないからな。写輪眼進化系、『万華鏡写輪眼』少しは別だな…。

「きゃああああー!!」

サクラの悲鳴が聞こえ、霧が開けてみると

そこにはサクラとタズナを守ったカカシが再不斬に袈裟斬り食らった場面だった。

…よくあれで立てるな。普通なら痛みでのたうち回るか、ショック死してもおかしくないぞ？

さすが、上忍はだてではないといったところか……。

しかしその状況は最悪で、カカシも既にほとんど諦めた顔をしている。

形勢が悪すぎるからな。

しかし

「サスケ君はあんな奴に簡単にやられたりなんかしないわ!!ナルトだって!!」

というサクラの声で何故かカカシの目に希望が生まれた。

意識はしてないだろうがサクラは良い仕事をした。あの言葉でカカシが希望を思い出したからな。

……その時、ナルト達の方から禍々しいチャクラを感じた。

その瞬間、ナルト達の周囲に漂わせていた『触爬糸』がはじけ飛び、

そちらの様子がわからなくなった。

……これが九尾のチャクラと言う奴か…。

流稀は糸が外される直前までナルト達の様子を見ていたが、サスケがナルトをかばい、そのサスケが倒れた映像が見てとれていた。

推測するに、サスケの死によりナルトの激しい感情に九尾のチャクラが反応し、そのチャクラで『触爬糸』を飛ばしたのだろう。……しかし、あの糸を弾き飛ばすとはな……状況が見れなくて困る。

此処にいてもヒシヒシと感じられる。……どうやら、チャクラが具現化しているようだ。

……しかし、ここでサスケが死んだのがわかった。これで小さな綻びの要因はなくなったな……。

そう思い、カカシの方を見ると、ヤバいと見たのかカカシはポーチから巻物を出し、胸の傷に親指を当てて血をつけて巻物に線を引いていた。

そして印を結び口寄せをした。

生物ではないが、流稀も口寄せを使っており、結構便利便利だと思っている。

霧に隠れて何かゴゴゴゴという音がしたと思ったらドゴツとデカイ音がし再不斬の所から犬が現れた。

そして霧が晴れると再不斬に木の葉の額当てを着けた様々な種類の犬が再不斬に噛みついていた。

うわ、痛そうだ…。

そう思っで見ていると、止めとしてかカカシが印を結び、右手にチャクラを集中させている。

そしてチャクラが見える程に集中して雷のように弾ける。…チチチと聞こえるから千鳥だろう。

眼に見えるまでチャクラを出せるとは…でもあの技、接近戦用だからあんま使えないな。

流稀の場合、主に広範囲殲滅型の忍実を好み、なにより性質変化は水と風だし使えない。

…いや、流稀には別の方法で使えるので使えない事はない。

何かしばらく話してたけど遂にカカシが動き出した。

千鳥を再不斬に突き出し、そのまま再不斬の心臓を貫く…

…かと思いきや、突然再不斬の近くに氷の鏡が出て来て、そこから白が出て来て盾になった。

いきなりの事でカカシは止められず、そのまま白を貫いた。

そして白はカカシの手を掴んで固定し、カカシの動きを封じる。

その好機を見逃さず、再不斬が白ごとカカシを斬りにかかる。

再不斬は無意識だと思いが白の死体を斬らないようにしてるから動きが遅い。

……白の死も影響してるんだろう。

そんな流稀は白たちを見る眼は……

ひどく冷たく、まるで嘲笑ってるかの様な眼で見下していた。

冷徹に見えた再不斬は白の死に動揺し単純な攻撃しかせず、カカシに良いようにやられていく。

そして再不斬の両手が使えなくなり、そろそろ来るころだな、と流稀は考えると、カカシ達のいる橋の所まで移動した。

霧が晴れ、カカシがナルト達の方を見るとナルトの九尾のチャクラは消え、その場に立っていたが、サスケの姿が見当たらない

「ナルトオ ！！ 無事だったのね ！！」

カカシはサスケの安否を尋ねようとしたが、駆け付けたサクラによって遮られる。

もう辺りの霧はすっかり晴れており、お互いの姿も確認できるようになっていた。

「あれ？ サスケ君は？」

仲間達の姿を確認し嬉しそうに手を振っていたが、サスケが居ない事に気付きその手を止めた。

ナルトはサクラの言葉に言い淀む。

「……………向こうだってばよ」

「？」

ナルトが示した方に目を向ける。

だがサスケが歩いてくる様子もなければ、人の気配がするわけでもない。

サクラの胸は不安で一杯になり、小さな肩が小刻みに揺れ始めた。

タズナはそんなサクラの姿を見て居た堪れない気持ちになり、そつと手を差し出した。

「……………ワシも一緒に行こう。 そうすれば先生の言い付けを破った

事にはならんじやろ」

「…うん」

ややあつて返事を返したサクラは、タズナの手を取り走り出した。

「サスケ君っ!!」

視界に飛び込んできたのは、ボロボロに傷付いたサスケ。

血の気の引いた肌に、幾つもの千本が突き立っている。

タズナの見守る中、サクラの手がサスケの頬に触れた。

「冷たい…これはもう…幻術じゃ…ないのね…」

「わしの前だからって気にする事はない……。こういう時は素直に泣いたらええ……」

タズナはサクラにそう促すが、

「…私…いつも忍者学校のテストで百点取ってた…」

「!」

サクラはこの場に場違いな事を言いだし、タズナはそんな桜に少し動揺する。

「百以上もある忍の心得を全部覚えてて……いつも得意げに、答えを…書いてた…」

しゃがみ込み、小さく丸められた背中が震えていた。

「……ある日のテストでこんな問題が出たの……」。

『忍の心得 第25条を答えよ』って…それで私はいつものように、その答えを書いたわ」

「!?!」

「…『忍びはどのような状況においても感情を…表に出すべからず

…任務を第一とし…何事にも涙を…見せぬ心を持つべし』って…」
そう言ったサクラの瞳から、涙が止め処無く溢れていた。

「うつ…うつ…サスケ君…」

（これが…これが忍というものか…余りにも辛い…。）
縋り泣くサクラを見下ろし、タズナは掛ける言葉を見つけれず
いた。

「…サクラ…サスケ…」

カカシはサクラが見た光景を察し、申し訳なさそうに目を伏せた。

そこへ…

「おーおー、派手にやられてエ……がっかりだよ」

「……!」

振り向いた先にはタズナ暗殺の黒幕。

「…ガトー、どうしてお前がここに来る…それに何だ…その部下共
は!？」

その背後で武器を構え下卑た笑いを浮かべるガラの悪い集団。

「ククク…少々作戦が変わってねエー……と言うよりは、初めから
こうするつもりだったんだが……」

ガトーはゴロツキ達が控えている所為か、五人を見下しふてぶてし
い態度に出る。

「再不斬、お前には此处で死んでもらうんだ」

「何だと?」

「お前に金を支払うつもりなんて、初めから毛頭無いからねエ」

口元が厭らしく釣り上がる。

「…正規の忍を雇えばやたらと金が掛かる上、裏切られれば面倒だ…。そこでだ…後々処理しやすいお前達のような抜け忍を雇い。他流忍者同士の討合いで弱った所を数でもろとも攻め殺す…金の掛らん良い手だろう？ま、一つだけミスがあったと言えばお前だ…再不斬。霧隠れの鬼人が聞いて呆れるわ。私から言わせりゃあなんだ…クク…ただの可愛い…『小鬼ちゃん…』ってとこだなア」

「今のお前ならすぐぶち殺せるぜエ！！」
勝ち誇った笑い声が響き、雇い主につられるようにゴロツキ達もゲラゲラと笑った。

ガト が白の死体のそばまで歩く
「そう言えば…そいつにはカリがあった」
そう言って白の顔を蹴りつける

「ククツ…もう死んでやがるよ、コイツ。」
「テッメー…！！何やってんだ！おまえコラァー！！」
そう言い、怒りながらガトーに突っ込もうとするナルト。

「よせ！…うかつに動くな！」
そっぴいながら暴れるナルトを止めるのは力カシ。
それでも力カシも我慢しているようだ

「…ッお前も何とか言えよ！…仲間だったんだろ！！」
ナルトは再不斬に何故だまっているのかを聞きだす。

そんなナルトに再不斬は

「黙れ、子憎！……白はもう、死んだんだ！！」

と、ガト の方に顔を向けながら慚然とした表情で答える……

「おまえ！……あんなことされて、何とも思わねーのかよ！お前つてば、ずーと一緒にじゃなかったんだつてばよ！！」

……そんな再不斬の返答に納得できないのか、ナルトは再不斬に向かって叫ぶ。

「……ガトーが俺を利用したように、俺も白の事を利用してきただけの事だ……！」

再不斬の言葉にナルトが少しひるむ

「言っただけだ。……俺たち忍びはただの道具だ！……俺が欲しかったのはあいつの能力であいつ自身じゃない！！……未練は……ない……！」

……再不斬は言い切り、ナルトはそんな再不斬の後ろ姿を睨みつける。

「……おまえつてば、本気でそう思ってたのか……？」
ナルトは怒りを押し殺し、震えた声で聞く。

…そんなナルトの肩に手を乗せながらカカシが止める。

「やめろナルト！…もうこいつと争う必要はない。それにッ…！」

カカシが言い切る前にナルトは乱暴にカカシの手を退かした。

「ッうるせえ！！…俺の敵はまだこいつだ！」

そう言い、再不斬に指をさすナルト。…そんなナルトを横目で見る再不斬。

ナルトは口で大きく息を吐きつづけ、

「…アイツは…アイツは！、お前の事本気で好きだったんだぞ！
！」

…そう、言いながらガトの前にいる白をナルトが見て言う。

「あんなに、好きだったんだぞ…！」

森の中で、白に合った時の事を思い出しながら、白に指を向けナル

トが叫ぶ…

「それなのに！…ホントに何とも思わねーのか！？」
橋の上で戦っているときの事を思い出しながらナルトは聞く…

「……ホントに…、ホントにお前は、何とも思わねーのかよー……
！」
ナルトの声が涙声になりながらも聞く…

「おまえみたいに強くなったら…、ホントに、そおなっちゃうのか
よ……！」
白の夢の事を思い出しながら眼を潤ませて聞く…

「……アイツは……、お前のために……、命を、捨てたんだぞお……！
！」
遂に、ナルトの目から涙がこぼれながらも再不斬に聞く…

「……自分の夢も見れねーで……」

白が再不斬の夢を叶えたいと願っている所を思い出しながら言う……

「……道具としてでしか生きられなくて……」

自分の拳を握りしめ、滝のように涙を流しながら言う……

「……そんなの、………そんなのって、………辛すぎるってよ……」

ついには号泣してしまい、哀しさを捻り出すかのように再不斬に言う……。

「……小僧」

……そんな再不斬は前を向きながら言い、

「……………それ以上は……………何も言っな……………！」

……………眼からは涙を地面にぽたぽた落とし……………、両目から涙を流しながら……………ナルトに言葉を返す。

ナルトは、そんな泣いている再不斬を泣きながら驚いて見ている……………。

「白は、……………俺だけじゃなく、お前たちのためにも心を痛めながら戦っていた……………！」

涙を流しながら白を見る再不斬……………。

「……………俺には分かる。……………あいつは、優しすぎた……………！」
そう言い、ナルトとカカシに言葉を伝える。

「……………最後に、……………お前らとやれて、良かった。」

……そういつと、再不斬は口元の包帯ビリビリと食いちぎる。

ガト はその様子を眺めがら不思議そうに声をあげている。

「そう…、子憎。…結局お前の言うとうりだった…。」
口を露出させナルトに言葉をかける…。

「忍びも人間だ、…感情のない道具には、なれないのかもしれないな。……フツ、俺の、…負けだ」
再不斬は少し笑いながら言葉をしゃべる…。

「小僧！おまえのクナイを貸せ！！」
再不斬は泣いているナルトにそう声をかけた。

「！……う、うん…」
…ナルトは頷き、泣きながら再不斬に自分のクナイを投げ渡す。

投げたくないはそのまま再不斬の口にくわえられ、再不斬はそのままガト の方へと走っていく…！！

「！……もおいしい！！おまえら、あいつらを殺つてしまえ！！」
「」「オウツ！！」「」

それに気付いたのか、ガト は自分の雇ったゴロツキの中に入り込む。

その言葉にゴロツキ達も返事し、一歩前に出る。

「この人数相手に、一人で勝てると思つてやがんのか……!?」
そういった一人のゴロツキはクナイで切り裂かれた。

そのままの勢いで再不斬はゴロツキの中を突き進む!!

…再不斬は突き進みながらあらゆる武器に身体を突き刺さり、それでもまだ進み続ける!!

…そしてついにガト のいる橋の行き止まりの所まで追いつめた。

「ヒイ!!お、……鬼!!!!」

……ガト から見た再不斬はまるで、怒りに染まった鬼のようだと感じ取られた。

そして、そのまま再不斬はガト にクナイを突き刺した……

「……ッガお!!……」

突きさした再不斬は、後ろから来たゴロツキたちに背中を刺され、一旦ガト から離れる。

「……そ、そんなに仲間の元へ行きたいなら、おまえ、ひとりで、行け!!」

刺されながらもガト は再不斬に言葉を吐く。

「…生憎だが、俺は、白と同じ所へは、行くつもりはねえ…」
そう言い、カチャカチャと背中に刺さった武器を鳴らしながら言う。

再不斬はガト の前まで行き、顔を覗きこみながら言い放つ。

「…オメーは俺と一緒に、地獄に行くんだよお……！」
その言葉にガト は全身震えて怯えている。

「大したことはねえ…」霧隠れの鬼人『も、死んで地獄へ行けば本物の鬼になれるぜ……！』
再不斬は笑いながら大声で吼える。

「…楽しみにしとけ！『子鬼ちゃん』かどうか、地獄でタツプりと確かめさせてやるよお……！！！」
そういい、ガト の突き刺さっていたクナイを口で引き抜き、

ガト の身体を引き裂いて、最後は橋から海に突き落とした……

残っているのは、満身創痍の再不斬とゴロツキ共だけ……

再不斬はゴロツキ共を睨み、それに反応して相手は声を上げ後ろに下がり道をあける。

「……………白う……………」

…再不斬は口からクナイをこぼし、満身創痍でヨロヨロ歩きながら白の所に歩む…

…途中地面にひざまづき、虚ろな目で白に目を向ける……………

「…もう、…サヨナラだよ…白……………」

「今まで……………ありがとう……………悪かったなあ……………」

…そう言つと、「ドサッ」と橋の上に倒れこみ、……そのまま動かなくなつた。

…それを見たナルトは眼をそむけるが、

「眼を背けるな！」

カカシがナルトをたしなめる…。

「…必死に生きた男の最後だ。」

そう言い、ナルトは涙声で返事をする。

第十四話 鬼人の最後（前書き）

この回で「原作編」は終了です。

第十四話 鬼人の最後

サスケサイド

ドックンッ

何処だ、此処は…？

「……ケクン…！」

…サクラ…？

「サスケクン…！」

ドッグンッ ドッグンッ

…そんな事を耳にしながら眼をあけると、目の前でサクラが泣き、タズナが立って見降ろしていた。

ドグンッ ドグンッ ドグンッ

俺は……俺は………！

「サクラ……重いぞ…！」

眼の前で泣いているサクラに声をかける。

サクラはハッと涙を流しながら俺を見てくる。タズナも驚いて眼を見開いてみてきた。

「サスケ…クン…？」

サクラは恐る恐る聞いてくる。

「…サスケクン…！！…サスケクン！！」

サクラは涙を流し、

「サスケクン！！！！」

俺の首の所に抱きついてきた。…痛ッタ！

「サクラ…イテよ…！」

サクラは声を上げ泣き声を上げる。タズナも涙を上げている。

ぎこちながらも身体を起き上がらせる。

「！ダメよ、動いちゃ！」

サクラは言ってくるが、それよりも知りたい事がある…

「…それより、ナルトは？…それに、あの、お面野郎はどうした…？」

「ナルトは、無事よ。…それに、あのお面の子は……死んだわ」

サクラの返答に、俺は顔を上げる。

「死んだって…、ナルトがやったのか！？」

まさか驚きながらも質問する。

「うつん、私もよくは図らないけど……再不斬をかばって…」

そう言い、サクラはカカシ達の方を向いて言う。…そこには、一人の少年が横たわっていた。

「わたし…信じてた!…さすがサスケくん。致命傷を避けてたのね!」

…サクラの言葉である時の戦闘の事を思い出す…

「アイツ、初めから…」

外して狙ってたんだな……。そう思って立ち上がるとサクラがナルトを呼んでいた。

「ナルト〜!サスケくんは無事よ〜!生きてるわ〜!」

「えッ!」

ナルトはびっくりしている。が、段々と涙目になり声をあげて笑いだした。

……心配、かけちゃったな。そう思っていると後ろから自分の知ってるやつの声がかかってきた。

「へ〜、生きてたんですね。サスケくん……」

…少し軽い感じの言葉とは裏腹に、声色はいつものふざけた様な色ではなかった

……代わりに、とてつもなく暗く、冷たく、何の感情も醸しませな

い声が響いた。

慌てて振り返ってみると、そこにはいつもの仮面をかぶった流稀が立っていた。

傍にいたサクラやタズナも、突然後ろから声を掛けられてビックリしたのか俺と同じように振り返る。

「流稀ッ！あんた、なんでこんな所にいるの!？」

タズナの護衛にいるの流稀がここにいるため、サクラが声を出して聴いている。

「実はですね、やっぱりタズナさんの家族を人質にするために刺客が送られてきましたね」。

何とかタズナさんの家族を守ることはできたんですが、そいつを尋問したら、なんと!!大群を引き連れて橋に向かっているって聞いたんですよ。だから、急いで来たんです。」

流稀の言葉はいつもと違い、少し真面目な感じに感じられたが、声色はいつもの調子に戻っていた。

……だが、俺は見えてしまった…アイツの目がまったく笑ってなく、底知れぬ暗い眼をしていた事を……

そんな流稀に気づいていないのか、サクラは大群が来るという事に焦りを見せ、タズナは家族が襲われて心配していたが、助かったと聞かされるとホッと息を吐いて安心していた。

……俺が『うちは イタチ』を最後に見た時、おれはイタチの目を見た。その時の目はまるで冷たく、何の感情も見せない見下したような眼をしていた……あの時のと少し似ている。

……だが、それと同時に徹底的に何かが違う感情が渦巻いている。まるで……何一つ存在を許す事が出来ない深い憎しみと悲しみの様な……

そう考えているとナルト達のいる方から大声が聞こえてきた。

クソッ！チンピラどもが騒ぎ始めたか……

「じゃあ、私は力カシ先生たちの所に加勢しに行っていますから……後よろしく」

そうサクラにいうと流稀は力カシ達の所に走って行った。

……しかし、何だったんだあの眼は？

……あいつ、いったい何を隠しているんだ？……

ガトーが死んだ事によって入る筈だった金が無くなったから私兵達は町を襲う現地調達に変更した。

ナルトとカカシは先ほどの戦いで疲れており、もうほとんどチャクラを失っていた。

……それでも、何とか退けようと立ち上がったその瞬間、

シュパンッ！

先頭にいたゴロツキ共の腕や足やらが斬り飛ばされ、斬り飛ばされた箇所から血が噴出した。

「うわぁー!!」、「ギャー――!!」など大群は突然の攻撃にビビり、止まる。

この場にいた全員が何が起こったのか分からず、少しどよめいていくと。

「スイマッセーソン!…ここから先は立ち入り禁止ですよ――!!」

何とも軽い感じのする方に顔を向けると、そこにか仮面をかぶった流稀が立っていた

「流稀っ!!」

ナルトが喜色満面の顔を向けている。

「ウィっス!、悪いねーナルト。ちょーっと遅れた」
「なんだか少年マンガっぽいセリフを言う流稀。」

「実は、やっぱりタズナさんの家族を人質にするために刺客が送られてきてさ。」

そいつ尋問したら、大群を引き連れて橋に向かってるって聞いたから急いで来たんだよ」

さっきサスケ達に言ったような説明を、ナルト達に説明する。

「……お前がこれをやったのか?、流稀…」

…カカシはゴロツキたちの身体が斬り飛ばされ、流稀が本当にやったのか真剣な目で聞く。

…そりゃ突然、身体が斬られ血を噴き出されれば誰だって警戒する。

「ええ！…この技は『水鏡一族』の秘伝忍術なので詳しくは言えませんが、確かにうちの血断限界であるから出来る忍術の一つですよ！」

流稀は少し笑いながらカカシに説明する…。

「……そうか」

カカシは少し疑っていたようだが、何とか納得したようだ。

『忍法・幽鈴晃河の術：獄落』
ゆうりんこうが じくらく

この忍術はチャクラ系『触爬系』を使用し、鋭利なチャクラ系に攻撃する広範囲大量斬殺型忍術。

いつも自分の周りに垂れ流している『触爬系』に、何時もよりもチャクラを多めに流し、そのチャクラで流された系はまるで『鋼系』以上の鋭さを持った系になる。相手の周りに『触爬系』を纏わりつかせ、その系に何時もよりチャクラを多めに纏わせる。すると系は普段、特殊な方法でしか見る事が出来にため、相手からは突然切られたようにしか感じられない。この技の攻撃範囲は半径五キロと縮んではいるが、使用者が本気を出せば、その攻撃の範囲内は全て切り刻まれるという極悪な忍術だ。

…ただし、質量はあくまで系のため、強風や風遁等の攻撃で吹き飛ばされ無効化出来る。

…とまあ、ぶつちゃけ『水鏡一族』の秘伝でも何でもないので、
そう言った方が探られにくく都合がいいので流稀はウソをついた。

ちなみに大群はどうするか迷っている。

さっきの相手を攻撃するのに何の躊躇いも持っていない事はさっきの
攻撃で分かるからだ。

（ちなみに、流稀の攻撃ではまだ死者は出ていない。ただ、手足を
何人が切り飛ばしただけなため。なぜ殺さないかと言うと、橋の上
に置いていかれても迷惑なためである。）

するとナルトが

「よし！オレも加勢するつてばよ！！」
と印を結んで影分身で増えた。

「くっ…。」

これによって大群は更に動揺する。敵が増えたんだからな。

それを見てカカシはチャンスだと思い、残ってるチャクラを振り絞
って影分身で何十体も増える。

「ヒーーーーッ！！！」

それを見て遂に大群は恐慌状態になる。強そうな忍者が何十人も増
えれば当たり前だ。

「さーあ…やるかア!？」

カカシが低い声で言う。遂に大群は崩れて逃げ出す。

「やりませエ〜ん!!」、「うわああ逃げとけエ〜ん!!」など
悲鳴を上げて自分達がここまで来た船に逃げて急いで離岸して
いた。

「よっしゃー!!」

それを見たナルトは喜ぶ。

流稀もその光景を見てか、また死んだ魚の様な眼に戻つ……

…てはいなく、流稀の前で倒れている再不斬に、これまでに見た事
のない複雑な目を見せて眺めていた。

流稀の視線にカカシが気付く、カカシは再不斬の傍までやってきた。

どうやら、まだ生きているらしい……

「……終わった、みたいだな」

するとカカシに倒れた再不斬がまるで息を吐くように声をかける。

「……ああ」

その返事にカカシも返す。

「カカシ……頼みがある……」

「なんだ？」

「アイツの……アイツの、顔が見て んだ……」
再不斬はカカシに最後の願いを頼む。

「……ああ」

カカシは左手で額当てをずらし、写輪眼を隠すと再不斬を哀しみの表情で見、了承した。

……カカシは再不斬の背中に着いていた武器を全て抜きとり、前に担ぎ白の元まで歩んでいく……。

……すると、冬でもないのに辺りに季節外れの雪が降ってきた……。

（白よ……泣いて、いるのか？……）

…再不斬はカカシに担がれながらそんな事を思っている。

…カカシは白のそばまで来ると、再不斬を白の横に寝かせ、離れる。

「悪いな、カカシ…」

再不斬はカカシに労いの言葉をかける……。

…再不斬はゆっくりと顔を横に動かし、白の方を見つめる。

「…ずっと傍にいたんだ……。せめて…、最後もお前の傍で」
そう白に語りかけると、再不斬はまた静かに白の顔を見つめる…

「出来るなら……お前と、同じ所に、…行きてーなあ……俺も……」
…そういい、傷で動かない左手を無理やり動かし、涙を流しながら
白の顔に手を添える……

雪を降らしている雲から光が射し、二人が倒れた所に降り注ぐ……

白の顔の右目の下に、降りそそぐ雪が留まり、日の光で雪が解け
ほを伝う……

……まるで、動かなくなった白自信が泣いているかのように……

そんな再不斬を静かに見ているタズナと第七班たち……

「……こいつ、グスツ……雪の沢山降る村で、ズツ……生まれたんだ……」

号泣し、涙と鼻水を流しながら鼻声で言うナルト。

「……そうか、……雪のように真っ白な少年だったな……。」
カカシもその光景を、辛そうな表情をして見続けていた……

（いけるさ……再不斬……）
カカシは、一緒に向こうの世界にいけるよう願っていた……

「……なぜだ……？……なぜ？……」
……そんな七班と一緒に見ていた流稀にも変化があった……

……その眼には狼狽と、困惑が写って観て取れ、

流稀はこの光景を見ながら、口で何度も何度も己自身に自問自答していた……

そして、この橋の上でまた二つ……二つの人生を終えて向こうの世界に旅立っていった……

自己紹介

名前 水鏡流稀 みづかがめうき

所属 木の葉隠れ 下忍

誕生日 12月20日

身長 151.6 cm

体重 43.8 kg

血液型 AB型

性格 多重人格、残忍、殺戮主義者

好きなもの (前世の)妻、娘

嫌いなもの この世界の全て

趣味 術の開発、計画の練り上げ、人間観察

能力パラメータ (評価はE〜Sまでの11段階)

忍術	EX
体術	D+
幻術	D+
賢さ	A+
力	D
素早さ	D+
精神	S
チャクラ	D
印	C
総合能力	C+
潜在能力	S
運	A+

(E) C下忍クラス、C+) B+中忍クラス、A) 上忍クラス、と
なっている)

(ただし、この評価はあくまで本来の流稀の評価)

自己紹介（後書き）

結構弱い？

第一話 日常（前書き）

一話だけ出します。

第一話 日常

波の国から帰り、しばらくは簡単な任務が続いた。

畑仕事やお使い、ペット搜索。…どれも忍者じゃなくても出来る内容だ。

…忍者ってなんだっけ？便利屋みたいなものだったか？

…とりあえず今日も任務のために集まった。

俺が待ち合わせ場所にはサクラとサスケが既にいた。

…何で早く来るんだろう？

カカシは三時間位は軽く遅刻するのが仏だというのに…。

そして少し経つと

「グツ！モーニーン！！サクラちゃん！！」

デカイ声を上げながらナルトが来た。

…そしてナルトはサスケと目が合うと「……………」しばらくお互い無言になり、

「フン！」

とお互い目をそらす。

やっている事こどもだ……。…互いに意識してるんだろう。

（ああ、まただわ…この二人波の国から帰ってきて以来、ちょっと変なのよねえ…なんだか気詰まり）

サクラはこのギスギスした雰囲気起居心地が悪くなる。

（早く来い来い流稀！カカシ先生！…しゃーんなろー！！）
心の内のサクラがまだ来ていない流稀とカカシが来る事を願っているが、その願いは打ち砕かれる…

…何時も通り三時間経った頃、

「やー！諸君おはよう！今日は道に迷ってな…」
と何とも見え見えなウソをつきながらカカシが来た。

それに「いつも真顔で大ウソつくなっ！！！」とサクラが突っ込む。
最早日常の光景と化している。

「ウウイ~~~~~~~~シュ（轟音）！！皆様！おっはつよ〜」（
激笑）！！」

そんな中、流稀も波の国以来テンション超高めで七班全員に挨拶しながら歩いてやってきた。

「流稀！！あんたもなんで何時も遅刻ばかりしてくんのよ、しゃーんなろー！！！」

同じように遅れてきた流稀にもサクラは心の内の言葉も吐きだし怒鳴ってくる。

「…てゆゝかさ、なんで皆カカシ先生は遅れてやってくるって知ってるのに律儀に時間守って集合してるわけ」（疑）？…………真面目

ですか……（プツ）？」

…堂々と遅れて来たにもかかわらず、何故か時間通りに来たサクラ達の事を半笑いで答える。

「うるさい！！！」

ドゴォ！！！！

「ボツフウ（一撃）！！！」

そんな流稀のウザい行動にサクラが切れ、流稀の脳天に怒りの一撃を叩き込む。

流稀は断末魔を発しながらアスファルトの上に沈んでいった。

…だがあえて言おう、サクラの行動は十中八九許される！

その後、流稀は何とか復活し、カカシから任務を言い渡される。

今回は草むしりらしい。…もう忍びからなんでも屋に改名してほしい。

「あのさ！あのさ！カカシ先生さあ！オレら7班、最近カンタンな任務ばつかじゃん！？」

オレがもつと活躍できる何かこうもつと熱いのねーの！？

こう、オレの忍道をこう！！心をこうさあ……！！？」

ナルトの不満が爆発する。

「あーはいはいはい……言いたいことは大体わかったから」
そんな熱く燃えたぎっているナルトを軽く受け流すカカシ。

ナルトは気に入らなかったのか、今度はサスケを睨みつけ、
（くっそー！！コイツってばどうも任務の時に借りばっか作らせていいとこばっか持っていきやがって…負けねーぞお！！）

なんだかよくわからない構えをしサスケを威嚇している。

そんな様子にサスケはただナルトを睨み返していた。

……流稀はいつものニユルニユルした様な踊りをその場で踊っていた。

そして任務終了。

ナルトがサスケに敵対心剥き出しにして多重影分身で張り切った結果、早く終わったがナルトはボロボロ。

現にサクラと流稀に支えられて歩いているという情けなさ。

「フ〜」

ナルトがため息をついていると

「もう、ムチャするからよオ！」

肩を支えているサクラが注意する。

「まあ！…今日はタコ焼き屋にイカ飯が発売されることになったから（慰）……！」

流稀は訳がわからない事を言いナルトを慰める。

「フツ、ったく世話のやける奴だな」

サスケのボヤキが聞こえたのか

「ムッキーーー！！ザズゲーーーー！！」

ナルトは簡単に切れて暴れようとするが

「これ以上暴れたらとどめさすわよ！」
サクラに押さえられて終わる。

…それを見ているカカシは

「んー…。最近チームワークが乱れてるなあ…」
とつぶやく。それにナルトが反応する。

「そーだ！そーだ！チームワーク乱してんのはテメーだよサスケ！
！いつも出しゃばりやがってー！」
どうやら自分の事は分かってないらしい。

「そりやお前だウストラトンカチ。そんなにオレにカリを作りたくね
ーならな…オレより強くなりやいーだろが」
サスケの言葉に互いに睨み合う。…子供だあ。

ガキの頃は他人に借りを作りたがらないんだよね。

「おお…！ナルトとサスケの視線の間に火花が飛んでいる（驚）！
……焼き芋、焼けるかな（疑）？」
流稀は何時ものごとく、どこから出したのか芋を持ってどうでもい
い事を考えている。

…コイツ、空気をぶっ壊す事にかけては天才的すぎる…！

すると ピーー、ヒョロロー。という鳥の鳴き声が響き渡る。

…それを聞いたカカシは

「さーてと！そろそろ解散にするか。オレはこれからこの任務の報

告書を提出せにやならん……」
と言う。

それを聞いてサスケは「……なら帰るぜ」と去る。

するとサクラが

「あ、ねえ！サスケくん！」

と、帰ろうとするサスケを追いかけて何か話し始めた。

……が、話していくうちにサクラが眼に見えて落ち込み始める。

どうやら、サスケにサクラの实力はナルト以下だといったようだ……

……なんだか、ナルトが不憫になってきた。

「サクラちゃ　ん！サスケなんかほつといて、二人で修業しよう
ってばよー！！」

そんなサクラの気持ちを知らずか、何とも能天気にならサクラを誘う。

「そ・よそ・よ（笑）！サスケに振られたからって、落ち込む事な
いじゃない（爆笑）！！」

……そんなサクラの気持ちを知っているか、何とも能天気にサクラを
誘う……こいつ、最悪である。

「流稀イーーーー！！しゃ　　んなろーーーー！！！！」
ぽっっっこーーーーーん！！！！！！

「ッボグハアーーーー！！！！！！（クリティカルヒット）！！！！
！！！！」

サクラは神速のスピードで流稀の傍まで移動すると、

血管の浮き出たコークスキュルー・ブローを流稀の顔面に叩き込む
！！

…その、もはや上忍クラスの右ストレートを食らった流稀は、そのまま遙か彼方までブツ飛ばされ、
キラッ！と空のお星様になった……。

…もう、彼を見る者はいないだろう

……その様子を見ていたナルトとカカシは、あからさまにサクラに
対しビビっていた。

…その後、

岩（？）に身を隠していた木の葉丸たちに、ナルトは忍者ごっこに
付き合えとせがまれたり、

ナルトに絡んで見ていたサクラを、木の葉丸にナルトの恋人と間違
えたりして、ブツ飛ばされたり、

木の葉丸がサクラに喧嘩を売り、ボコボコにされたなど、こちら辺
はマンガと一緒にため省略する……。

…木の葉の依頼報告所

「…では、確かに受け取りました」

カカシの任務の報告書を受け取る海野イルカ。

「ナルトの奴？仲間とうまくやれていますか？」

自分の受け持ちだったナルトの事を、担当上忍のカカシに聞くイルカ。

「うん？……まあ、……ボチボチ、ね？」

イルカの質問に少し考え……何故か眼を逸らしながら答えるカカシ。

「最近、忙しくて……まだ、帰ってきて一度も会えていませんから……アハ、ちよつと心配で」

ナルトを心配するように言い、恥ずかしかったのか顔を少し赤らめながらイルカは自分の頬を描く。

「……イルカ先生もご存じの通り……あの、『うちは』サスケや『水鏡』流稀も一緒なんで……」

ライバル視はしてギクシャクはしていますが……ま！結果として実力はバリバリに伸びていますよ。

……尊敬する、アナタに追い付く位に……！」

そうカカシは言い、イルカに笑って安心させる。

「……そうですか！」

カカシの話にイルカも笑って返す。

そしてお互いに笑みを浮かべていると、

「……ところで、流稀の方はどうですか？」

とイルカはカカシに聞いてきた。

「……流稀、ですか……」

……カカシは波の国でタズナの家の時の事を思い出。

…あの時、カカシは流稀の本性（偽）を知った。
何時もの仮の姿、本当はめんどくさがりの怠惰の塊の様な自分の部下。

初めはそれが本性だと思った。…が、カカシは暗部の時の勘がそう言っているのか、
流稀はまだ、何かを隠しているような気がするのだ。

…それも、……本当に知られてはいけない何かを……。

「アイツは…よくわかりませんね…」
カカシはイルカにそう伝えるしかなかった。

「そう、…ですか…」
イルカも分かっているのか、それ以上カカシに追求をしなかった。

…二人の間にはさつきと比べて、何とも微妙な空気が流れるのだっ
た……

「木の葉丸!!」

ナルトが歌舞伎メイクに襟を締め上げられている木の葉丸に叫ぶ。

「いてーじゃん、クソガキ…」

歌舞伎メイクはそう言い、さっきより襟を強く締め上げる。

強く締め上げられ、木の葉丸から短い喘ぎ声がでる。

「やめときなつて、後でどやされるよ…」

歌舞伎の横にいた姉さんあね風の巨大な扇子を持った少女に微妙に止める気のない声で注意される。

「ゴメンナサイ! 私がふざけてて…」

そう言い、謝るサクラ。

「おいコラ! その手を離せつてばよ!!」

そして歌舞伎に怒鳴りつけるナルト。

…てか、ぶつかったのお前らなんだから悪いのお前らじゃね?

「うるせ のが来る前に、ちょっと遊んでみたいじゃん。」

歌舞伎はほつといて一人で進んでいる。

「う……離せ、コレえ……!!」

そんな歌舞伎に木の葉丸は弱キックを入れまくる…。

…いや、だから悪いの君たちだって…

「元気じゃん…クソガキ…」

反撃されたのがムカつくのか、歌舞伎は少し声を静め、強く襟を締

め上げる。

「…テツンメエー………!!」

襟を締め上げられ喘ぐ木の葉丸に切れたのか、ナルトは歌舞伎に向かつて突進した。

歌舞伎はギラツと眼を見開き、自分の指を動かした…

…すると突進していたナルトが、まるで何かに足を引っ張られるようにずっこけた。

「なんだ!…いまの!？」

ナルトはあからさまに驚いている。

「なんだ弱いじゃん、木の葉の下忍ってゆーのはよー」

歌舞伎はナルトを見下す。

「…木の葉丸!」

「木の葉丸ちゃん!」

「木の葉丸君!」

ナルトがいい、モエギとウドンは涙をためて叫ぶ。

「おい、そいつを離さないと、この俺が許さないぞ!…!っこのバカ!」

ナルトが歌舞伎に指をさしながら怒鳴る。そのあと、サクラにヘッドロックを掛けられ黙らせる。

「…ム力つくじゃん…おまえ」

ナルトの態度が気に入らないのかそうつぶやく…てか、こいつも大人げなさ過ぎだろ…

「大体、俺チビツて大嫌いなんじゃない…おまけに、年下のくせに生

意気だし…、

壊したくなっちゃうじゃん」

歌舞伎の呟きにこの場に緊張が帯びる…。モエギとウドンはもはや涙を流し怯えている…。

コイツ… どんだけ大人げないんだ？

「はあーあ、あたし、知らないよ…」

歌舞伎の行動に扇子の子も諦めたようだ。

「ま、そのドチビの後は、そこにいるうるさいチビも…」

… すごい、歌舞伎は左の拳を振り上げる。

「このー！ー！！」

殴ろうとする歌舞伎を止めようと、ナルトが木の葉丸の所にダッシュする。

… が、間に合わない。

と、そのとき、

歌舞伎のつかんでいた右手の甲に小石がブチ当たった…。

飛んできた方向を見ると… そこには木の枝に腰掛けたうちはサスケがいた。

コイツ… 狙って登場してきたんじゃないだろうな？ …… ハッキリ言
って絶妙すぎるぞ！？

「よそんな家の里でなにやってんだ？…てめーは？」
そう言いながら、歌舞伎を睨むヒーローサスケ…

「サスケくーーーーーん!!!!」

サスケの登場に周りに花畑を召喚するサクラ……

そんなサスケに睨む歌舞伎と、もはや脇役のナルト…

(…結構いい男じゃん)

同じように顔を赤らめながらサスケを見る扇子の少女…

「兄いチャ ン！」

襟から離され、ナルトの元に走り寄る木の葉丸…

「ヒュ〜ヒュ〜〜(歓声)!!!さすが木の葉のヒーロー、サッスケ
ク〜ン(笑)!!!!」

サクラと同じようにウザさMAXで叫びまくる流稀…

『『『『ツ!!!!?』『』『』』』

突然、この場所に現れた『髑髏の仮面』に、この場にいた者が全員
ビククリした。

「流稀！？…おまえ、生きていたんだってばよ！！？」

…ナルトはさっきのサクラの一撃を見ていたため、本気で死んだと思っていたらしい…無理もないが。

「……ああ（悟）…こいつのおかげで命拾いした…」

そう言い、流稀が取り出したのは…一本の粉々に砕けた芋である。

…芋でなにがどう命拾いしたかどうかは判らないが…およそ十割出鱈目であろう…

「うわっ！？何なんじゃん！！こいつ！！？」

「兄ィチャ〜ン！！怖いんだコレ〜！！！！」

…流稀の周りにいた七班以外の彼ら、

歌舞伎達の方は明らかに警戒し、木の葉丸達に至っては流稀の顔を見た瞬間泣きだしてしまった。

…忘れがちだが、流稀の仮面は始めてみた奴等は皆、必ずと言っていいほど恐怖するか警戒するかのだちらかのリアクションをする。
…それほど彼の仮面は恐ろしい。

そのせいで、さっきまでのシリヤスな雰囲気は粉々に砕け散った…

さすが、K・O・K・Y（キング・オブ・空気・読まない）！！…
そこに痺れる！憧れる〜！！

そんな全てがグチャクチャになり、もはや混沌^{カオス}となった領域に救世主が現れた…

「カンクロウ……やめろ……」

…その声にこの場にいた全員がサスケの木の反対側を見る。

「…里の面汚しめ」

そう言ったのは、逆さまに枝にぶら下がった赤毛の目の隈が特徴の大きな瓢箪を背負った少年だった。

その少年を見た全員が驚いた顔をする……流稀は最初から知っていたのか、大人しく見ていた。

「我…我愛羅」

その我愛羅と呼ばれた少年に震えた声で返事するのはさっきの歌舞伎クン…そんな怖いの？

（コイツ？…何時の間に俺の隣に……カカシ並みの抜け足だぜ……！）

いつの間にか自分の近くにいたその少年に、サスケは警戒の目で見らむ。

「里の面汚しめ…何しにこの木の葉まで来たと思っているんだ。」
「そう言いカンクロウと呼ばれた歌舞伎クンを睨みつける……てか、何時までぶら下がっているのだろう…」

「き、聞いてくれ…我愛羅！こ、こいつらが先に突っかかってきたんだ……」

カンクロウは怯えながらさっきまで起きた事を話そうとするが…

「黙れ」

我愛羅の言葉で切り捨てられる。……カンクロウ、おまえ不幸臭が漂ってるよ……………（泣）

「…殺すぞ」

「わっわかった！…俺が悪かった。…ゴメンな…本当、ゴメン」
根本的な所は全然悪くないのに謝らなきゃいけないなんて……………不憫すぎだろコイツ！！（号泣）

「君たちも、悪かったな…」

我愛羅はそう言い、横にいたサスケの方に顔を向けた。

（こいつ、…嫌な眼をしてやがる…！）

サスケは我愛羅の目を見ながらそんな事を考えていた…大概失礼である。

（あのカンクロウにいと簡単に石つぶてを当てるとは…出来るな、コイツ）

我愛羅の方もサスケに対し高い評価をしていた。

そう思うと、我愛羅の周りで砂が纏わり、消えたかと思うとカンクロウ達の傍に現れた。

「行くぞ。俺たちは遊びに来たわけじゃないんだ」

我愛羅はカンクロウ達に命令口調で言う。

「判ってるって…」

カンクロウが答える…そりゃ、年下のガキの事嫌いになるはずだわ…見ててもストレスたまるもん。

「ちょっと待って！」

立ち去ろうとした我愛羅達にサクラが呼びとめる。

「…何だ？」

振り向かず、サクラの問いに扇子の少女が聞いてきた。

「額から見て貴方達、砂隠れから来た忍びね。…確かに、火の国と風の国は同盟国だけど…忍びの勝手な出這入りは条約で禁じられて居る筈。…目的を言いなさい。場合によっては…」
そっつい、サクラは砂の忍びに一步詰め寄る。

「ふーうう…灯台もと暗しとは、この事だな…何も知らないのか？」
…そっつい、呆れながら三人は振り向く。

「通行証だ…」

そう言いながら扇子の子が通行証を見せる。

「…お前の言う通り、あたし達は風の国『砂隠れ』の下忍。…『中忍選抜試験』を受けるために、この『木の葉の里』まで来た」
「？中忍…選抜、試験？」

砂の少女の言葉にナルトは首をかしげ、そのナルトに砂の少女が懇切丁寧に教えてくれるが…

そのナルトは途中までしか聞いてなく、しかもなんか勘違いしている…

「…で、ちゃんと聞け！このヤロー！！」
そりゃ怒りますとも…

「…フン」

そう我愛羅は言い、また背を向け立ち去ろうとするが…

「おい！そこのお前…」

今度は木から降りてきたサスケに呼び止められる。

「名はなんと言う？」

サスケは瓢箪に向かって名前を聞いた……いや、話の中で我愛羅って言ってたじゃん。

「！え……あ、あたしかい！？」

そして何を感じがいたのか、扇子の少女が顔を赤らめ聞き返す…

「違う…その隣の瓢箪だ。」

サスケが指をさし聞くと、我愛羅達も立ち止まり、

「…砂漠の、『我愛羅』」

とサスケの方を向き自己紹介を言う。…結構礼儀正しい子だ。

「…俺もおまえに興味がある。…名は？」

サスケに向かい名前を聞く。

「…『うちはサスケ』だ」

サスケは不敵に笑いながら言う。…全然礼儀正しくないなコイツ…

…そしてそのままにらみ合ったまま動かなくなる。

「あ、あのさ！あのさ！…俺は！？…俺は！？」

「ちなみに、わたしは木の葉一の芋職人になる男！…名を水鏡流稀という！！それなりに覚えとけ（バーン）！！！」

…もはや空気になりつつあったナルトと流稀は自分の存在をアピールしてくる。

ナルトは自分に親指をさし、流稀は前とビミョーに似ている自己紹介を叫ぶ…コイツ確か漬物職人になるとか言ってたかったか？

「興味ない」

しかしこれもさつきと同じく、切り捨て御免で退けられた。

…ナルトは木の葉丸と愚痴り合っている。

今度こそ行こうと砂の忍びが背を向けて立ち去ろうとしたが、

「あ~~~~！！ちょっと止まって〜（焦）！！！！」

今度は流稀が砂の忍びを呼びとめた。

「…今度は何だ？」

我愛羅はいい加減イラついたのか、少し苛立ちを込めて言葉を吐いた。

「いや、君じゃなくてそこにいる彼！カンクロウクンに用があるんだ〜（笑）！」

そう言い、流稀はカンクロウを指差す。

「え！…おれじゃん！？」

カンクロウは驚きながらも、流稀はドンドン近づいて行って、…遂に目の前まで来た。

「…な、なんじゃん…？」

カンクロウはそんな流稀に警戒しつつ、恐る恐る聞いてきた。すると…

「…さつきはゴメンね。あれ、全面的にこつちが悪いから…コレ
…お詫びってほど大したものじゃないけど…取っついて」
…そう言い、流稀が懷からカンクロウに渡したものの…それは、粉々に
砕けた芋とはまた違う真新しい一本の芋だった…

「…………おまえ」

…カンクロウは自分にとって理不尽すぎる出来事に諦めていたが、
自分に否がない事を分かってくれた流稀に目を見開いて驚いていた。

…そして、そんなカンクロウに流稀は目の前で親指を立て、

「中忍試験、…頑張つて受かれよ!!」

そんな熱いメッセージをカンクロウに送った。

「…………ああ!!」

そんなカンクロウも眼に涙をため、笑いながら返事を返す。

……………今、此処に『木の葉隠れ』と『砂隠れ』、そんな二人に奇妙
な関係が生まれた瞬間だった…

おまけ

「…どう思う？」

木の枝の上にいた『死』と言う文字の入った少年が聞く。

「大したことないと思うけどさあ…木の葉の黒髪と砂の瓢箪…あの二人は要チエックだ」

そう言ったのは顔に包帯を巻き付けた少年だ。

すると、

「ちなみに、わたしは木の葉一の芋職人になる男！…名を水鏡流稀という！！それなりに覚えとけ（バーン）！！！！」
「「「！！！！？？？」」」

突然自分たちの横から流稀の自己紹介が聞こえた。

そのせいで『死』と言う文字の入った少年は枝から足を滑らせ落ちてしまった…

「わたしは木の葉一の芋職人になる男！…名を水鏡流稀という！！それなりに覚えとけ（バーン）！！！！」
それでも流稀はその忍者たちにしつこく自己紹介をしてくる。

「…いいいんじゃないですか…？」

…そう、オズオズと包帯の少年は流稀に返事をした。

すると、満足したのか流稀は眼で笑いかけると、その場から消えていなくなった。

…そして残ったのは包帯の少年と黒髪の少女だけとなった……

「……あの、『髑髏の仮面』青髪も要チェックだ……」
そんな事を呟く包帯クンでした…。

第一話 日常（後書き）

奇妙な友情が芽生えました。

第二話 憐れむ仮面

今日は朝早くからカカシからの橋の上に集合命令があつたので仕方なく集合場所に集まつた何時ものごとくカカシは約二時間の遅刻…

朝っぱらからなのかイライラしているサクラとナルト、そして珍しく時間道理に来ていた流稀。

「…ねえねえねえ！！なんであの人自分で呼びだしというて人待たせるのよ！」

ムキーツと言いながらナルトと流稀の前に出て不満をぶつけるサクラ

「そ　だそーだあ！！」

「全くもってそのと~~~~~~~~っり（賛）！！！！」

サクラの不満にナルトと流稀も賛成の意を上げる。

「思わず寝坊して、風呂を諦めて来る乙女の気持ち！…どーしてくれるのよ！！」

サクラはさらに大声を出し不満を言い、どーでもいい事までカカシに責任を擦り付ける。

「俺なんか寝坊したから顔も洗ってないし歯も磨けなかったんだってばよ！！」

…いや、せめてそれ位は来る前にやってこいよ…。

「あ…あんだ、それは汚いよ」

…さすがにサクラもナルトの発言に異議を唱える。

「私も、今日はいつもより遅く起床しちゃったから日課の『へろへろ踊り』出来なかったよ（怒）！！」

…いや、おまえも何時も踊ってんだろ。所かまわず…

「…あんたも、何時も暇な時踊りまくってんじゃない…」

…サクラは流稀に同じことをいう。

（…朝っぱらからなんでこんなハイテンションなんだ、コイツ等…）
サスケも朝からこのテンションには付き合えきれず、イラつきながら橋の手すりに寄りかかっていた。

…そんな事をしていると、橋の鳥居の上にカカシがやってきた。

「やあ！お早う諸君！！今日はちよつと人生という道に迷ってな…」
何時も通り適当な理由を上げるカカシ。

「ハイ！嘘ツ！！ちつとは反省しろ！」

「てか、あんたの場合は人の道なんてすでに雑草だらけで道なくなってるわ（怒）！！」

サクラと流稀が叫ぶ。最近容赦がなくなってきたな……

「ま！なんだ…。いきなりだが、お前達を中忍選抜試験に推薦しちやったから」

メチャクチャテキトーなテンションでとんでもない事を言うカカシ。

…ホント、ろくなことしないなこの変態（もはや上司とも思っていない）。

「何ですって〜〜！！」

サクラが反応する。とんでもない事だからな。

「志願書だ」

カカシが中と大きく書かれている紙を渡してくる。

「カカシ先生大好きーっ!!」

ナルトがカカシに抱きつく…そんなに出たかったの？

「…チツ！」

流稀は偽の性格でめんどくさがり屋を演じ、明らかに不満を持ったという調子でカカシを睨む。

「…と言っても推薦は強制じゃあない。受験するかしないかを決めるのはお前達の自由だ。受けたい者だけその志願書にサインして明日の午後四時までに学校の三―に來ること。以上！」
そう言つてカカシは瞬身で消えた。

解散後、七班全員は帰宅するため歩いている。

「中忍試験か…！強い奴がたっくさん出て來るんだろー!!」
ナルトは色々何か間違つた妄想をして上機嫌に歩いている。

（アイツと、戦えるかもしれない…!!）
サスケは昨日会つた我愛羅と戦闘できるかもしれない事に笑みを浮かべて歩く。

(…それに、コイツとも…)

…そう思いながら見るのは一緒に歩いている流稀だった。

サスケは波の国の時以来、流稀は実力を隠しているのではと疑っていた。…そこで中忍試験の時に実力を確かめてやろうと少し心に決めていたのだった。

(…わたし、ヤダ…サスケクンに、…ナルトにすら付いて行けないのに…中忍試験なんて…)

サクラは自分の実力不足に落ち込みながら歩いている。

…流稀は眼の表情こそ何時も道理だが、…その奥はギラギラと怪しい輝きを見せていた。

次の日

待ち合わせ場所にはナルトとサスケはもういた。…コイツ等、こういう時は真面目だよな。

すると、後からサクラも来た。

「サクラチャーン!…遅いつてばよ」

ナルトがサクラに手を振って呼ぶ。…ガキか？…いや、まだ子供か（ナルト十一才）。

「…ああ、…ゴメン」

サクラも片手をあげてナルトに返す…昨日の事を引きずっているようで元気がないようだ。

「おはよう、…サスケくん」

…そのせいか、好きなサスケを呼ぶ声にもいつもの元気がまったくない。

「ああ…（サクラの奴…なんか変だな…）」

いつもクールぶっているサスケもサクラの変化に気が付いたのか、少し気にかける。

「いやゝメンゴメンゴ（笑）！遅くなっちゃったよゝゝ（すまぬ）！！」

そして最後にいつものテンションで流稀も遅れてやってきた。

「流稀！おまえ今日も遅いんだってばよ！！」

「まあ、遅刻しなかったんだから…気にしない、気にしない（爆笑）！！」

そんな事を言いながら四人で久々にアカデミーに行き、行列についていって階段を昇る。

…すると、自分達と同じ受験生が前を塞いでいる。

「ウグッ！」

すると三一の教室の前にいたオカッパタイトの少年が後ろに殴り飛ばされていた…何あのセンス（笑）！

「ふう　ん…そんなんで中忍試験受けよっての？」

「やめたほうがいいんじゃない？…僕達？」

「ケツの青いガキなんだからよー…ズー！」

そう言うのは三　一号室の前に立ち塞いでる鼻炎とバンダナの二人組

…どうやら、此処で受験生をふるいにかけて人数を絞り込むつもりらしい。

「お願いですから…そこを通して下さい…！」

オカッパのチームメイトのお団子ちゃんがそう言う…が、バンダナに顔をぶん殴られた。

「…ひつでー」

あまりの容赦のなさに周りの下忍たちが騒ぎ始める。

「…なんだって？」

…その声に反応したのか鼻炎が聞き返す。

「いいか？これは俺たちの優しさだぜ…！？」

…何言ってるんだコイツ…？鼻汁が脳味噌まで浸っちゃったか？

「この試験を受験したばかりに、忍びをやめていく者、再起不能になった者、…俺たちは何度も目にした…」

「それに、中忍って言ったら部隊の隊長レベルよ！…任務の失敗、部下の死亡、それは皆全部、隊長の責任になるんだ！……それを、こんなガキが……スン、スン！」

…なんか、最後の方だけひがみ入っていたのはなんでだろう？

「どっち道、受からないものを此処でふるいにかけて何が悪い……」

「正論だな…！だが、俺は通してもらおう……」

そう言いながら偉そうにバンダナたちの前に出てきた第七班…なんかヤダなあ…。

「そしてこの幻術で出来た扉をとつと解いてもらおうか…俺は三階に用があるんで…」

偉そうにカツコつけて前に出て解くように言うサスケ。…周りはサスケの事を間違いを見るような眼で見ている…なんか、サスケが不憫だ…。

「ほお…！」

「気付いたのか、貴様！」

…そんな周りの視線お構いなしに言う二人組。

「サクラ。どうだ？…お前なら一番に気づいているはずだ…」

「えっ？」

「お前の分析力と幻術のノウハウは、俺たちの班で一番伸びているからなあ…」

そんな事をいきなり言いだすサスケ…もし、サクラわかってなかったらどうするつもりだ？…無茶ブリにも程があるだろ！

「サスケくん…ありがとう。…もちろん、とつくに気付いているわよ！だってここは二階じゃない！」

サクラがそう言った途端、三一の教室番号が二一の教室番号に変わった。…どうやら幻術だったようだ！

…て言うか、木の葉の忍びなら普通教室の場所とわかるだろ…！

「…ふーん。なかなかやるねえ！でも、見破っただけじゃ………ッズ、ねえ！」

そう鼻炎は言つと、地面に手を付きサスケに右キックを仕掛けてきた！

サスケも気付き、相手に右ローキックをお見舞いしようと蹴りつける！！

…だが、その二人の間に先ほど殴られたタイツ（笑）くんが滑り込み、両方のキックを受け止めた！！！！

（は…速い！この人！…さっき殴られていた人物と別人だわ！！）
サクラはタイツクンの動きを見て驚く…

…流稀は驚いた顔はしているが、目は真剣に見つめていた。

「フー！」

タイツくんは息を吐き、掴んでいた足を放す。

（コイツ…俺の蹴りを！…何だ、こいつの腕のチャクラは…！？）
サスケは自分の攻撃を止めたタイツクンに警戒している。

するとタイツクンのチームメイトみたいな二人組が近寄ってきて、
「おい、約束が違うじゃないか？…下手に注目され警戒されたくないと言ったのは…おまえだぞ」

どうやら、先ほどまで殴られたのは演技だったらしい。…注目されたくないならそのまま三 一 号室に行けば良かったのに…もしかして、幻術見破れなかった？

「だって……」

そしてタイツくんはサクラを見て顔を赤くする。……え！まさか！？

…そしてタイツくんはサクラの所に近付き、

「ボクの名前はロツク・リー。サクラさんと言っんですね…。」

ボクとお付き合いましたよう！！死ぬまでアナタを守りますから！

！」

歯をキラーンと光らせ渾身の告白をする。……うわ、ないわ（爆笑）！！

そんな告白を受けたサクラは…

「ぜったい…イヤ…あんた濃ゆい…」

と眼を点にしながら完膚無きまでに断られた。……当然過ぎて作り笑いしかできね〜（超爆笑）！！！！

タイツクンはガツクリと肩を下ろす。それを見てナルトは笑っている。

「……まあ、今は中忍試験だから…試験が終わったらまたツブフウウウウウウウ（吹）！！！！」

流稀はそんなタイツクン改めリークンを慰めようとしたが、我慢していた笑いを噴出してしまい、逆に追い詰めるきっかけになった…マジコイツ最低である。

傍らではリークンの仲間の白目（なにあれ？病気？）クンがサスケに

「おい、そこのお前…名乗れ……」

友好さが微塵も見えない話しかけをしていた。

「人に名を聞く時は自分から名乗るもんだぜ…」

サスケも同じように返す。

「お前ルーキーだな…歳いくつだ？」

「答える義務はないな…」

「何イ……！？」

サスケの返事が気喰わないのか、白目君はサスケに睨みつける…いや、どっちもどっちム力つくけどな！

（ウフ、…かわいい〜！）

サスケを見ながらそんな事を考える白目君の仲間のお団子さん…病院行ったらいい…

「はあゝあ、…濃ゆい、か…」

「はあゝあ、ノーマークか…」

「はあゝあ、……別に何もねえ…」

…廊下の壁にはリーくんはサクラに振られ、ナルトはサスケばかり注目されて、壁に手を付け頂垂れていた。…ちなみに流稀も同じように頂垂れていたが、ノリでやっているだけなので言わなくてもいい…。

「さあ！サスケくん！ナルト！流稀も！早く行くわよ！！」

サクラは幻術を見破ったことで自信が付いたのか、元気よく三人を呼ぶ。

サクラはサスケとナルトの手を引いて試験会場に行こうとする。流稀もそんな三人に変な踊りをしながらついていこうとしたが、

「待て、…その仮面のお前、お前も名乗れ…」

後ろにいた白目君に流稀は呼び止められた。

「うい？私？…わたしは木の葉一の油絵職人になる男！…名を水鏡流稀という！！それなりに覚えとけ（バーン）……！！」

…明らかに今までの使い回しの自己紹介をした流稀。そして、また

将来の夢が変わってる…。

「フツ！そうか…おまえ、あの『水鏡一族』か。…名前が知られなくなってずいぶん落ちたな…！」

…白目君からは明らかに侮辱と蔑みの視線を感じた。

周りにいた七班や白目君の仲間も少し顔が曇っている。ナルトに至っては怒鳴りそうな雰囲気だ…

…そんな嫌な視線を浴びせる白目君の返事に、流稀は……

「うわ………何だコイツ…キモい！！…うわ！もう駄目だコイツ！もう色々な意味で終わってる…！！」

…そんな事を言いながら白目君に嫌悪と憐みの視線で見つめていた。

「うわゝもう駄目だよこいつゝ（憐）！…絶対友達いないよこいつゝゝ（悲）！！…うわ、もう見てるだけで可哀そうになってくるゝゝゝ（憐）！！…眼もなんか『網焼きにされて白く濁った魚』みたいな眼ゝしてるしゝゝゝゝ（哀）！もう、存在自体哀れ過ぎるゝゝゝゝゝ（涙）！！！！！」

…流稀の無慈悲で残酷すぎる言葉に、この場にいる下忍全員が白目君に対して同情の視線を向ける…。

…彼のチームメイトは少し目に涙をためて憐みの視線を投げかけ、サスケやサクラもそんな白目君に対し同情のまなざし、周りにまだ残っていた受験生達からも励ましの言葉を投げかけられる。……さつきまで怒鳴ろうとしていたナルトですら可哀そうなものを見るような眼をしている…。

「ッ…貴様！！！」

…そんな周りから可哀そうな目で見られている白目君は顔を真っ赤

にしに、体を小刻みに震わせながらこの事態を招いた流稀を親の敵のように力いっぱい睨みつけていた…先に喧嘩売ったのはそっちだけど。

…そんな視線など知ったこっちじゃない流稀は、そんな白目君にさらに言う。

「やべ〜よこの人（驚）！…本当の事言われて超泣きそうだよ（焦）
！…！…こう言う時はそつとしておいた方がいいかな、やっぱり（考）
。…いや〜！まあ、…人の生き方なんて人それぞれだと思っし！
…別に、友達一人もいなくてもいいと思うよ〜僕は、うん（笑顔）
！…！…あ！もうそろそろ時間だからもう行くね！…じゃあ、気を落とさずにね（満面の笑顔）！…」

…流稀は最後にそう言うと、ナルト達三人を連れてさつさと教室に行ってしまった。行こうとする瞬間までのナルト達の白目君を見る視線は、ものすごく温かった…。

…そして、この場に最後まで残っていたのは、さつきよりも励ましの言葉が大きくなった受験生達、…そんな光景をドアの隙間から目もとを赤くしながら覗いていた試験官の二人組、…もはや涙を流して優しい目をしてみている白目君のチームメイトのリー君とお団子ちゃん。

……そして、そんな周りからものすごく可哀そうな目で見られ、顔を真っ赤に血管が体中から浮き出ており、身体を怒りのあまりブル

ブル震わせている…

…可哀そ過ぎる白目君、前回の期待のルーキー事『日向 ネジ』が
その場で立っていた。

「……『水鏡 流稀』か……！！……覚えておくがいい……
……！！……」

…その静かな声はまるで怒りにより煮え切ったような酷くぐぐもつ
た声だったそうなの……

中忍試験、どうなる事やら……

第二話 憐れむ仮面（後書き）

.....ネジィ.....。（ ; , ）

第三話 『自重』、という言葉を辞書で調べる。頼むから（前書き）

二十一、二十二話はあまり出来が良くないですが、取敢えず二本投稿します

第三話 『自重』、という言葉で辞書を調べろ。頼むから

…あのネジの悲惨すぎる事件によりテンションが下がったが、今はそれも落ち着きサクラがナルトとサスケの手を引っ張りながら三階に行く。その後には流稀もついていく。

…そして向かってる途中、

「目つきの悪い君、ちょっと待ってくれ！」

さっきのネジ君の仲間のリーが声をかけてきた。

サスケか流稀のどちらに言っているのかと思っていると、

「何だ？」

とサスケだけが返事した。…自覚、してるんだ…。

「今ここで、僕と勝負しませんか？」

リー君は本気目のサスケに挑んできた。

「今ここで勝負だと…？」

「ハイ、ボクの名前はロック・リー。人に名前をたずねる時は自分から名乗るもんでしたよね？」

「うちはサスケ君…。」

「フン…知ってたのか」

「君と闘いたい！」

リー君は左手を胸の前に立て右腕は後ろに回している。

それがリー君の構えだということは容易に察せられた。

「あの天才忍者と謳われた一族の末裔に…ボクの技が何処まで通用するのか試したい」

リー君はさらにサスケを挑発する。

…そんなシリアスな空気に、仮面の男こと水鏡流稀はこの場に『触爬糸』をこの場所に充満させると、

「…じゃ、私^{わたくし}先に行っているから（笑）！遅くならずにちゃんと来るのよー！！」

笑いながらそう言い、流稀は三階にさっさと行こうとしていた。

「ちょ！？流稀！あんた何勝手に一人で行こうとしてるのよ！？」
そんな流稀の行動にサクラは叫んで突っ込みを入れる。

「だって～！なんか長くなりそうだし～退屈しそ～だから～（笑）！…っわけで先に行ってるね～（笑顔）！！」

…流稀はそう言い、後ろからサクラがギャーギャー何か騒いでいるが、流稀はそのまま振り向かず、そのまま試験の教室に歩いて行った…。

…あれから流稀が一人で階段を上がり三階の三　一教室の前に行く
と力カシが待っていた。

「…ほう、意外だったな。流稀はめんどくさがって来ないと思ってたよ」

力カシが意外そうに言う。…技とかよこの変態…！

「…チイ！もしこれが個人の試験だったら絶つて来なかったんだがなあ！！…今回、七班員全員が受験しねーと受けられねーシステムだから渋々だ！！…流石に、俺一人の我が侭で三人の受験資格を取り上げるのも何ですからなあ……」

流稀は表の偽の性格を出し、忌々しそうにカカシを睨みつけ、吐き付ける。

…っといつても、今回の中忍試験は流稀は絶対に出るつもりだった。なんせ…、今回のこの試験が流稀の計画の初めであり…、なにより、この試験でやっておかねければならない事があるからだ。

「へエ〜、知ってたんだ？」

カカシは流稀に笑いながら言葉を掛ける。…たぶん、憎まれ口を言われながらも、仲間の事を気に掛けたことがうれしいんだろーなあ…知らないって幸せだな…。

「調べたからな。このくらい、すぐに人に聞けばわかる。…それに、こんなメンドクサイことやルことになっちまったんだ…！中忍になつてこんなタルイ試験なんて二度と受けないでやる！！」

「…まあ、そこはお前の自由だからな。…でも、俺はお前は中忍になれると思っているよ。」

カカシは自分の部下である流稀にそんな言葉を送り、苦笑いを浮かべていた。

（おや…終わったようだな……）

流稀は『触爬糸』を使い、ナルト達がこちらにやってくることを察知する。

その後、ようやく三人も来た。

「……そうかサクラも来たか……。中忍試験……これで正式に申し込みできるな」

「……どういふこと……？」

サクラはカカシの言葉に疑問に持つ。

「実のところ、この試験、初めから三人一組でしか受験できないことになってる……。お前らは特例的に四人一組だが」

「え？でも先生、受験するかしないかは個人の自由だ……。って……。じゃあウソついてたの？」

カカシの返答で驚くサクラ。

「……もしそのことを言ったならサスケやナルトが無理にでもお前を誘うだろう……」。

たとえ志願する意思がなくてもサスケに言われれば……。お前はいい加減な気持ちで試験を受けようとする……。サスケと……。ま！ナルトの為に……。ってな」

「じゃもしサスケ君とナルト、流稀の三忍人だけだったら？」

「ここで受験は中止にした。この向こうへ行かす気はなかった……」。

だがお前らは自分の意思でここに来た。オレの自慢のチームだ。さあ、行ってこい！」

カカシは自信満々にナルト達を送り出す。

「よし！！行くってばよ！！」

ナルトが宣言してサスケとサクラが扉を開ける。

「…す、すげえ」

「……」

「な…なによ、コレ」

「……ワァ~~~~~~~~オ（驚）……」

ナルト、サクラ、流稀は教室に入ったと、そんな驚きの言葉を吐いた…

教室の中に入ると、そこにはすでに既に教室を埋め尽くすほどの大勢の下忍がいた。

…てか、全員こっち向いてるよ…なんか悪いことしたみたいで怖いんだけど…。

（なんて人数なの…もしかしてこれ、全員受験生なわけ…？）

受験生しかこの教室にはいないはずだが、…あまりの多さに受験生か疑うサクラ。

（なんか…ものすごそうな奴ばかり…）

サクラは怖気づいたのか喉を鳴らし緊張する。すると…

「サスケ君おっそーい！」

…いきなりサスケに薄い金髪のポニーテールの少女が抱きついてきた。

「あたしったら、久々にサスケ君に会えると思って、もうワクワクして待ってたんだから！」

顔を少し赤くしてサスケに言うポニーテルちゃん。…ちなみに、サスケは抱き付いた子を嫌そうに睨んでいる。

「サスケ君から離れ〜い！イノブター！！」

サクラはポニーテールに指を指し、怒りながら怒鳴りつける…さっきの緊張した気分はもうなくなってしまった様だ。

「！アアゝラ…サクラじゃない。相変わらずのデコリ具合ねゝブサイクゝ！」

ポニーテールの子もサクラに返事を返す…コイツ等、口悪いなゝ。あと、レベル低すぎね？

「なんですつー」

「ベエー」

二人は七班の間から互いに睨みつける。犬猿の中か？…どっちかつーとサクラは猿だな。

…サクラとポニーテールが何か言い合っている、横からシカマルとポテチを食べるポツチャリの少年の第十班が現れた。

「なんだよ…こんなメンドクセー試験、お前らも受けんのかよー？」
シカマルがポケットに手をつ込んで聞いてくる。

「なんだ！お馬鹿トリオもでるのか…！」

「その言い方ヤメゝ！…たくつ…クソメンドクセゝ」

シカマルの質問に答えるナルト。…ナルトにそんなこと言われる十班って…

…ちなみに、ポニはいの、ポツチャリはチュウジと言う名前である。

「いやっほー！！みつけー！…これはこれは皆さまお揃いでゝ！」

そんな事を言いながら近づいてきた三人組の一人、頭に上に子犬を乗せた少年がそんな事を言ってくる。

「こ、こんにちは…」

少年の後ろにいた大人しそうな白目（あれ？…どっかで見たぞ？）の少女が挨拶してきた。

「…ん？」

ナルトが白目の少女を見ると、少女はナルトが目を逸らす…此処まで分かりやすい子も珍しいな（萌）…

「……………」

ちなみに、白目の横にいるサングラスをかけた子は何も言葉を発さない…つか、怖エーヨ（怖）！！

名前は犬男はキバ、白目はヒナタ、グラサンはシノという。第八班が現れた。

……なんて言うか、まるで飴に群がる蟻見てえだな！！

「なんだよ、…お前らもかよ、たくっ…」

シカマルがタルそうに八班を見て呟く…

「けっ！なるほどね。今年の新人下忍十名全員受験って訳か…さて、どこまでいけますかねえ、俺達！…ねえ、サスケ君？」

キバはサスケの方を見て明らかに挑発するようにほくそ笑みながら言う。

「フン、偉く余裕だなあ…キバ！」

「俺たちは相当修業したからな！。お前らには負けねーぜ」

サスケとキバは睨みあふ。…どーでもいいけど挑発好きだよな…この世界の忍者って…

「うるせーってばよ、…サスケならともかく、俺がオメーラなんかに負けるか！」

ナルトが八班に指をさし言う。

「ご、ごめんねナルト君…キバ君は、そんなつもりで言ったわけじゃないから…」

別にヒナタは悪くないのに謝っちゃったよ……損な性格だわ、この子…

「え？」

ナルトは聞こえてなかったのかヒナタに聞き返す…が、ナルトの視線で眼を逸らす。

…うわ、ヤダ、この子メンドクセーわー（嫌）！！！！超ーメンドクセー…よ（無理）！！！！！！

（…赤丸…、うまそーになったなー）

ポテチ喰ったたチヨウジがキバに頭に乗っていた赤丸を見てそんな事を思っている。…なんか怖え よコイツ（怖）！！！！！！

…なんだよこいつら！！

「なんでこいつら揃いも揃ってこんなに濃いんだよ（怒）！？どんだけ自己主張したいんだよこいつら（怒）！！！！個性ありすぎだよ！？…全然忍んでねーーじゃねーーか（呆）！？？」

…今まで黙っていた『髑髏の仮面』をした自己主張の塊、流稀が突然大声でそんな事をほざく。

「『オメー！』にだけは言われたくないわ！！！」

「おお（驚）！！？」

…ナルト、シカマル、キバが流稀の発言に当然の突っ込みを入れた。

…そんな感じで何か久々に集まったからか割かし（いや、相当）デカイ声で会話していると…

「おい君たち！もう少し静かにした方がいいな…。」
眼鏡をかけた青年が注意してきた。……流稀はその人物にわからないように注意深く見る。

「君たちがアカデミー出たての新人十人だろ？　かわいい顔してキヤツキヤツと騒いで…まったく。」

「ここは遠足じゃないんだよ」

「誰よ～アンタ？　エラソーに！」

いきなり現れた青年に、いのが不機嫌そうに言う。

「ボクはカブト。それより辺りを見てみな」
「辺り？」

全員が後ろを振り返ると雨隠れの額当てをした三人組が睨んでいた。

「君の後ろ…あいつらは雨隠れの奴らだ。気が短い。

試験前でみんなピリピリしてる。どつかれる前に注意しとこうと思
ってね」

カブトがそう言つと全員黙った。

そして静かになったのが分かったのか睨み付けていた奴等も前を向
いた。

…一人の男を覗いて、

「…ボフォ（吹）！！！！なんだあの髪形ｗｗｗｗ（笑）！！……ダッ
セｗｗｗｗｗｗｗｗ（爆笑）！！！！！！

え、何！？何なのあれ（疑）！！？…パールック（疑）！！？…ブ
ッフーーーーー（爆笑）！！！！

ちよーーーーダッサイんですけどｗｗｗｗｗｗ（激笑）！！？
え？流行ってんのあの髪形（疑）！？ テラワロスｗｗｗｗｗｗｗｗ
ｗｗｗｗ（超爆）！！！！！！！！」

…名前を書かなくても誰がしゃべっているのか判るだろう……。

…心を挟るところかドリルでゴリゴリ削り掘られるような言葉を吐いたしゃべっている奴は、自分の口に手を当て、もう片方の手で相手に指を指しながら眼に涙を流し大声で爆笑していた。

「なんだ！！！？テメーぶつ殺されて のか！！！！！？？」

…そんな超大声で笑って指を指されているため必然的に相手にバレ、メチャクチャ怒り心頭に笑っている流稀に向かって突進してきた。
…が、

「甘いわ、愚か者が（投）！！！！」

流稀はズボンのポケットから黒い丸薬的なものを取り出すと、突進してくる三人組の口に投げ入れた。

『『『ングウ……！！？』『』『』

そして流稀の投げた丸薬を雨隠れの三人組は呑み込んだ、すると…

…『バタツ！』っとそのまま床に倒れ、そのままいびきをかきながら眠りだした…。

「ツフ、…暴力ですべてを解決しようだなんて…なんて野蛮な人たちなんだ…（驚）！」

…まあ、安心したまえ……その丸薬は即効性だから二時間位で起き上がるさ（教）。…自分の罪を悔い改めるがいい（キラリンツ）……」

そう、何故が無駄にムカつく決めポーズを決めながらほざきだす流稀は、寝ている三人を教室の隅に蹴りだす。

…もう突っ込みどころ満載過ぎるが、取敢えずこの三人は今年試験には受験は出来ないだろう…可哀そ過ぎだろこの雨隠れの三人組…。

受験生達は流稀のあまりの行動に全員黙ってしまい、教室の中は痛いほど静かになった。

「……まっまあ！右も左も分からない新人さん達だしな、昔の自分を思い出すよ……」

…そんな中、青年改めカブトは流稀の行動をなかった事にし話を進める。…強いわ、この人…。

「…カブトさん…でしたっけ!？」

「ああ!」

「…じゃああなたは二回目なんですか!？」

サクラが聞く。…こいつらもすげーな。木の葉のメンバーは流稀の

行動を忘れようと話題をカブトの方向に進める。

「いや…七回目！この試験は年に二回しか行われないからもう四年目だよ！！」

「す、すげーッスね！そんなに受けたんすか！！」

…シカマルはカブトの言葉に大げさに驚いて見せる。

「へーじゃあこの試験について色々知っているんですね！！」

「…まあな！」

「へー！カブトさんってばすごいんだー！！」

…木の葉のメンバー達も教室の空気を変えるためカブトを必死にほめたたえる…。

その言葉に気を良くした風に見せたカブトは

「へへ…。じゃあかわいい後輩にちょっとだけ情報をあげようかな。この忍識札でね」

とカードを出してきた。

「忍識札？」

「簡単に言えば情報をチャクラで記号化して焼きつけてある札のことだ。この試験用に四年もかけてやった。札は全部で二百枚近くある」

…その後はどこの里が何人受験者を出しているかやリーや我愛羅の情報を見せてくれた。

…ちなみに、流稀はその後サクラにボコボコにされて今は教室の床の上で転がっていた。…ハッキリ言ってそっちの方が世のため人のためである。

…そしてナルトが震えていたかと思いきや突然

「オレの名はうずまきナルトだ！…てめーらにやあ負けねーぞ！！」
と、流稀並みの大声で教室にいる受験生達に宣言する。

当然ながらまた教室の全員がうんざりしてこっちを注目してくる。

…しかしナルトは頭を後ろに組んで笑ってるだけ。

サクラが「み…皆さん冗談です…。こいつかなりのバカでして…」
とフォローする。

カブトが「フゝゝ、まったく…」と言った直後に音の忍三人が動き出した。

音忍の死の文字の少年が集団からジャンプしてカブトに剣だかクナイだか分からない刃物を投げ、カブトがそれを避けるともう一人の包帯少年が現れて何か穴が空いている籠手を着けた右腕で殴りにかかる。

しかし当てるつもりはあまり無かったのか大して速くなく、カブトは避ける。

しかし避けた筈のカブトのメガネが割れる。

そしてカブトはいきなり吐き出した。

「なーんだ…大したことないんだなあ。四年も受験してるベテランのくせに」

「アンタの札に書いときな、音隠れ三名、中忍確實ってな」
音忍三人がドヤ顔でカブトを見降ろしながら言い放つ。

…ちなみに、すぐそばに倒れている流稀にはチラチラ見ながら警戒
していました…

第四話 第一次試験開始、終了

「静かにしやがれどぐされヤローどもが!」

デカイ煙と一緒にデカイ声が響いた。

「な…何だ?」

周りの受験生達も驚く。

煙が消えるとそこには同じ服を着て木の葉隠れの額当てを着けた男女がかなりの数いた。

「待たせたな…。『中忍選抜第一の試験』試験官の森乃イビキだ!」

…その中で一人だけ黒い羽織を着た顔に傷の付いた強面の男の声が教室に響く。

…どう見てもヤクザだ、あれ…。

その雰囲気には受験生達は飲み込まれる。

「音隠れのお前ら!試験前に好き勝手やってんじゃねーぞコラ。いきなり失格にされてーのか?」

イビキは音忍を指差して怒鳴りつける。

「すみませんねえ…なんせ初めての受験で舞い上がってしまいました…ついで…」

全然反省していない様子で包帯くんはイビキに言葉を返す。

「フン…いい機会だ、言っておく。

試験官の許可なく対戦や争いはありえない。また、許可が出たとし

ても相手を死に至らしめるような行為は
許されん。オレ様に逆らうようなブタ共は即失格だ。分かったな」
いびきの言葉で場の雰囲気がまた緊張を帯び始めた。

「…へん、なーんか甘つちよろいなー…この試験」

死の服の少年は笑みを浮かべながらそう言うが、少年の言葉で試験官の中忍たちはニヤニヤ笑いかける。

「いやいや！油断している時がーッ番危ない（注）！！気を引き締める（忠告）！！！」

「うおおッ！！？」

…いつの間にか復活していた流稀は音忍三人衆の後ろに立ってそんな事をほざいてきた。

流稀の話声で音忍三人は大げさに流稀から距離を取り警戒する…ど
んだけ嫌われてんだよ、コイツ…

「うるせーぞ！！…ではこれから中忍選抜第一の試験を始める…。
志願書を順に提出して代わりにこの…座席番号の札を受け取り、そ
の指定通りの席に着け！その後、筆記試験の用紙を配る」
まさかのペーパーテストに驚く者達もいた。

「筆記…？用紙…？」

ナルトはその不吉な単語を言いながら確認し、試験官の持つ問題用
紙の束を見た瞬間、

「ペツ…ペーパーテストオオオオ！！」

と叫ぶ。…うるせ。

各自志願書の代わりに受け取った座席番号に従い着席すると見事に

班員とバラバラになった。

そして次に試験官が試験用紙を裏表紙で各席に置いていく。

「試験用紙はまだ裏のままだあ。そしてオレの言うことをよく聞くんだ。

この第一の試験には大切なルールつてもんがいくつかある。黒板に書いて説明してやるが質問は一切受け付けないからそのつもりでよく聞いとけ」

そう言いながらイビキは黒板に文字を描く説明する…。

「第一のルールだ！まずお前らには最初から各自十点ずつ持ち点が与えられている。筆記試験問題は全部で十問。各一点…。そして試験は減点式となってる。つまり問題を十問正解すれば持ち点は十点そのまま、しかし問題で三問間違えれば持ち点の十点から…三が引かれ七点という持ち点になるわけだ」

「第二のルール…。この筆記試験はチーム戦。つまりは受験申し込みを受け付けたチームの合計点数で合否を判断する。つまり合計持ち点をどれだけへらさずに試験を終われるかをチーム単位で競ってもらう」

幸いにも俺達は四人一組だから他チームよりも持ち点が多い。だからサクラも別に慌てない。

…仮にナルトが0点でもサクラ達でカバー出来るからな。

「第三に、試験途中で妙な行為、つまり「カンニング、及びそれに準ずる行為」を行ったとここにいる監視員たちに見なされた者は…その行為一回につき持ち点から二点ずつ減点させてもらう。つまりこの試験中に持ち点をすっかり吐き出して退場してもらつ者も出る

だろう」

「いつでもチェックしてやるぜ」

さっき変化で下忍に化けていた中忍が言う。

「不様なカンニングなど行った者は自滅していくと心得てもらおう。仮にも中忍を目指す者。忍なら……立派な忍らしくすることだ」

『立派な忍らしく』の所を強く強調して言い放つ。…ああ、言うこと？

「そして最後のルール……。この試験終了時までには持ち点を全て失った者……および正解数0だった者の所属する班は……全員道連れ不合格とする……！」

その言葉にサクラとサスケは動揺する。…流稀は別に気にしている様子はない。

ナルトは寒気が感じれたのか身震いしていた……。

「試験時間は一時間だ。よし……始める……！」

第一次試験が開始された。

コテツサイド

試験開始二十分後……ちらほらカンニングする奴らが現れ始めた。

…この試験の内容は下忍に出来るような問題ではない。

故にイビキ上忍が最初に言った『無様なカンニング』をせずに『立派な忍らしい』行為、つまり誰にもばれる事のない情報収集術を使わなければいけないのだが、

それがわからない奴をこの試験の減点対象としている……っと、あいつ、これで五回目だな。

そう思いながらコテツはクナイを取り出すと、五回減点された生徒の机の前へとクナイを投げつける。

「うわあー!!」

クナイを投げつけられた生徒は驚いた声を上げながら叫ぶ…。

情けねえ声だなあ。カンニングしてビビってるからだろう。

イビキ上忍が言っていたことをちゃんと理解していれば良かったものを…。

「な…何の真似ですか!!」

「五回ミスった…てめーは失格だ!」

俺は無情にもこの生徒に失格の宣言をする。

「コイツの連れ二人共、この教室から出てけ…今すぐだ」

「そんな…」

そう言つとコイツの連れが立って教室から出ていった。…ま、また次回頑張んな。

俺は自分の椅子に座り直し、またカンニングしている奴がいないか

探し始め、一人の受験者に目を止めた。

…その受験者は、両足を組んで机の上に乗せており、左手を自分の頭の後ろにまわし、右手で本をめくり読んでいた（本の題名は『ヨガろうぜ！お茶の間ヒーロー、軟骨老子！』炸裂！軟体夫人の地獄廻り編）。なんだ、その題名！？）。…さらに顔には『髑髏の仮面』という趣味の悪い仮面を付けており、その上からサングラスを付け、仮面の下顎が開きその口からクツチャクツチャとガムを噛みながら膨らませていた。…ちなみに両足を乗せた机の横には南国果実の入ったトロピカルジュースが傍らに置いてあった…。

…その光景はどう見てもリゾートで満喫している人であり、中忍試験の受験者には見えなかった…。

俺はその時、口をあけてポカーンとしていただろう…それほど、衝撃的な光景だった。

（…なんだ、アレ？…どう見ても受験生の態度じゃないだろ！…て言うか、どこからジューズ取り出した！？）

…そんな事を考えながらその受験生をマジマジと観察していた。と、すぐにその人物に心当たりがある事に思い出した。

あれはたしか今年の新人下忍の一人、たしか『水鏡 流稀』という下忍だ。…たしか、木の葉の旧家の一つ『水鏡一族』の跡取りの子で、『うちは一族』の子と同じ班だったはずだ。

…さつき、俺がイズモと受験生の品定めをしていた時、『日向一族
分家『日向 ネジ』の騒動を見ていたが…あの時は見ているこつち
が可哀そうになるくらいボロクソに言われまくっていた。

…あの時は本気でイズモと一緒に涙を流してしまった……。

周りを見ると、俺と同じように流稀に気付いた試験官が俺と同
じように眼を点にして見つめていた…

…て言うか、アレいいのか？…周りの受験生とかガムの噛む音で米
神から血管浮き上がらせてるぞ……。

そう思い、俺はもう一度その受験生に眼を向けると、

「……………ZZZ〜（眠）。」

…鼻からチヨウチンを作りながら眠っている流稀の姿が眼に見えた。

（寝たあああああー！！！！！？？）

コテツは心の中で寝ている流稀を突っ込んだ……。

……そんなこんなで流稀が寝ている間に第一試験は終了した。

ガシャン！！と三階の窓を割りながら黒い塊が侵入して来た。

…それと同時に、眠っていた流稀も眼を覚まし教室の前の方を見る。

黒い塊からクナイが2本飛び出し、天井に突き刺さり、黒い布を両方に引っ張り、広げる。

そしてその中から一人の女忍者がでてきた。

「アンタ達よろこんでる場合じゃないわよ！！」

私は第二試験官！みたらしアンコ！！次、行くわよ次イ！！！

ついてらっしやい！！！！」

片手を挙げてカツコ良くポーズを決める。

が、いきなりの紹介に全員ポカーン状態：受験生達は当然の如くついていけなかった。

黒い布には『第二試験官、みたらしアンコ見参』

…という明らかに前もって準備していたんだろっ紹介文がデカデカと描いてあった。

「うわ……痛いわ……あの人（呆）。…何、なんか辛い事でもあったの（疑）？」

寝起きからアンコに対し辛口トークをする流稀：

…寝起きなので結構小さめの声でしゃべったのだが、静まり返った流稀の声は良く響き、それを聞いたアンコは顔を赤らめる。

いつの間にか布に追いやられていたイビキが布の端っことから半身を出して「空気読め…」と言う。

それに自覚があったのかアンコはますます赤め、「グッ！」声を出し震えだす。

…ハッキリ言つて恥さらし以外の何者でもない。

その様子に受験生達もくすくす笑い出した。

…アンコはこの気まずい教室から逃げ出そうとするが

「おい、どこへ行く？ 帰るんなら、このなんと評したらいいのか判らんでつかい風呂敷も持つて帰れ」

「ググッ！」

回れ右しようとした足は、一歩目を踏み出す前にイビキに止められた。

アンコは次に話題を変えようと会場を見渡してきつかけを探す。…そして、ある事に気付く。

「七十九人…！？」

イビキ！二十六チームも残したの！？…フッ！

今回の第一の試験…甘かったのね…！！」

わざわざ大声でイビキに怒鳴る…八つ当たりか…

「今回は…優秀そうなのが多くてな」

イビキは自分の決めた合格者達を自信を持って答えた声でそう言った。

それを聞いた受験者は顔を緩ませる…ダンディだ。

「フン！まあいいわ…次の「第二の試験」で半分以下にしてやるわよ…！」

ああゝゝゾクゾクするわ！詳しい説明は場所を移してやるからついてらっしやい…！」

…この人、大人げないわゝゝ。あと、ちよつと痛いわゝゝ。

アンコはそう言い、教室から出ていこうとする。が、

「いや、…第二次試験は明日って普通に書いてあつたじゃん（呆）。

…なんだこの人？やる事なす事全部空回りじゃねゝか（つぶ）」

…時刻はすでもう夕方…流稀の呟きに今度こそ教室から嘖き出す声が聞こえた。

そんな恥ずかしい行動をとったアンコは顔を真っ赤にし、流稀を少し涙目で睨みつけると、ダッシュで教室から出ていった。…逃げたな…。

中忍試験一日目、第一試験はこうして終了した。

「…あれ？…ていうか試験は（疑）？」

…ちなみに、流稀は試験開始約十分で問題を解き、十点満点を取っていた。

第五話 第二次試験〜サバイバル突入〜

翌日、アニコに案内された場所は目の前に金網が張られて嚴重に口ツクされた樹海であつた。

一同を導いたこの場所は、木ノ葉の忍達にとつても見知らぬはじめて訪れる場所であつた。

見るからに怖いな此処…うおっ！目の前の鳥が大蛇に食われたぞ！！！！

「なんか…薄気味悪い所ねえ…」

サクラがこの森を見てビビっている。…やっぱ入んなきゃいけないのかなあ（泣）。

「ははっ！…ここが「第二の試験」会場、第四十四演習場…別名『死の森』よ！！」

なんとも…ベタすぎる名前に嫌になつてくる…。てか、この試験官今笑つたぞ！

「ここが死の森と呼ばれる所以、すぐに実感することになるわ」
不敵に笑いながら言うアニコ。絶対性格悪いわこの人。

…その言葉に何故かナルトがムスツとして

「「死の森と呼ばれる所以、すぐに実感することになるわ」なーいなんておどしてもぜんっぜんへーき！怖くないってばよ！」

「なんだかな〜（考）。…今更あんたがそんなこと言つても全然実感わかないんだけど〜（笑）！」

ナルトは腰をクネクネしながら言い、流稀もナルトに便乗し、昨日のアニコの事を思い出しながら笑つてアニコに指を指し言い放つ。

「そう…君達は元気がいいのね」

ニコツとアンコは笑う（額に血管が浮き出ている）がクナイを取り出し、ナルトと流稀に投げつけた！

…一本はナルトの頬を掠め、皮膚を切った。そしてクナイはナルトの後ろにいた番傘を被った下忍の長い髪も一本切った。…もう一方のクナイは流稀に直撃コースだったが、これに察したのか「ひよわあ（驚）！！」と言いながらギリギリよける事が出来た。

「…アンタらみたいな子達が真っ先に死ぬのよねエ、フッフ…。私の好きな赤い血ぶちまいてね」

ナルトの後ろに瞬身で移動したアンコはナルトの頬の傷から滴る血を舐める。そして流稀に対しては憎々しげに睨みつけると「チッ」と聞こえるように舌打ちした。…まだ根に持っていやがる。

その瞬間、アンコの背後から殺気を感じてアンコはまたクナイを取り出して攻撃しようとしたら

「クナイ…お返ししますわ」

…編み笠をかぶった女が長い舌（なんだあれ！？キモッ！！）でクナイに巻き付け、アンコにそのまま渡す。

「わざわざありがとう」

アンコも笑顔で受け取る。

…て言うか、よくあんな汚いクナイ受け取れるな！

ピーーンと張り詰めた空気が出来たが

「でもね…殺気を込めて…私の後ろに立たないで。早死にしたくなければね…」

アニコはクナイを受け取る。

「いえね…赤い血を見るとついウズウズしちゃう性質でして…それに私の大切な髪を切られたんで興奮しちゃって…」

そう言って長い舌を口に戻す。…どうやって長い舌を収納してるんだ？

（な、なによあの試験官！…ハッキリ言ってヤバい！！それにコイツも…！）

サクラがアニコと明らかにヤバそうな編み笠の女を見てそんな事を考える。…もし忍びじゃなかったら快樂殺人者にでもなってるんじゃないの？

（アイツ…なんであんなにした長いんだ？）

ナルトもその場面を見て、編み笠の方に興味を持って見ていた。

「悪かったわね。どうやら、今回は血の気の多い奴が集まったみたいね…。フフ…楽しみだわ…」

（あんたが一番血の気が多いんだってばよ！！）

ナルトはアニコを見ながらそんな事を考える。

ちなみに、この場面で黙っている流稀はと言うと…

「すいまつせ〜ん！！なんすかその舌？どうなってるんすかその舌

！？食事の時とか噛まないんですかその舌（疑）！！？ヤバッ！！
超～～テンション上がるんですけど～～～～（激感動）！！！！」
…そんなヤバそうな編み笠に対し、メチャクチャハイテンションで
質問しまくっていた。…ただだけ命知らずなのこの人！？

「チヨツ！？流稀！！アンタ何やってんの！！！！…すみません！こ
の馬鹿、相当頭が残念な奴でして…！！」

サクラは流稀に近づくと首を極め、編み笠に謝りながらその場から
遠ざかるうとする。

「…いえ、…別にかまわないわ…」

…編み笠は流稀をウザそうに見ていたが、何とかお咎めを受けずに
済んだ。

「…それじゃ、第二の試験を始める前にアンタらにこれを配ってお
くね！」

懐から紙の束を出す。そこには大きく同意書と書いてある。

「同意書よ。試験に参加するものはまずこれにサインしてもらっわ。」

「なんで？」

ナルトがアンコの言葉に疑問を持つ。

「…こっから先は死人も出るからそれについて同意をとつとかな
いとなね！私の責任になっちゃうからさ…」

アハハ。と笑顔でアンコは告げる。…受験生の大半の顔が青ざめて
いる。

「じゃ、第二の試験の説明をするから、…早い話、此処では極限のサバイバルをしてもらうわ。」

アンコは同意書を配りながら説明する。

同意書の内容を読むと如何なる怪我、もしくは死亡したとしても自己責任という内容だった。

「じゃ！第二の試験の説明を始めるわ」

話が長くなるため、此処からは要点だけ説明する。

アンコの説明によるとこの森の中央の塔を目指すこと。

- ・森は円状になっていて塔までの距離は約十km。
- ・そして天の書と地の書の巻物を揃えて五日以内に塔に集合する。
- ・スタートは同意書と巻物を交換する際に四十四個あるゲートのいずれかに振り分けられる。
- ・巻物は一チームに天か地の巻物を渡すから奪い合え。
- ・ちなみに巻物を途中で開けてはいけない。開けた時の罰則は開けてのお楽しみ。
- ・食料などは自給自足。完全サバイバルで行う。森には人食い猛獣や毒虫、毒草が多々あるので注意。
- ・失格条件は時間内に巻物を揃えて塔まで三人、もしくは四人で持つてこれなかったチーム。
- ・班員を失ったか再起不能者を出したチーム。
- ・途中ギブアップは認めず、五日間は原則森から出られない。

「…説明は以上！同意書三枚と巻物はある小屋で交換になってるか」

アンコの指差した方向には試験官が待機している小屋があった。

「その後ゲート入口を決めて一斉にスタートよ！」

アニコがそう言うと大きなため息を付く。

「……フウ……最後にアドバイスを一言、死ぬな……」
アニコが受験者達に言い放った。

……その言葉でこの場にいる受験生全員の気が引き締まった感じがした。

「「死ぬな……」つか。良い言葉だ（嬉）……何のアドバイスにもなっていないがな（ドーン）……」

……そしてその言葉に反応する流稀。……そう言うとアニコが流稀に向かって微笑み、

「あんたは死ぬえ……」

「ひどッ（驚）……!?」
流稀に大声でそう言い放った。

「巻物を受けつつたチームから担当について、それぞれのゲートに移動！……これより、三十分後に一斉スタートする……」

十六番ゲート：八班

「イヤッホー……サバイバルなら俺たちの十八番だあ……おはヒナタ、甘えを見せるんじゃないぜ……」

キバが森の方を見ながらヒナタに話しかける。

「うん」

ヒナタは小さな返事を返す。
…シノは黙ったままである。

二十七番ゲート：十班

「命がけかよ……メンドクセーがやるしかないか……こうなったら、ナルト狙いだ!」

シカマルが呟きながら自分達にでも狙える相手を見定める。

「お菓子は…、ポテチは…」

チヨウジは自分のポケットからお菓子を取り出し数を確かめている。

(あんたらね〜！)

…そんな一人を見て呆れているいの。

十二番ゲート：七班

「いよーっし！負けねーっ！ってばよ！！近づく奴はあ、片っ端っからぶっ倒押してやる！！」

ナルトは気合を入れるために、その場でシャドーボクシングをする。

[illegible]

流稀は大声で叫びながら、その場で残像を残すほどのグネグネした踊りをしている。

「うん！（しゃあ——んなる——！！！！）」

サクラは心の中で気合の雄叫びをあげる。

サスケは黙ったまま森と流稀を交互に睨みつけ心の準備をする。

二十番ゲート：音忍三人衆

「フフ…やっと、この機会が来た。公然と我々の使命が果たせるチャンスが…待っていてくださいねうちはサスケ君…できれば、あの仮面の男には出会いたくないが…」

…そんな事を言い、少し鬱になる包帯な少年、死という服を着た少年、特に目立った外見をもたない黒髪の少女は少しだけため息をついた。

三十八番ゲート：カブト班

特になし（寂し！）

六番ゲート：砂のチーム

（敵チームに遭遇もあるが、…こいつと五日間も行動するのが怖い！）

そう思いながらカンクロウとテマリは我愛羅を見つめる。

（アイツも生き残ればいいが…）

…カンクロウは自分の苦労を共感した流稀の事を考えていた。

十五番ゲート：草隠れチーム

「まずはルーキー狙いですね？」

「此処からは殺してもいいそうだから、帰って簡単だわ…」

編み笠女は不敵に笑いながら、自分に絡んできた流稀について考えていた…

（…あの仮面のボウヤ…たしか、前にどこかで会ったような…？）
思い出してみるが何処で会ったかがはっきり思い出せない…。

四十一番ゲート：ネジ班

「ガイ先生…！ボクは頑張ります…！必ず勝ちぬいてみます…！」
リーは眼に火を灯し、拳を握りしめながら意気込んでいる。

（水鏡流稀…貴様をこの試験で必ず叩き潰してやる…！！）
ネジは自分を馬鹿にした流稀の復讐に燃えていた…。

「これより、中忍選抜第2の試験！開始…！」
そして、アノコの号令と共に第2の試験が始まった…！

七班の十二番ゲートが開けられた。

「よっしゃあ…！行くぞ…！」

「フォーーーーーーー（笑）…！！！」

「……………」

ナルトが何時も通り氣勢を上げ、流稀は大声で雄叫びを上げる。

「うっさい！黙れ流稀…！」

…その後サクラにぶん殴られました。

七班がしばらく進んでいると『うわあああ…！』という悲鳴が聞こえた。

「…！」「……………」今の人の悲鳴よね！？」「オ…………ウ…………」
…（静）…！」

サスケとサクラ、流稀が反応する。

「…な、なんか緊張してきた……」

「ど…どーってことねーってばサクラちゃん！」

ナルトは強がるが確実にビビっている。

「……オレってばちつとしょんべん……」

ナルトは目の前の草に向かって立ち小便をしようとしたがその前にサクラが殴った。

「レディの前で何さらそうとしてんのよ！！草陰行きなさいよバカ

！！」

「テーーー！！」

殴られたナルトは素直に奥の方の草陰に入る。

少しした後

「あーすっげー出た……。すつきりー！！」

草陰から出てきたナルトは明らかに変な言葉遣いだった。

「だからレディの前でそーいう……」

サクラがまた殴ろうとしたらその前にサスケがナルトの顔に右手で殴り飛ばした。

「サ…サスケ君…いくらなんでもそこまでしなくなつて……」

サクラはサスケを諷めようとする。

「な…なんあだてば…！！」

ナルトが何か言う前にサスケがナルトにキックを入れる。

だが、ナルトはそれを避けるが、サスケは追撃の回し蹴りを放つ！ナルトはかるうじて避け、自分の真上にある木の枝に飛び移った。が、サスケに後ろを取られ、そのまま地面に突き落とされた。

「な…何するんだってばよ、いきなり！！」

ナルトが起き上がりサスケに聞く。が、

「本物のナルトはどこだ！」

サスケは目の前のナルトにそんな事を聞いた。

「え！？」

「きゅ…急に何わけわか…」

ナルトがしゃべろうとしたら流稀が遮る。

「偽物だよ。…この人」

「偽物…！？」

傍で見ていた流稀がサクラに言う。

「！何言ってたってばよ…！？」

ナルトが流稀に否定の言葉を放つが、

「フフ……顔の傷はどうしたの？」

流稀は眼でニヤケながらそう伝える。

「…！！」

その言葉でサクラとナルトがハツとする。

「…それに手裏剣のホルスターが左足についてる。あいつは右利きだ。てめーはナルトより変化がヘタだなニセ者ヤロー！」

サスケのその言葉にこれ以上は無理と悟ったのかナルトは変化を解き

「アンラッキー！バレちゃ仕方ねえ！！巻物持つてんのは誰だ！？」
ガスマスクを着けた雨隠れの忍が現れた。

その言葉にサクラも戦闘体制を取る。

「そうかい…だったら実力行使だ！！」

雨隠れの忍がこっちに突っ込んで来たらサスケはジャンプして火遁、鳳仙花の術で火の玉を数個吐いて攻撃するが全部避けられ、クナイでの戦闘になった。

サスケが敵を追撃するとそこには

「サスケー！！」

簀巻きにされたナルトが横たわっていた。

サスケはナルトにクナイを投げて渡す。

「ほらスキができたあ、ラッキー！！」

雨隠れの忍はナイフやクナイを数本投げる。

サスケは木に隠れてやり過ぎすが、そのクナイには起爆札が仕込まれていたので爆発した。

それを避けるためにサスケは態勢を崩しながら着地する。

「これぞラッキー！動くと殺す！巻物をおとなく渡せ！！」

サスケの背後に回りクナイで脅す。

しかしその時、やっと縄から脱出したナルトが雨隠れの忍に向かってクナイを投げた。

敵はそれを避けようとジャンプした。サスケはナルトが投げたクナイに片足で乗り、チャクラで吸着させてクナイを敵に向かって蹴り上げた。

敵はそれを何とか避けたが、その機動を読んでいたサスケによって
利き腕である左腕をクナイで刺された。

「サ、サスケ君…」

サスケのいきなり攻撃に戸惑うサクラ。…流稀はそれを見て呆れた
目をしていて。

「手荒いがこうするしかなかった…！ボケボケすんな！こいつ1人
とは限らない…」

「いいか！気をぬいたら本気で殺されるぞ…！」

今更な事を宣言するサスケ。いや、そんなこと言っている暇あった
ら止めを刺せばいいのに…

利き腕を潰された敵は形勢不利と見たらしく去っていった。

…その後、とりあえず全員で集まり作戦会議が始まった。

「いったん四人バラバラになった場合、たとえそれが仲間であつて
も信用するな。今みたいなことになりかねない」

「それじゃどうするの？」

「念のため合言葉を決めておく。いいか…合言葉が違った場合はど
んな姿形で敵とみなせ！

よく聞け、言うのは一度限りだ…忍歌『忍機』…と問う。その答え
はこうだ。

『大勢の敵の騒ぎは忍びよし、静かな方に隠れ家なし、忍には時を
知ることこそ大事なれ…敵のつかれと油断するとき』

「OK!」、「……。」、「判ったよ……ん（了）。」

サクラと流稀は覚えられたようだ。…ナルトはサッパリらしい。

「…またまたあ、そんなの覚えられるわけないじゃん」
ちよつと焦りながらナルトは言う。

「アンタバカね。私なんて即覚えよ」

「何？判んないの！？…ナルトヤバいじゃ〜ン（笑）！」
サクラと流稀が自信満々に言う。

「オイ…ホントこの合言葉で…」

ナルトが無理だと言おうとしたが

「巻物はオレが持つ！」

とサスケが打ち切る。…ヒデえな。

その瞬間、いきなり風が吹いてきて、すぐに突風が変わった。…明らかに敵の攻撃！！

「新手か！？」

……サスケは風が吹いてくる方向を見るが風が強すぎて全員吹っ飛ばされた。

第五話 第二次試験〜サバイバル突入〜（後書き）

ここで、大蛇丸とナルト達の対決は省きます…。

次回、大蛇丸 対 流稀の対決です。

流稀のバトルシーンが出ると思います。

第六話 第二次試験く顔のない男く（前書き）

ご都合主義満載！

…不満も結構あり、納得できない部分もありますが、読んでくれると幸いです

第六話 第二次試験く顔のない男く

第二次試験サバイバル：一日目：夕刻

…木立の合間を全力で疾走する人影があった。

（まずい…っ。早く見つけないと…ッ！）

強張った表情で死の森を駆けるのは、中忍第二試験官みたらしアンコ。

彼女は、先ほど見つけた三体の死体から犯人をすぐに推測したため、柄にもなく焦っていた。

三体の死体の内一人は、試験が始まる直前、アンコが投げたクナイを返してきた草忍。

（あの時、既に入れ替わっていた！？…死体から顔を奪う術…『消写顔の術』。それができるのは、間違いなくアイツ…ッ）

暗部の出勤を要請しておいたが、彼らが来るまでには己が時間を稼がなければ…そしてできることなら引導を渡してやる…忌まわしき過去に決別を。

（…それがあなたの部下だった…）

「私の役目よね…大蛇丸」

「無理よ」

…静かに紡いだアンコの言葉に、大木から返答が返ってくる。

木と同化していた人物が、するりと彼女の前に現れた。

アンコは木に同化した大蛇丸に袖から出した武器を投げつける。それに対し大蛇丸は下をのばしアンコを攻撃する。

「…ッグ!!」

アンコの立っていた場所は大蛇丸の攻撃で砂煙が発生する。…アンコはすかさず攻撃しようとするが、大蛇丸の舌が腕に絡まり振り回される。

「【潜影蛇手】!」

アンコは、目前の大蛇丸に向かって攻撃を仕掛ける。袖の下から無数の蛇が大蛇丸に襲い掛かる!

「逃がさないよ!!」

アンコはそう言うと言分の袖から出した蛇を引き、木から同化していた大蛇丸を引き剥がした。

…大蛇丸は木に叩きつけられ、アンコは自分の蛇をしまつと大蛇丸に向かって走る。

彼女はクナイを取り出し、己の手の甲と大蛇丸の手のひらを木に縫い付ける。

「へっ、捕まえた!…大蛇丸、アンタでも片手借りるわよ!!」
勝利を確信し笑みをみせるアンコは、大蛇丸の左手を取り何かの印を組む。

「！…この印は…」

「そう…あなたと私は此処で死ぬのよ…！」

大蛇丸はアンコの使用とする印に驚き、アンコは額から汗を流しながら大蛇丸に笑みを浮かべる。

「…『忍法、双蛇相殺の…』」

…アンコが目を瞑り、術を発動しようとした瞬間、

「フフツ…あなた、自殺するつもり？」

…後方から絶望とも云うべき声が響いてきた。

「……！？」

…アンコが驚愕しながら後ろを振り返ると、そこには格好の同じ大蛇丸が立っていた。

大蛇丸は焼き爛れた顔の皮膚を剥がし、自分の顔をさらけ出す。

「…変わり身よ」

…目前の大蛇丸がドロドロに溶けてなくなると、アンコは悔しさに顔をゆがませ、それを見た大蛇丸は口を歪めてせせら笑っている。

「…仮にもお前は里の特別上忍なんだからねえ…私の教えた禁術ばかり使っちゃダメじゃない」

大蛇丸はそう言いながら近づき、アンコは自分の手に刺したクナイを引き抜くと大蛇丸に投げつける…

「…だから無駄だって…ハア！」

大蛇丸は飛んできたクナイを指で挟んで止めると、片手で印を組み発動させる。

途端に、アンコの首筋を激しい痛みが襲い、立ったまま動く事さえできなくなってしまった。…その間にも大蛇丸は近づいてくる。

全く歯が立たない実力差。

「…今更…何しに来た…ッ！」

「久しぶりの再会だというのに、ずいぶんと冷たいのねえ」

「まさか…、火影様を…暗殺でもしに来たの…っ!？」

痛みに耐えながらも途切れ途切れに問うアンコを、見下しながら大蛇丸は笑った。

「いやいや…そのためにはまだ部下が足りなくてね…この里の優秀そうなのにツバつけとこうと思ってるねえ…」

…冗談めかしたその言葉には、部下集めの目的が感じられる。

アンコは大蛇丸の真の目的を聞き出そうとしたが、首筋に浮かび上がった痣の痛みに耐えられず、木の幹に座ってしまい爪を立てた。

「ぐっ…う…ッ！」

「…さつき、ソレと同じ呪印をプレゼントしてきたところなのよ」
欲しい子がいてね、とアンコの首筋の痣を嘗めるように見ながら大蛇丸は語る。

「くっ、勝手ね…相変わらず。…まず死ぬわよ、その子…」

「生き残るのは十に一つの確率だけど、お前と同じで死なないほうかもしれないしね…」

「えらく…気に入ってるのね…その子…」

「…嫉妬してるの?…ねえ、お前を使い捨てにした事をまだ根に持

っているんだ。」

息も絶え絶えに紡いだアンコの言葉を、大蛇丸は愉快そうに一笑しながら彼女の顔を撫でながら言う。

アンコは大蛇丸の言葉に殺気を込めて睨みつける。

「お前と違って優秀そうな子でねえ。…なんせ、『うちは』の能力を受け継ぐ少年なんだから…。」

…ニヤツと口を三日月のように曲げ、嬉しそうにそう言う。

「容姿も美しいし…私の世継ぎになれる器ね。…あの子が生き残っていれば、面白い事になる…！」

「…くれぐれもこの試験、中止させないで頂戴ね。」

そう言うのと、大蛇丸は立ち上がりアンコから離れる

「うちの里も、三人ほどお世話になっている…楽しませてもらうよ」

…大蛇丸はそう言うのと消え、この場に残ったのはアンコ一人だけとなった。

「もし、私の楽しみを奪うような事があつたら…木の葉里は終わりだと思いなさい」

最後に、大蛇丸の警告だけがこの場所に響いていた…。

…大蛇丸はその後、木から木に飛び移りながら中央の塔に向かっていった。

自分の部下であり大蛇丸の右腕でもあり、音の隠密スパイでもあるカブトから、呪印を与え、自分のお気に入りである『うちは サスケ』の情報を受け取るためだ。

…自分のお眼鏡に掛かった物が見つかり、他人が見れば全ての物が恐怖により氷つくほどの恐ろしい笑みを大蛇丸は浮かべながら上機嫌でこの森を掛けていた。

…油断ならない敵だ…

が、次の瞬間

「……！！！！？」

…その大蛇丸の殺意すら凌駕するほどの、濃厚で、まるで存在すら許されないような殺意が大蛇丸に襲って来た…。

大蛇丸はあまりの出来事にその場で動きを止め、臨戦態勢を取りながら自分に向けた殺意の方向…森の暗闇の奥を凝視し睨みつける…。

「…そこで隠れているあなた、…姿を現しなさい」

大蛇丸は自分に殺意を向けた相手の方向に警戒しながら呼び掛ける…が、相手は何の反応もしない…。

「…あなたに言っているのよ」

そう言う大蛇丸はクナイを取り出し、相手の居る森に向かってクナイを投げる。

しかし、何の反応も帰ってこない…

…しばらくして、大蛇丸は埒が明かないと思い、相手の方に近づこうと動こうとした

…が、直後、

《さすがにばれてしまいましたか。…まあ、ワザワザばれるようにしてあげたんですけど……》

…森の奥から、まるで大蛇丸をからかうような言い草で言葉が返ってきた…。

「何者…アナタ…？」

大蛇丸は相手の言葉使いが気に入らないのか、声の相手を殺すような眼で睨みつける…。

《何者…ですか、…忍びがそんな事応える訳ないだろ…？…まあ、そんな事は今どうでもいい…。

初めまして。よもやこんな場所で『木の葉の三忍』と謳われる『大蛇丸』殿にお会いできるとは、

至極光栄でございます…。》

相手は言葉使いは丁寧だが、尊敬もなにもこもっていない声で大蛇丸に言葉を返しながら近づいてくる。

大蛇丸は相手の言葉に嫌悪しながらも近づいてくる相手の姿に集中する…。

… 声と言うのはその人の特徴を表すための一つだ。だが、目の前の人物は何か術を使っていつのか男とも女とも、または子どもとも老人の声にもとれる。

さらに… 大蛇丸自身、相手の明確な殺意でやっと気付けたほどだ、相手は自分と同等か、もしくはそれ以上の存在と考えていいだろう…。

… もし、相手が自分に攻撃を仕掛けてきた場合、そのまま気付かなかった可能性がある。

… 最悪、相手に命を奪われていたかもしれない…。

… 油断できない相手だ…

大蛇丸は冷たい物が背中から伝わるような感覚を感じながら、目の前の敵が姿を現す所を凝視する。

真っ暗な森の奥から姿を出し、… 月明かりに照らされ、その人物の全貌を映した…。

…大蛇丸がその人物の姿を見た時、その人物に初めに感じた事……
……それは、『虚無』だ。

…相手は黒いニツカポツカを着け、それをロングブーツの中に入れており、上は黒い厚手のロングコートを着ていた。コートの前のチャックはしっかり止めており、手には両方黒い手袋を着用している。
…全体から言うと黒一色である。…相手の容姿だが、身長は百五十センチ前後と言ったところであり、歳はまだ十代と言ったところである。だが、身体の形からして男性だと見て取れる…。

…そして、大蛇丸は肝心の相手の顔を見た…が、大蛇丸は相手の顔を見れなかった…。

いや、見れないという言葉は適切ではない……相手の顔は視る事が出来ないのだ。

なぜなら、相手の顔があるであろう場所にはなにも存在していない。
…『視えない』のだ。

彼の姿は、下半身は実態しているのだが、そこから上に上がるにつれ上半身が透けてきており、遂には肩から上の方は何も存在しておらず、後ろにある森を映し出していたのだ…。

その姿はまるで、この世に未練を残した幽霊のように…目を離したらそれこそ景色に溶け、そのまま消えてしまいそうな雰囲気を感じている…。

『どこにでも居てどこにでも居ない』。…そんな言葉が相応しい人物であった。

「へえ…あなた、随分と面白い忍術を持っているのね……」

《まあ、…あなたにここで素顔を晒してしまったら、何かとメンドウになってしまいますのでね…》

大蛇丸は相手の忍術に興味を持ちながら話しかけ、相手もそんな言葉を手軽に受け流す。

「…それで？私に何かご用でもあるのかしら…？」

大蛇丸は相手を警戒しながら質問する。

《ええ…ちょっと、この広い森の中で、こんなに早く会えるとは思いませんでしたが……まあ、せつかくあなたに出会えたので…》

《……殺しておこうと思いましたが…》

相手は感情のこもっていない調子で大蛇丸に言葉を放つ。

相手が言った瞬間、大蛇丸と顔のない男の空気がガラリと変わる……
周りにいた生き物たちはその場所から逃げるように遠ざかり、傍にある森の木々もギシギシときしむ音が聞こえた…。

「……私に勝てるかしらボウヤ？」

大蛇丸は目の前の敵に殺気を叩きつけられるが、相手は気にした様子はない…。

顔のない男は右手の袖からクナイを抜きだすと大蛇丸に向けて突進してきた。

…自分の殺気をもとめせずに攻撃してきた相手に驚いている大蛇丸。

だが、スピードはそこまで速くはなく、自分の身体にクナイを突きだす相手の攻撃を余裕を持って避け、相手から離れ攻撃しようとする。

だが、大蛇丸が相手の攻撃を避けた瞬間、背中から殴られたのか衝撃を食らった。

「…っ!？」

攻撃を食らった大蛇丸は相手の攻撃で吹き飛ばされるがすぐに態勢を立て直し、すぐに自分を攻撃した相手を見る。

…が、すでにそこには相手は消えていた。

（誰もいない！？……！！）

突然の背中への攻撃に大蛇丸は不思議がるが、自分の見ていた方向に男が消えている事に気付く。

…と、自分の横から殺気を感じ、見ると自分の目を狙ってクナイを振う相手が目に入る。

（なっ！？）

大蛇丸はいつの間にか自分の傍まで近づいていた相手の速さに驚きながらも、かろうじて避ける事が出来、そのまま相手から距離を取り、印を組む。

『風遁・大突破！！』

大蛇丸は口から息を吐き、チャクラで増幅した風を相手に叩きつける。

男は5mほど飛ばされるが、その場で踏みとどまり、風がなくなるのをジッと待っている。

…風の攻撃が弱まると、男は立ち上がりながらクナイを構える。

「この私に攻撃を与えるなんて…なかなかやるじゃない…」

大蛇丸は相手を見ながら面白そうに言うが、相手は何の反応を返さない。

「あなたの事甘くみてたようね……今度はこっちから行くわよ！」
そう言うと、大蛇丸は自分の手の親指を歯で噛み切り、自分の腕にある刺青に親指を押し付けた。

『忍法・口寄せ!』

術を発動させると、男の目の前に巨大な蛇が出現する。

蛇は男に狙いを付けると、相手に向かい口を開けながら攻撃してくる。

「さあ、貴方はどうやって攻撃を防ぐのかしら…」

大蛇丸は大蛇の後ろから相手の出方を見るため観察する。

……顔のない男は向かってくる巨大な蛇を見ると、大蛇に向かって片手を横に振るった。すると、

ブククツ…バアアーーーーーン!!!!!!

次の瞬間、蛇の頭は膨れ上がり、血や肉を周りに撒き散らしながら爆発した。

「なッ!!!?」

その光景を見ていた大蛇丸はあまりの出来事に驚き、僅かに動きを止める。

蛇が爆発した瞬間、顔のない男はいつの間にか動きを止めた大蛇丸の前に出現し、大蛇丸にクナイできりつける。

しかし、大蛇丸は口から『草薙の剣』を取り出し、相手の攻撃をなんとか防ぐ。

：そのままダメージを与えようとしたが両者とも防いだり避けたりし、そのまま数分間、

お互いダメージを与えられないまま斬り合い続けた……

そしてついに、男の右拳が大蛇丸の身体に叩き込まれた……

「チツ……!!」

大蛇丸は突然の攻撃を受けたが、威力はそれほどもなく、まだ余裕で戦う事ができるダメージであり、

そのまま無視して相手に斬りつけようと『草薙の剣』を持ちあげる。

しかし次の瞬間

⌈
⋮
!
!
?
⌋

叩き込まれた相手の拳の部分から自分の細胞が震えだし、それどころか周りの森や地面、相手の拳から前方の空間全てがビリビリと震動し始める…。

自分の今居る空間、全てが震えだした瞬間、

バアオオオオオオオオオン！！！！！！！！

まるで、世界を引き裂くほどの轟音を轟かせるほどの衝撃が大蛇丸を襲い、
そのまま大蛇丸は森の木を薙ぎ倒しながら前方に吹き飛ばされていた…。

…最後にその場に残った顔のない男と頭がなくなった大蛇、…男が拳を叩き込んだ所は、前方の地面は地割れを起こして一部陥没し、周りの木々は前方を中心に攻撃の余波でたたき折れているか曲がっており、その場所だけ災害が通り過ぎたかのような姿になっていた…。

「…ガッ……ガハア！」
…あれから大蛇丸は男の攻撃を受け、森の木々をなぎ倒しながら、元居た場所からは数百mまで吹き飛ばされていた。

大蛇丸はさっきの予想外の破壊力を持つ攻撃を食らい、ダメージもまだ残って回復せず、身体も激痛によりうまく動かせず口から血を吐きながら地面に手を付いていた。

「な…んなの、…あの攻撃…は…！？」

そう言いながら大蛇丸は何とか立ち上がり、この場から立ち去ろうとする。…今のこの状態からでは攻撃をするどころか防御すらままならない状態。…もしこの瞬間、あの敵が自分を攻撃してきた場合、なすすべなく確実に殺される！

…そう思いながら必死に立ち上がり、一刻も早くこの場所から立ち去ろうとする。…だが、

《どうやら、『木の葉の三忍』と言えど…この程度だったようだな…》

…そんな冷酷に、そしてそれ以上に何の感情も感じ取ることのできない声が大蛇丸の目の前から発せられる。

慌てて大蛇丸が顔を上げ目の前を見ると、目の前には手にクナイを持ち、顔は見えないが明らかに大蛇丸を見下している顔のない男が立っていた。

《…こんなのが最強の分類に入ると言うのだから……他の奴らもたかが知れているな…》

…顔のない男は、明らかに落胆した声で言うと、やっと立っている大蛇丸を見続けている…。

「！…ツク！『万蛇羅ノ陣』！」
そんな見下した態度に激怒した大蛇丸は、もはや少なくなったチャクラを使い、口から大量の蛇を口寄せさせると、そのまま顔のない男に攻撃を仕掛けた！！

だが、男は大した興味もなく自分に襲ってきた蛇を見ると、今度は両手で目に見えないほど素早く印を組んだ。

『火遁・大火葬の術』
だい かそう

…顔のない男が印を組み終わった瞬間、その場に存在した蛇から炎が吹きあげ、瞬く間に全ての蛇が業火に呑み込まれた。

…そして、十秒足らずで火が消えると、そこには大量の蛇の燃えカスが地面に落ちていた。

「ばっ…馬鹿な…！」

…もはや今の技でほとんどのチャクラは使い果たし、その場に座り込んでしまう大蛇丸。

（…死ぬ…私が…？…こんなところで…？）

愕然とした表情を張り付かせる大蛇丸に、もはや攻撃や防御をする手立てはない。まだダメージが抜けきらず、小刻みに笑っている膝では、撤退も叶わない。

もう此処で終わりなのかと考えた瞬間、

《……おまえ、見逃してやる……》

…そんな満身創痍の大蛇丸に、顔のない男は感情を出さず言う。

「なんですって………！？」

大蛇丸は目の前にいる敵に対し、信じられない気持で相手に聞き返す。

その疑問に対し男は何のくん上も見せず、ただ、淡々と言葉を放つ…。

《…貴様ごときの小さく、脆弱すぎる暴力など、俺にとっては何の脅威でもない。

俺が手を出さずとも、自然にお前は他の誰かにやられて死ぬだろうからな……。それまで、せいぜい地面の上で足？き続ける……ハッキリ言つて、おまえが弱すぎて興味を失ったのだ……。

……所詮、地上で這う蛇では空を飛ぶ鷹には勝てなかったか様だな……》

…最後に大蛇丸を見下したように言い放つと男の身体は薄くなっていき、文字道理この場から消えてなくなってしまった。

稀」がこの場所に立っていた。

「……あそこまで挑発したのだ……これで奴はさらに力を欲するだろう……」

流稀はそう言うと、自分の計画道理に行っている今の状況に満足した。

「『木の葉崩し』……うまく立ち回らなければ………」
そう呟き、流稀はその場から消え失せていった……

第六話 第二次試験〜顔のない男〜（後書き）

…この場合、流稀が強すぎ？それとも、この小説の大蛇丸が弱すぎ？

第七話 奇襲（前書き）

今回は原作と同じであり面白くありません。
（こんかい、流稀は登場しません）

第七話 奇襲

第二次試験サバイバル：二日目：早朝

大きな木の根元にあるスキマ…そこにサクラ達七班は休んでいた。原作通り、大蛇丸はサスケに呪印を与えたいらしい。

…サスケは呪印のせいでうなされており、ナルトは封印術を付けられ気絶している。
その二人をサクラが大木の根で出来た空間に隠れながら看護していた。

（だんだん呼吸は整ってきたけど…でも、まだ凄い熱…）
サクラはタオルに水を染み込ませ、サスケの額に乗せる。

（ナルトはもつと酷い…呼吸が弱くなってる…）
眼を閉じ、ナルトも苦しそうに眠っていた。

（流稀も…あれからどこに行っちゃったのか判らないし…大丈夫かしら…）

大蛇丸の風遁で吹き飛ばされた流稀の事も、サクラは心の中で無事を案じていた。

（流稀がいない今、私が…私が二人を守らなきゃ…！！）
そう思うと、サクラの眼に強い意志が宿る。

……数時間後、

大蛇丸との戦闘のせいでかなり疲労しているためか、サクラは座

りながらたまに眠りそうになっている。だが、警戒して気を張っているために心身共に磨りながら起きていた。

…だが、さすがに限界なのか、眠気が頂点に達し倒れこもうとする。

「フフ…寝ずの見張りかい？」

「…！」

サクラは背後から聞こえてきた声に振り返る。

…そこには、木の葉の教室でカブトを襲った『音隠れの里』の三人組が隠す隙もない敵意をサクラに飛ばしそこに姿を現した。

(こ…こいつら…!!?)

「…あの珍妙なお仲間はいないようだね…サスケ君を起こしてくれよ。僕たちそいつと戦いたいんでね。」

猫背で立っている顔に包帯を巻いた男…ドスがサクラに喋りかける。

「(…珍妙なお仲間？…流稀の事ね…)な…何言ってるのよ！一体、何が目的なの！？…大蛇丸つてのが影で糸を引いているのは知っているわ…！」

「…「…!!?」…」

「サスケ君の首にある変な痣は何なのよ！？…サスケ君にこんな事をしといて、何が戦いたいよ…！」

「…さうてね、何をお考えなのかな…あのお方は…？」

「しかし、それを聞いちゃあ黙っておけねーなあ。…仮面野郎も殺るつもりだったが、この女も俺が殺る。サスケとやらも俺が殺る」

死と言う文字の入った少年…ザクがそう言つと、座っていた石の上から立ち上がり、

サクラを睨みつける。

「さて、ザク！」

「ああん？…何だよ？」

ザクを止めるとドスは前に進み、しゃがみこんで地面の布を剥がした。

「ベタだなあ…ひっくり返されたばかりの土の色。この草、こんな所には生えないでしょ…トラップってのはさあ…ばれないように作らなきゃ意味ないのに」

（……！）

包帯男に自分の仕掛けた罠が見破られ、汗を垂らしながら動揺するサクラ。

「チエツ！下らねえ…あのクナイはリスがトラップに掛からないためにするためだったのか」

ザクが顔を横に向きながら悪態をつく。

「……すぐ殺そう」

包帯が言々と音忍三人はサクラ達の方に跳躍する…。

…それに対しサクラは音忍たちを見て薄ら笑うと、自分のそばに合ったワイヤーをクナイで切断する。

すると、木の上から巨大な丸太が音忍たちに襲いかかる。

「丸太！？」

「上にもトラップが！？…やばい！！」

突然のトラップに驚く音忍たち…しかし

「…なーんてね」

包帯男が右手を丸太に添え、左手で印を結ぶと丸太は破壊され、無傷でサクラの方に向かう。

「……！？」

容易く破られた事にサクラが驚愕する。

「はつきり言つて才能ないよ君は…。そういう奴はもつと努力しないとダメでしょ？ 弱い君がボクらをナメちゃいけないなあ！！」
音忍達は勝ち誇りながらサクラ達に攻撃を仕掛ける。

…サクラは目に涙を浮かべ、諦めかけたその時

「木の葉旋風！！」

突然、サクラと音忍たちの間に割り込み、空中で回転しながら音忍たちに蹴りを入れる。

「！！！！」

蹴りを食らった音忍たちは後ろに下がり態勢を立て直すと、自分達の邪魔をした相手を睨みつける。

「きゃあ！！」

サクラもいきなり現れた相手に目を見開いて驚いた。

…驚きながらも出て来た相手をサクラは見ると…

「だったら君達も…努力するべきですね！」

「な…何者です！？」

カッコつけながら現れたのは、緑のタイツを着用し、両腕には包帯を巻き、腰に木の葉の額当てを巻き付け、オカッパに極太の眉毛…ハッキリ言つて服装のセンスは最悪としかいえない……というか、もはや変態以外の何物でもない姿をした人物の名は…

「木ノ葉の美しき碧い野獣…ロック・リーだ！」

木の葉の下忍の中で接近戦では最強を誇る下忍、ロック・リーが音忍の方に向け立っていた。

「な…何であんたがここに…」

「ボクは…アナタがピンチの時はいつでも現れますよ」

サクラの質問にリーは、若干ストーカーの様な発言をする。

それに対しサクラは「はあ？」みたいな顔をする。

「…でも、今はあなたにとっても私は敵よ？」

「前に一度言っただしょ？」

「……え？」

「死ぬまでアナタを守るって…」

「あ、……ありがとう」

サクラは廊下でリーの言った事を思い出し少し頬を赤らめお礼を言う…なんかドラマの様な展開だ。

…そんなサクラの言葉に感動したのか、その場で涙を流しながらガッツポーズをしているリー。

「……しかたないなあ。ザク、サスケ君は君にあげるよ。…こいつらは僕が殺す！」

ザクは袖の下から地の書を取り出すと、後ろにいたザクに投げ渡すと、穴のあいた籠手の様なものを構えながらリーに突撃する。

…それに対し、相手の攻撃法を試験で見ていたリーは警戒し、自分の立っていた地面に手を突き刺すと、そこから大木の根を掴み、引きずり出して相手の攻撃を防御する。

ザクの籠手に当たった根は大きく抉れ、一部が粉々に吹き飛んでしまった。

「キミの攻撃には、何かネタがあるんだろう？…馬鹿正直にはよけ

ないよ！」

（…とは言え、1対3は分が悪い…賭けに出るしかないな、一人ずつ…全力で潰す…!）

リーは今まで自分の担当上忍、マイト・ガイから教わった事を思い出し、両手に巻かれた包帯を解く。

（ガイ先生…では、心置きなくあの技をやります…何故なら今が、その…）

…そして音忍が攻めてきた時に何か印を結んだ瞬間、爆発的に速くなった。

（消えた!?）

ドスはあまりの事に驚愕の表情を浮かべ、その場で動きを止めてしまった。

…そこからリーは立ち止まったドスの顎を蹴り上げ、浮き上がった相手の背後に回り込むと包帯で全身を拘束した。両手まで完璧に封じられているため、印を結ぶことはもちろん受け身も取れない状態。

そして後ろからリー自身で拘束し、完全に動けなくして更に回転をかけながら締め上げる。…あの回転と落下速度で頭から地面に突撃したら間違いなく死ぬだろう。

「あれじゃ受け身もとれねえ!!ヤ…ヤバイ!!」

仲間のザクが印を結んで地面に手を突き刺す。

「喰らえ————!!『表蓮華』!!!!」

リーは叫びながら敵を地面にたたき落とす。

キリモミ回転しながらの高速落下は、凄まじい風圧を生み辺りに砂

塵を撒き散らす。

そして、そのままドスの頭を下にして地面へと叩き付ける。
ドスの上半身は地面に思いつきりメリ込んでいた。

（…感触は？）

「！やったあ！」

サクラは相手を一人倒して喜んでいるが…威力の割には衝撃音が小さすぎる。

「…へ！…やれやれ。どうにか間に合ったぜ…」

ザクの地面には土が盛り上がった道が出来ており、ドスの落ちた所に盛り上がった山が出来ていた。

…少ししてドスはどこぞの犬神家のように地面に突き刺さっていたが、技を食らったにも関わらず自力で這い出て来た。

「フー…。恐ろしい技ですね…。ザクが土をスポンジにしてくれなかったら即死でしたね」

顔を横に振りながらリーの技の恐ろしさを体感する。

「バ…バカな！！」

完璧に仕留めたと思っていたリーは、対してダメージを喰らっていないドスを見て驚愕する。

「次はボクの番だ…」

ドスが袖の下から籠手を出す。

（くっ…ヤバイ…今ので、身体がまだ…）

『禁術』レベルの技を発動した後遺症で、身体が効かない。

それでも、ドスはお構い無しに仕掛け、右腕を横薙ぎに一閃。
リーに攻撃をするがリーはギリギリで避ける。

しかし避けた筈のリーは脳に鋭い衝撃が走りグラつくとその場でし
やがみ込む。

左耳から血が流れ出る。…どうやら鼓膜が破れたようだ。

「君の技が高速なら　ボク達の技は音速だ…努力だけじゃどうにも
ならない。壁と言うモノを教えて上げるよ…ゲジマユさん……」
「くっ！」

リーの視界に映るドスの姿は、まるで蜃気楼のように揺らいでいる。
次いで襲い掛かってきたのは嘔吐感。

地面に両手を突き、胃の中にあるモノ全てを吐き出してしまった。

「リーさんっ！！」

サクラの悲鳴が響き渡る。

「ちよつとした仕掛けがあつてね…避けてもダメなんだよ、ボクの
攻撃はね…」

左耳を両手押さえながらリーはドスを睨む。

「アンタ、一体何を……！？」

「フフ…音だよ。拳は避けても、音が君を攻撃したのさ…」

（音！？）

「…音つてのはそもそも何なのか…知ってますか？」

突然、サクラ達に投げ掛けられた問題。

「…振動！？」

「御名答…音が聞こえると言う事はつまり…空気が揺れているのを
耳の鼓膜がキャッチすると言う事…」

ドスは自分の耳を引っ張る。

「そして、人間の鼓膜は 百五十ホンを越える音で破れる……。また、更に奥深くにある三半規管に衝撃を与える事で…平行感覚…バランスを失う。

フフ…君は当分、満足に身体を動かす事もできないよ」

「オレたちに古くせー体術なんて通じねーんだよ…」

馬鹿にしたような笑いをリー達に掛けるザク。

体術を侮辱する言葉に、リーは鋭い視線を向ける。

「まあ、途中までは良かったが…オレの術まで疲労したんだ、そう上手くはいかねーよ」

そういうと、ザクは地面から手を引き抜き、胸の前で十文字に構えた。

「オレは超音波と空気圧を自由に操り…岩ですら破壊する力を持つ。土に空気を送り込んでクッションに変える事も思いのままだ。……お前の下らねー技とは違うんだよ！」

ザクの両の掌には小さな穴が空き、『シュー』と静かな音を立てている。

…殺意の込められた眼差しで睨み付けるザクに、サクラは恐怖を覚えた。

（ちくしょう…）

既に満身創痕になっているリーは動けない。

「よーし…次は君だ！」

ドスはリーの後方にいるサクラに標的を変える。

「（来るッ！？）くそッ…！！」

サクラはクナイを構えるが、満身創痍にも関わらずリーがドスに向かって攻撃を仕掛けた。

（何：バカな！！）

通常なら立つ事すら不可能な筈：ドスは驚愕の表情を見せる。

『木ノ葉旋風！！』

リーは高速な回し蹴りを繰り出す

「くっ！！」

…が、自らの攻撃の衝撃で左耳に激痛が走った。

「やはり、さっきの攻撃…効いてるみたいだね…」

ドスはリーの回し蹴りを軽く片手で防ぐ。

「少々驚かされましたが…あの閃光のような連続体術が面影もないじゃないですか！？」

手甲を装着された右腕を、リーの頭部に殴り付ける。

「くっ！」

身体に鞭打ちながら、左腕でドスの攻撃をガード…それを見たドスは口元を歪ませる。

特殊な籠手がリーの腕と接触した瞬間……

「この腕は内部で発した小さな音を、極限にまで増幅する…言わば、スピーカーなんだよ！！」

籠手に空けられた無数の穴から衝撃音が飛び出す。

「しかも衝撃音は腕の方向に捕らわれず…ボクのチャクラにより狙った獲物に必ず収束される！！」

「うわあああああ！！」

先程と同じ場所を攻撃され、リーの三半規管は完全に破壊される。

「さあーて…じゃあ仕上げだ…」

「ぐオオあ!!」

内部から響く激痛に、リーはのた打ち回った。

全身を痙攣させて、戦闘不能に陥っている。

「させないわ!!」

ドスの右腕が振り下ろされる寸前、サクラは持てるだけのクナイを投げ付けた。

「あー…もう…」

籠手を顔の前に持っていていき、全てのクナイを弾く。

（私だって…！私だってエー！）

サクラは心の中で自分に言い聞かせながら、今度は手裏剣を取り出しドスに向かって放つ。

「全く…もう…」

ウンザリとした様子で籠手を盾代わりにしてガードする。

だが、その眼前にザクが割り込んだ。

「ハッ!!」

ザクは印を結んで前方に両手を突き出す。

すると掌の穴から凄まじい風圧が吹き荒れ、手裏剣を押し返す。

「キャ…!!（空気圧…手裏剣が跳ね返された!?）」

自らの放った手裏剣が跳ね返され、サクラ自身を傷付ける。

その痛みに気を取られている間、彼女の後頭部に違う痛みが走った。

「私より良い艶してんじゃない…コレ」

音忍3人衆の黒髪の少女、キンがサクラの桃色の髪を驚んでいた。

「フン…忍のくせに色気付きやがって…髪に気を使うヒマがあったら修行しろこのメスブタが…」

…キンが嫉妬からか更にサクラの髪を強く掴む。

「ザク…この男好きの目の前でそのサスケとかいう奴を殺しなよ。こいつにはちよつとした…余興を見てやろーよ」

「…!」「お!いいねー!」「オイオイ…」

残酷な提案を出したキンに対し、ザクは面白そうに賛同し、ドスはそれを嗜める。

(そ…そんな事、やらせる理由には…!!)「動くな!」

サクラの手がホルスターに伸びた瞬間、音忍達の叱咤が飛ぶ。

(サ…サクラさん…)

もはや、手足どころか指一本すら動かす事が叶わなくなったリー。

(身体が…動かない…私…また…足手纏いにしかなくてないじゃない…!…何時だって守られてるだけ…悔しい…今度こそは…っ
て思ってた。…今度こそは、大切な人達を私が守らなきゃ…)

「じゃあ、やるか」

ザクが嫌らしい笑みを浮かべ、サスケの元へ歩みを進めていく。

そうしている内にサクラが何か決めたような目をしてクナイを取り出す。

「ムダよ！私にそんなものは効かない」
キンが嘲るが。

「何を言ってるの？」

…笑みを浮かべながらサクラは言つと左手を右手に添え、自らの髪に向かつてクナイを滑らす。

「何！！？」

「！！！」

…そして、サクラの艶やかな桃色の髪がバツサリと切られ、宙を舞う。

（私は、いつも…一人前の忍者のつもりでいて…サスケ君の事、いつも好きだって言つた…）

ナルトに、いつもえらそーに説教しといて…私はただ、いつも二人の後姿を見てただけ…。

それなのに…二人はいつも私を庇って戦ってくれた…。

流稀も、いつもはふざけているけど…いざとなったら私たちよりも前に立って戦ってくれていた…。

リーさん、アナタは私の事好きだって言つて…。私を背に命懸けで戦ってくれた…アナタに教えて貰った気がするの…。

…私もアナタ達みたいになりたい…みんな、今度は私の後ろ姿を…しっかり見てて下さい！！）

「チー！キン！殺れ！！」

ザクが驚いて動きを止めているキンに言う。

その言葉を合図に、キンは片手に四本の千本を構えた。

…そして、背を向けているサクラに全体重を掛けて突き刺す。
その一瞬の間、サクラは印を結ぶ。

（フン…あの印…）

キンがサクラに千本を突き刺した瞬間、丸太に変わった。

「！！（『変わり身の術』…！！）」

「（右か…なめてんのか…そんな基礎中の基礎忍術で…オレに向かって来るなんてな！）キン！離れろ！！」

両手にクナイを持ったサクラと直線状に並んだキンは、ザクの言葉通りに離れた。

サクラはキンを避けるとザクに向かって駆け、その加速力を利用してクナイを八本程投擲する。

「無駄だ！（空気圧壱百% 超音波零%出力！！）」

再び両の掌をサクラに向けた。

サクラは急いで先程と同様の印を結び始める。

「バカの1つ覚えか……………」

『斬空波！！』

ザクの放った空気圧が、サクラのクナイを跳ね返す。

跳ね返されたクナイがサクラの身体を切り刻む…が、空気に弾かれ逆にサクラを襲うがまたもやその前に変わり身をやって防ぐ。

「バレバレ…上だ！」

上に避けたサクラをザクは簡単に見抜く。サクラはまた変わり身の印を結ぶ。

「2度も3度も…通用しねーって言ってんだろーが！！てめーはこれで十分だ！！」

今度はザクは空気圧ではなく、ポーチからクナイを取り出し投げつける。

それが全てサクラに刺さる。ザクはまた変わり身だと思い本体をまた探す。

「ん？…何だと！？」

上空から降り注ぐ水に気を取られ、再び見上げるザク。

そこには血塗れになりながらも、クナイを振り下ろすサクラ。

（今度は 変わり身じゃないだー！！）

そんな驚く暇もなく、サクラのクナイがザクの右腕に押し込められ突き刺さる。

「くっ！！」

残った方の左腕の掌をサクラの顔面に押し付けた。チャクラを収束させ、『斬空波』を放とうとする。

（やらせない！！）

サクラは残った左の手首に噛み付く。

「離せ、コラ！！」

…その姿からまるでスッポン鼈のように噛み付き、離れようとしなないサクラ

を何度も殴打する。

…サクラは顔面を血塗れにしながらも戦意は失っていない…寧ろ、その意志は徐々に強くなって行く。

ザクはサクラを殴り飛ばし、両手が自由になると印を結ぶ。

「このガキイ!!」

サクラに『斬空波』を放とうとした瞬間…、
茂みから飛び出した三つの人影、山中いの・奈良シカマル・秋道千
ヨウジら十班がザクの眼前に立ちはだかる。

第七話 奇襲（後書き）

これからも読んでくれると嬉しいです。

第八話 空気嫁?!!(前書き)

お気に入り件数200件突破!! みなさん、ありがとうございます!!
す!!

…結構、滅茶苦茶になってしまいました。

気分が悪くなったらもう読まなくてもいいかな?と、言っ感じ
になってしまいました。

第八話 空気嫁?!!

日向ネジ サイド

「遅いわねッ！リーったら…」

俺達の指定した時刻から約三十分はとくの昔に過ぎている。
それなのに、リーは姿を現す気配すらない。

「おかしい…アイツ、時間だけは正確な筈…敵に出くわしたのかな
…」

同じ班のテンテンの表情に不安が彩られる。

「まさか…」

「…まあ、それは無いだろ」

俺達はリーの實力をある程度知っている、…あいつは俺ほどではないが下人の中でも強い部類に入る奴だ。俺はテンテンの考えを即座に否定する。

「取り敢えず、リーを捜すぞ」

そう言い、俺達二人はそれぞれの方角へ散った。

…テンテンと別れた後、俺は森の中で印を組み『白眼』を発動させるため眼にチャクラを練っている。

『白眼』…木の葉の里では、うちは一族と双壁となす名門・『日向一族』に伝わる『血断限界』、それが『白眼』だ。この『白眼』の力を使う時、術者は眼前の遮断物を透視し、遙か先の事物をも捕えられる。

…だが、それ以上にこの眼は驚くべき能力を有している。…それは、体内のチャクラが流れる同筋『経絡系』や、チャクラの体外に放出するための穴『チャクラ穴』をも、見極められる事だ。

…この能力のおかげで日向は最も優秀な『血断限界』を持つ一族と賞賛されてているが……

それ故に、悲劇の歴史を重ねてきた……………俺の父上も……………

…いや、今はそんな事はどうでもいい…、さっさとリーを見つけて合流しなければ……

『…白眼！…！』

ピキキ…と、目の周りに血管を浮き上がらせ白眼を見開く。…百m先を見通し、体内のチャクラでさえも見切る眼をもってこの周辺を凝視した…

「！なんだ、これは……………！？」

…が、次の瞬間、白眼で見た景色を見て、俺は不覚にも声を出して驚いてしまった。

『白眼』で見た周辺には、特に生物らしい物は映ってはいなかった。
…俺に見えているのは、とても細く、そして途轍もなく長い『線』
があった。『線』の太さは1mmもなく、色は光に反射し、かろう
じてだが青色に光って見える。…普通に白眼で見なかった時は何も
視えない所を考えると、どうやらこれはチャクラで出来ているよう
だ…。

…俺が驚いて声を出したのはたのは、周りを見ただけでも『線』
の量がとてつもなく多く、…まるで森を囲っているように見えたら
だ。

この『線』は空気の流れに乗っているらしく、まるでクモの糸の
ように森の中を漂っている…。

…触ってみようと手で掴んでみたが、何故かすり抜け触れない。ど
うやら実害はないようだ…。
しかし…、本当に何だこれは？…これがチャクラだとすると敵の何
らかの忍術だと思われるが…

そんな事を考えていると突然、漂っていた『線』に変化が訪れた。

最初、何も逆らわず漂っていた『線』が、まるで生き物のように一
斉に同じ方向に動き出したのだ。

いきなり動き出した事には驚いたが、この『線』達はどこかを目指
すように動いている事がわかる。

…俺は自分の好奇心に負け、木の上を渡りながら『線』と同じ方向

に付いて行ってみる。

…少し時が経ち、あれから『白眼』を発動させながら『線』の後を追って言ったが、…なかなか速い！

まるで巻き戻されるかの様にスルスルと森の中を進んでいく。…と言う事は、あの『線』を出している忍者に接触する可能性があるな。……さすがに危険だな。

あの術がどんなものかは分からないが、あれだけの長さと量の『線』のチャクラは相当必要な筈…

少なくとも中忍以上のチャクラ量を持っているだろう。それに、あの『線』は普通では見えないどころか触れる事さえできない。…もし、あれで攻撃が出来るのならまず避けるどころか目視する事すらかなわないだろう。…どんな奴が使っているのか気になる所だが、…此処は諦めるしかないだろう。

そう考えていると、もうすでに周りには『糸』はなく、『白眼』を使って周りを見ても発見することはできなかった。

諦めてリーを探しに行こうとすると、突然、森の中から何かの破壊音が聞こえた。

音のした方角に身体を向けると、目にチャクラを込め『白眼』を使う。

…そこには音隠れの忍びと……あの憎つくき『水鏡流稀』の居る、木の葉の下忍チームが映った…

『斬空波!!』

…腕にある風穴から放たれた衝撃波が、キンとその中に入りたいのごと吹き飛ばす。

「ガハッ!!」

凄まじい空気圧を喰らい、キンの身体が木に叩き付けられた。

「な…何て奴等なの…仲間の身体如…傷付ける…なんて…」

「フン…油断したな…」

木に激突したダメージが、いの身体にも影響を与え、口元からは真っ赤な鮮血が一筋流れ出る…。

「我々の目的は下らぬ巻物でもなければ…ルール通り、無事にこの試験を突破する事でもない…」

（だったらコイツら何しに来た…!?!）

（ヤバイ!喰われるって…!?!）

（巻物じゃ…ない？）

（コイツら…何が狙いの…!?）

上から順にシカマル・チョウジ・サクラ・いの。
それぞれの思いを別に、ドスは静かに口を開く。

「ボク達の狙いは…サスケ君だよ！」

（チィ…そろそろオレの術が解けちまう…）

時間が経つにつれて、シカマルの影が元の形に戻って行った。

「ほう…この術、5分が限界つてところですか……。それと…その子の体術は脅威でしたが、その様子じゃ動けそうもないですねェ…」
ドスは右腕を横に突き出し、袖を捲り上げる。
その下から出て来た籠手が不気味に光る。

「フン…気に入らないな。田舎者の『音忍』風情が……。そんな二線級をイジメて勝利者気取りか…」
森の中を響き渡る男の声。

「なに!？」

ドスが見上げた木の枝には白目君事…日向ネジ、…そしてお団子さん事…テンテンの姿が見えた。

「ワラワラとゴキブリみたいに出て来やがって……」
地面にツバを吐き、鬱陶しそうに呟いたザク。

ネジが視線を向けた先には意識を失っているリー…。

「へましたな」

「リー」

冷たい言い方だが、彼なりの心配の言葉なのだろう。

（あれはリーさんのチームの…）

「そこに倒れているオカッパ君はオレ達のチームなんだが…好き勝手やってくれたな…！」

日向一族特有の白い瞳の周りに無数の血管が浮き出る。

（なんだ…こいつの全てを見透かすような眼は…）

木ノ葉一の名門『日向家』の『白眼』を目の当たりにしたそれぞれが、驚愕の表情を彩った。

「……ん？……おい、そのピンク髪の女…」

ネジはサクラに向かって喋りかける。

「え？…あ、私…？」

「お前らのチームメイトの『水鏡流稀』がいないが……何処にいる？」

「……あゝ、…実は、こんな状況になるまで色々あって、…今は流稀が何処にいるか判らないんです…」

ネジの質問に申し訳なさそうに言うサクラ。

「なっ！？……クソッ！…！」

サクラの言葉に本気でイラつくネジ。……まあ、気持ちわかる…。

「おいコラッ！無視してんじゃねえぞ…！」

蚊帳の外に出され、ネジに怒鳴りつけるザク。

「…黙れ、雑魚」
「…ときが今の俺に喋りかけるな…！」

「…なんだと、テメエ!!」

「悪いが、今の俺は虫の居所が悪い。…これ以上やるようなら…全力で行く…ん!?」

（このチャクラは…!!）

「フフ…気に入らないのなら…格好つけてないで、此処に降りて来たらいい…」

言葉の途中で感じた例えのようなチャクラ。

それが原因でネジは言葉を止めた。

「いや…どうやら、その必要はないようだ…」

「…何だと?」

ネジの物言いに疑問符を浮かべるドス。

すると、木の下で寝ていたはずのアイツが起きた。

「サクラ…誰だ…お前をそんなにした奴は…」

…左半身に黒い変な斑点模様が浮き出ているうちはサスケ。

立ち上がりサクラに聞く。それにサクラは呆然として答えられ無い。

「サスケ君…」

「どいつだ…」

「オレだよ!」

ザクは樂觀しているのか、薄笑いを浮かべて答えた。

「サスケ君…その体…!?!」

尋常ではないサスケの様子に、サクラは戸惑いを隠せない。

「心配ない…。それどころか…力がどんどん溢れてくる。今は…気分が良い」

…だが当の本人は、呪印に覆われた左手を見つめ、まるで陶醉したような声色で答えた。

キンの体の中にいたイノは急いで心転身を解いて自分の体に戻る。サスケは何かを溜めるように歯を食いしばる。…すると左半身にしか無かった呪印が右顔にも現れた。

一気にチャクラ量がハネ上がる。

（こ、これは…。）

溢れ出したチャクラは禍々しい邪気に満ちており、大蛇丸のそれに酷似していた。

「チャクラがでか過ぎる！！（い、いくらなんでも、これ程まで・・・！）」

圧倒的な力の開きを感じたドスは、戦う前に戦意を喪失した。

…ドスはヤバイと確信したが

「ドス！こんな死に損ないにビビるこたあねえっ！！」

何故か強気なザクが印を結ぶ。

「よせ！ザク！分からないのか！」

ドスが必死に止めるが、ザクは両手をサスケに構えて今までより遙かに威力が高い風と超音波を出す。

『斬空極派！』
ざんくごくは

…超音波と空気圧の奏でる破壊圧。…威力は『斬空派』を遙かに上回っていた。

その凄まじい威力に地面がえぐれ、線上にあった木々がなぎ倒される。

「へっバラバラに吹っ飛んだか」

「誰が？」

ただ、攻撃が当たらなければ意味はない…

「…！ぐお！」

振り向く間もなく裏拳を打ち込まれ、ザクは無様に地面を転がっていく。

…ザクが起き上がると、サスケは素早く印を組み、息を吸い込む。

『火遁・鳳仙火！！』

「図に乗るな！ かき消してやる！！」

サスケから吐きだされた炎弾に向かって、ザクは両手を構える。得意の斬空波で炎をかき消すつもりだ。が、

「何！？（火の中に手裏剣！）」

炎は防げて、中に仕込まれていた手裏剣までは防げなかった。

「ぐああつ！！」

全身を切り刻まれたザクの口から、苦痛に満ちた悲鳴が漏れる。

そして、防御体制を取ったためにサスケから意識を外してしまい、そこを狙いサスケがまた速く移動した。

「ザク！！下だつ！！」

「え？」

ドスが切羽詰った声で注意を促すも、ザクの反応が間に合っていない。

そして、そのままサスケに両腕を拘束され後ろに回られてしまった。背中を踏み付けて体重を掛け、無理矢理膝を畳ませて…

「クク…。お前…この両腕が自慢なのか…」

サスケは低い声で笑うと、ザクの両腕を掴む手に力を込め…

ゴキッ！！、ボキッ！！

そして何の容赦もなく、一切の躊躇いもなく関節を破壊した。

「ぐおおおおああ！！」

ザクの惨たらしい悲鳴が木霊し、それを聞いた全員に戦慄が走る。

（こんな…！！…こんなの！ サスケ君じゃない！）

それを見て涙目になるサクラ。

そんな桜の気持など知らず、サスケは歪んだ笑いをしながらドスを見て、

「残るはお前だけだな…。お前はもつと楽しませてくれよ…」
「ッー！！」

標的をドスに変える。ドスはビビって後ろに後ずさる。

「やめてー！！」

…気が付くと、サクラは駆け出していた。

サクラが後ろからサスケに抱きつく。

「おねがい…やめて…」

…ただ失いたくない一心で、サスケの背中に涙を流し縋り付く。

「.....ああ〜」

.....その時、遠くの森の奥から何かが聞こえてきた.....

「.....ああああ〜〜〜〜〜!!.....」

「……なんだ？」

最初に反応したのは草むらに逃げ込んでいた奈良シカマルだった。

「……どうしたの、シカマル？」

「ああ、いや……なんか変な声聞こえなかったか？」

「ちょっと！こんな時に何言ってるのよシカマル！！」

シカマルの言葉に小声で怒鳴るいの。

「いや、マジだって……なんか、動物の鳴き声のような……」

「……あああああああ~~~~~！！……」

「！ほら見ろ……！やつば聞こえたじゃねえか」

「うん……！今のボクにも聞こえたよ！！」

「……ちょっと、……なんかこっちに近づいてきてない……？」

「……あああああああああ~~~~~！！……」

「……」
ついに動物の声と思われる音は、この場にいる全員の耳に入ってきた……

…この場にいる全ての者が、ただいまの事態に思考を麻痺しながら
ブツ飛ばされたネジを見る……

…サスケはあまりの出来事に呪印を引つ込め立ち尽くしている…。

「さあさあさあ…！！やって参りました、俺の時代（超爆）！！！！

爺ちゃん婆ちゃん父ちゃん母ちゃん妹^{いも}弟^{てい}姉妹に兄弟お隣さん（爆笑）
！！！！

今の俺には誰も止められないゼイアアアアアアアアアアアアアアアア
アアア（荒ぶる）！！！！！！！！

テーマー等には『俺的最強スーパーファバー特別訓練マニユフェ
スト！！！！！！！！』

…教えてやるから付いてこいヤアアアアアアアアアアアアアアアアア
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

…二次小説を見る時は、部屋を明るくして離れて見（るにやん？）
キュルリン）！！！！」

この瞬間、この場が『現実』から『混沌』に変わっていく事を、全
員が肌で感じ取れた…。

…ちなみにナルトはまだ気絶中～にゃん

第八話 空気嫁?!!(後書き)

ネジイイイイイイイイイイイイイイイ(号泣)!!!

(注) 作者はネジの事は嫌いではありません。…好きでもないが

次回から少しテンション下げます。

…ちなみに、流稀の叫び声は某未来兵器の有名なセリフです。

第九話 戦闘終了！第二次試験終了！（前書き）

今回で二次試験終了です。

第九話 戦闘終了…第二次試験終了！

「…つまり私がブツ飛ばされた後あの『草忍』の奴にボコボコにされた。

揚句に私達の巻物も燃やされてしまい、ハッキリ言つて今の七班は大ピ~~~~ンチ！！

…取敢えず傷ついたサスケとナルトをこの木の下に移し看病していたが、なんと此処でも敵の『音忍』に奇襲されてしまい、またもやサクラは大ピ~~~~ンチ！！

…所がそこに、正義のヒーロー『毛虫眉毛』がサクラの前に只今誕生！！…だがしかし、

『ミイラ君』と『微妙ヘアー君』の攻撃は想像以上の強さを持っていた！

相手の術にあらがうこと出来ず倒れる『毛虫眉毛』！！

その後、サクラは『ジミ子ちゃん』に髪の毛やかさで嫉妬されて大ピ~~~~ンチ！！

サスケ達が殺されようという瞬間、サクラは己で自分の髪を切り拘束を解く！

…その後『微妙ヘアー君』に食らいつくも無情にやられる。

もう駄目だ…とサクラが自分の人生に諦めを感じた瞬間！！

『呼ばれてね〜けど！飛び出て！ジャジャジャ~~~~ン！！』

僕らのヒーロー『木の葉戦隊 第十班！！』、サクラの目の前に助太刀したんだ！

『ぶーちゃん』、『パイン』に『オニオコゼ』！！十班三人がサクラを守ってくれたんだ！

その後、色々あったけど最後はまたまた大ピ~~~~ンチ！…何回ピンチになってんだよ（ボソッ）

しかし、そこでサスケが復活だ~~~~！！

強い！！さすが『うちは サスケ』！！…あっという間に倒してしまった！！

…なのに最後の最後に『うちは サスケ』はバーサクモードに豹変だ~~~~！！

血を求める野獣、それを止める慈愛に満ちたお姫様……姫は野獣に抱きつきこう言った。

「お願い！もうやめて、サスケ君！！」…野獣に言葉が届く瞬間、

テンション爆超の流稀くん（笑）が雄叫び上げて登場し、現在に至る。……と、こんな感じ（疑）？」

…現状確認のために今までの出来事を喋る流稀……ちなみに一息で言っただけではない。

「…ええ、まあ大間かにいえばそうね……色々言いたい所はあるけど」

流稀の説明で大間かでも理解しているだろうと思い、取り合えず返事を返すサクラ。

…何故か、顔が少し赤らめている。

「……………」

呪印の使い過ぎで地面に座っているサスケ。…黙ったまま流稀を睨みつけてる。

「『ぶーちゃん』かぁ…案外かわいくてボクにピッタリかもね」
流稀のニツクネームに満更でもない反応をする秋道チョウジ。…『デブ』以外なら別にいいのか？

「てゆうか、あんた！…『オニオコゼ』って私の事じゃないでしようね！…？」

ニツクネームで流稀に本気で激怒し、襟をつかんでいる『オニオコゲフンツ』…山中いの。

「はぁ…いの、メンドくせ…から別に許したっていいだろうが」
頭をかきながらイノを落ち着かせようとする『パイン』こと奈良シカマル。

「あんた！何言ってるのよ！…こんな可愛い女の子がこんなふう
に言われてるのよ！？」

激怒するにきまつてるじゃない！！！！

「ええ…、い…じゃん。カッコいいし…。…ナンデダメナノ（
3・）？」

「ドコがよ！！女の子がそんな酷つい名前が良いなんてありえない
から！！」

……ていうか、その顔やめろ！！！！

（注）流稀は顔は仮面を被っているために目しか見えませんが、な
んか雰囲気で分かります。

流稀のテンションのせいでいのはさらにイラつき、流稀の襟を持ち
ながら乱暴に振り回している。

…もう、先ほどのまでの緊迫した空気は跡片もなく、すでに何とも言えないムードになりつつあった。

その隙を逃さぬようドスは気絶しているザクとキンを担ぎ、この場所から静かにこの場から立ち去ろうとする。

「あれえ〜？ミイラ君達〜どこ行くの〜（疑）？」

…しかし今日、彼はあの仮面から逃げられない運命らしい。

ドス達を目ざとく見つけた流稀は、いの手からするりと抜け出し、微妙に普通の歩き方ではなく…なんかへろへろした感じで近づいていく…。

それに対しドスは近づいて来る流稀から後ずさり、半径十m前後を保ちながら何時でも逃げられる状態を取っている。………どんだけ嫌われているんだ、コイツ。

「…君は強い。サスケ君…君は僕たちでは太刀打ちできないくらいに強くなっている」

サスケを見ながらそう言ってしゃがみ込むと、『地』の巻物を地面に置くドス。

「…これは手討ち料、…ここは、引かせて下さい」

「…！」

それを聞いたサスケとサクラは一瞬驚くが、引くと聞くと息を吐きホッとする。

「虫のいい話ですが、僕達にも確かめなきゃいけない事ができたのでね。…その代わり、約束しましょう。…今回の試験でまたあなた達と戦わなくてはいいけないと気が来たなら…僕達は逃げも隠れもし

ない」

そう言うと、サスケ達に背を向け森の奥の方に歩いていく。

だが、立ち去っていくドスにサクラは声を上げて呼び止める。

「まって！」

「……？」

「大蛇丸って、いったい何者なの！？サスケ君に何をしたの……！？
なんでサスケ君に……！？」

「……わからない。僕らはただ、サスケ君を殺るように命令されただけだ……」

「……ッ……！」

そんなドスの返答に納得できないのか、サクラは力を込めて睨みつける。

（……僕達にサスケ君の暗殺を命令しておきながら、……あなたは僕達の先回りをしていた。……しかもサスケ君を殺さずにあんな『呪印』を残しておいて……一体、何をお考えなのか……）

サクラの質問に答えると再び歩き出し、今度こそ森の中で消えていった。

「あらら……ミイラ君達行っちゃったよ……もう少し休んでいけば良かったのに（心配）」

……お前と一緒に居たら精神的ダメージとストレスを喰らい悪化する。

「ま！またいつか会えるでしょう（笑）！」

……それよりサクラ、サスケ大丈！「そこを動くなッ！」オオウツ（驚）……！！？」

流稀が喋りながらサクラ達に近づこうとすると、突然サスケがクナイを構え流稀に怒鳴りつける。

その声に思わず流稀もその場で止まる。

「サスケ君!？」

「今ここに居る流稀が本のだとは限らない…また味方に变化した敵の可能性もある。」

…合言葉を言え。『忍機』」

いきなり怒鳴ったサスケにサクラ達は驚くが、サスケの言葉に納得したのかサクラは流稀を見ながら少し警戒する。…ああ、だから睨んでたのね。

「あ、そう言えばそうだった(ウツカリ)…じゃ、言うぞ(ゴホンツ)!」

『…大勢の人の騒ぎは宴会あり。静かな一人身に友達なし。童貞は時として妄想こそ大事なれ。寂しさつかれて枯れ果てるとき…』

「…………全然違うじゃないの!？」

流稀の合言葉の不一致にメチャクチャ驚くサクラ。…しかも、なんか哀しい。

「…………よし、どうやら本物らしいな」

しかし、サスケはそう言うのと流稀に対する警戒を解く。

「いいのツ!？サスケ君!？」

「ああ、…あの無茶苦茶なウザさ加減…こいつは間違いなく流稀だ。…そもそも、こいつがちゃんとした合言葉を言うなんて最初っから期待なんてしていなかったしな…」

むしろ、ちゃんと合言葉を言った方が不自然すぎて怪しいだろう…。

「……うん、それもそうね……」
納得したのかサクラも警戒を解く……しかし、仲間にもこんなふうに
思われる流稀って……

「いや〜ん！そんなに褒められても……全然うれしいが（ドヤッ）
！！」

……どうやら、そんなに大した怪我はしていないみたいです（ホ
ッ）。ところで、ナルトの方はどうなったのでしょうか（疑）？」

「あ、ナルトならあそこに「だぁーっ！！みんな隠れる！いや、
スグ伏せるんだぁ！！！」

サクラが言おうとした瞬間、辺りに大声が響きわたる。……タイミン
グのいい奴だ。

「ナルト……」

（あの、馬鹿あ……やつと目を覚ましたのねえ）
今更過ぎる時に起きたナルトに呆れるいの。

「……すごい天然だな、おまえ。……っか、見ててムカついて来
るな」

「うん」

地べたに這うナルトを見下げながら言うシカマルとチョウジ。……ま
あ、本当に今さらだし（笑）！

そんな事を言われながらも、ナルトはサクラ達を見つける。

「……！サクラちゃん！？」

するといきなり大声を出しこっちに向かってくるナルト。

……今まで空気だったクセに、いきなり流稀並みに存在感が出てきた
な。

「何よ、ナルト…?」

「そ、そそつ、その髪!？」

「!…あ、ああ…これね?…イメチェンよ、イメチェン!」
自分の髪を触りながら言うサクラ…

「…私は長いほうが好きなんだけど…ホラ、この森の中じゃあ長いと邪魔なのよねえ」

「ふ…ん」

サクラの言葉に取り合えず納得するナルト…なんも考えていない事が表情からして分かる。

「うわ…、…今さらすぎだよ、ナルト君…(哀)」

「おお流稀!!…お前、大丈夫だったのか!」

サクラ達と一緒にいた流稀に気付き嬉しそうに声をかけるナルト。

…この試験で流稀の事で気遣ったのナルトが初めてだよなあ…

「…ところでさあ、何でお前らがこんな所にいるんだってばよあ?」

…戦闘中、ずっと気絶していたナルト…今さらすぎる質問をする。

「もうお前に説明するのがメンドクセエ…」

「…みんな、助けてくれたのよ」

「ええ?」

(サクラの奴…強がっちゃって)

サクラの言葉に驚いているナルト、近くに居たいのはサクラに少し笑みを浮かべる。

「…そう、俺達七班を守ってくれたのは此処に居る木の葉の下忍、全員だ。」

…しかし、その中でも一番頑張ってくれたのはサクラ、お前だ」

「え…？」

…いつものふざけた態度ではなく、少し真面目な声で言う流稀。…
その場に居るナルト達も少し驚く。

「今回、ナルトとサスケは戦える状態でもなかったし、私も皆とは離れていた。

…敵が潜んでいるこの森の中、サクラは一人で二人の看病をしながら徹夜で守っていたんだ…。

そんな事、並大抵の忍びがやろうと思って出来る事じゃない」

…流稀は少し優しげにサクラを見ながら言う。

「今の七班があるのはサクラが居たからだよ。…だから言わせてほしい…ありがとう、サクラさん」

…いつものウザさがまるで嘘の様に、微笑みながらお礼を言う流稀。

サクラは仮面から唯一見える漆黒の眼に見惚れながら流稀の方を見る。

（……流稀の眼ってこんなに綺麗だったんだ……いや！わたし何考えてんのよ！？相手はあの流稀よ！？…私にはサスケ君が…！しゃくくくんなろー！！！！）

…サクラは少し顔を赤らめながら慌てて視線を外す。

「へくく、…おまえでもそんな表情も出来るんだな…」

傍で見ていたシカマル達もビクリしながら流稀に声をかける。

「まあ、こういうのは気持ちの問題ですしね（笑）！」
シカマルの返事に対し、もういつもの話し方に戻っていた。

「そっかー！！サクラちゃんが俺の事守ってくれてたんだな！ありがとうサクラちゃん！！！」

「…流稀の奴の言うとおりだ。…サクラ、ありがとうな…」
流稀の説明でサクラにお礼を言うナルトにサスケ。

「！ッお礼なんかいいよ！仲間なんだし、当然じゃない！！（サスケ君に感謝されるなんて…しゃあんなる…！！）」
サクラはサスケの言葉を聞き、心の内で滅茶苦茶喜ぶ。
…さっきまでの流稀に対する気持ちはすでに消えていた。

…サクラが心の中で喜んでいると、木の上からお団子ちゃん、テンテンが地面に下りて来た。

「…そのタイトの奴と気絶している奴、二人は私が見るわ」
そう言うとテンテンはリーの傍まで行き…リーの肩を持ち身体を激しく揺さぶる。…他の下忍もビックリしている。

「しっかりしなさいよッ！！リー！！！」

「……う、うん……あ、…テンテン…どうして、此处に…？」

腕から離されるとその衝撃でか、リーが目覚ましテンテンを見る。

「助けに来たのよ」

「…あれ？…あいつら…音忍は…？」

「サスケって子が追い返しちゃったわよ…」

「そっか…」

「何で黙って単独行動なんてしたのお！？…しかも、ボロボロじゃない！」

「…さッ、サクラさんがピンチで、…男としては」
リーは地面を見ながら言う。

（まったく、…あんな奴ら、リー一人だけでも絶対に倒せたはずなのに…）

「…ホント、アンタって馬鹿ね！！」

「…言い返す言葉もないっす…」

いつの間にか体育座りになりながら言うリー。

「…そう言えば、ネジは…？」

自分の班のネジが居ない事に気付くリー。その言葉にテンテンは無言でネジが居る方向に指を指す。

…そこには今なお白目を剥いて倒れているネジの姿があった。

「…えっと、…一体、何が「ああー！！…お前ってばゲジ眉！！」

…リーが疑問を言う前にナルトが傍に来てリーに指を指す。

「ナルトー！！！！…リーさんに変な事！！言っんじゃないわよ
————！！！！」

サクラがそう言いながらナルトに近づくと、右手でナルトの顔を殴る。

「グハアツツ！！！！」

殴った右腕はそのままナルトの頬に突き刺さり、そのままナルトはキリモリ回転しながら直線に吹き飛ばされる！！

（一体…俺が寝ている間に何が…？）

「ナルトの奴…思いつきり蚊帳の外だな…」

「物語の主役になれないタイプでね……きっと」

「言ってやるなよ……余計に悲しくなっちゃうじゃないか……（哀）」
混乱しているナルトを遠くから眺めるシカマル、チョウジ、流稀の
三人……。

「……リーさん」

ナルトをブツ飛ばした後、サクラはリー達の方に向き言葉を出す。

「ありがとう……私……リーさんのおかげで目が覚めました……ちょっとだけ強くなった気がします。」

そう言ってサクラはリーに笑みを浮かべる。……その言葉に感動し、
涙を浮かべるリー。

「サクラさん……ボクは、まだまだ努力が足りなかったみたいです……
……サスケ君」

涙をぬぐい、サクラの横に居るサスケに目を向ける。

「さすが『うちは一族』、ホントに追い払うなんて……やっぱり君は
凄い力の持ち主だ。……僕はコテンパンにやられた。」

（！？……こいつがコテンパンにやられた？……どういう事だ、そんなに強かったのか……あいつ等が？）

「……サクラさん、……木の葉の蓮華は、二度咲きます……！」

「えっ？」

「次に会った時は、もっと強い男になっている事を………誓います
……！」

「……うん！」

リーの言葉に笑みを浮かべ頷くサクラ。

…その姿はほんの、…本当に少しだけ成長した様に映し出されていた。

…その後、リーとテンテンは気絶しているネジを肩に担いで連れ去り、シカマル達もサクラの髪を整えた後に立ち去って行った。

「……よし！じゃあ、このまま中央の塔に……………レッツゴー——（爆）——！」

流稀はその場で片手を上げると、テンション高めでそんな事をほざく。

「ちよつと、何言つてんのよ流稀！…行った所で巻物揃ってないんだし無駄じゃない！」

「そうだってばよ流稀！サクラちゃんの言つと……………り！..！」

流稀の発言に否定するサクラとナルト。

…流稀は二人にそう言われると、何やらポーチに手を突っ込み、ゴソゴソと何かを探る。

そしてお目当ての物を見つけたのか、ポーチから取り出したものは…

「テンテレットテツテツテ……………ン！…『天の巻物』……………」

（ダミ声）「

天の巻物でした。

「……!!?」

当然、ビクリして流稀を見るナルト、サクラ、サスケの三人。

「流稀！アンタ…何で『天の書』持ってたの!!?」

サクラが興奮した様子で聞いてくる。…そりゃいきなり脈絡もなく揃ったら誰でも驚く。

「フオッフオッフオッフオ…私が何もせず一晩彷徨っていたと思うのかね（疑）？」

「……うん（ああ）」

少し考えた結果、三人からそんな答えが返ってきた…弁解できねえ…。

「私が吹き飛ばされた後、最初に合った雨隠れの忍びのチームに合ってたね」。…うまく騙してうまく手に入れた訳（笑）!!」
…本当は背後から叩き潰し奪ったのだが、彼らは森の中で気絶し、木に縛られているため確かめるすべはない…。

「ええ!?!…流稀、敵に出合ったんだってばよ!?!」

「うん!まあ、敵はもう気付いているかもしれないし…奪え返される前にさっさと行こうぜ!」

右手の親指を立てウィンクする流稀。…その様子に疲れたため息をつく第七班の三人…

「…まあいい、流稀が巻物を持っていたのは幸いだ。このまま中央の塔に行くぞ!」

流稀たち七班が塔に到着したのは三日目の朝…二次試験、合格!

第九話 戦闘終了！第二次試験終了！（後書き）

次回からは予選開始です。

第十話 第三試験前（前書き）

なんかもうすぐお気に入り件数300件超えそうなんですけど…
200件超えてからまだ一週間もたってないよね？

第十話 第三試験前

「まずは『第二の試験』…通過おめでとう！！（フフ…第二試験受験者数七十八名…ここまで二十二名も残るなんてね。…半分に落とすと言ったものの、本当は一桁を考えてたのに…）」

そんな事を考えながら笑う第二次試験官、みたらしアンコは残った下人たちを見渡す。

…流稀たちが塔に到着し、今この広場に集められたのは試験で合格した者と木の葉の上忍、そして、木の葉の里長『火影』がこの場所に存在していた。

グウ。…腹減った」

「まだこんなに残ってるのかよ…クソめんどくせえ」

「サスケ君達も合格してる…！」

「当たり前だ。あれだけ苦労して助けたんだ…合格してもらわねえと合わねえよ」

（へえ…！！あれがガイ先生の永遠のライバルねえ。ビジュアル的にはガイ先生、完璧に負けてるけど）

「（やはり！先生の中でガイ先生が一番ナウいです！光っています！……よし！）見ていてください、ガイ先生！！ボクも光って見せます！！」

（…水鏡流稀…やはり貴様は生き残ったか…！！次の試験、絶対に叩き潰してやる！！！！）

（腕のお返しはしてやるぜ…うちはサスケ！必ずなあ…！！）

「（…やはり、仮面の彼はいますか…。出来ればもう関り合いたく

ないのですが……) はあ……」

(二十六チーム中……たった七チームしか生き残れなかったとわねえ……)

(あの仮面達も生き残れたのか……なんか、ホッとしたじゃん)

(……やはり無傷か、我愛羅……)

(?……赤丸の様子が変ね……?)

「クウーン」(砂の奴ら……)

(ナルト君も合格したんだ……! よかったあ……)

「なによ……木の葉のルーキーみんないるじゃない」

「なんかさあ、なんかさあ!……火影の爺ッちゃんにイルカ先生、ゲキマユまでいるってばよ!

……みんな勢ぞろいって感じだな!」

「フンッ……あんまり、良い予感はいねーなあ……」

「……………」

(……これほど残るとはのお……しかも、残った者のほとんどが新人……あ奴らが競って推薦するはずじゃわ)

「それではこれから火影様より「第三の試験」の説明がある。……各自心して聞くように!……では火影様、お願いします」

「うむ、これより始める『第三の試験』……その説明の前にまず一つだけ。……ハッキリお前たちに告げておきたいことがある!……!……この試験の真の目的についてじゃ。」

(……真の目的?)

「何故……同盟国同士が試験を合同で行うのか? 同盟国同士の友好、

忍のレベルを高め合う、

…その本当の意味をはき違えてもらっては困る…！この試験は言わば……………」

此处で言葉を区切り、啞えていたパイプを放す火影…。

「……………同盟国間の戦争の縮図なのだ！」

「ど…どういうこと？」

火影の言葉にテンテンが質問する。

「歴史を紐解けば今の同盟国とは即ち…かつて勢力を競い合い争い続けた隣国同士。その国々が互いに無駄な戦力の消費を避ける為にあえて選んだ戦いの場。それが、この中忍選抜試験のそもその始まりじゃ…」

「な…なんで、そんなことしなきゃなんねんだってばよ！？…中忍を選ぶためにやってんじゃねえのかよ？」

「確かに、この試験は中忍に値する忍びを選抜するために設けられた事を否定の余地はない。しかしこの試験は国の威信を背負った各国の忍が国の繁栄も考えて闘う場でもある！」

「国の威信…？」

「この『第三の試験』には我ら忍に仕事を依頼すべき諸国の大名や著名な人物が招待客として大勢招かれる。そして各国の隠れ里を持つ大名や忍頭が、お前達の戦いを見る事になる。

国力の差が歴然となれば『強国』には仕事の依頼が殺到する。『弱小国』と見なされればその逆に依頼は減少する…」

「だからってなんで！命懸けで戦う必要があんだよ…！？」

「国の力は里の力…。里の力は忍の力…。そして忍の本当の力とは

命懸けの戦いの中でしか生まれてこぬ！！この試験は自国の忍という力を見てもらう場であり、見せつける場でもある。本当に命懸けで戦う試験だからこそ意味があり、だからこそ先人達の目指すだけの価値がある夢として中忍試験を戦ってきた…」

「…では、どうして…友好なんて言い回しをするんですか!？」

「だから始めに言ったであろう、意味をはき違えてもらっては困ると。命を削り戦うことで力のバランスを保ってきた慣習。これこそが忍の世界の友好…己の夢と里の威信を賭けた命がけの戦いなのだよなのだよ」

…火影の言葉に下忍達は誰も口を開かない…まあ、結構な大事になっているからな。

「へ！納得いったぜ…」

「何だっついていい…。それより早くその命懸けの試験ってヤツの内容を聞かせろ。」

…そんな中、ナルトと我愛羅が言葉を放つ…なんて言うか、もう少し空気読もうよ…。

「フム…ではこれより『第三の試験』の説明をしたい所なのじゃが…、実はのお…ゴホン!」

なんかワザとらしく咳をする火影、…すると、一人の上忍が出てきて火影の前に跪く。

「…恐れながら火影様。…ここからは審判を仰せつかったこの…月光ハヤテにお任せください…」

「……任せよう」

「皆さん初めまして、ハヤテです。えー、皆さんには『第三の試験』前に…ゴホッ、やってもらうたいことがあるんですね…ゴホッゴホ

ッ

…何だかあきらかに病人な上忍が語りかける。…何で今日この試験会場に来たん？

「えーそれは本選の出場を賭けた第三の試験…『予選』です…」

「え…？」「予選…？」

上忍の言葉で騒ぎ出す下忍たち…。

「予選って…どういう事だよー！」

「先生！その…予選って意味がわからないんですけど…今残ってる受験生でなんで次の第三試験をやらないんですか？」

ハヤテの言葉に疑問を感じたサクラは質問する。

「えー今回は…第一、第二の試験が甘かったせいかな…少々人数が残り過ぎてしまいましたね。」

…中忍試験規定に乗っ取り予選を行い…第三の試験進出者を減らす必要があるのです」

「え、そんなあー！」

…えーなんだそりゃ？なんか後付け感が滅茶苦茶するんですが。

「先程の火影様のお話しにもあったように第三の試験には沢山のゲストがいっぱいいますから…だらだらとした試合はできず、時間も限られて来るんですね。」

「…えーという理由で体調の優れない方…ゴホッゴホッ、ゴホッ…」

（ちよつと、大丈夫なのお…！？）

（先生の方こそ体調悪そう…）

咳き込んでいるハヤテにいのとヒナタはそんな事を考える。…誰でもそう思うわなあ。

「失礼…これまでの説明で辞めなくなっただけ、今すぐ申し出て下さい。これからすぐ予選が始まりますので…」

「…！これからすぐだと！？」

「ようやく二次試験を通過したばかりだって言うのに…」

「はあ、めんどくせえ…」

「ええ、…ご飯は…！？」

さつきから驚いてばっかなんだけど…なに、サプライズ？…全然嬉しくねーんだよバーロー！

（…よお〜しっ！ぜってー頑張つてやるぞ〜！！）

…やはりと言うべきか、ナルトは説明を聞いて、逆に燃え上がっている…素直に凄いと思うよ、うん。

「あ…、えー言い忘れていましたが、これからは個人戦ですからね…。自分自身の判断でご自由に上げて辞退して下さい」

（誰が辞退なんか…ッ…！）

サスケは肩の『呪印』が痛み、無意識に右手で肩を押さえる。

「…！サスケ君ッ…」

（…痛みの波が…どんどん短くなってきてやがったッ…！）
余ほど痛いのか、肩を押さえる力が強くなる。

「…サスケ君。…この予選、やめた方がいいわ…！」

（…！）「え…？」

サクラの言葉にサスケとナルトが反応する。…流稀は已然、黙ったままである。

「だって！…大蛇丸って奴からヤラれてから、…サスケ君ずっと変よっ！」

…その言葉に顔を背けるサスケ。

「ねえ、今でも痛むんでしょ……その痣？」

（…痣？）

気絶していたナルトは痣の事は分かっていないようだ。

「このままでいけば……！……お願い……お願いだから……ヤメテッ……！私……怖いッ！」

（……サクラちゃん）

…サスケの事が心配で泣きながら辞退するように頼むサクラ。

「今のサスケ君は…まともに戦える状態じゃないわ！」

「ッ黙れえ……！」

「…私にはわかってる！」

「静かにしろ……！」

「だって……ずっと痛みを我慢しているじゃない！」

「…静かにしてくれッ……！」

「ッ……サスケ君がなんて言おうと私、この事……先生達に言っわ……

！……そうすれば、」

「……！」

そう言いながらサクラは手を上げようとした……その前に、別の所で手が挙がる。

「ほお……？」

「……ええ？」

「あの……ボクはやめときます」

笑みを浮かべながら手を挙げ、リタイア宣言をするカブト。

「カブト……さん？」

…その突然の行動にナルトやサクラが少し驚く。

「えーと……木ノ葉の薬師カブトくんですね……。では下がっていいですよ……。」

「はい…」

カブトはそれを聞いて会場を後にしようとするが、ナルトが声をかける。

「カブトさん！…何で、辞めちゃうの！？…ねえ、何でだってばよ！！」

「すまない…ナルト君。…けど、ボクの身体はもう…ボロボロなんだよ…」

…この世界では二次試験は全くお世話になっていないはずなんだが…原作に引っ張られているからか？

「実は第一次試験の前に、音の奴らと揉めた時から…左の耳がまったく聞こえないんだ
とても今すぐ戦えなんて…それも、命がけと言われちゃあ…僕にはもう」

「…そつかあ。…なんか、残念だつてばよ……。ま！でも…さ、来年もあるし、またがんばって試験受ければいいんだつてばよ！！」
少し残念がるが、原作と違い明るく送り出すナルト。…微妙に嫌味っぽく聞こえるのは私だけか？

「ありがとうナルト君。…君たちなら合格できると応援しているよ」
そう言い、笑みを浮かべながら手を振ると、そのまま試験会場を出ていった…。

「…ゴホッ、えー他に辞退者はいませんか？」

（……ッ！サスケ君の、痣の事…先生達に！）

ハヤテの言葉で思い出したサクラ。…そう思うと、もう一度手を上げようとするが、その前にサスケに手を掴まれる。

「！あつ！」

「この痣の事は黙ってる…！」

そう言い、サスケはサクラを見る。サクラは涙を目にため下を向い

ている。

「…どうしてそう強がるのよ！？私はもう強がるサスケ君を見たくない…！私はさすくんが…」

「お前には関係ないだろ…！」

サスケの言葉で哀しい顔をするサクラ…

「余計なお世話なんだよ…」

「……前に一度言っただけだ……俺は『復讐者』だ……！！これは俺にとって単なる試験じゃない。…中忍がどうのこうのなんてのも俺には関係ない！」

そう言い、サスケは何処を見るときもなく視線を横に向ける。

「俺は強いのか…ただ、その答えが欲しい。…強い奴と戦って、そして……そして、

そいつ等は此処に居る……！」

そう言い、サスケは周りにいる我愛羅、ネジ、リーを見渡しながら言う。

「…いくらお前でも、…俺の道を奪う事は許さない……！！」

「……サスケ君」

サクラに視線を戻すと、きつく睨みつけるサスケ…。

「てんつめえー！、何カッコつけてんだってばよ、馬鹿……！……サクラちゃんが……こんなに心配してくれてい……ナルトッ」るの……ん？」

前できていたナルトは、サスケの言葉に文句をつけようとしたが、その言葉にサスケの言葉が被り一時中断する。

「……俺は、お前とも戦いたい！」

「……！！！」

サスケは不敵な笑みで言うと、ナルトはその言葉に驚き、固まった

ままサスケを見つめる。

「…そして流稀、お前とも俺は戦いたい…！」
…サスケは流稀に視線を向けるて言うが、流稀はその言葉に反応せず…ただただ静かに立っているだけだった。

「えーでは、…これより予選を始めますので、これからの予選は一対一の個人戦。…つまり、実戦形式の大戦を行います。」
誰も辞める気がないと見たハヤテは、さっそく予選のルールを説明する。

「大戦人数は二十一名と一人余ってしまいましたが…試合は合計で十回戦行い…で、その勝者が『第三の試験』に進出することが出来ます。…ルールは一切なしです…どちらが一方が死ぬか倒れるか、あるいは負けを認めるまで戦ってもらいます。…えー死にたくないればすぐ、負けを認めてくださいね。…ただし、勝負がハッキリと付いたと私が判断した場合、ゴホツ、…えーむやみに死体を増やしたくないので、止めに入ったりなんか致します」

「ちよつと！…じゃあ、余った最後の一人はどうなるんですかあ！？」

「ゴホツ、…あー最後に選ばれずに残った選手には、そのまま『第三の試験』にすることになっています。…『第三の試験』ではまた違う形の試験になっているので」

「なんだよそれ！？ズリーじゃねーか…！」
受験者が少し騒ぎ出すが、構わず説明を進めるハヤテ。

「では、これから君達の命運を決めるのは…」
ハヤテがアンコの方に顔を向け合図をする。

「…開け」

アンコが言つと、目の前の壁の左上の板から電子パネルが姿を現した。

「これですね。えーこの電光掲示板に、一回戦ごとランダムに選出された受験者二名ずつを表示していきます。…では、さっそくですが…第一回戦の二名を発表します」

すると、掲示板に文字が浮かび上がると、色々な名前がシャッフルされながら表示する。…そして出された名前は…

「…!!」

《『あかどう ヨロイ』VS『うちは サスケ』》

「フツ…（いきなりとはな…）」

呪印で痛みながらも笑みを浮かべるサスケ。…結構運がないな、コイツ…。

（そんなあ…？何でサスケ君が…）

「…では、掲示板に記された二名…前へ」

そう言つと、サスケと長身の口を布で隠した男…赤胴ヨロイが出てきてお互い向かい合う。

「第一回戦…対戦者『赤胴ヨロイ』、『うちはサスケ』に決定…異存ありませんね？」

「ああ!」「オウ!」

二人はお互いに睨み合いながら返事をする。

（もう、私は見守るしか…サスケ君!）

（サスケ!…俺と戦いたいんだつたら、負けんじゃねーぞ!）

先に対戦するサスケに七班は思い思いの事を考えながら見守る。

「えー、これから第一回戦を始めますね…ゴホッ、対戦車二名を除

く方々は、上の方に移動してください…」

…ハヤテがそう言うと、他の奴らはそろそろと移動し始めた。

「んッ…！おーい！カカシせんせー！！」

七班も移動しようとしたが、ナルトが近づいて来るカカシを見つけ、大声で声をかける。

カカシはそのままサスケの後ろに立ち…

「…サスケ」

「…？」

「……『写輪眼』を使うな…！」

「…！！…知ってたのか」

「その首の『呪印』が暴走すればお前の命に関わる…」

「…だろうなあ」

「ま…その時は試合中止！俺がお前を止めに入るからよろしく」
そう言うとかカカシは階段の方に進んでいった。

（…！…中止だと！？）

遠ざかっていくカカシを睨みながらサスケは呪印を手で押さえる。

（…この呪印って奴は、どうやら俺のチャクラに反応してやがる…
うかつにチャクラを練りこめば、俺の精神を奪い、体中のチャクラを際限なく引き出してしまう…）

目の前に居るヨロイを見る。

（つまりこの試合…『写輪眼』はおろか、普通の術ですらそうそう使えないって訳だ。…さーで、どう行くかなあ…！）

それでもサスケは戦う気満々で対戦相手を睨みつける。

「…それでは、始めてくだ…？」

「…？」「…どうした？」

…突然言葉を止めたハヤテに疑問を持つサスケにヨロイ。
サスケはハヤテの視線の先を追って見てみる。

すると、そこには先ほどから一言もしゃべらず、ただ黙って立っている流稀の姿が目に入った。

「…てめえ、一体どういうつもりだ…!？」

試合の邪魔をされたサスケは流稀を睨みながら言葉をぶつける。しかし、それでも流稀は何も返事を返さない…。

「お前もサクラと同じく、俺を邪魔しよーて言うのか?…とっとと上に戻っている!」

怒鳴るように言うが、全く反応しない流稀にだんだんイライラしてくるサスケ。

「…無視しやがって…!いいから行けって言っただつ…?…(…

…コイツ、まさか…!?)」

…怒鳴っていて何かに気づいたのか、サスケは流稀に近づいて行く。そして、流稀の目の前まで行くと耳をそば立てて聞く。…すると、

「……………ZZZZZZ(爆眠)」

はい、ずっと眠っていました。本当にありがとうございました。

…と言うか喋らないと思ってたらずっと寝てたんだね…。え、判つてた?じゃあいいよ。

「…起きやがれ馬鹿ヤロー!」

「ヒヤッフウ(ビクリッ)!!!?」

…その後、怒鳴って起きた流稀は周りから冷たい視線で見られ、そ

のままナルト達のいる所に向かって行つた。…そして試合は氣を取り直す。

「ゴホッ、…それでは、始めてください！」
試合が始まりました。

第十話 第三試験前（後書き）

ワンパターンなため次回から省略します。

…そして、少し更新が遅れるかもしれませんが、申し訳ありませんが、

期待しながら待っていてください。

第十一話 第三試験予選／第九試合目（前書き）

流稀の真面目な戦闘シーンが見れます。期待しててね！

第十一話 第三試験予選／第九試合目

第一試合『赤胴ヨロイ』VS『うちはサスケ』
…勝者『うちはサスケ』

第二試合『ザク・アブミ』VS『油女シノ』
…勝者『油女シノ』

第三試合『剣ミスミ』VS『カンクロウ』
…勝者『カンクロウ』

第四試合『春野サクラ』VS『山中いの』
…勝者『なし』

第五試合『テンテン』VS『テマリ』
…勝者『テマリ』

第六試合『奈良シカマル』VS『キン・ツチ』
…勝者『奈良シカマル』

第七試合『うずまきナルト』VS『犬塚キバ』
…勝者『うずまきナルト』

第八試合『日向ヒナタ』VS『日向ネジ』
…勝者『日向ネジ』

残り選手

『我愛羅』『ロック・リー』『秋道チヨウジ』『ドス・キヌタ』
『水鏡流稀』…以下五名

…なんだよ、私はちゃんと前の話の最後に言っていましたよ？『省略します』って予告してましたから。

ちなみに此処までは原作と一緒にです。なのでいきなり進んでビックリしたかと思いますが、勘弁してみてくださいと幸いです。

「おいチヨウジ！…おまえ、ヤベーぜ…後、強えーのしか残ってねーぞ」

そう言いながらシカマルは、残っている選手たちを見回す。

「音隠れの忍びは、あん中じゃ一番強そーだし。…リーって奴はサスケと戦いあえるくらい強えーって話だからな…まあ、一番可能性があるのは流稀しかいねえぞ」

…そしてシカマルは向こうの高台で見えている我愛羅を見る。

「…特にあの砂の野郎。…あーゆうのが一番危ないんだぜえ」

我愛羅はシカマル達の方に目を向け睨みつける。

…チヨウジはそのせいで足は震え、涙目になりながらその場でしゃ

がみ込む。

「べ、別にいいもん……！ 什么时候は……すぐに棄権するし……」

「……てこたあつ……焼き肉食い放題つてのもなしだな……！」

そんな弱音を吐くチヨウジに『十班担当上忍』、猿飛アスマが気楽に喋りかける。

「ええ——！！！！……そんなあ……！！」

アスマの言葉にこの世の終わりのような表情になるチヨウジ。

「なーに。…ヤバくなったら、ヒナタの時みたいに止めに入ってやるよう…なあ、特上牛タンでも

骨付きカルビでもなんでも食わせてやるぞお……！」

(… 食い物なんかで吊らせんじやないわよ…！)

(つーかヒナタン時、アンタ止めに入っていないし……)

アスマの言葉に胡散臭そうに見つめるシカマルといのの二人……

「うおおおー！！！！YA・KI・NI・KU！！！！」

…焼肉行くぞー！！！！

食べ放題――！！！！！！」

アスマの言葉で目に火が灯り、手を上げながら雄叫びを上げるチヨウジ。

：「すげーテンションだな、おい！！」
：「砂隠れ」の皆さん、目が点
になつてゐるぞ。

「おい！」

「んん？」

ナルトの方を見ると、砂の方からカンクローがやってきた。……

「…ゴホッ、えーでは、試合を再開いたしますね」
ハヤテが言うと、電光掲示板の名前がシャッフルされる。

「…よおーっし！今度こそ出番だぞ、…さあ、行けリーー！」
リーの担当上忍『マイト・ガイ』が親指を立て、教え子のリーを送り出そうとするが、

「いえ！」

…そのリーはプイツと顔を背け拒否をする。

「…??」

傍で見ていたサクラと流稀も、リーの行動に？を浮かべる。

「…此処まで来てしまったんです。…どうせなら、ボクはトリがいいです！」

そう言うところにはまた顔をそっぽ向く。

(…リーさん…拗ねてる…?)

どうやら期待していても自分の番がこないため、完全に拗ねているようだ…。

「おやおや、『毛虫眉毛』さんは随分拗ねてしまったようですね」
…ほら！この味噌田楽を上げるから気分を直しなさい…(微笑み)

リーが拗ねているとわかると、流稀は手を後ろのポーチに伸ばし、
…その中から味噌でベチャベチャになった田楽を取り出すと、目で微笑みながらリーに渡そうとする。

…ていうか、何生モノ入れてきてんだよ!?

流稀が取り出した田楽を見たサクラやガイは引いている…。

…そんな変なやり取りをしている中、掲示板を見ていた我愛羅は印を組み…そのまま『砂瞬身の術』を使い広場に出てきた。

「はやく…降りてこい…！」

「うおおおおおおおおおおお…！！！！！」

我愛羅の言葉に反応したのか、チョウジが突然大声を出す。……どうやらチョウジが対戦相手…

「セエーーーーーッフ！！！！！」

…ではなかったようだ。…紛らわしんだよ、デブッ！！！！

「コオラツ！！」「紛らわしい事すんなっ！！！」

案の定、いのとシカマルに叩かれるチョウジ…当然の結果だな（怒）！！

…っで、本当の試合の選手は

『ガアラ』VS『ミズカガミ リュウキ』

「！？……ッ流稀！！！」

電光掲示板を見たサクラは、横に入る流稀に目を向ける。

「ぐびやああ（驚）！！まさかの私でしたよ……やばい、棄権したい…（泣）」

…その流稀はというと、自分の番が来て驚いたのか…その場でorz状態となり頂垂れている。

ちなみに、横にいたりも何故かガツカリしており、「また、選ばれませんでした…」と嘆いている。

「アンタ…本当に大丈夫！？…向こうの相手はかなり強そうよ…？」
そう言いながら下に居る我愛羅を見るサクラ…まあ、絶対に相手にしたくないよ、あんな奴…」

「…ツクシヨ…！…なつてしまったモノは仕方がない…！…やつてやろうじゃないのヨ（カマ）…！」

そう言い、流稀は起きやがり…何故かオカマ口調で言いながら下に居る我愛羅を睨む。

「この『七夕に願い事を書く場所を全て自分の願いで埋める男』…『水鏡流稀』が、

『おとぎ話に出て来るメルヘンチックなお転婆妖精』のごとく舞い降りてやるぜ…」（トウツ）…！」

…そんな訳の分らん事を言いながら勢いよくジャンプする流稀…

ジャンプした流稀はそのまま空中に回転半を決めると、そのまま綺麗に着地…

ゴンッ…！！

…できず、仰向けになったまま地面に全身を打ちつけた。

「グバババババババババ…！！…痛エー…！！痛エーよー…！！」（大泣）…！！…！」

…着地できなかった流稀はそのまま床を転げ廻り、どこぞの雑魚キヤラのごとく大声を上げながら鳴き声を上げる。

（（（（…終わったな、コイツ…））））

…それを見ていた全員の視線は、とても冷たく感じられました。

…五分後、

「…ふう、…いや、マジすいません（笑）！…では、始めましょうか（真面目）」

…やっと痛みが引いたのか、流稀は目の前の我愛羅を見ながら対峙している。

「貴様…俺をなめているのか…」

流稀の一連の行動にイラついている我愛羅…そう問われても弁解の余地はないが…。

「残念ながら私は何時でも本気です……ちなみに、私はあと二回変身を残していますよ（教）？」

「……ッ！」

…我愛羅の言葉にいつものウザさ加減で答える流稀…あまりにムカついたのか、我愛羅は瓢箪の栓を流稀に飛ばしてくる。

…飛ばした栓が流稀の額に当たり、流稀は少し痛がる素振りを見せる。

「…慌てんなよ。……どうせ嫌でもやるんだからさ（真剣）」

そう言う流稀は少し真面目になり、我愛羅に対して構えを取る

…どうやら真剣にやるつもりらしい。

「…それでは、第九回戦…始め！」

カカシサイド

「あの仮面…残念だが、どんな攻撃を使うか知らないが我愛羅には勝てないじゃん…絶対になあ」

「いや…アイツは強え…!!」

「流稀の奴、大丈夫かしら…」

今、俺の近くにいるサクラ達が『我愛羅』という砂の少年を見てそう呟いている。

…確かに、あの少年は何やら色々隠している様だし…少し得体のしれない相手だ。

「…流稀の奴はいつも気が抜けているが、この七班の中じゃサスケと同等か…それ以上の戦闘センスを持っている。まあ…下忍の中でも強い部類に入るんじゃないかな？」

「なッ!? マジでえ!!!?」

「…!!…流稀ってそんなに強かったんですかッ!!!?」

俺の言葉にナルトやサクラだけではなく、周りの奴らもかなりビツクリする。…まあ、いつもの流稀の行動からしていきなりそんな事を言われれば、誰だって混乱し疑いもするだろう。

「アイツは『下忍合格試験』の時、俺から唯一スズを取る事が出来た。…それに『波の国』の戦闘の時も見事に相手の懐に入ったほどの奴だ…そうそう、負けはしないよ。」

…しかし、アイツはスズを取る時はトラップを仕掛け奪い、再不斬の時はナルト達に気を引き付け背後から攻撃した。…今回の様に相

手と対峙しての戦いではどうなるかは、正直わからない…。

だが…流稀も相手と同じく俺達に何かを隠している。…それも俺ですら計り知れない物を……

「そつか…そう言えばあの時、一人でカカシ先生のスズを取ったのよね…！」

前の出来事を思い出したのか、サクラは少し安心しながら流稀を見る。…ナルトも目を爛々と光らせながら流稀を応援する。

「…それでは、第九回戦…始め！」

ハヤテが言い終わると同時、流稀は後方に飛び相手と距離を取る。

距離を取ると流稀は自分のジャケットの左袖をめくり、自分の腕を外にさらけ出す。

…流稀の左腕には何かの文様が描かれており、流稀は右の親指を口で噛みちぎると、そのままその文様の上に血が出た親指を走らせる。
…あれは、まさか…

『□寄せの術！』

ボンツ！…という音と白い煙とともに出てきたのは…全体が黒く、細長い物体だった。

長さは全長八十cm幅十cm、厚さは三cmほどの真っ直ぐな刃…
…形としてはトンファアの様な取っ手のみがついた刀の様なだ。

流稀は出てきた武器を右手で持つ。

…持ち方はトンファアとそれと同じであり、打撃ではなく斬撃にוותてかわったトンファアのようなだ。

刃にはまるで罅の入った様な模様をしており、色は錆びた赤鉄色をしている…持ち主と同じように、あの武器にも何か隠された感じがするな。

…流稀は手に取った武器を右手で振ったり回したりして、まるで確かめるように弄んでいる。

「…先生、流稀のあれって…？」

「どうやら、あれが流稀の主力武器みたいだねえ…」

サクラは驚きながら聞くが、目だけは流稀の武器から離さず見続けている…。他の忍び達も、流稀の武器に注目しているようだ…。

「……よ……っし……行くゼツ（轟）！！」

…武器を確かめ終えたのか…流稀は弄ぶのをやめると、そのまま相手の方に向かって突撃する！

スピードはサスケと比べるとあまり速くはないが、それでも普通の下忍相手ならば通用する速さである。

…相手の所まで来た流稀はそのまま体を回転させ、左斜め上から斜めに武器を振う…

これで相手の身体を切り裂く！！…と思ったが、それは叶わなかった。

斬り裂こうとした瞬間、相手の瓢箪から出した砂によりガードされ、受け止められてしまったのだ…。

「……砂（疑）！？」

流稀は受け止められた事に驚きを見せるが、受け止めた砂はそのまま膨張し、そのまま流稀を襲う！

…だが、流稀はすぐに後ろに飛び、…間一髪、砂にのみ込まれずに済んだ。

…襲ってきた砂は、そのまま相手の砂の中に戻り、残った砂は周りに展開されている。

「あれは…」「…砂!？」

(…変わった術だ…)

(瓢箪の中に、砂なんか入れてやがったのか…!?)

…自分同様、周りにいるナルト達もかなり驚いている様だ。

「砂を操る術ねえ…(疑)?…厄介だな(疲)」

そう流稀が疲れた様子で言うと、流稀はまた相手の方に近づき武器を振う…!

…しかし、やはりと言うべきか…相手の砂で防がれ、連続攻撃しても一向に当たる気配がない。

そうしている内に相手も方から砂で飲み込もうと攻撃してくる!

流稀はかろうじて避けてはいる者の、まだ一步も動いていない相手に押され始めている。

「流稀の攻撃が全然通っていない…!？」

「一体、どうなってるんだってばよ!？」

「アイツにはどんな物理攻撃も通用しねえ…」

「ええ?」

…サクラとナルトが疑問に思っている中、砂の忍びの一人…カンクロウと言う子が疑問に答える。

「…我愛羅の意思に関係なく、砂が盾となつて身を守っちまうからなあ。…だから、未だ誰一人としていねーんだ……。…我愛羅に、傷を付けた奴なんてなあ…」

「……ッ!」

カンクロウの言葉にナルトは額から汗が流れる……

一方、流稀は相手の攻撃から逃れるため……また少し距離を取る。

……我愛羅を見ながら考える流稀。……すると突然、何かを考えついたのか、右手の武器を自分の横の床に付き刺す。

武器を手放したことにより両手が自由になり、手を前に持つてくると……流稀そのまま印を組み始めた。

……あの印は俺でも見たことない物だな……。

……数秒経ち、印を組み終わると同時に空気を大量に吸い込み、体を仰け反らす。

『氷遁・氷柱千本の術！！』
ひょうてん 氷柱千本の術

大量に吸った空気を、身体を戻しながら口から吐き出すと……空気に混じって大量の氷で出来た『千本』が吐きだされ、そのまま前方の我愛羅に向かって殺到する！！

……しかし、それでも対して威力がないのか、相手の砂の盾により防がれてしまい、見た目こそ大量に突き刺さってはいるが、本体には全く届いてはいないようだ。

「ふ~~~~い！！……やっぱ、それでも駄目ですか（残念！）」
それでも予想していたのか、流稀はそこまで落ち込まず……床に刺さった武器を手に取り、また臨戦態勢を取る。

「……いまのつて……もしかして氷？」

「あの術……て、確か！」

流稀の忍術を見たナルトとサクラが少し騒ぎ出す。…まあ、大体予想はつくがな…。

「カカシ先生！さっきの術って…確か、『波の国』の…」

サクラが波の国で戦った、白と言う少年と同じ術だということを思い出しながら聞いて来る。

「そうだサクラ。…あれは『氷遁』と言ってな、木の葉にある『血断限界』の一つに数えられる秘伝忍術の一つだ」

「『血断限界』って、…たしか、サスケ君と同じ…！」

「あれは木の葉にある旧家の一つ、『水鏡一族』が持っている術でな。…まあ、見ればわかるように『水鏡一族』は氷を使った忍術で敵を倒す忍術の家系だ。…そして、その血を受け継ぐのが今戦っている『水鏡流稀』。アイツだ」

…そう説明すると、二人ともさっきと違う目で流稀の試合を観戦する。…今までが今までだからしょうがないが。…アイツも多分、自覚とかないだろうし。

「それだけか？」

「？」

流稀の術を防いだ我愛羅が喋りかけてきた。

「…楽しませてくれよ…もっと…足りないんだ、…血が…！」

そう言うと、砂がスピードを上げて流稀に襲いかかってくる！

流稀は慌てて逃げようとするが、砂に足を取られてしまい、そのまま壁に叩き付けられてしまう。

「…ガハッ…！」

叩き付けられた衝撃で口から大量の息を吐き出す…壁に寄りかかっ

てしまう流稀。

それでも許さず砂が攻撃してくる。流稀はその砂を避けるが、砂はそのまま追撃してきて襲ってくる。

何とか避けようとするが、地面に撒かれた砂で足を滑らしてしまい、流稀はそのままこけてしまった。…その上から砂が流稀を襲う！

「きゃあ！」「流稀い！！」「おいおい…マジかよ！」

試験会場に居た受験者達が声や悲鳴を上げる。

…だが、その流稀は間一髪空中に逃げており、空中で回転しながら『岩で出来た手』の上に着地する。

着地した流稀は下に居る我愛羅を睨み、手に持った武器を弄びながら、何やら考えている。

「流稀の奴…接近戦や忍術でもダメージを喰らわない相手に…一体どうするつもりなの？」

「あの砂のガード…ボクの速度なら何とか抜けられるかもしれないかもしれせんが…彼では無理かもしれせんね…」

「ちくしょー！！流稀い！！…おまえ、どうするんだってばよ！！」
サクラ、ナルト、リー君が流稀の試合を見て、各々今の状況を観察する。…接近すれば攻撃を防がれる上に反撃され、…また、遠距離からの術での攻撃も、あの程度の威力では貫通すら出来ず無駄に終わってしまうだろう…。

「カカシよ！…今のお前の教え子の術では、相手に勝つことは不可能に近いぞ…？」

ガイが流稀を見て今の流稀の状況を説明する。…まあ、今のままじ

やあ流稀は相手に勝てないだろう。…だが、

「…まあ！試合を見ていればわかるさ…」

…そう言うとかイは変な顔をするが、また目の前の試合に戻っていった。…そう、別に根拠はない。

…だが、あいつなら何とかなるだろう。

そんなことを考え流稀の試合に目を向ける。…すると、流稀は考える仕事をやめ、一言つぶやく。

「う~~~~ん（考）…………じゃあ！…攻撃力を上げた攻撃をしよう（笑）！！」

…なんか、さつきから悩んでいる事を普通に打ち砕くことを言いだす流稀。

流稀はそう言うって立ち上がると、先ほどと同じ印を組むと大きく息を吸い込み仰け反らせる。

『氷遁・氷柱千本の術！！』

口から出した『氷の千本』が我愛羅を襲う！

……事はなく、千本は我愛羅の頭上…試験場の天井に向かって吐き出された！

…吐きだした千本は天井部分に全て突き刺さり、まるで針山のようになってしまった。

「…続きまして~~~~」

声を出した流稀の方を見る。…すると、今度は先ほどとは違う印を

結び…また大きく息を吸う。

『水遁・水乱波（みずらんぱ）！！』

今度は氷ではなく、口元から出てきたのは瀑布の如き水を噴き出す！
…しかしこれも相手ではなく、上を向き、天井部分に水を吐き出す。
…水び出しになった天井は、滴り落ちながら水が下に落下していく。

「まだまだあつ（ハイテンション）！！」
また先ほどと違う印を組み、息を大きく吸う流稀。…一体何をするつもりだ？

『氷遁・大寒波（だいかんぱ）！！』

今度は水ではなく、勢いよく吐き出したのは莫大な冷氣…！
流稀の出した冷氣は天井に向けられており、先ほどの水が当てられ、凍えていく。…すると、

「なに、コレ……？」

「…すげーてばよ…」

「すごいです…流稀君！」

「こりやまた……」

…この場に居る全員が天井を見つめ、驚きの声を上げる。

天井を見上げると、最初の千本を芯にし、その千本に水を纏わせ、その状態で凍らせる。

……すると、天井には相手の頭上を中心に巨大な氷柱が垂れ下がっていた。

慌てて流稀の方に目を向けると、流稀の手には『起爆札』の付いたクナイを握っていた。…まさか…

「グツバ~~~~~イ（ニヤリッ）！……忍法！『氷山落弾ひやうかくだんの術！
！！！」

…そう言つて、笑いながら流稀はクナイを巨大な氷柱付近に投げると、そのままクナイは天井に突き刺さり…そのまま爆発！

…そして、爆発した振動で天井が振動し、揺さぶられた氷柱は根元から砕け…そのまま下に居る我愛羅に向かって落下していく。
落ちて来る氷柱はさすがにヤバいのか、相手は驚いた様子で上を見て砂の盾を展開する！

…そして、巨大な氷柱はそのまま相手を飲み込み、試験会場から轟音と震動が直後に襲ってきた…。

第十一話 第三試験予選Ⅰ第九試合目（後書き）

結構しんどいです。

面白かったら評価をください。

第十二話 第三試験予選〱我愛羅VS流稀（前書き）

…もうすぐ、お気に入り件数400件超えそうなんです…。
なんだか、最近いきなり人気が出てきたような気がする……！
天狗にならすがんばります！

第十二話 第三試験予選　我愛羅VS流稀

流稀の攻撃によって試験会場が鳴り響いた後：落ちてきた氷柱により床は砕け、辺りは砕け散った大小さまざまな氷の破片などその景色は変わっていたのだった…。

攻撃が終わった後、流稀は岩で出来た『手』の上から下り、周囲の氷により冷え込んだ試験場の床に音を立てて着地。：着地した流稀は、そのまま前方に居る我愛羅のいた方角に顔を向け、相手の状態を確認する。

「…さすがにあの威力なら攻撃くらい通るっしょ～～（確）！？」
何とも軽い調子で呟きながら、攻撃を喰らわせた我愛羅の方角を見る…しかし、先ほどの攻撃の影響か前方は白い煙を出しており、相手の状況などは全く分からない。

「ん～～～見えんなあ……………ちょっとやり過ぎちゃったかな（疑）？」

先ほどの攻撃に対し少し反省する流稀……………そんな事を口にしながら前方を観察知ると、徐々に白い煙が薄れていき…やっと攻撃の中心部の所まで見えるほどになった。

…そして、その中心部には一人の人間が立っていた。…が、

「……………おや、あれでも足りなかったかい…（睨）」

それを見た流稀はいつものふざけた声色を少し沈め、その見た方角にいつもより少し睨みつけて言い放つ。

流稀が見た攻撃の中心部：そこには対戦相手、我愛羅が腕を組んでその場で立っていた。
だが、やはり先ほどの攻撃には聞いたのか服や身体には汚れが付いており、周りにも砂が散乱していた。

…そして、流稀が睨んだその顔には……

…纏った砂が剥がれ落ち、凶悪な顔で流稀を見ている…笑った我愛羅がそこに居た。

カカシサイド

「やったあッ！流稀の攻撃が直撃ねっ！！」

「すんっげ……」

「あんなの喰らったら一溜まりもないわね……」

「…もしかして、死んじゃったんじゃない…？」

…先ほどの流稀の攻撃に下忍達が驚嘆の声を上げる。…確かに、あんなの見せられれば誰でも呆れた声を出すか…。…しかし、コレほどの術を持つとは……。

「ヤバいなあ…！」

すると、ナルトの隣に居たカンクロウという子が呟く。

「ああ〜ヤッベーなあ！お前らのあの目の隈野郎、けっこー重いの喰らったってばよお！…！」

「……そっちのヤバイじゃねーよ……！」
「ん？」

カンクロウの言葉にナルトは反応するが、ナルトの言っている事が食い違っているらしく、その事に不思議がるナルト…。

先ほどの攻撃の煙が晴れていく…そして、下に降りた流稀と、
…攻撃を受けたにもかかわらず、その場で笑みを作り立っている我愛羅の二人が姿を現す。

流稀は相手のいる前方を睨めつけており、我愛羅の方を見ると顔から砂が剥がれ落ちている所が見えた。

…まさか、体中に砂を纏っているのか…！？

「…なんだ！？……顔がボロボロに崩れたってばよ！？」

「まるで無傷かよ…！？」

「な…何なの、アイツ…！？」

ナルト達も相手がダメージを受けていない事に驚いて見ている。…
こちらが見ている間にも、我愛羅の周りにあった砂が動き出しだし、集まり始めると身体中に纏わりついていく…。

そして、全身に纏わりつく…先ほどと同じ、無傷になった我愛羅がそこに立っていた…。

「おい…あれって何だったばよ！…さっきの流稀の攻撃も、あれでガードしたのか…？」

「…ああ、ありゃ『砂の鎧』だ」

「！…鎧！？」

「普段は『砂の盾』がオートで我愛羅を守り。…万が一『砂の盾』が破られたとしても、『砂の鎧』が攻撃を防ぐ。…あれが我愛羅の…『絶対防御』だ」

「ッ！そんなの！…どうしようもないってばよ！！…弱点なんて、ねーじゃん！」

（いや…、そうは言いきれない。…むしろ『砂の鎧』は弱点の目白押しだ。…オートでない分チャクラを膨大に消費するし、『砂の盾』より防御力は劣る……砂が体に密着するため、体力も消費してしまう。…我愛羅があればを使わざるおけないのは…今の所追い込まれている証拠だ！……あの流稀って仮面野郎、なかなかやるじゃん。…だが、もう終わったな…）

「…それだけか？」

「…！…！…ほお、挑発するってことは…私の準備がとこのうまで待っててくれるんですね（疑）？」

…先ほどと同じように我愛羅は流稀を挑発し、それに対し流稀は我愛羅の言葉に質問する。

「…さつさと来い…！」

「…では…！…！…お望み道理にッ（本気）…！！…！！」
流稀はそう言うと、武器を構えながら相手に向かって一直線に走ります！…！が、そのまま我愛羅の脇を通り抜け…そのまま走り抜けてしまう。

「…！ちよつとッ…！流稀、アンタなんで攻撃しないのよ！？」

サクラも流稀の突然の行動に、大声を出して疑問を上げる。…しかし、今度は何をするつもりだ？

「まあ、見ていなさいって…の（活目せよ）…！」

サクラの声が聞こえたのか、流稀は走りながらそう言うと…相手とかなり離れた場所まで来ると立ち止まり、また我愛羅の方に身体を

向ける流稀。

すると、流稀は武器を自分の真上に投げ…その間に手の空いた両手で印を組み始める。

今までの術とは違い、かなりのチャクラを練り込んでいる事がわかる。…これは、かなり大きな技が来るな…。

術を組み終わる…流稀は今まで一番大きく空気を吸い込むと、それに比例し身体を大きく反らせ…、

『…氷遁・氷砕弾ひょうさいだんの術！！！！』

口から吐き出されたのは、直径約六mほどの巨大な氷塊を吐き出し、相手に向かって勢いよく放たれる！！

氷塊は床に当たりながらも削りながら突き進み、その勢いは衰えない。…あれを喰らえばいくらなんでも砂では防ぐ事は出来ない！

そう思いながら、氷塊の直線上に立っている我愛羅を見る。………すると、

(………！やられたっ………！)

「いつけーーーー！！流稀いーーーー！！！」

ナルト達は大声で流稀の勝利を確信する。

流稀の放った氷塊はそのまま我愛羅に当たり、…それでも勢いを衰える事はなく突き進む氷塊は、先ほどまで流稀が立っていた『手』の彫像を破壊！！

そして、試験場の壁に轟音を上げて突き刺さると、…やっと勢いが

なくなり止まった…。

…術を出した流稀は、先ほど上に投げた武器を掴むと…同時に床にへたり込んでしまった。

「き……ッ決まった!？」

「なッ!？……おい、嘘だろ…!？」

「…いやった……!?!?!流稀が勝った……!?!?!」

「おいおい……今度こそマジで死んだんじゃないのか…!？」

…流稀の技が決まったことにより、全員声を上げ出す。

今回は巨大な氷塊と、試験場の壁に挟まれたために防ぎようがない。

…喰らえば確実に流稀の勝ちだ。

…他の下忍達も流稀の勝利に確信したのか、流稀にねぎらいの声を掛ける。…ハヤテも判定の合否を決めるため、突き刺さった壁の所に確かめに行く…。

…だが、

「……はあ、……はあ、……はあ、」

…床にへたり込んだ流稀は、荒い息を吐きながら呼吸する。

最後の特大の『氷砕弾ひょうさいだんの術』を放つ際、いつもより数倍もチャクラを練って発動したのだ。…流稀のチャクラはほとんど残ってない。

…事はなく、まだ全然有り余っているのだが、今この試験場で使うのはヤバいからである。

…流稀は計画を進めるにあたり、決して油断などはしない…

…今ここである程度注目してしまうと、何かと計画に支障を利かす可能性が出て来ると考えたからだ…。

…そもそも、流稀はこの試験に全くと言っていいほど本気を使っているわけではないのだ。

流稀の戦術やチャクラの使用法…術でさえも、自分の本当の戦い方をしていないのだ。…確かに、今回の試験では『氷遁』を主にした忍術は使用して試合に臨んだ。…だが、所詮は見技だ。

…流稀本来の忍術など、コレツぽっちも使用などしていないのだ…。

「…ふう、…これでやっと予選は終了したか……（疲）」

「……………な訳はないか（疲）」
「…クツクツクツ…！」
流稀の後ろから声が聞こえた。

カカシサイド

「…やはり、あの時か…！」
…俺の近くにいたガイが砂から現れた我愛羅を見てそう口に出す。

「どうしてっ！？だって…？あの氷に巻き込まれた筈じゃ…！？」
攻撃を喰らったはずの我愛羅を見たサクラは混乱して声を上げる…。

「…流稀が攻撃を放った時だ」
「えっ！？」

「正確には、流稀の攻撃が当たる前…つまり、あの巨大な氷で遮ら

れた一瞬を突き…入れ替わったんだ」

入れ替わったのは自分に似せた砂を使ったのだろう。……しかし、これで流稀にはかなり不利になってしまった。

「間違いねえ！！（…あの眼は…完全に眼を覚ましやがった！！）」
横にいたカンクロウを見てみると…冷汗を流し、顔は蒼白になり震えながら我愛羅を見ている…なんだ？

（アイツの中の……魔物が！！！）

「……死ね」

我愛羅が胸の前で印を組み、膨大なチャクラを練り込む。
すると瓢箪から更なる砂が溢れ出し、相手を威嚇するように聳え立つと砂達が一斉に襲い掛かる！！

「！！…ウヲオオオオ（驚）！？」

急いで立ち上がった流稀は避けようとするが、砂の方が早いのか…砂に捕まり流稀は投げ飛ばされる！

…流された流稀は床に叩き付けられたが、すぐに武器を構え我愛羅を睨む…。

…我愛羅の鋭い視線が流稀を射抜き、砂がまた一斉に襲い掛かる！！
その様子はまるで荒波を形成する津波のように流稀を飲み込もうとする…！！

「……！！？があああああ（痛）！！！！」
流稀は逃れようとするが…あまりの砂の量に逃れることはできず、そのまま津波のように流されてしまい…試験場の壁に叩き付けられる！！

「避けるっ！流稀！！」

「！？…ぐうツ（防）！！」

壁に叩き付けられた後も攻撃は止む事はなく、またすぐに砂が流稀に向かつて殺到してきた。

…流稀は避けきれないとわかると、武器と腕を顔に交差して防御の姿勢を取る。

襲ってきた砂は流稀がいた壁に突き刺さり、その衝撃と震動がこの建物を揺らす！！

…あの攻撃を喰らったら、たとえ流稀でもヤバイ！！

「…あの仮面の奴はもう完全にアウトじゃん。…我愛羅の奴、遊んでやがるじゃん」

カンクロウが顔色を白く染めそう言う。…この攻撃で形勢を完全に逆転されたか…。

「…何でよ？何で流稀の奴避けないのよ！？…さっきまでのスピードなら、流稀の奴避けられたはずじゃない！！」

「『避けない』のではなく、『避けられない』のだよ…！」

「！？…どういう事？」

「流稀は今回の試合で術を何回も連続で使用していた…しかも、最後の大きな術でチャクラを大量に込めて放ったんだ。…普通の忍びでもあれほどの術を使えばチャクラは無くなり、動く事も困難になる。…今の流稀では術を攻撃するのはおろか、避けるのも難しいはずだ…」

「そ、そんなあッ！？」

サクラに説明すると、また流稀のいる壁の方に目を向ける。

…壁に突撃した砂が後ろに下がり、挟まれた壁の中で防御している

流稀の姿が見えた。…何とか防いだものの、片膝を床に着き、肩で息をしながら腕を十字に組み動かない。…流稀の奴、相当不味いな…。

「まだだ…まだ足りないんだよ…血が…」

我愛羅は更なるチャクラを練り、印を結ぶ。

『砂手裏剣の術!!』

…砂のツブテが浮かび上がり、そして手裏剣の形へと変化した。…その量は無数！

「…殺れ」

我愛羅の命令と同時に『砂手裏剣』が流稀に目掛けて放たれた!! 辺り一面を覆い隠す程の数に逃げ道は見つからない。

「…くそッ…!!」

流稀は壁の中から出て来ると、右手に持った武器を回転させ、そのまま身体の前に持っていていき突き進む…回転した武器に砂で出来た手裏剣が当たるが、当たった手裏剣はそのまま砂に戻り弾けていく。

…流稀はそのままの勢いで我愛羅に向かって行くと、右手の武器を垂直にして斬りつける!! が、やはりというか、刃は届く前に『砂の盾』によって防御されてしまった。

「無駄だ…」

「だったら、これならどうかな（笑）」

そう言っと、流稀は武器を手元に戻し、身体を一回転させながらもう一度我愛羅に斬りつける…。

すると、今度は我愛羅の前に出てきた『砂の盾』ごと、我愛羅に斬りつけてきた！！

「…ッ！！？」

…幸い、斬られたのは『砂の盾』だけで終わったが…自分に刃が届いた事に余程驚いたのか、目を見開きながら流稀を見る我愛羅。

「オラアア（蹴）！！」

斬りつけた流稀はそのままの勢いで回転すると…その反動を利用し、右足で我愛羅の身体に『後ろ回し蹴り』を喰らわせる！

…その攻撃を受けた我愛羅は抵抗もせず、後ろの方に吹っ飛ばされ床に転がった。

「…砂の防御を抜けたっ…！？」

「馬鹿なッ！…『砂の盾』を斬り裂いただと！！？」

「ガイ先生ッ！！…一体、何が起こったんですか！？」

「いや、リー！…実は、俺にもよく…」

いきなり流稀が相手の砂を切り裂いた事によって周りが混乱する…かくいう、俺もビックリした…。

…だが、何故だ？…流稀は最初のころから武器を使い攻撃したが全く通らなかった…。

ましてや、今は最初のころよりも体力は減っており、とても攻撃を塔酢ことなど出来ないはずだ。

…そう疑問に思いながら流稀の武器に目をやる。

すると、流稀の持っている武器の周りに何か緑色の靄のようなものが
かかっていた…そうか！あの武器は…

（…『チャクラ刀』かつ！）

チャクラ刀…持ち主のチャクラの性質を吸収する金属で作られた武器
の事を主に指し、チャクラを流すと切れ味が格段に上がる代物だ
…。

そうか…あの砂の防御を斬る瞬間に、自分のチャクラを流して攻撃
したのか…。あれがあの武器の隠しだねってところか。

しかし…そうなるとなぜ、最初の段階で使わなかったんだ？

相手を油断させるため…いや、あいつならもっと早い段階で使つて
いるはずだ。…もしかして、手を抜いていたのか…？

…流稀について疑問を持っていると、流稀に蹴られて飛ばされた我
愛羅が立ちあがり…流稀を睨みつけている。

「貴様ツ……、一体…何をした？」

何故自分の防御を破られたのか判らないらしく、鋭い視線で流稀を
睨む。…だが、

「そんな悠長に聞いて来る前に、お前の後ろをよ…く見てみたら
？ m9（^ ^）プギヤー！」

…別に、自分が言われた訳ではないが…激しく人をイラつかせる事
を指さしながら言う流稀。

周りに居た奴らも流稀の今の言葉で一気に額から青筋が浮き上がった

ているのがわかる。

…言われた本人、我愛羅からは本気で人を殺すような目つきを流
稀に睨みつけている。
これはしょうがないね。

…なんだか釈然としないまま流稀の言うように我愛羅は自分の後ろ
を振り向いた……すると、

「……………」？

…我愛羅が後ろを振り向くが……別にこれと言って変わったモノ
は見当たらない？

「引つかかったなボケー——（笑）！！！！何もないは糞が——！！！！（爆笑）！！！！」

…そう、流稀は大声で絶叫しながら自分の持っている『起爆札付きクナイ』を「これでもか!」と言うほど相手の背中に浴びせる。…

『.....』

「へおおおおおおおおおおおおおおおー！っっっ」

ッ
……………あ？

『『『『『『『…何い——————ッ！
！！？？？？？『『『『『『

まさかの……『だまし討ちッ』！！？

この会場に居る流稀以外の人間全員が、流稀のあまりの出来ごとに
絶叫する……！！！！

…『起爆札』で爆発した煙が充満する中……流稀は腕を組み、仁王立ちしながら煙の中にいる相手に声を掛ける…。

「フツ、……敵の言葉を鵜呑みにするとは、『アホ』以外の何者でもね〜なあ〜」（爆笑）！！

…よかったね〜！！……今、このボクちゃんに教えてもらってー
――（鬼笑）――！！

ん？感謝の言葉かい（疑）！？…いいいいいよ、別に大したこと
はな〜んもやって無いから〜。

まあ、一言言わせてもらおうと『忍びは裏の裏を読め！！』って
感じかな〜（笑）！！！！

…ふう、此処まで行つては何だけど…キミ、死んじやつたわけじ
やないよね（疑）？

もし生きていたら返事してみてよ。ほら…、

…一っ斉つのうっで！『っおお〜〜〜〜〜〜い（笑）！』」

そう言いながら煙に向かって手を振う流稀。……当然、煙の中から
は返事は全く帰ってこない…

…もう、なんて言ったら判らない位『流稀』と言う人物がわからな

くなってしまった。

…と言うより、もうなんだか疲れてきた……試合なんてもう、どうでも良くなったな……ハハッ。

流稀のだまし討ちで投げられた起爆札のおかげで、相手のいた場所は煙で何も分からなくなってしまうている。…だまし討ちでも使ったのは大量の起爆札。……かなりのダメージは受けただろう。

…その時、会場全体が急に冷え込んだ感じがした…

…そして次の瞬間、ゾクッ！…という悪寒が全身を伝わり、身体から冷汗が流れ始める…。

身体が突然震えだし、うまく動かす事が出来なくなる……なんだっこれは！……！

「…カ、……カカシ先生…ッ！」

「一体ッ………何が起きてるってばよ…？」

声のした方に顔を向けると…サクラは涙目になりながら震えており、今すぐにでも倒れてしまいそうな状態になっている…。ナルトは手摺りに掴みながらも会場を見つめているが、身体からは汗を流し、

フルフルと震えを耐えているように見える…。

…他の所を見ると、やはり全員何かを感じているのか…震えているか、その場でへたり込んでいる者が多い。

「一体…何が起こってるの…？…何なの、…これ！？」

「落ち着け、…サクラ！大丈夫だ…」

取り合えずサクラを落ち着かせる。…が、やはりあまり意味は無さそうだ。

そして次の瞬間、起爆札の煙の中から我愛羅の声が響き渡る。

「水鏡…流稀と言ったな………この札に、俺のこの『力』を使って殺してやるっ……！！」

煙が晴れ…流稀の目の前に身体の纏った砂を剥がれ落しながら睨みつける我愛羅がいた。

…我愛羅は自分の前に手を持っていくと、声を出しながら印を組み始める。

『壬・申・巳・申・壬・申・酉・辰・子・申・壬・子・卯・寅・酉・壬……』

我愛羅は呟くように言いながら印を組んでいく…。

すると、周りに飛び散っていた砂が動き出し…その砂がどんどん我愛羅の近くに集まって言っている…？

「やめるんだ我愛羅ッ！！！！」

「待っじゃん！我愛羅ッ！？…今それを出しちゃったら……ッ！！」

「やめなさい！！我愛羅！！！！」

…我愛羅の突然の行動に、砂の忍び全員が大声を出し必死で止めようとしている。

一体何が起ころうとしているッ!?

「煩い黙れ!…もう、計画なんて知ったこっちゃない!!俺はこいつを殺すッ殺す…殺すッ!!」

…もう目の前の流稀のことしか頭に無いのか、周りの仲間の声など聞く気も持たなくなってしまうっている。

「…今回だけは特別だ。思う存分に暴れ…目の前の奴を殺せ!!…出て来いッ『守鶴』!」

『守鶴』…その言葉を口に出した瞬間…

ゴウッ!…と砂塵が舞い…我愛羅を中心にして渦を巻き始める。

…そして、徐々に影が大きくなっていき、形を変えていく。

「クッ…クク《ク…クック…》」

…我愛羅とは別の声色が混じり、…別の『何か』が低い笑いを醸し出す…。

「…何がどうなっているんだろうねえ…?」

我愛羅の目の前に居る流稀にも何が起こっているのか判らないようだ。

…そして、砂塵の中に浮かび上がる不気味な双眸…。

そして次の瞬間、…渦巻いていた砂塵が八方に吹き飛ばされ…そして、

《シャハハハアア！！…随分と気前が良いじゃねエか…我愛羅あ！？》

…目の前に巨大な怪物が腕を広げて佇んでいた…。

第十二話 第三試験予選「我愛羅VS流稀（後書き）」

最後らへんは滅茶苦茶になってしまいましたね…。読みにくかったですみません。

此処でアンケートを取りたいのですが、次の中で出すとしたらどれがいいですか？

出してほしい物があれば感想に書いて送ってくれるとありがたいです。

- ？1 身体に包帯を巻いた体長4メートルの一本角の鬼
- ？2 下が土蜘蛛、上が上半身だけの女性の体長3メートルの人外
- ？3 全身真つ黒で鉄で出来た、体長5メートルの巨大カラス

この中から一つだけ選んでください。

…あ、それと。次回は少しでも話が短いかもしれません。

感想、意見などお待ちしております。

第十二話 第三試験予選VS守鶴 仮面の下の『本性』（前書き）

疲れました…最後の所は下手な文章になってしまいましたが、勘弁してみてくださいと幸いです。

第十二話 第三試験予選VS守鶴 仮面の下の『本性』

…流稀の目の前にいる砂を纏った我愛羅…。

その姿からはまさしく…『砂の獣』と呼ぶにふさわしい姿をしていた。

…不気味に光を灯し、全てを射抜く我如き黒色の双眸。

…大きく横に裂け、その鋭く尖った牙は…あらゆるモノを噛み砕けるだろう大きな口。

…その姿に相応の巨大な両腕に付いた爪は、存在する全ての物を引き裂く禍々しさが垣間見える。

…身体と同じ位の大きさを誇る砂で出来た尻尾を入れると、全長はおよそ四mはある巨大な軀。

…そして、そのどれも巨大な特徴を上回るほどの禍々しく、邪悪で凶悪なチャクラ…。

その膨大なチャクラに相応しく、巨大な動物の姿を象っている。…その動物はまるで…

「パンダ（疑）？」

《『狸』だ！！クソガキヤあつ！！！！》

流稀のボケに『砂隠れの里』に存在する化身…『守鶴』は大声でツッコミを入れた…。

《テメエ！…俺の姿の何処をどう見ればパンダなんて言葉が出て来

やがんだ！？…ブツ殺すぞ！！！！」

流稀の的外れな言葉に激怒しながら殺気を込める守鶴。其のせいで忍びたちはさらに顔色を悪くする。

「何処をどう見ればって…：そんな摩訶不思議な姿の奴にそんなこと言われても…：正直、困る（困）」

しかしそんな殺気など知ってか知らずか、流稀は守鶴の言葉に本気で困りながら普通に喋りかけていた。

《…この俺の姿を見てそんな態度を取るたあ…：相当死にてえ様だなあ…：コラア！！！！！！！！！！》

流稀の態度が相当気に入らないのか、チャクラを大量に垂れ流し声を荒立てる守鶴…：だが、

「ていうかお前さつきと性格変わってね？…：なに、二重人格？…：うわ…：正直引くんですけど…（哀）」

…：流稀はそんな守鶴を見ながら言うと言らかに体を引き、まるで腫物の様な対応をする…：。

《おいコラア！！：仮にも本人の前でそう言う事言うか普通！？…：たく、一体どんな教育受けてやがるんだ（ボソツ）》

…：口は悪いが流稀の態度を注意する魔獣…：実は結構いい奴…？

「だ、出しやがった…：『守鶴』を…：遂に出しやがった！！！」

カンクロウが守鶴を見て顔を蒼白にし、怯えながら叫びだす。…：だが、正直もうあまり怖くない。

《ハア、…：我愛羅の奴が態々俺様を出すたあどんな野郎だと思ったがあ！！…：相当嫌われてんだな》

流稀を見ながらため息をつく守鶴。…：この世界の恐怖の象徴にまで

言われる流稀って…。

《…まあゴチャゴチャ言っても仕方ねえ…すぐに殺してやるからよ、ヒヤッハッ！》

…今までの雰囲気ガラリと変わり、守鶴の双眸が目の前にいる流稀を射抜く。

「……クツ（苦）！！」

凄まじい威圧感が流稀の身体に負荷を掛ける！！

《オラア死ねやーーーー！！》

…そう言うや否や、巨大な腕が流稀目掛けて襲い掛かった！

「流稀！！危ないッ！！！」

上で見ていたサクラが震えた声で流稀に避けるように声を出す！

「！？…ヤッベー！！！」

サクラの言葉で守鶴の攻撃を避けようとする流稀。…だが、守鶴の凄まじい威圧感が体を鈍らせ、身体がぎこちなくしか動かない！！…それでも何とか紙一重で横に避ける流稀。もといた場所には守鶴の腕が通り過ぎた。

巨大な腕が生み出す凄まじい破壊力…先程まで流稀がいた場所は粉々に砕かれてしまった。

「うっはー！？何じゃありやー（驚）！！？…一次、戦術的撤退をさせて頂く（脱）！！！」

守鶴の攻撃を見て、声を上げながら驚愕する流稀。…叫びながら守鶴の傍から遠ざかるうとする。…が

《シャハハハ！！逃がすワキャネーだろうが！！》

守鶴は逃げる流稀の方に身体を向けると、己の巨大な刃のような爪を地面に突き刺す。…両腕の爪を地面に付き刺すと、両腕に力を入れ…

…まるでパチンコ玉を打ち出すように守鶴が流稀に向かって発射される！！

発射された守鶴は猛スピードで流稀の背後に近づき、そのままの勢いで流稀に腕を振う…！！

背後から近づいて来る守鶴に気付き避けようとする流稀…だが、守鶴のあまりに速い攻撃に反応が遅れ、背中に守鶴の腕の爪が襲う…！！

「！？がああああああああ（激痛）！！！」

守鶴の爪により背中の服が破れ、背中からは血が流れる…幸い、傷はそこまで深くはないようだ。

攻撃を受けた流稀はそのまま横に転がり、守鶴は勢いが止まらず…そのまま流稀の術で出来た氷の破片がある所に突っ込む。

守鶴が氷の所に突っ込み、氷が砕ける音が会場を大きく響かせる！

「……クウウウウウ…（苦）！！！」

「流稀いッ！！」「流稀君ッ！！」

…背中の痛みで声を漏らしながら立ち上がる流稀に、観戦していたナルトやリー達が声をかける。

立ちあがった流稀は突っ込んで行った守鶴の方を睨みつける。

しばらくすると、氷の破片の中から太い腕を振り上げながら守鶴が出て来る…。

《クソがあ…！邪魔クセエーんだよこの氷共は！！！》

叫びながらそう言つと、守鶴は巨大な両腕を振り上げ、周辺の氷を砕き壊す！！

腕を振うたびに砕け散る氷…守鶴が壊しまわっている間に流稀は満身創痍になりながらも両手で印を組み、口から空気を吸い込むと身体を仰け反らせ、口から氷を吐き出す！！

『氷遁…氷柱千本の術！！！！』

流稀は残っているチャクラを使い、氷の千本を前方に居る守鶴に向けて発射。…そしてそれは全て守鶴の身体に命中！！！！…しかし、

《ああ！？…なんだあこの『八虫』みたいな攻撃はあ？…全然気がねえなあッ！！！！》

…流稀の攻撃に、まるで痛がる素振りも見せない守鶴。大きな口元で嫌らしい笑みを浮かべ流稀に嫌味を言う。

《そんな攻撃じゃあ、あと百人居たって俺様には効かねーよあ！

！！！！！！》

…そう言い、守鶴は流稀を見ながら叫ぶと、体中からキバの生えた『口』が複数出現すると、流稀と同じように体中の口から空気を吸いだす！！

そして…

《『風遁・無限砂塵 むげんさじん 大突破！！！！』》

口から吸った空気が、チャクラを帯びた砂塵と共に吐き出される！！

吹き荒れた突風は会場を軋ませ、周囲にあつた氷は砂により削られながら吹き飛ばし…流稀もあまりにも強い突風により吹き飛ばされ、手に持っていた武器を手放し壁に叩き付けられる！！！！

「ッガハ！！！」

背中から強烈にたたき付けられた流稀は、口から血を吐きだすそのまま壁に寄りかかりながらしゃがみ込む。

砂塵の風が弱まると…辺りにあつた氷は消え失せ、広場には何も残ってはいなかった。

しゃがみこんだ流稀は口から血を流し、近づいて来る守鶴を睨みつける。

《なんだデメエ！？態々呼び出されたのに…こんな弱えー奴じや全然殺したりねーぞお！！！！》

「…いや…、別にお前の機嫌を取る気はこっちにはないんだがね…」
（苦笑）

しゃがんでいる流稀を見下しながら嘲笑う守鶴…。それに対し流稀はさりげなく周囲を見ながら言葉をかける。

《…俺様に傷の一つも付けねえ分際で粹がりやがって…雑魚は大入しく寝てる！！！！》

…流稀の言葉にキレル守鶴。殺意の籠った目で睨みつけると…巨大な右腕を上げ、流稀に振り下ろす！！

「避けるおお流稀！！」

「いやああああ！！」

「流稀い……………」

上にいるナルト達が流稀に向かって振り下ろさせる攻撃を見て逃げるように叫ぶ！！

それでも流稀はまだ逃げ出そうとはしない！

《死ネツ！！！！！！》

腕による風を切る音が、轟音を上げて流稀に迫る！！！！守鶴の腕が流稀に当たる瞬間、

「ッ！（此处だッ！）」

流稀は身体を前に倒し転がると、守鶴の攻撃が当たる寸前に逃れる。そのまま守鶴の左脇を通り抜け、先程の守鶴の忍術により飛ばされた武器の所まで走り出す。

《チッ！…まだ足？こうとしやがるか…人間ごときが！！！！》
攻撃を外し、自分の後ろに逃れた流稀の背中を睨みつけながら守鶴は身体を向ける。

…その間に流稀は飛ばされた武器の所までたどり着くと、右手に武器を掴み、遠くにいる守鶴の方に身体を向ける。

…そして流稀の表情は何故か、『悪戯に成功した悪餓鬼の様な表情』をして守鶴を見つめていた。

「フッフッフ…どうやら皮膚が厚過ぎて、細工をされたことに気付けなかったようだねエ（微笑）」

《…何イ……！！》

…久々に見る流稀のウザい笑い方に、滅茶苦茶殺気を込めて睨む守鶴。だが、そんな相手に対しても余裕の表情は変わらず…さらに流稀は語りかける。

「…さっき私が攻撃を避けた時…何で態々敵の懷に潜り込んで避け

たのか判らないのかな（笑）？」

そう…先程の攻撃を避ける際に、態々ギリギリまで誘い込むような事をしなくても避けられたはずなのだ。

…何故そんな事をしたのか…それは、相手に反撃をするため、相手の身体にある細工をするためだ。

…流稀はそう言うと、…先程攻撃を避けた時に通った守鶴の左脇付近を指で指す。…そこには、

《！！…これは……………『起爆札』！！？》

「そう、それも…今私が持っている中で、一ツ番威力のある『特別製起爆札』…そんな至近距離で喰らえば、いくらなんでもタダでは済みませんゾ（ニツコリ）！！！」

流稀の指した左脇…そこには複数の起爆札がベタベタと重なり合っているが張り付いている！

先程、流稀が通り抜ける際に、守鶴の死角となる脇部分に張り付けていたのだ！！

…ただだけ起爆札好きなんだ、コイツ…。

「それじゃーボクちゃん疲れちゃったから終わりにするねー！！…『破ッ』！！！」

…流稀はそう言いながら左手で印を組み、掛け声を上げる。…する

「うわぁ……………さすがに、あの爆発の中を生きているとは思わなかったよ…（汗）」
だが、その状態じゃあもう戦う事は出来ないだろう。…今、この場で降参すれば認めます…」

流稀は今の相手の状態はヤバいと考え、この試合を早く終わらせようと急ぐ…しかし、

《ふざけるな……………ふざけるなぁ！！！！この俺様が…この『一尾』様がたかが人間のガキ一匹にやられるだど！！？…調子に乗りやがつて…ブツ殺してやるッ！！！！子憎オオオオオオオ！！！！！！》

流稀に対しての憎しみが強いのか…言った事を理解せず、その場で殺意を籠めて吼える。

…すると、守鶴の身体から大量の邪悪なチャクラが溢れ出し…爆発で散った砂が守鶴に集められ、爛れた場所や失った左腕が再生していく…！！

《…クソガキィ…もう泣こうが喚こうが無駄だぜエ…テメエはグチャグチャに引き裂いてやる…！！》

砂が集まり、完全に咲くほどの状態に戻ると、守鶴はギラギラした双眸で流稀を睨みつける…

もう、相手は流稀を唯で生かそうとは考えてはいない…。

…守鶴が戻っていく姿を見て木の葉の下忍達が絶望的な声を上げる…。

そんな殺気を受けている流稀はダルそうに相手の視線を受け止める。

「はぁ…なんだよ、その再生力…反則過ぎでしょ（呆）。何であの爆発でヤラレてくれないのかなあ？」

そもそも、そんな凶悪なチャクラで気が滅入りそうなの………

……？」

…とても疲れた様な目で守鶴を見ている中…前触れもなく突然言葉を切り、守鶴をこれまで見たこともない真剣な形相で観察する流稀…。

…そして次の瞬間、何かに気付いた様に流稀は眼を見開くと

流稀は守鶴を恐ろしい形相で睨んだまま、まるで彫像の様に動かなくなってしまったのだ…

カカシサイド

「…どうして、…どうしてあれでまだ立ってるんだってばよ!？」
…傍にいるナルトが流稀の起爆札を使っても立っている我愛羅を見て声を上げている。

周りの下忍や上忍達も、我愛羅の戦い方に恐れながらも試合を観戦し続けている…。

…正直、一体いつになれば戦いが終わるのか全く分からない…。
こうしている間にも…流稀はチャクラと体力を消耗し、確実に不利になっていく。

…そして流稀が倒れたら最後…待っているのは間違いなく……
「死」だ。

あの我愛羅と言う子にいたるモノは、確実に流稀を殺しに来るだろう。
…もし、そうなった場合、俺は…

「…畜生、…あいつが出た以上…もう、何もかもが終わったじゃん
…」
…我愛羅って子があの状態になってから、カンクロウは身体を震わせながらうわ言の様に言いながら流稀たちを見ている。

この口ぶりからして、明らかに何かを知っている。…だが、さっき

ナルト達も同じように聞き出そうとしたが、

「それは…いや、それだけは言えねエじゃん!!」と、頑なに拒む。おそらく、『砂隠れ』でも余程の重要性を秘めた事なのだろう。…これでは聞き出すことは出来ない。

《ふざけるなあ!!!!この俺様が…この『一尾』様がたかが人間のガキ一匹にやられるだど!!!!?調子に乗りやがって…ブツ殺してやるツ!!!!子憎オオオオオオ!!!!!!》

…流稀の攻撃に、地の底から怨みを籠めるように雄叫びを上げる我愛羅…。…その雄叫びに応えるように砂が集まり身体を修復していく…!!

不味い!?!今この状態で敵に回復されたら…!!

「そんな…!!?この状態で回復なんて…流稀!!!!」

「流稀の奴、ホントにヤバいつてばよ!!!!」

「流稀君!!…避けてください!!!!」

流稀の絶望的な光景にナルト達は声を荒げて流稀に呼び掛ける。

…そして、その光景を目の当たりにした後…流稀の方に目を向けて見ると…

流稀は我愛羅を見たまま固まっており、…その状態でただ、立ったまま動きを止めていた…。

「…おい、流稀い!?!おまえ、何やってんだつてばよ!!!!?」

「はやく逃げないと、…アイツの攻撃が来るわ!!!!?」

流稀が全く動かない事に気付いたナルトとサクラ…一体、どうしたんだ!?!何故動かん…流稀!?!

《死ネッツツツ！！！！オラアア！！！！！！！！》

…我愛羅の身体が復活すると、先ほどの戦いよりも大量にチャクラを籠めた砂を流稀に向けて押し寄せる！！！！ヤバい！！逃げろ、流稀！！！！

だが…それでも流稀は身体を動かす素振りは一切見せず、そのまま我愛羅から目を逸らさずに立っている。

…そして、押し寄せた砂が流稀の所まで来ると、砂が腕の形に形成し…そのまま流稀を包み込もうとする！！！！これでは、逃げることは不可能だ…！

《ああ！！？なんだあ…もう逃げられねーと悟って諦めちまったかあ！！！！？》

流稀が動かない事に諦めたと考えた我愛羅…そう思ったのか、我愛羅はそんな流稀を見ながらその大きな口を嫌らしく歪ませ、下卑た笑い声を上げて砂を操る。

「…駄目だ…！！あの仮面、もう殺されるぞ…」

「！！？流稀い！！早く砂から逃げるんだー！！！！」

「そんな…どうしてツ？…どうして流稀の奴、動かないのよ！！！！？」

「流稀君！！早く逃げてください！！！！」

「…おいおい…！！流稀の奴、かなりヤベーぞ！！！！？」

「ちよつと！！！！…あんだ、なんで動こうとしないのよー！！！！？」

「やばいよ…ホントにヤバいよ…！！」

…流稀が砂に捕まった事に下忍達が声を上げて逃げるように呼び掛ける！！…それでも、流稀は関係ないと言わんばかりに全く声に反応

しない!!…これは、本気で不味い!!

流稀がもう動けないと悟った俺は、高台から下りて流稀を助けようと動く！…しかし！！

《おっと！！…外野はスツコンでな！！！！！！！！》

我愛羅の腕がこちらに向け腕を振う。
 …すると操っている砂がこちらに向かい俺の行く手を阻む！！

「! :: クッ! ! ?」

「カカシッ！？」 「カカシ先生ッ！？」

《シャハハハ！コイツを殺す邪魔は誰にもさせネー……ゾ
オ！！！！！！！！！！》

後ろに押し戻されてしまい、ガイとサクラが声を掛ける……その間に、流稀を包む砂は完全に身体を飲み込む……！！

…あれでは、もう…！！

《シャハハハッハハハハハハハハハハ……死ネエエエエ！！！！》

!!!

[illegible]

!!!

《『砂爆送葬』!!!》

…我愛羅がそう叫んだ瞬間、

《グシャツ！！》

…砂が圧縮しされ…その中にいた流稀の身体が潰れる音が、静かに
なつた試験会場を響かせた…。

《…クツ、…クククツ、シャハハハッハハ！！殺ッタ！！…あの
クソガキをぶっ殺してやったぜエエエエエエ！！！！！！！！！！》

流稀が潰れた音で確実に殺した事を知る我愛羅……。余程嬉しいのか、身体を天井に見上げ歓喜の雄叫びを上げている。

「嘘だろ……？　嘘だよなあ……！？　おい……返事しろよ……！　流稀い……！！！！！！」

「嘘……あの、流稀が……？……いやッ……！嫌――」

…流稀が殺された事に、ナルトはまだ信じられず砂の中にいる流稀に大声で呼びかけ、サクラは流稀が死んだ事実を受け取り、顔に手で覆いながら涙を流し悲鳴を上げる…。

周りを見ると…下忍たちも流稀が死んだ事が信じられないようで放心し、沈黙を通していた。

「…ックソ!!」

…俺の目の前に流稀が居たのに、…何故、助けられなかった!!
! ……何時もそうだった!!俺が仲間を助けようとするとなん時も手遅れ…昔、俺のために死んでくれた仲間…オビトに約束したじゃないか…!

「仲間のために守る」と…この俺にオビトがくれた左目の写輪眼に掛けて誓うと…!!

…だが、それなのに…何だこのザマはッ!!

…結局、俺の目の前の部下さえ守れなかったではないか…!!
…そんなので何が先生だ、…何が「木の葉一の技師」だ!!…結局、昔と変わらないではないか…!!

《アア~~~~ッ!!ム力つく奴はブツ殺したが、やっぱりまだまだ全然足りね~~~~なあ!!!!!!》

…下にいた我愛羅はそう言うのと、上にいる忍びに向かって顔を向けてさっきの籠った黒色の双眸を向ける…此処にいる奴らに攻撃を仕掛ける気がッ!?

「ッカカシ先生…!?!」

…我愛羅に睨まれたサクラが震えながら俺に涙の濡れた目で助けを乞う…。

…そうだ…俺にはまだこの場に大事な部下達がいるんだ…!流稀の

分までこの子たちを守らなければ…ッ！！

そう思うと、俺はサクラ達の前に出て、我愛羅に対して戦闘態勢を取る！！…ガイやアスマ達もこの事態に警戒を張る！！

…正直、この子に勝てるかどうかは分からない…だが、俺の仲間は誰一人傷付けません！！……そう意気込み、相手の方に一步近づく。

…だからこの瞬間…流稀の声が会場に響いた時、…この場にいる者全てが動きを止めてしまった…

『憎む』

…この世の全てを憎み、嫌悪のような暗い声が、流稀を潰した砂の中から聞こえる…。

…その声はまるで、膨大な憎しみと恨みを煮詰め結晶化し、それをまた溶かし継ぎ足しをし…その工程を何回も何回も続けられ…遂に、まるでマグマのようにドロドロになったたかの様な黒い感情が練り込まれている様な声だ…

その声がすると、全員が慌てて一斉に流稀の方に目を向ける。

《ズパパンッ！！》

そんな砂を切り裂くような音が流稀の砂の中から聞こえ、その中から漆黒の閃光が放たれると…

…砂が崩れ、中にいた流稀が姿を現す。

…不思議な事に、砂の中にいた流稀は何故かそこまで目立った傷は付いておらず、…代わりに上着などは砂により無残に破られており、

…流稀のトレードマークの仮面も、上半分が粉々に砕け、口から上の部分が露出してしまっていた。

そしてその顔は眉間にしわを寄せ、長い黒色の眉毛は吊りあがっており…、

…両眼の黒目からは『憤怒』と『嫉妬』が渦巻せながら、目の前の我愛羅を殺意を籠めて睨みつけていた

第十二話 第三試験予選VS守鶴 仮面の下の『本性』(後書き)

激怒する流稀

次回はアンケートのため数日お休みにします。

守鶴VSマジ本気流稀…お楽しみください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5224x/>

A revenge tragedy ~ 偽顔の鬼童子 ~

2011年11月27日18時59分発行